

---

**F o u l P l a y -笑顔の向こう側-**

GAN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F o u l P l a y - 笑顔の向こう側 -

### 【Nコード】

N 2 8 5 0 E

### 【作者名】

G A N

### 【あらすじ】

無邪気で明るい女の子…それは逆を返せば壁を作っている。訳隔てない子を演じれば自分は傷つく事なんてない…嫌われることなんてない。でもその笑顔の向こう側を覗いてくる人がいた…新任、会った時から嫌いそう…目の前の男性は学校の先生だった…

## 1・これが私

今日の朝は珍しく早く起きた。

割とすつきりで目覚めがいい。

カーテンの先。差し込む朝日が目に染みた。

今朝、作った目玉焼きは黄身が崩れなかった。

隣のトーストは食べたなら『サクッ』といい音になった。

出かけの靴。つま先をトントン鳴らすとすんなり履けた。  
手に持つカバンはいつもより軽かった。

「おはよー!!!」

教室のドアを開けて挨拶をするといつもよりクラスメートが振り返った。

2

朝から、割りといい感じで気分上々!!

何のことだか……。

ありきたりな少女漫画じゃあるまいし、こんなどうでも良い事で喜んでる人がいるんだろうか……。

日々の移り変わる日常が素晴らしいって思ったり、何気ない事で一喜一憂したりしてる人っているんだろうか。

周りが騒がしい中、私は一段と大きな声を教室中に響き渡らせる。無鉄砲に元気で明るいのが私のとりえ。よく友達にも言われるけど、私自身してやったりな印象だったりする。

「智亜美！」

段々と大きくなる私を呼ぶ声が、私の席となる窓際の後ろから二番目に腰を降ろすと聞こえる。

ついさつき聞き慣れた始業のチャイムが鳴ったから、当然チャイムの指示通りにカバンを置き、悠々と腰を落ち着かせる。

なんて……ね。

私もだけど、そんな真面目気取りの軟弱者はこのクラスにはいない。

朝、先生がH・Rで扉を開けるまでのギリギリの時間、昨日のテレビや会わない間に起きた出来事と一緒にそれぞれ挨拶がオマケに付いてくる。

いきなり挨拶代わりに冗談で相手を蹴飛ばす子。カバンを置いて黙々と机に座り一時限の用意をする子。

誰に挨拶しているのか教室に入った途端に大きなおはようの挨拶をする子もいる。

勘弁して。ここは小学校じゃない……。

全員が笑顔で挨拶を返してくれる訳でもない。まったく頭が悪そうな程度の低い挨拶をする者もいる。

「ちょっと聞いてる！？ 智亜美ってば！……」

視線の先に見慣れた顔が入ってきた。扉を開けた生徒に向かつて何人かの女子や男子がおはようと駆け寄る。そんな子はクラスの人気者なのだ……。

わけ隔たりのない壁を作らない人。どの学校も絶対にクラス一人位はいる。

皆を寄せ付けるオーラを放っていて、嫌な顔一つしない明るく人気者って役柄だ。

「チャーーーーーミィ!!」

視界の外側から、耳鳴りにも似た私を呼ぶその声に思わず眉間に皺が寄った。

耳の奥にまで響く私を呼ぶ声、途端に痛みが鼓膜に走る。

「いたたたたたっーーーーっ!!」

耳を塞ぎたくなる。朝から迷惑としか思えないその声は、私を呼んでいたらしい……。

見覚えのあるというかクラスで仲良しの女子が目に入る。

「ったあ! 美弥!!」

振り向きざまに確認が出来た子の名前を呼ぶと、その顔は何故か疲れ切つて顔が引きつって見えた。

後で考えてみたら分かるもの。彼女には似つかわしくない声で私を呼んでいたのだから。

「何回呼んだと思つてんのよ」

仁王立ちとはいかないが腰に手を当て、勇ましい立ち方で自分ごとにかく怒っているということを表示する。

「あ、そうだった? ごめんごめん」

「何を無駄に喚き騒いでる子が珍しくぼーっとしてるのよ」  
「すごい言われようだけど否定はしない。だって返す言葉は一つも見当たらなかつた。」

「珍しく落ち込むことがあったの？」

『怒』を表現していた仁王立ちはいつの間にか解除し、心配そうに私の顔を覗きこむ。

二回連続で使われた『珍しい』って言葉は、連呼して言われると馬鹿にされているような気分させられる。

「まさかぁーっ！っ！ そんなこと全然ないって！！」

声が教室中響き渡り、そして再び美弥の耳元に戻ってくる。

凶星なのに言葉で誤魔化そうって感じに見えたかな？

いや、凶星ではないんだけどね。

だって素直に人間観察って言ったら微妙でしょ？

私の何度も反響した間抜けな声に気付いてか、それともその前から私を発見していて、ただ集まってきただけか。

「おはよっ！ チャミー！！」

私の目の前に同じクラスの女子が顔を出す。

「おっはよっ！！」

やたら元気に至近距離なのにも関わらず、無駄に手を振りまくり。座っている私の頭を挨拶と同時に軽く平手打ち。

続いてくる女子もコミュニケーションの一環として叩いてくるのは分かるんだけど、優しくても連続で攻撃されると。

知ってるか？！ 痛いんだぞっ！！

ドリブルされてるバスケットボールの気持ちがり始めた頃、私はふっと視線を向ける。何人もいるクラスの女子の中で視界に入

った見た通り、活発の象徴ショートヘア！。  
絶対体力重視の子だ。って初対面みたいな言い方って思われるか  
もしれない。

でも当たり前！！ だってあまり話したことはないもん……。

トントン……。

またまた視界の外側から誰かの指先で肩を叩かれる。  
人間は条件反射には逆らえない性質だ。理解はしているけど突然  
の訪問者に叩かれると不意にその方向を知っていても向きたくなる。

その瞬間はまさにスローモーション。

「ひっかかったあ！！ おっはよ」

顔を向けた先には人差し指が私の頬を待ち構え、見事に直撃だ。

こんな古典的なことをする奴は誰だ！！

さつきから耳は痛いし、頭も痛いし、頬も痛いし一体なんなの！

！！？

隔たりのない壁を作らない子。誰からも信頼されて情に厚い。  
それが本当にいると言うならば……。

「ちよつと皆さあ！！ 普通に挨拶できないのっ！！？」

それこそ嘘で出来た手作りで、一步線を引くことによって出来上  
がる綿密に自分が築き上げた『己』という虚像だ。

最高の自分を演出する最高のスタイル。笑顔と言う極上の仮面で。

私は勢いよく椅子を押し倒し、余す事無くクラスの皆を見渡す。  
怒っていた顔をこれでもかって位、眉間に皺を最大限に眉を額の  
中心に傾かせる。

それを一気に外側へと緩ませるとドツと周りに笑顔が満ちた。

朝一番、私はクラスの皆と笑顔で会話していた。

これからもこの仮面はきつと外れることはない。  
これは……私。これが私なんだ。



## 2・戯れ言

朝早くに放つ大声で一瞬は静まり返ったがそれはつかの間。  
私と言う人物はどう足掻いても、クラス全体を笑わせることは  
天下一品でも……。

「うつせえーぞ!! 神崎!!」

この場を仕切るには常日頃から馬鹿にされすぎた。たった一瞬だけ  
で誰も二度は静まり返ってはくれない。この罵声もあるある……。  
クラスの女子に男子が茶々を入れる。そんな光景は中学までなら  
まだしも、私達は高校生だけどねえ……。

案の定。私の席とは逆の位置にいる廊下側の席の男子が大声を上  
げた瞬間、クラスに再び笑いが走った。

そんな事でめげる筈もなく、いつもの事として私は数人の女子と  
笑った。

「あはははははっ!!!」

だって普通に私の行動は可笑しかった。

ムキになって大声を張り上げる程じゃないし、教室全体に響き渡  
る位に怒鳴ることもなかった。

どうして私はそんな行動をとったのか。だって、そうした方が皆に  
対する私の好感度が上がる。

馬鹿に見せる事で、親しまれやすく一段とクラスに溶け込めるっ  
てものだ。

まあ、視点を変えてみればなんとも笑える話だが。

ガラッ！

そんな笑いの渦の真っ只中。教室のドアは迷う事が無く開いた。「こらこら……チャイムが鳴っただろう。それなのに廊下の端まで聞こえる笑い声は何でだ？」

入ってくるのと同時に、うつすら映える白髪と一緒に顔を出す担任の木村先生。

少し傾いていたメガネを人差し指で修正すると、教壇へと歩きながらレンズ越しに呆れ顔を見せる。

だが……本当に怒っている訳じゃない。

どっちかって言うと、これがこのクラスの良さなのだっていうのを認めている呆れ笑い。

まったく珍しい限りの先生。年配の男性教諭ときたもんだ。年配というかベテラン教師になると、生徒に憎まれ口を叩かれ、それを無碍に出来る程の威圧感。そして勉学に人一倍手厳しい先生が出来上がるはずだ。

世間にもまれてか、この教育の場に嫌気が差しているのか。理由も分からず疲れきった顔の先生ばかりだと思ってた。

実際。私の過ごした小、中の年配教諭は正しくそうだ。こんな先生は見たことないし面白い。一気に生徒の興味の対象となる。

なんだけど、でも……。

「ねえ……」

後ろから聞こえる声は美弥だった。

教室の窓際後ろから二番目にいるのが私。そして教室の端に席を陣取っているのは一番後ろの美弥って訳でクラスの中で一番仲良しの女子だ。

「もったいないよね？」

何が……つて、あぁ〜。

「だって先生、学校辞めちゃうから」

皆を一番に考えるいい先生。そんな人こそ誰よりも先に去っていく。

「一学期で辞めちゃうなんて」

いつも通り連絡等の話を始める担任。そして私達もいつも通り先生の話の聞かないでそれぞれの会話に花を咲かせる。

だって周りを見渡せばそんな生徒達ばかり。先生も暗黙の了解で何喰わぬ顔でH・Rを進める。

必要のない話だと無理に首をこっちに向かせたりしないし、意味なく注意したりしないのだ。

重要な連絡事項になると話を止め、必ず黒板に顔を向けるのを知ってるから。先生が信頼してくれるから私達も信頼する。それ以外のことに無理に首を突っ込んできたりしない。

従わせたければまずは従うべし……。

何年もの教壇生活で得て、身に染みた教訓が目の中の先生から滲み出てる。

「だけど……先生のお母さん」

私は世間話をしている担任の顔をちらっと見る。

「今はもう、誰か看病しないともう一人で起き上がれないって」

私にしか聞こえない小声で、複雑な顔をする美弥に視線を移す。

「夏休みを待って……とか関係なくすぐにでも帰りたいだろうね」

まるで近所の噂好きな主婦のように美弥は語尾を延ばす。

先生を今まで育ててくれたお母さん、か。

どうして大切に思う人ほど離れて行くんだろう。

必要な人ほど傍にいてはくれない。こんなにも思っているのに。

それは私が歩いていく過程でそういう星の下に生まれたのか。

神様の勝手な判断の元からののだろうか……。

私は必要って感じる人こそもっと自分の事を知って欲しい。

なんて……何を言ってるんだろう。考えたって無駄だ。もうよそう。

### 3・一人になる

朝のホームルームは終わり、教壇でいつも通りの平坦な物言いで生徒と会話していた先生はいつの間にか教室から姿を消していた。

「チャミー……！」

ついさっき思考から覚めた頭なのに、後ろからいきなり机へと押し倒すように抱きつかれる。

ガンッ！！！！！

学び舎の愛しき机に顔面ストライク。

鼻から直撃した私の額は潰されたまま、息もまともに出来ずもがき苦しんでいた。

く、首が痛いから離して。

と言いたいものの顔面からめり込み、机にこんにちわをしている。ため息も出来ないが口自体が開かない。

だからもがく、必死にもがく。

空中に円を描く様に後ろにいる人物を必死に掴もうと努力する。

この声は絶対に千佳だ。

「ねえ。今、気分が落ち込んだの」

声のトーンだけは下がっているが全然そうは見えない。

机と無理矢理仲良しこよしをさせられて、もがいても尚。離してくれない千佳にこっちが落ち込みそうだ。

全体重をかけているのか、首にどんなに力を入れても起き上がれない。

悪戦苦闘していると体が軽くなり、今度は後ろのめりになりそう

になる身体を留まらせる。首の間接が異様な音を立てた。

知ってか知らずか、さつきまで首を絞めて抱きついていた千佳が勢いよく空いている前の椅子に座る。

「そうそう！！ 落ち込んでいるのよ」

千佳の重みから解放され、軽くなっても顔面の痛みが消えない。

赤くなっているであろう額を労わるように撫でる。その間、さも当然と目の前に座った千佳を睨みつけてやる。

チャミって呼ばれてるからって親しい間柄じゃない。

名前が『神崎 智亜美』だから、より簡潔に短縮して『チャミ』という発想みたい。

『智亜美』なんてまるで当て字みたいになってるけど、誰かが呼び始めてしたらクラス全体に広がってみたい。

まだまだ高二『ちあみ』って名前がまだまだ可愛く思える年代！！なんて自分ではそう思い込んでいる。

お婆ちゃんになって『智亜美』お婆ちゃん。まあ、可愛い歳を取っていればそれも悪くない……。一体なんの心配しているんだろう。

痛みがひいたと感じたのか、無意識に額を撫でていた私の腕が下がる。

と、思ったたら大間違い。そこから加速をつけて、憎い輩が目の前で油断しているのを見計らって頬へ突撃！！

隙を見せたのが運のつきと言わんばかりに、仕返しに千佳の頬をつねる。

『千佳』あまり親しくない相手でも相手が名前で呼ぶのであればそれに答え、私は名前で呼ぶ。

なんともバカらしい光景を一つ後ろの席で美弥はただただ笑ってみている。

「どう見ても落ち込んでいる顔には見えないんだけど？」

「ぶふい！ ふはあゝい」

何を喋っているのか分からない……。

力を入れすぎてか。千佳の顔が抓ってる方向に垂れ、アツカンベーの最上級とも言えそうな可笑しい顔になる。

美弥の前が私の席、さらに美弥の笑い声が響き渡る。

「ぷっ！ つははははははっ！！！！」

私は思ってもみない方からの笑い声に、思わず緩めるはずのなかつた手を緩めた。

「頬を掴まれてる千佳も変な顔だけど……そう力んでるあんたの顔が一番変な顔！！」

言われた私はもつとリクエストにお答えして、奇抜的な顔をして美弥を睨む。

「な、なにその顔！」

お腹を抱えて笑い出す美弥に満足！！

心の中でガッツポーズを繰り返した。

気付けば抓る手は弱まっていた。指先は強まり、半泣きになっている千佳の頬から手を離す。

「あ、ごめん」

興味津々にどんどん私達の周りにクラスメートが集まる。

「本当に痛い。ちょっとした冗談なのに……」

少し赤くなっている頬に、さすがに仕返しとはいえ罪悪感が生まれる。

撫でる千佳の赤くなった頬を見つめていると、いつの間にか周りにたくさんの人が群がっていた。

「何々！！ ちょっと千佳泣いてんじゃない！！ なにやったのよ」

冗談なのか本気なのか周りにいる全ての女生徒が千佳をかばう。

これじゃ『仕返し』じゃなくて本気で私が千佳を苛めてるみたいになってるじゃない！！

「罰よ罰！！ 見てよこれ。おでこ赤くなってるでしょ？」

角度を変え、負けじと同情の眼差しを乞う私。

「はいはい。痛い痛い飛んでけえ」

思わず、机に付いていたもう片方の肘が滑る。

「私の処置、適當すぎない!？」

言い終わらないうちに大笑い。その中心で私は屈託なく笑う。冗談を自分から提供することで卒なく笑いを提供し私の居場所をつくる。

それはいつものポジション。

そして、ありがたい場所でもあるから……。



時間は過ぎ、学校内を締めくくる最後のチャイムが鳴った。

帰り支度をする生徒が私の席の目の前を行き交う。

いくつかのクラスメートを見送り、一人で居残りしている訳。だからって一人で残っている事に理由がある訳じゃない。特に部活に入ってる訳でもなくこれから帰宅するだけ。

ただ帰る気がしない私は、ゆっくりとカバンを机に寝かせ、その表面に顎を乗せる。

「ああ、落ち着く」

美弥は先に用事があると言って帰りのHR後は即刻で帰宅した。

他に一緒に帰ってくれる友達がいらない訳じゃない。

だけどそれは全て適当な理由をつけて断る。

ただ単に一人で夕焼けを見るのが好き……だから。

教室は3階の一番端。構造上そびえ立つ木々に邪魔されることなく落ち始める夕焼けがよく見える取って置き場所が今、自分の席でもある机からの景色だ。

カバンに顔を預け、見える真つ赤な夕日に眩しいと目を細めながらもゆっくりと落ち始める夕日を見ていた。

じつと見つめているとオレンジなのか、赤なのか、白なのか、大袈裟に言えばここが何処かのか分からなくなる。ただ落ちていく夕日に見惚れて頬を私は緩ませている。

いつかは屋上に出て風と一緒に感じてみたい……と考えるほんの小さな望み。

顔を起こし静かに立ち上がると、決して綺麗とは言えない我が教

室を見渡す。

誰が何処に座っているのか一目瞭然に分かる。

机が斜めになってたり、酷い場合は椅子が倒されたままになっていたり。

今日最後の授業、世界史のまま帰ってたりカバンさえも持ち帰らなかつたり。

ハートマークの落書きがいつぱいの机。席について一番に自分の顔を見たいのか鏡が置きっぱなし。

それぞれの性格が現れてる……たったこれだけの事なのに、可笑しい話だ。

皆が集う場所では目立つたたくさんの価値観と生活観。

真面目な人はちゃんと綺麗にズレもなく真っ直ぐに教壇に向かって整頓して帰っている。あそこは確か学級委員長が座っている席だ。

私は身体を回転させ、今度は沈みゆく夕日を眺める。

再び視界に真っ赤とは言えない真っ白な夕方の太陽に目を奪われる。

「……………」

こんな時間が好き……。

誰にも邪魔されない一人で呆けてられるこの空間。

だけど望んでいる時間でも不安になる時がある。そんな時は決まって不思議と真っ直ぐ家に帰りたくなるものだ。

今、この教室にいるのは正しく『それ』なのかもしれない。

漠然と得体のしれない不安を日常で打ち消し、私は皆と変わらな  
い様に振る舞い、知らないフリをしている。

あれだけ私を見て笑ってしてくれるクラスの友達が全て嘘のように私  
を色黒く染め上げていく。

こんな望んでいるわけじゃない。だけど、気持ちが悪く上手く切り  
替わらない。

いつでも何かには黒く染め上げられ、前も見えない黒に窮屈に  
なる。

そしていつも救ってくれるのが、この黒にも屈しない真っ赤な夕  
日だ。

#### 4・夕暮れ、教卓との別れ

夕日を目の前に瞳を奪われる中。私のテリトリーに入り込むようにゆっくりと教室のドアを開く音が聞こえる。

瞬間、反射的に振り返り、人物の把握を促す。

「おっ。まだいたのか」

誰もいない筈の放課後の教室に、ドアが開いた先の相手も驚いたのか目が点になる。

微妙な沈黙の後、把握をし終えた頭が口を伝って名前を口にする。

「先生……？」

私も先生と同じ、来るはずのない教室に誰かが訪れたと言う突然の事に、名前を言う以上の言葉が咄嗟に出てこない。

先生も少し驚いた様子だ。それはそのはず。随分と下校時刻から時間が経っていた。

廊下からも足音なんて聞こえない。校庭からも部活に励む生徒はいるが話し声は聞こえない。

でも当たり前、そんな時間を私は選んだのだから。

もう少しで夕日が沈み終わる薄紫色の頃、目の前で驚く木村先生も誰も居ないんだって思い込んでいたのだろう。

「忘れ物？」

咄嗟のことで私の口からとんちんかん言葉出てくる。忘れ物って言いたいのほきつと先生の方だろうね。

「いや、ちょっと用事があったな。ついでに教室を覗いていこうと

……」  
年配で白髪が目立つ頭は夜になる手前で灰色になる。

掛け慣れているメガネを人差し指で直す事で、先生は自ら止まっていた時計を動かす。

動き出した後、手持ち無沙汰に日直が消し忘れたのであろう残っていた文字をその場しのぎで消し始める。

「学校、辞めちゃうんだって？」

窓の外に向けていた身体を先生へと向ける。

まだ半分しか消し終わっていないのに黒板消しを左右に動かす手が止まる。

「そうか。もう生徒にまで伝わっているのか。その通り。私は今学期をもって教師を辞める事になったんだ。皆が夏休みに入ると同時に帰ろうと思っている」

声のトーンは低く、深刻な声色に変化していた。

消すことを諦め、ゆっくりと黒板消しを置くと、教壇に視線を移す。

「本当はな。『今学期』と悠長な事は言ってもらえないのだが。私もこの通りの歳で、母の年齢といえば神崎にだって想像できると思う」  
「……うん」

「だかな。何歳になってもワガママは言いたくなるものだ。親の前ではいつまで経っても子供は子供のままだ。神崎は軽蔑するかもしれないが、最終的に私は生徒と過ごすことを。この教壇をとってしまっているのかもしれない。親か教師か選ぶことも出来ないなんて」

先生の温和な表情が崩れ、止まった様な先生の息に私は思わず顔を上げる。

しかし、それは本当に一瞬で、すぐに温和な先生に戻る。

「なんて。こんな話を生徒にしても仕方ない」

「いいよ先生。続けて？」

自然と言葉は詰まらなかつた。それは大して私は先生の事を軽蔑していないことを意味している。

「あ、いや……うん。まあ、これからは独り言だ」

知ってる……。

先生は教師として生徒に接する壁も、先生と生徒の境界線つてもなんてない。

いつも誰でも同じ人間として、教え合える立場であるのを頭に入れ、クラス全員のことを見てる。

相手が迷惑でなければ一緒にあって泣くし喜ぶし、そんな先生が皆も大好きだった。

「教師に成り立ての頃はいつでも教壇を降りれるという若さがあったが、今になるとこの仕事为天職でやりがいのあるものに変わっていた。三年間、皆と笑顔で共に過ごし、共に私も育つことが何よりの生きがいになっていた」

黙って掌を見つめる先生の顔を見て頷く。

「いつからだろう。こんな貪欲になってしまったのは……。自分の親を量りに掛けても悩むくらい大事なものに変わってしまったのは結局は母親の最期の時まで教職を選んで」

「……」

夕日さえ消え去る時刻。雲に夕日が攫われた瞬間、私以外の教室の時間が止まった。

「もういつ旅立つか ……」

それだけ言うと先生の言葉は止まった。

先生の視線は決して私を見ず、教室を見渡すように後ろ向きな発言とは裏腹に真っ直ぐと前を向いている。

うつすらと残り僅かな時間を惜しむかのように夕日が顔を出す。

「いいんじゃない？ 逆もそう、先生が思っているのならそれがお母さんの答えなんだよ。我が子の夢まで奪ってまで自分の最期を見せたくないと思うし……」

「……」

「生きている間に自分の命より大事なものを見つけられた先生に心から喜んでいと思う」

私は体内に起こる妙な動悸に驚き、少し間を置いた。

「それに……賛同しなかったら親じゃないと思うよ？」

無意識に抵抗しようとコブシに力が入る。それとは裏腹に私は微笑んだ。

「なあ なんて！！ 子供も産んだことないのに何言ってるんだこの若造が！！ って思われるものぶっちゃけ嫌なんで。っていうか、思っているのでこちらで止めておきます」

再び微笑み返すと、お行儀よくお辞儀をし、ついでに私はカバンを手に取る。

「先生はね？ このクラスで慕われているのは事実だし、辞めて欲しくない人ダントツ第一位だけど、この神崎智亜美！ 木村先生のこの門出を快く迎えたいと思います！！」

先生に向け冗談交じりで敬礼をする。背筋をシャンと伸ばし、掌を垂直に額に当てる。

やっぱり真面目な話をするのは苦手。聞きたいって言ったのは私だけ。

「か、門出とは……」

呆れてる先生の顔を横目で通り過ぎ、カバンを持つ手を変えてドアへと歩き出す。

「神崎」

「はい？」

「君は馬鹿に笑ってよく騒いで、いつでもクラスの真ん中にいるような生徒だった」

振り向きざまにわたしは皮肉な発言を口にする。

「それは褒め言葉あゝ？ だったら先生軽蔑するな」

「どつちでとつても構わない。ただ……私が願う事はいつまでもそのままいてくれ」

私の表情が少し硬直したのが分かった。途端、視線を背け先生の顔が見れなくなった。

何もなかったかのように声のトーンはそのままに言葉を重ねる。

「照れちゃうってそんな言葉。でもありがとっ！！ せんせっ」  
そっつい終わらないうちに教室を後にした。

外に出ると私達を照らしていた夕日は沈み、すっかり夜の表情を見せていた。

どれくらい喋っていたのか分からない。



喉が渴いていた……酷く、喉が渴いた。

外から自分の教室を見つめるとまだ先生は教室にいるのか、明かりが付いていた。

きっと、傾いている机を直しているのだろう。

知ってる。直しても直してもキリがないのに、あれだけ乱れきった机を放課後に欠かさず直すことが日課になっていることを……。

想像するだけで気持ちが暖かくなる。

生徒をまるで我が子の様に思っただけに考えているのか……。

辞めて欲しくなかった。それは憧れとか尊敬とかじゃない。

木村先生はいつもお父さんみたいな感覚。

夜は仕事で疲れた顔を見せても、朝は元気に寝起き顔の私を『おはよう』って迎えてコーヒー片手、新聞に目を伏せる。そんな日常の暖かさをもっている。

『いつまでもそのままいてくれ』

隔たりなく壁を作らない子……それは私なのかも知れない。

お父さんの後姿が蘇る。

日常の暖かさに少し落胆を覚えた。

## 5・当たり前前の夏

その次の日、先生は学校に姿を見せなかった。もうクラス全員が知っている事を見越して、堂々と教卓に教材を置く。

そして代理で来た副担任の先生は包み隠さず木村先生の話をした。予想通り教室中の驚きは一目瞭然。クラスの大半は目を丸くし周囲の顔を窺う。

『木村先生のお母様が昨夜、お亡くなりになって、今日は先生は来られません』

と言った副担任の言葉。

今日とは言ってはいたけど、言わずと知れてそれは今日だけじゃなくて『これから先も』だった。

私達生徒は誰一人。木村先生にさよならはもちろん会うことさえ出来なかった。

今日は沈みゆく夕日の中。先生から話してくれたその翌日だ。

あれだけ苦しみ悩んでいた先生は結局、親の死に目に会えなかったってことになる。

軽く考えてはいるが、どれ程のことなのか分かっているつもり。

『別れ』ってこんなにも簡単で脆い、突如な出来事だけに心の準備もさせてくれない。

運命ってというのがあるのならば意地悪な話だ……。

神様は掌で人間を弄んでいるのか。それが運命って言うのはそんなものか。

運命なんて、軽く考えているから口に出るもの。運命なんて言うてる内は運命の内には入らないのかもしれない。

私は人一倍『大したことない』そう思えるものが少ない。

人事。そう思ってしまえばこの話は終わりなのに、こんなにも気持ちが悪入って来る。嫌になる程の損な性格。

朝のH・Rの後、先生に二度と会えないのにいつもと変わらないクラスメート達。いちいちそんな他人事で騒いでなんていられない。そうじゃないのかもしれないけど、あまりにも変化しない日常が勝手にそう思わせる。

ぼっかりと空いた心の隙間に寂しさが押し寄せる。

美弥は後ろの席でクラスの女子に話しかけられてか、いつもの冷静な口調で話している。

誰もいないのを確認した後。私は生徒手帳に挟んでいるものを取り出す。

ポケットの中……『それ』は密かにいつも持ち歩いている。

今度の先生はどんな人だろう。

木村先生がいなくなつた日常が五日程過ぎ去り、私以外の人が期待に胸を膨らませていた。

たった五日なのに教室中は新しい先生の話で持ちきりなのがあまりにも寂しかった。

あれだけのいい先生がまるでなかつたかのように教室から存在を消してしまった。

でも、そんなクラスのドキドキに待つたを掛けるように毎年恒例の夏休みに入る。

終業式の一週間前から、色んな友達の勧誘だなんだで私の予定はぎっしり埋まつてしまった。

悲しいのか嬉しいのか。しかも今年は今までにないほどの猛暑らしい。

玄関を一つ開けるのにも気合が必要なこの季節。夏の虫もバテてしまつてるんじゃないだろうか。要らぬ心配を他所にさらに暑さを倍増させる蝉の声。

暑い暑いけど去年は我慢できない程の暑さじゃなかった。

はつきり言つて暑さは我慢できる体質であるこの私。

この私が！！ 我慢できずに全部脱いでしまいたい！！……つていう欲求が頭を駆け巡る毎日だ。けど、常識ある人間でいたいので我慢。

鬱陶しい位に鳴り止まない蝉と、生物図鑑で調べればわかるだろ  
うその他。暑さで把握が出来ない程の大勢の喚き声を聞いてると理

性も何もかもなくなってしまう。

『その他大勢』それは適当に言ってる訳じゃなく、蝉以外の声が暑さで雑音にしか聞こえない。

そう言ってしまうばご理解いただけるでしょうか。

そんな日はだいたい一通のメール。それが電話が入る。

『チャミ つー！ 暑い。プール行こう！』

普通だったら海だろう。彼氏を連れて海水浴とかさ。

.....。

まあ、それが出来ない。

いわゆる世の中の負け組が私に一報くれるのだが。私もその一部にされてるのが正直気に食わない。

『智亜美は当たり前』的な参加者の一名になってる一方的なメルにさらに苛立つ。

でも、なんだかんだでこんな日々が楽しい。

涼みに行こうつとマイク片手に大熱唱するカラオケに、やる気なんてさらさらない軽装で図書館。学校の課題をやっているかどうかはこの際、別にしておこう。

実際、誰一人として真面目に教科書、宿題たるものを持ってこないし。

夏休み終了を目前にして泣くのは自分だ！！ だったら文句をいっな！！ が私の考えなのだから小心者の私はちゃっかり課題も遊ん

でいる合間をぬって全て終わらせている。

効率のいい。そして抜け目のない私。言ってくれる人がいないので自分で言ってしまうおう。

高二的の夏休み。ふつとカレンダーを見上げる。

カレンダーに違和感を覚えた私は立ち上がり、原因の八月なのに七月のままのカレンダーを無造作に破る。七月の絵柄は海水浴、捲つた八月は花火の絵柄がコミカルに描かれていた。

そういえば、花火大会一緒に行こうって千佳が夏休み前に言ってたな。

無意識に携帯を手にする。

学校に行つてると長い気がするのに、この一ヶ月は長いと思ったことがない。

長いと思えない程、私はどれ程学校が好きなんだろう。

学校は友達と会うための学校。それが一般で言われているものであれば私は困らない。

いつも友達には恵まれてるし、遊べるだけの友達。朝起きてメールを見れば何件か着信ある。

半分は下らないメールだけど、寂しいって感じたことがない。

それ以上の関係を望まないのだから十分だ。

友達がたくさんで羨ましいとか、毎日楽しそうだねっていうけど、それは皆が出来ることだと思っ。

『人に好印象を与える私』という人物を作り上げればいい。人間

はそういうことが得意だといえる。

動物では難しいことを簡単にやってのける。

だから世の中、善と悪っていろいろがある。現に私は得意だし。

ベットの上を動けば暑いと思っていながらも、もがきつつ器用に身体を揺らして内輪を手取る。

「はあ……。暑い」

涼しさが無駄にならないように必死に仰がず、風が来る来ないか位に抑える。

「……」

安息を欲しがって必死に扇いで汗掻くなんて馬鹿だし。

結果、あまり風が来ない役立たずな内輪を投げると、勢いよく私はベットから飛び起きた。

もう夕方だ。私の部屋からは夕日が見えないが、辺りがオレンジ色に染まりつつある。

夏の夕日は綺麗だ。

『秋の夕日』ってよく言うけど、涼しさの中で見る真っ赤な夕焼けそれもいい。

だけど、暑さが漂う中で見る今の夕日が一番好きだ。ますます暑くなるのは必須だけど、見た途端に暑さなんて忘れてしまっ位に綺麗というか心が洗われる。

少し風が吹いてる。きつと涼しい心地いい風じゃないんだろうって予感はしていた。

生ぬるい風にべっとりとした空気。だけど無性にその心地悪い風を肌で感じたくなった。





## 6・騒がしい我が家

ベットのすぐ横で私は膝を立てて窓を全開にする。爽快とは冗談でも言えない風が部屋の中に入ってきた。

『はあー』って思わず声が漏れるような風が微かでも良いから来ないかな。

思いは空しく窓を両手で開けると、予想通り暑さの残る夕方の嫌な生暖かさを感じる。

誰もいないのに耐え切れず、苦笑いを浮かべてしまった。

私の家は七階まであるマンションの三階。真ん中よりは下の階に住んでいる。

ここからは見えないが少し身を乗り出すと、まだオレンジになりきれない中途半端な太陽が顔を見せていた。

我慢しきれず窓から首を出してみると、額の汗が風に当たりそのお陰で無理矢理涼しさを感じさせている。

これ以上乗り出すと母親に怒られるので身体を元に戻そう。

まあ、今は仕事から帰って来てないからまだ大丈夫。

「智亜美!!! あんたまたそんなことして!!!」

そうそうこんな声で……。

「え?」

聞き慣れた声でしたので私の部屋を見渡す……が誰もいなかった。

不思議に首を傾げつつ、また夕日を眺めようと顔を窓に向けると

「お、お母さん!!?」

……。

遙か下の地上から倒れるかのようにお母さんは仰け反って見ていた。

「なんでそんなとこに!!?」

「なんでって仕事の帰りよ」

ここは3階……お母さんは夏の間は鉄板とも言えるアスファルトの上。

微妙な距離で話している私達親子って一体……夕飯時でも近所迷惑なのか?

なんて、どうでもいい疑問が降って湧く。

「それに、これはお母さんの日課なの」

眩しいのか、日差しを手で隠しながら見上げながらも日課と言いきり、何故かムキになっているようにも聞こえる。

日課ってそうやって仰け反って私の部屋を見ることが? なんと  
も不思議な日課。

少し離れた所から私達親子を見る近所の主婦達が目に付いた。

口を掌で隠しながら私ともチラチラと視線が向けられる。主婦の手元にはこれから夕飯の支度なのか、ネギが顔を覗かせていた。

知らないフリを続けるのにも限界なので、私は話を不自然に放り投げた。

「まあ、いいから早く帰ってきなよ……」

それだけ言い残すと先手を打って私は顔を引っ込めた。

「そういえばよく注意されるわ。  
さつきみたいに下から大声で叫んできたり、仕事の後だからだか  
知らないけど日課だったら見つかる訳だ。」

『ああー』とオバサンみたいな声を出すと首を半周だけ回した。  
一周出来たらしたいけど人間の構造上は仕方ない。  
冗談で言ってる訳じゃなく、それほど身を乗り出し過ぎて身体が  
軋んでしまった。

でも軋んでも損しない位、今日見た夕日は格別に綺麗だったな。  
ただそんな単純な事だけど、今日は言い夢を見れそうとモチベー  
ションは上がっていく。

ゆっくりと立ち上がり、部屋を出ようと足を進めた。  
また違和感が拭いきれない首をもう一回半周曲げると、小さな息  
を吐きゆっくりと回す。

「ワンツッ!」

「え ……ぎゃっ!」  
いきなり飛びついてきたものにビックリして飛び退く……のが遅  
くて後ろのめりになった。

「ワンワン!」  
辛い体制のなのにも関わらず、聞き慣れた鳴き声の主が遠慮なく  
私の頬を舐める。

「ココ!! くすぐったいってばあ!」  
後ろのめりで尻もちはずかなくなったものの、首の次には腰を痛め  
そうな反り方になっていたのでゆっくりと体勢を整え、自分の部屋  
の絨毯に腰を下ろした。

頬を舐めた仕返しとココの頭を撫でる。

いつもの事とは言え、油断してたわ。

するとさつきまでの威勢がウソのように、チヨンっと大人しく私の太ももの上に座った。

綺麗な茶色ツ毛の私の愛犬。

いつも驚かせるのが大好きなのか、不意打ち攻撃がかなり多い我が家のダックスフンド。

チマツとした足に伸びてる背中が妙に可愛い。

何を言いたいのか、私の顔をジーツとボールみたいな瞳は見つめていた。

ポンポンツ!!

意図は分からないが軽くココの頭を叩くと立ち上がる。

さて……。

「ワン！」

何をしょ……う?

「ワンワンワン!!」

……って一体何?

視線を下降しながらココに目線を送ると、ただただ何をしたいのか尻尾を振って吠えている。

「あ……」

なるほど。時間かあ。

「ココ！！ 散歩しに出かけようか！！」  
勢い良く腰を下ろし、ココの顔を驚づかみにする。クシャクシャと撫でると元気な声が倍になって部屋に木霊した。

「あ、智亜美。何処行くの？」

玄関で今着いたばかりのお母さんがハンカチで汗を拭きながら顔を見せる。

近所の人と話していたのか、あれから家に着くのが遅かった気がする。

母親は仕事用にとローファーに似た焦げ茶色の靴を揃えながら私の言葉を待っていた。

「散歩！ ココの散歩に行ってくる」

お母さんにお帰りの挨拶もする間もないまま、ココの小さな身体の誘導に早々と履き終わった私はドアノブを回す。

ココの首に緑のリードをつけて完了！！

首輪がむず痒いのかココはオスワリをすると後ろ足で首を掻いた。

「じゃあ、いつてきます！！」

閉まるうとしていいるドアから母親が覗き込む。

「あ、智亜美。帰りにパンと牛乳買ってきて」

走って出て行く私の後を追うように玄関から顔を出し、大声で私の名前を叫ぶ。

私は返事と同時にバイバイとお母さんに大きく手を振った。

間違いのないように言っておくと、うちはマンションでもペット可の家。

だから内緒で飼ってるわけじゃない。この辺りじゃペット可のマンションが少ないのか、逆にペットを飼っていない家族なんて我が

マンションじゃ珍しい位だ。

私より先をトテトテ歩くココは、繋ぐリードに不意に引っ張られながらも『早く』と急かしていた。

「ちよつとココー！ 待つて。待つてっば」

小走りで走る私は何か釈然としない。だって絶対的に歩幅は人間の方が大きいのに……。

疑問に思いながらもココの後を相変わらずの小走りで歩く。

綺麗な夕日が見えた後は暗くなるだけだ。

さつきまで顔を出していた夕日も姿を消し始め、これから夜の空気を醸し出していた。

プーッ！！！

突然。大型トラックが我が物顔でスピードを緩めず私達の目と鼻の先を通り過ぎる。

実際は距離があつたのだろうが、大型だっただけに表現はオーバーになつてしまった。

もちろん衝突しそうになつた訳じゃなく、通り過ぎる風に目を瞑っただけだ。

咄嗟に転びそうになるココを抱き上げ、理不尽なトラックが行つた先を見つめた。

走り抜けていった大型トラックは私のマンションの四、五軒先に急停止した。

あれは引越車？ ユニークな愛らしいクロネコが怪しげに描かれている。

誰かがあのアパートに引越してくるんだろうか。

だけどあの車の運転の仕方!!

仮にもお客様の荷物を運んでいてあのスピードであの急ブレーキ。近くに止まる予定だったらスピードを出すなっつーの!!

バタバタバタ……!!

腕の中で世話しく動く感覚に気付いた。

「キューウ!!」

早く降ろして、と手足をバタバタさせる。

「あ、待って! 今、降ろすから」

そう言ってココの前足を地面にへと傾けた途端にジャンプして私の前を走り出す。

止まったトラックを見送りながらその場を後にした。

## 7・それは突然コンビニで出会う

散歩の定番の場所に辿り着くと、飼い主をそっちのけでココは公園内に入ってしまった。

毎日の散歩でこの公園には立ち寄る。

私が必死に走ってココに追いつこうとしているのに、柵を潜り抜けてさっさと行ってしまふ程の一番のお気に入り場所だから。

さすがの夏でもこんな時間になれば暗いなんて感じる。

明るかるうが暗かるうが、そんなことお構いなしに探索するのにもってこい……なのかな？

ココは飽きもせずあっちこちとはしゃぎ回っている。何が見えているのか、私の目じゃ理解できない。

確かにこの公園は原っぱが中心で遊具があまりない気がするけど、きっとココの大きな屈託の無い黒い瞳には楽しいモノがたくさん見えているんだろうな。

やっとのことで息を切らしながらも追い付き、ベンチで頬づえを付く。

拳動不審に右、左と何でも興味を持つココに羨ましさを感じる。

意味なく草むらに突っ込んだり、土を蹴ったり……。

実際は違うんだろうけど、気になる匂いがあるのか鼻を地面に引っ付けて短い足で歩く。

いつもあるべきものに素直で、ココはというか犬は真っ直ぐな生き物だっと思う。

私達の微妙な心情の変化に誰よりも早く耳を動かして敏感に反応す



る。

ドラマとかドキュメンタリーで盲導犬をよく見るけど、初めに気付いて視線を向けてくれるのは動物だ。家族でもなく……友達でもなく、同じ人ではない。犬だったり猫だったり。

少し言い方は悪いけど、人間って言うのは一人では生きていけない生き物。

ペットを飼うと言うのはそれを表立って表してる証拠じゃないかって考えてしまう。

今はココの首に手綱は付いていない。

大好きな公園を今だけは縛られる事も無く自由に走って欲しい。なんて弱い人間の自己満足だ。

いつだって私の手元にあるリードを見つめると泣きたくなる。動物って言うのはきっと目の前で見てるココみたいな光景が自然なんだ。

だけど人間が動物を縛り付ける。私がココを縛り付けてる。

ごめんね……。だけど私、『一人』じゃられないんだ。

あんなにはしゃぎ回っているけどは自由じゃない……。  
気付いているのだろうか。見放されれば電話一本で保健所行きになる。

どんなに貴方達が、私達を愛していたとしても。

知っているのだろうか、自由なようで自由じゃない。

コントロールされていることを……。

それを分かってて私達人間は手綱を付ける。

「ワン!!」

気付くと土まみれのココが私の足の間にお座りして眺めている。

「クウ？」

手足を宙にバタつかせ、私の太ももに乗っかろうとする。

距離が足りないのに気付いているのか宙を切っているだけなんだけど。

私の微妙な変化にまた気付いたのだろうか。

「ココ、楽しかった？」

必要以上にココの名前を呼ぶ差し出した広げる手に、やっとバタつかせている前足を私の掌へと辿り着かせる。

不意に私と目が合い満足と言いたげに一声吠えた。

「そっか!! じゃあ、帰ろうか!!」

微笑むと掌に置かれた前足を優しく包み、土まみれのココの身体を躊躇なく腕の中へと抱きしめた。

行きと速度は違い、ココをあやす様にゆっくりと歩く。

ココは疲れたのか出先とは違って暴れたりしない。静かに私の腕の中に収まっていた。

でも寝ている訳じゃなく、首は今でも拳動不審に右へ、左へ動いている。

公園を抜け、坂道を登り終わった先にすっかり暗くなった夜道にポツンと明かりが見えた。

歩き続けていると電灯でうつすらと見えていた足元が、しっかりと靴の色が分かるくらいにまで明るさを取り戻した。

「あ……そういえば」

明かりの源を目線で辿るとある事を思い出した。

牛乳とパン買ってきてって言われたんだった。

明かりの先は私達家族が御用達のコンビニ。

発見するのと同時にドア越しに言われたお遣いを思い出した。

買う品物より余分に買ってしまった……。

忘れていた。カゴを持たなければ多く買うことはないって思っていたけど、当たり前だけど手は二つあったんだ。

ビニール袋を片手に自動ドアが開くとコンビニから出た。

お座りして大人しくしているのかと思いきや、私に抱っこされていた時に十分休んだ様でコンビニから出た途端にグイグイとリードを引っ張り催促をする。

その姿に微笑むと、一旦荷物して腰を降ろす。

「お待たせ。ココ」

ココにだけ聞こえる小さな声でゆっくりしゃがむと、柱に結び付けていたリードに手をかける。

「……？」

あれ？ 取れない。

そんなにきつく結びつけたつもりはないのに結び目が固い。変な結び方をしてしまったのだろうか。

「ココ、ごめんね。もうちょっと待ってね」

ジツと私の顔を見つめ続けるココの頭を軽く撫でる。

振ってきた暖かさに気持ち良さそうにココは瞳をとじた。

「ん……つと、いたっ!」

私の異変に気付きココが立ち上がる。繋ぎ合わせている錆びれた柱の角で指を切ってしまった。ツーツと指に線が入ると切れ目に沿って赤い血が浮かび上がる。

なかなか取れない……。

きつく結んだつもりはないのにきつくなってる。

断固として結び目が緩む気配がなかった。尖った物で切ろうにもそんな柔な紐の作りじゃない。

「大丈夫……」

視線を合わせ、ニコツと笑うが焦って手が滑る。

ツウツと流れる血を軽く舌で舐めると鉄の味がした。

それは柱の味なのか血の味なのか多分、今の私には分からない。止まらない血を他所に、再び手綱に手をかけようとす。

「ほれ、ちよつと貸してみ?」

「……っ!」

不意に背後から伸びてきた腕にビックリし、声も出さずリードから手を退けた。

私より一際大きな手だけが鮮明に私の瞳に写り、細い指先が硬くなっている筈の結び目を簡単に解いていく。

「出来た」

腕と手先しか見えない不思議な光景の中、引き綱を私へと手渡し

てくれる。

「あ、ありがとうございます」

ここで初めて振り返り、その時も目の前に写る腕を辿りながら顔を見る。

なんとなく顔を見る前に、勝手な推測だが、がっしりとした筋肉から血管がはつきり見える腕に、細い割には角張った大きな手だから男の人だとは思った。

その通りの頭一個分背の高い。私より年上に見える男性だった。見かけたことのない人だけどきつとこの近所の人だろう。

だって顔の次に服装に視線を向けたけど、どう見たって遠出の服装じゃない。家が近くだから簡単な服でコンビニに来たって感じた。ちゃんとしたら綺麗なストリートになりそうな焦げ茶の髪もところどころ跳ねているし、少し細めの瞳は欠伸をしながら益々目を細める。

あ、そつだ。

無造作に私は地面に放り出したままのビニール袋を漁ると、気まぐれで何気なく買ったコーラを差し出す。

「助かりました……これ、お礼に」

「え……？」

いきなり目の前に差し出されたものに男性は言葉に詰まった。

「大丈夫です。ちゃんと冷えて……あ、やっぱ子供過ぎですよね」

新たなものを捜しにガサガサと袋の中、必死に旅に出る。

「そうじゃなくて別に平気だよ。大したことないし」

そついうと一個分の頭を翻し、私の傍から離れていく。

「本当、ありがとうございました」

距離が遠くなっていく男性にまた一步、近づいてお礼を言う。

「そんな、本当に気にしないです」

一言大声を張り上げた。不意に私の瞳に涙が溢れた。

別にどうでもいいことなんだけど、突然差し出された触れてもいけないのに体温が伝わった大きな手。私の身体を覆い隠し、玩具のようにするりと淡々と綱を解いていく指先。

両手で持っているはずなのに引き綱を持つ手が震えている。

本当にたいしたことではないんだー。

だけど嬉しかったこんなちよつとした出来事が内の顔が隠せなくなる。

## 8・新しい季節

今日から夏休みは終わり、ありふれた普通の生活。そして学校の日々が始まる。

私はいつも通り決まった時間に起きて顔を洗い、ココに餌をあげた後に私もご飯へと箸を向ける。

今の時間はいつも母親はいない。毎朝この時間にはもう仕事をしている。

ここから数分歩いた先のスーパーでパートとして勤務している。詳しくは聞いてないけど仕入れからかり出されるから、だいたい七時半には部屋はもぬけの殻になっている。

父親はいないし……いわゆる離婚ってやつだ。だから気付いた頃には朝は私一人しかない。でも寂しくなんかはない……。

私にはココがいるし。

箸を休めて視線の先、一メートルも満たない場所だがむしゃらに餌に喰らい付いていた。

遅れて気付いたココは私の顔を見た。途端、顔全体に付いた餌を首を振ることによって綺麗にすると愛らしい姿を見せた。

「ワンッ」

ご馳走様かな？

微笑ましい光景を見つめると、私も椅子から立ち上がった。

ココの元気な姿を見てるだけで大丈夫！！

食器を片付けるとココも私の部屋について来た。

ブラウスに着替え、スカートを短く折り込むとネクタイを締め、カバンを肩にかける。

いつもの慣れた身支度だからここまでを五分足らずでやってのける。

「……あ、そうだ」

今まで夏休みだったから制服の中にある生徒手帳から取り出してたんだ。

壁に貼った写真を破らないように丁寧にピンから外す。

そこにはいつまでも色褪せない綺麗なロンドンの写真が映し出されている。

私が中学生の頃から大事にしている写真、唯一の宝物。

「元気かな？ ……ユキ君」

感傷に耽っている私に業を煮やしてか足元にココが張り付いた。

「ワンワン！！ ワンワン！！」

まるで、何処かで火事でも起きているかのような勢いで目の前を行ったり来たり私の部屋を駆け回る。

「分かった。分かったって！！ もう時間なんでしょ」

「ワン！！」

立ち止まり自信満々に吠える。

折れ目がついてしまわない様に、そして迅速に生徒手帳に写真を書き下し、自分の部屋を後にし、玄関まで小走りした。



私はしゃがみこんでココの頭を今日一日分と言わんばかりに優しく撫でる。

だって学校に行ってる時は会えないから……ね。

「じゃあ、行ってくるね!!」ココ、いい子にしているんだぞお」  
乱暴にココの頭を撫でくり回す中、気持ち良さそうにつぶらな瞳が閉じたのを確認する。

そして玄関から見える多めに作った餌を確認。

「じゃあ、行ってきます!!」

「ワン」

私は一カ月半ぶりで久しぶりの学校へと足を向けた。

まだ断然。暑さの残る9月上旬の朝。

上旬って言っても照りつける太陽。

まだ朝なのに昨日の分の暑さが残っているのか。  
アスファルトの暑さは嫌味なほど変わりはない。

頭上には誇らしい暗い熱を放つ遠慮のない太陽が昇り始め、足元には熱され始めるアスファルト。これもまた鉄板のように暑い。

気分は冗談抜きでフライパンの上に乗った目玉焼き。

卵の殻から出てきた透明な白身、イコール私が焼かれ、真っ白になるのか時間の問題。この場合真っ黒なんだが……。

今日一日の暑さを予感させる一日の始まり。

外に出て間もないのに滲み出てくる汗と、ダラダラさは夏休み入る前と変わらない。

吹く風もないし、吹いたところで暖房器具と変わらない。

意味ない暑さに新学期早々何処かだらけ気味。覚悟していたとは言えこの暑さには正直に参るぞ。

「……8時10分」

ココが急いでって吠えるほど時間はヤバくなかった。うちの愛犬は利口なのか。しっかりと余裕のある時間で送り出してくれる。

帰ったら一番最初に褒めてあげよう！

「おはよ。智亜美」

振り返ると美弥が、眩しさに目を細めながら手を振っていた。

時々『チャミ』っていうけど基本的には美弥は智亜美って本名で私の事を呼ぶ。

「おはよ。余裕そうだね！！」

自然に横に並ぶと、手で風を額に送りながら私はそう美弥に問いかけた。

「まあ……時間には気をつけてるから。この暑さの中で走る馬鹿者にはなりたくないし」

気温さえ変わらないが冷ややかにとんでもない毒舌。

「ああー……違う違う。時間もそうだけど暑くないの？」

少しでも意味が伝わるようにと、今度は大袈裟に手のひらで仰ぐ仕草をする。

だって振り向いた先の美弥の顔は『余裕』そのもの。涼しそうだった。

ああ……って納得すると変わらぬ涼しげな顔。

「もう義務教育は終わったけど、学校に行き始めて何年経ってると思うの？」

「え……?」

「十年くらい経ってて夏も十回。家にエアコンがあるとはいえ、そろそろ慣れてもいい頃じゃない? 学校に冷完備がないこと」

そう、その発言は『余裕』ってことね。

まったく。この綺麗な長い黒髪に無駄に肉がない。すらりとモデル並に伸びた身長。冷静沈着なところが美弥の特徴だけだ。

余裕さに頭にくるところか、ここまでくると威厳が出てくるな。私はその余裕さに尊敬以上に感服し、思わず笑ってしまった。

話している間に自分の教室に辿り着き、無造作にドアを開ける。

「おはよ〜っ!! ……おはよ! はよ」  
教室に入った途端、色んな人に声をかける。

それはもうありとあらゆる人に無差別挨拶とでもいいましょうか。

「おっ! チャミ! おっはよお」

この声は千佳だ……。

声が来た方向に振り向くと笑顔を浮かべる。

「おはっ!! ……ぎゃっ!?!」

間もなく、口元から出た私の奇妙な叫びに美弥もちよつと驚き顔になっていた。

だって……。

「ひっかかったあ!!」

ってそういう問題じゃないと思っ。

「あのねえ〜っ!!!」

ひっかかったもなにも……。

「避けきれなかったってえの！！　なんだって古典的な遊びをつ！！」  
思わず腰を抑える。体制を崩した私は少し腰にきていた。

「ひざかつくんは伝統行事だよ！！」

「そんなの勝手に由々しき文化の一部にしない！！」

荒々しくカバンを置く私の横で、千佳が話を持ちかける。

「そういえば、前の担任の代わりに人が来るらしいよ！！」

そう、木村先生はもうこの学校にいない。

お母さんが亡くなってしまったから故郷に帰るため学校を辞めてしまった。

すごく良い先生だったのに……。

一学期の間は副担が担任の代わりで教卓に立っていた。  
そして本日、二学期からは違う先生が来る。

「ふ〜ん。いい先生だといいのにね……女？　男？　やっぱり男がいよねえ！！　若いメンズ！！　だって目の保養になるし」

「その発想、男だって」

苦笑いをしながら集まっている皆が口を挟む。

「発想が男？　そんなことないよ！　女だっていい男見ると癒されるもの。私、絶対に手を上げるし課題だって欠かさないっ！！　最後は彼女いますか？　すかさず質問攻めで猛アタック。上目遣いで聞いたりして！！！！？」

コブシを振り上げ、妄想を繰り広げながら力説する。

「それは単純過ぎだって！！」

「そんなことないっ！！　だって一番に私に注目して欲しいじゃない

い。皆だって好みの男に逢うと気合はいるでしょ？」

正直場の盛り上げに言ってるだけで分からない。

口だけが勝手に動いて空回ってる感じで気持ち悪い。

正反対のことを言葉にする私に対して、身体が無意識に反抗しているのだろうか……。

さらに言葉を重ねる頃にはその偽りの表情も慣れてきた。

「見て欲しいって思うなら積極的になるべきよー!!」

心臓は気持ちとは裏腹に表情とは逆の反応をする。

「あ、あれ？ 本題ずれた？」

集まっていた皆は大笑いした。

「なんだっけ？ 本題って？ ……：そうそう担任だよ男男なの？」話を持ちかけてきた子に問いかける。一、二、三步後ずさりされた。

「ガッツキ過ぎだってチャミ……」

あ、やりすぎた……？

キーンコーンカーンコーン。

お決まりの一秒とて狂わないチャイムが私の勢いを停止させた。

その数分後、私の顔は啞然と言う言葉が似合う表情をする。

今はとりあえず皆は緊張や気配りなのか。木村先生の時には見せなかった『チャイムが鳴ったら着席』を無意識に行っていた。

「ちょっと皆……。調子が良すぎない？」

後ろにいる美弥に二人にしか聞こえない声で投げかける。

「やっぱり男か？」

一緒に登校した美弥に分かるはずがないのに問いかけてみる。

「気になるならその扉、開けてみたら？」

相変わらず冷静に放つ美弥の指が向けられ向く先、窓にうつすらと人影が写る。

影は場所を確認したのか一度立ち止まると、再度動いてその手で扉をゆっくり開けた。

カラカラカラ……。

なんとも軽いノリで開く我が教室の扉の向こう。誰一人逸らさないみんなの視線はまるで大物芸能人が登場してきそう勢いだ。

なかなか顔を出さないじれったさに心臓は正直に答えた。

別に緊張してるわけ……。してる、のか？

むしろ異常な空気に生唾を飲みたくなってくる。

ただ単に新しい先生がくるだけなのに、やっぱり環境の変化というものは何気ないことでもここまで人の心情に波風を立てるものなのか。

やっと思いをさせた先生は噂していた『男』だった。

## 9・異常な先生

生徒には興味が無いのか、一向に表情が見えない名前も知らない先生はゆっくり扉を閉めた。

メガネを掛けたスラリとした体格の男性。髪は綺麗に整っていて、前髪は全て後ろへとワックスで固めていた。グレイのスーツは嫌味な位に着こなしている。

皺一つない真っ白なシャツは、この男性の放っている雰囲気そのまま表していた。

年齢はどれくらいなんだろう？ 新任という若さでもなく木村先生程の歳でもない。

歩き方、教材の持ち方は隙がなく、背筋を伸ばしている。

放たれてるオーラーというのがあれば黒に近い灰色。

見た目は三十歳前って感じかな？ 失礼ながら自己推定ではあるが……。

若いだろう瞳には笑顔がなかった。

頬を緩ませる機能は持ち合わせていないと言わんばかりに、変わらない無表情を保ち続けると、教卓に足を向ける担任になる新しい教師。

眉一つ動かさない男性教諭が教卓に荷物を置くと即座に口を開いた。

「日直！！？」

突然、発された聞き慣れない声はとても低く、たった一言なのに鮮明に分かる。底がない程冷たい声。

格好良さはギリギリクリアとしても、望んでいた明るく優しい先

生とは冗談でも言いがたかった。

「日直何してる！！ モタモタするな。一度呼ばれたら三秒以内に返事するっ！！」

教室全体へと響き渡るように教卓に両手を付き、身を乗り出すように怒鳴る。

突然のいかにもな怒鳴り声に日直は声を詰まらせた。

「返事は一回だ！！ 何をやっている。直ちに号令をかけなさい」  
一度たりとも頬を緩ませない目の前の男性。皆の血の気が引いた音が聞こえてくるようだ。

緊張気味の日直の号令の後、改めて静かにその担任になるであろう教師の顔を拝む。

あ、あれ……？ この人……。

号令の後、皆が疎らに椅子に座る。

「ええー。今学期から木村先生に代わって、君達C組を担当する」とになった」

手際よく白いチョークを手に持ち、静かに教室全体を見渡すと背を向ける。

後ろを向いただけで教室中が安堵の溜息をする。やっと息を吐け たって秀囲気だ。

けど、いつこっちを向くか分からない……。

どういった先生か分からない以上油断は禁物 ……。

でもきつと誰もが思っている。

誰一人、友達同士で振り向きあって話したりはしないが。



『木村先生とは類が違う』  
後姿にも隙がないように感じる。もう私の中で彼の第一印象が決まった。

先生の背中を見つめている間に黒板に自分の名前を丁寧に……。

教室中が一気にどよめいた。

男らしい綺麗な達筆な字で彼の名前は『狩屋 悠司』ということが分かった。

書体は書道担当の先生も惚れ惚れする位の腕だろう……。けど、それが問題ではない。

自信作と言わんばかりにチョークを置くと真顔で振り返る。

眉一つ動かさない無表情とは裏腹に彼の達筆な名前の最後に……。

「ハ、ハートマーク？」

思わず小さい声で言葉にしまった。

一瞬、頭の中で鳩が飛んだが、場違いの為に鳩を外へと放りだした。

途端、堪えきれず何処からか笑い声が響いた。

「っ誰だ!!!?!?」

振り向いた先、教室全体を睨みつける先生に誰もが理解できない。

「誰だ!!! 今、笑った者は!!!」

一気に生徒の間で緊張は元通りになる。

「笑った生徒は速やかに教壇の前まで来なさい……」  
厳しい瞳は遠慮なく教室中を睨みつける。

ここまでの処置に大した時間は掛かっていなかった。

静かに立ち上がる一人の素直な男子生徒。

「君か。今は休み時間でも……増して笑う時間でもない。しかし理由があるのなら問おう。どうして笑った？」

自分が仕出かした不祥事に気付かないのか……。

少し振り返ってみたら分かるのに……っというか書いたでしょ？

ん…………。

見れば見る程に、この先生にやっぱり何処かで会っていた。

「何故笑ったのか答えられないのか？」

低い声で威厳を保っているが内容は何とも下らない話。

説教している間中、先生の後ろからセットになって見える、黒板にはこの男性の身なりや雰囲気にも似つかない、名前の最後に大きなハートマーク。

素直に名乗り出た男子には悪いけど、可笑しくて笑いが込み上げて来る、

少し間の空く教室。そして溜息交じりで言葉にする。

「では、私の質問に答えなさい。君は厳しい先生と面白い先生ならどちらを選ぶんだ？」

はあ????????

何を今度は言い出したのか。この人の脳裏を見たい。

きつと私だけじゃない。本気で皆思っているだろう。

絶えずメガネの奥、鋭い眼光で見つめるその瞳に笑うどころか反論の余地はない……。

「そ、それは厳しい先生です」

そういつしかないじゃない!!

この流れで面白いつて言ったら怒るでしょ……あんだ。  
そのやり取りに私はもうツツコミさえ入っていた。

「そうか……それは残念だ」

そう言うと先生は男子生徒から離れ教壇に立つと、ネクタイを緩ませ、シャツのボタンを上から順に二つ外し、皺一つない筈の白いシャツも無造作に腕まくりをした。

決めていたパリパリの綺麗に整った髪も崩しながら、グシャグシヤと新たなセットをしなおす。

それをだた啞然と口を開けたまま見ているしか出ない生徒。

「俺は……」

一瞬で何が起きたのか分からない呆気に取られる私達生徒。

「完全なる面白い先生だ」

彼の人格を主張していたメガネを投げ捨て、大きな口を開けながら大笑いした。

投げた先を私は目線で追ってしまった。

役目を果たしたと言わんばかりに、メガネは落ちた拍子にレンズが割れた。

「ははっは!!!!? 自己紹介どうしようかって昨晚は寝ずに考えたんだけど」

今度は笑いかみ殺しながら、誰一人付いてくれないのを知っているのか。

このイマイチ掴めない先生は一人、笑いながらも説明をする。

クラスの何人の生徒がその話を聞いてるのか、今現在不明。  
絶対クラス全員の目は、豆鉄砲を喰らった鳩状態で私なんて焦点  
が合っていないし。

笑いすぎて涙を流す先生を目の前に、私自身状況が読み込めてい  
ない。

とりあえず第一印象というものがあれば、これ以上のツワモノが  
いないだろう……。

## 10・苦手意識

数日に渡って観察してきた彼は、誰から見ても好感の持てる先生だった。

お調子者で若いという他は、前任の木村先生と変わらない気がする。気がするっていうのは、やっぱり私一人の意見では決めかねる。何を偉そうにって言われるかもしれないけど、何故か彼には前任の木村先生を超えて欲しくなかった。

次の日に教室の扉を開けた先生の額にメガネはなく、ピンとしたシャツはおるかネクタイもない。あえて例えるなら、コンビニ服とでも言うんだらうか。

気軽に近くのコンビニまで行けます！ みたいなラフな服装。自己紹介の時とは全然違う身だしなみに啞然としてしまった。

先日の後遺症で警戒していた真面目な生徒もその姿を見てホッと胸を撫で下ろす。

あまりにも短い期間で狩屋先生は生徒と馴染んでいる。

それは有無も言わさない何らかの理由が、生徒達を引き付けているのかもしれない。

じゃなければ、短期間でクラス全員に及ばず、他クラスの生徒まで渡るこの人気はありえない。

まあ。人並みにはカッコよくて面白くて、若くて……となると興味は引かれるのだろうが。少しの期間は一步引いた関係になる筈だ  
って思ってる。

それほど私達は木村先生を尊敬していた。

些細なことでも妥協しない親身になってくれる父親みたいな先生。

思い出すと幾らでも思い浮かんだ。  
きつとクラスの皆は学校中の教師の誰よりも木村先生が大好きだった。

それを押しつけるパワーというモノにクラスの皆は無意識に惹き付けられている。

最後のチャイムが鳴った。今日一日を締めくくる至福の音が耳に響く。

小学生の時みたいにテンション高くはならないが気分は軽くなるってものだ。

言わば開放される『授業』という窮屈からの脱出。

いつの間にか。あっという間に狩屋先生が赴任してから一ヶ月は過ぎていく。

私の中ではまだ一ヶ月しか過ぎていない。  
木村先生の方が良いのか。それとも、嫌なところを見られてしまったからなのか。

そう。あれから時間が経ってやっと思い出した。何処かで会ったってこの感じ。  
知っていると言うほど顔見知りじゃないけど、夏休みの下旬。コと散歩をした帰りにコンビニでリードを解いてくれた男性。  
それが目の前で生徒とじゃれてる先生だ。

今、教卓で連絡事項を話している狩屋先生の顔。

夜道の暗い中でコンビニの明かりだけじゃ頼りないけど、先生の姿や形で思い出す。

正真正銘、第一印象はあのコンビニになる訳で……一気に気落ちした気分になった。

確かに親切で誰も気にかけてくれなかったのに良い人だって思う。だから尚更どうして……って思うかもしれない。

けど、私にとっては一番見られたくない瞬間。先生は覚えていないのかな？

目が合っても、先生は話題に出してこない。

言われると思った。指を差されながら『あの時の……』って茶化されるって思ってた。

それを踏まえてまだ言うけどきつと良い先生だ。それは直感で分かる。

……忘れてるにしろなんにしろ。私は馴染めないでいた。

先生のあの屈託のない笑顔には ……。

「智亜美」

「え……？」

帰りのH・R中なのにも関わらず、声がした後ろの席にいる美弥の方へと振り向く。

「こっちじゃなくてそっち」

冷静に答える美弥に思わず表情で聞き返した。

「前からプリント回ってきてる」

「あ……」

机の端に置いてある残り二枚の紙に気が付いて適当に一枚引き抜くと、列の一番最後尾の美弥に手渡す。

以降、無言でそのプリントを美弥は受け取った。

あ、そうか……。今、帰りのホームルームだったけ？

意識が違う方向に行っていた。

気持ちを引き締めるべくプリントに目を向けると、もうすぐ体育祭なのを思い出した。

若い先生に女子生徒は弱い……。っと思う訳なのか。それとも単なる新任への興味なのか。

帰りのH・Rは終わったはずなのに狩屋先生は戻れずにいた。

戻る場所はもちろん職員室。だけど嫌な顔一つもなく上機嫌で取り囲まれていた。

いや。事実、上機嫌なのか？

取り囲んでいる生徒が女子ばかりだからなのか、上機嫌なその表情も不謹慎に見えてくる。

とんだ私の偏見だけど……。

「先生！ ごめん。忘れちゃった」

一人の生徒が教壇にいる先生に話しかける。

「なんだあ〜。お前、また忘れたのか！」

「ごめん……先生」

囲んでいる女生徒の中から声が聞こえる。



騒がしいのに気付いてかそれとも目当てなのか。他のクラスの生徒も寄ってたがる。

忘れてしまったものは課題なのかと思考を張り巡らしている私。

先生は手持ち無沙汰に余ったプリントをカンカンと揃える。

「まったく、楽しみにしてたのに……漫画」

ま、漫画あ？

今……この先生、漫画って言ったの？

少し可愛くて笑ってしまった……。

「先生」

次の瞬間。表情を整えると、先生に近寄り日誌を渡す。

今日は、私は月に一回やってくるか来ないかの日直だ。

だからの日誌を渡さなきゃいけない義務がある。

「先生。日誌、あげる」

コンビニの一件があるからなのか、先生とは一ヶ月も経つというのに目を合わせられずにいた。まだ引きずっている私自身もそろそろ忘れてしまえって思うんだけど。

この性格に十七年も付き合っているのがあり、そう簡単には行かない。

「しかし先生え！ よりどりみどりでよかつたねえ」

正直乗り気はしない。けど会話しない訳にもいかない。

「こないっぱいピチピチ女子高生に囲まれて……どれお持ち帰りくい？」

日誌を教卓の前に置くと、馴れ馴れしい素振りを見せて、軽く冗談を放つてみる。

先生を取り巻く生徒は笑っていた。

「私もその中に入っちゃおうかなあ？」

傍にいる生徒の最も群がっているところに割り込んで先生を見つめる。

クラスの皆が仲の良いこのクラスは快く私を迎えてくれた。

「……ん〜っ。どれにしようかな？」

狩屋先生は腕を組み、真剣に一人一人の顔を見る。

『先生！！ 先生！！』と身を乗り出してく女子生徒が私の視界を塞ぐ。

お持ち帰りされていいのか君達。

……。まあ、……いいんだろうなあ。

言われなくとも素で先生の家に乗り込みそうだけど。結局皆は若い教師に弱いのか。

長身でがっちりしてる気がするし。体型とは違って……まあ。色白で爽やかな感じ。何処かちゃんぽらんぽんな気がするけど。

「じゃあ……」

「ああ。遅い！！ 残念時間切れ！！ 目移りしてる時点で失格」  
ポンポンと先生の肩を叩くと私はその場から離れてく。

と言っても本当に帰るわけじゃない。私の去った隙間は側にいた生徒が埋めていく。

「チャミ！ 面白いでしょ？」

「チャミ？」

先生は不思議そうに、遠ざかる私の背中を見ながら近くの生徒に問いかける。いつも最後に残る生徒は決まっていた。

次々と先生から離れて行き、その度にさよならを言っていく。

お決まりメンバーは千佳と千佳の仲良い友達だ。

「そう！ 神崎智亜美だから下の名前を略して『チャミ』……どう？ 可愛いあだ名でしょ？」

自分の事のように千佳は話し出す。

狩屋先生と話すのは実はさっきが初めて。それまでは避けていたのかな。

やっぱり気まずいっていつかなんというか。

自分の席へ戻ろうとする背中からの視線が痛い感じがして、無性に頭を掻きたくなった。

「ふ〜ん。智亜美ねえ……」

「ああ！！ 先生呼び捨て！！」

「呼び捨てって。中学生じゃあるまいし。そんなことでいちいち反応するな」

倍の笑い声が教室中に響き渡り、千佳が回りに相槌を促す。

「面白い子だよ？ いつも騒いでて、周りを楽しく盛り上げてくれるし、一緒にいて飽きない。だってチャミの落ち込んだ姿って見たことないってか想像できないし」

また言われた。私自身、望んでいるポジションだし嬉しかった。

……でも、なんだろ。そう思われて心のどこかで寂しさもある。ぽっかりと空いている穴が更に広げられたような間隔。

面白い子、落ち込んだ姿見たことない……か。

私は不意にスカートのポケットに入っている生徒手帳を触れる。

ロンドンに行ってる彼の事を思い出した。

いつまでも不自然に立っている訳にもいかない。

歩く元気を与えてくれた写真をスカートの上から撫で、カバンを片手に背負い込む。

「なるほど。面白くて元気な子。でも、なあくんか違つと気がするけど俺は……」

そう言つて再度、私の姿をチラッと見た気がした。

視線を感じて振り返つた時には話題は変わつていた……。

何。今の言葉。

やっぱり私はこの人苦手だ……。

直感是我的心臟を強張らせた。

## 11・想定外の範囲外

静かに部屋のドアを開け、私は窓越しの日差しに当たってホカホカしてるベットに前のめりに倒れ込んだ。

「はあ……疲れた」

パフンツ！！

お布団に溜まった空気が私の重さでいい音になった。

「んーっはあ！！」

人知れず大きく伸びをした。

あの先生の前だと嫌に気を張るっていつかなんていつか……。

ベットの上で深呼吸して吸い込んだ匂いは、なんだか真夏のお日様の匂いがした。

再び疲れを癒すかのように背筋を伸ばす。傍から見れば、奇妙な海老反りって訳だ。

日の匂いに名残惜しむことなく、筋肉が緩むとゆっくり仰向けになる。

不意にさつき学校で千佳が先生に話してた会話が甦る。

『だってチャミの落ち込んだトコみたことないもん……ってか想像できないもん！』

……。

仰向けになると天井が視界に入った。

色がない部屋の天井に先生の姿が映る。

『元気な子ねえ……なんか違うと思うけど俺は』

ムカっ腹が立った。見透かしたかのような言い方がなんか癪に障る。

思い出せば思い出すほど胃がムカムカしてきた私は勢い良く飛び起きる。

少しはスカッとするかと思って……。

朝に開けたままにしていた窓が揺れ、カーテンが視界の邪魔をした。

驚いて避け切れなかった私は、水色に透けたカーテンを顔面でキヤツチする。

突然の事に肺から外へと空気の入替えが出来なくなって軽く咳き込んでしまった。

「コホッ!! ココ。いたの?」

風で揺れるカーテンの先にココがお行儀よくお座りしていた。吠えることを忘れているのか、尻尾だけで存在をアピールする。なるほど。私が部屋に入る前からココは部屋にお邪魔してたって

訳だ。

「ただいま。おいでココ」

遠慮なく私がおいでと手を差し伸べる前にジャンプして来たココ。サラサラとしたココの茶色の毛並みが通り抜けると同時にココの抱きついた。

さらさらのココの薄茶色の毛が風に吹かれて、気持ち良さそうに泳いだ。

「ワンッ! ワンワン!!」

膝から降りたココは窓の柵に前足を乗つけた。

「ワン！！ ワンワン」

一生懸命に窓の向こうを見ようと尻尾を倍に振る。

意図が理解できない私は、必死に乗り出そうするココの身体を抱える。

「ココ！！ そこは危ないって」

窓枠に爪が引っかけ、離れたくないと吠える。

それもその筈。吠えてる先に呆けているお母さんがいた。

お母さんは、私が呼びかけないといつも立ち止まって夕日を見る。

でも、分かるんだ。夕日を見ていると時間を忘れてしまうような感じ……。

だって今の私がまさに声を掛けるのを忘れてる。

オレンジに街が染まって全てを一色に染め上げていく。

電柱も屋根も人も……まるでその色しか知らないかの様に、それぞれの色を主張していた街並みは夕日色に気付けば染め上がった。た。

そしてお母さんも私も、その色に魅入られてオレンジへと姿が変化している。ただ違うのは、夕日を見つめているこの瞳だけ。

誰もこの眩しい位の光には勝てない。

「綺麗……」

今日の夕日はこの前ほど赤くないが眩しさはこっちが勝る。

ずっと吠え続けていたココに、やっと我に返って気が付いたお母さん。

「お帰り。智亜美」

気付いたお母さんが私に声をかけるが代わりにココが挨拶をした。

「お帰りって逆でしょ。普通」

「そうだったわね」

そして地上から三階へと近いようで遠距離な会話がまた始まる。

恒例の窓越しで話した後、夕日が見えなくなる前にマンションへと帰ってきた。

「お帰り。お母さん」

「あ、そうだ……。来週末から忙しくなるからココに餌よろしくね  
上着を脱ぐお母さんの背中に語りかける。

「え？ どうして？」

傍にあった学校からのプリントをお母さんに差し出す。

「体育祭。忙しいんだよ二学期って……。体育祭の後に続けるように文化祭だし。毎年なんでこの行事の一つでも一学期にまわせないかなって思うよ。秋は騒ぎなくなる季節って分からなくもないけどね」

「智亜美、役員になったの？」

冷蔵庫から冷たい水を手にとると、キッチンの椅子に腰掛けるお母さんに手渡す。

「違う違う……。練習だよ」

トテトテ……。

思い出したかの様に玩具みたいな足音を立て、ココは我関せずと水分の補給する。

そんなココに私は無意識に近寄り、様子を見ながら頭を撫でる。

「放課後に残るんだよ。練習だね」

「そう、大変ねえ」

手渡した水を一口飲むとテーブルに置き、上着を背もたれにかけ  
る。



「またそんな所に置く!」

しょうがないなあ〜と言わんばかりの小言。

母親は娘が出来てるせいか、というのはいすぎだけど至って大雑把。

「あ、そうだ! 智亜美、帰りに牛乳買ってくるの忘れたわ」

「また? 何、それ? 私に買いに行けってこと?」

その牛乳には明日のココの朝ごはんも含まれていた。

だったら文句は言うけれど、私が断る訳にはいかない。

「別にいいけど。ココと散歩するそのついでにでも行くよ」

ありがとうの代わりに申し訳ないと感じる笑みを浮かべ、お風呂場のドアを開けた。

上着を直してから入って欲しかったのに……とまたまた小言を漏らし、溜息を吐きながらも椅子に掛けてあった上着を掛け直す。

一通りの散歩コースを回った。

元気なココを先に歩かせ、もちろんリードは変わらず私とココを繋いでいる。

トテトテと聞こえてきそうな軽快な足音に可愛らしさを覚えながら、コンビニに向かおうとしていた。

「コンビニ寄って行くのか!」 ココの明日のご飯だよ」

言ってることが分からなくても私の声でココは立ち止まってくれた。

ココを抱き上げようとした時。

「こんばんわ」

聞き慣れるにはまだ日が経っていないが、誰だか分かる声までにはなっていた。

「……………」

「無視するのはどうかと思うけど神崎さん？ それともチャミって呼べば振り向くのかな？ 犬の散歩中？」

ココを抱き上げようとしていた腕を降ろした。

「あ、こんばんわ狩屋先生！！ 一瞬誰だか分からなかった」

全開の愛想笑いで振り向くとやっぱり先生だった。

出てきたばかりなのかコンビ二袋をぶら下げている。

「この子うちの愛犬ココって言います！！ 先生は買い物帰りですか？」

コンビ二から出てきたばかりの先生は何を買ったのか。普通よりは少し大きいサイズの袋を右手に持ち会話をしている。

不意に、買い物袋に目をやる私は、思わずちよつとした意地悪な心が芽生えた。

「生徒として抜き打ち持ち物チェックをします。怪しいものは入っていないかなあ？ エロ雑誌とかエロビデオとか……………」

逃げることを期待していたのに。あろう事が奪おうとした買い物袋を先生はパツと広げる。

「え？」

「何、見たいんでしょう？ 別に変なもの入っていないし」

呆気にとられた。でもどっちかって言うと一本とられたって感じに近い。

「え……………別に見せなくても」

「冗談なんだし。」

怪しいものが入ってるなんて思ってない。  
けど、見られたくないものだと思うんだけど……。

「今日はつまらないものしかはいつてないけど。いつもは神崎さんが言う面白い本買ってるよ。まあ俺……一人暮らし長いし、彼女いないしね」

恥ずかしげもなく言う先生を見ると逆に私が恥ずかしくなってきた。

そんなこと聞いてないって言いたかった。

先生が生徒に言う言葉じゃないって、けど……そんなこと言えない。

ムキになってるみたいで。

「先生。私のことチャミでいいですよ？ 千佳達もそんなこと言うてたでしょ？」

無理矢理話を変えた。

「そっ？ じゃあ、お言葉に甘えて『チャミ』ね？」

そう言つてメモする振りをする先生に私は笑いかける。

「まあ、ごく僅かだけど。そう呼んでくれる先生もいるから気にしないで気軽に呼んで」

無意味に胸を張っていつもの微笑を取り戻すと、お座りをしていたココを抱き上げる。

「ココちゃんだよね？」

「はい……。じゃあ、これからコンビニ寄って帰るんで」

先生の横でココの頭を撫でた。

気持ち良さそうにその手の平に頭をすり合わせるココ。

「じゃあ先生、明日また……」

先生のココを撫でるその腕を振り払うかのようにすり抜ける。

「ねえ、神崎さん？」

ついさっきの事で慣れないのか先生は私を苗字で呼んだ。

「はい？」

呼れ慣れない苗字に過剰に振り向く。

ココが落ちそうになってしまったのを慌てて支える。

「あの出来事は忘れていいから」

はつきりと彼は覚えていた。先生って知る前に一度この店で出会ったことを。

「あ……つと」

別に特別何かあったわけじゃない。先生から言わせて貰えば道で困っている人を助けたに過ぎない。

だから今まで私からはどう切り出しているのか分からなかった。

これから知り合う人だって分かってたらあんな姿は見せなかった。涙目でオロオロしている私なんて……。

知ってる人なら元気に微笑んで『ありがとう困ってたんだ』って終わらせている。

油断してたとはいえ……失態だ。

「俺にとっては何でもないことだけど、神崎さん。気にしてるみたいだからさ」

心臓が鷲づかみにされてる気分。それは凶星だったこと。

「……………」

「まあ、それだけ……明日学校でな？ チャミ」

変な空気を誤魔化すためにあだ名で呼んでくれたであろうその声は、何処か余裕がある大人の声色をしていた。

私が気にしていることを知っていたし、誰もいないこの場で言うてきてくれた配慮優しさ……とでも言うんだろう。

その気遣いも全てやりにくい。

私は。……私はやっぱりこの人を好きにはなれない。

## 12・遅刻の結末

いきなりだけど、漫画の女子高校生だとこの場合。

ローファーのかかかとを踏みつけて小走りで、リズミカルにサラサラの髪をジャンプさせ、可愛く赤いリボンを振り乱しながら、ポイントは少し前のめりに。

急いでるからって、ちよつとした段差に躓きながらスカートを翻して。

『きゃ~~~~!! 遅刻!!』

って言いながら、出掛けに口に加えた苺ジャムたっぷりの食パンをほお張り、駆け足で通学路を駆けて行く。

ああ。それはもう古いか……。

でも、それが出来たらどんなに可愛いか。

「はあはあっ!!」

なんて、現実感たっぷりある般若みたいな形相でしかも小走りではなく、大股で階段を二、三段飛ばしスカートとブーメランみたいにブンブン振り乱すリアルな女子高校生ここにいます。

パンなんて啜えてたら息が出来なくて窒息するっつゝの!!!?

軽く漫画の世界にツッコミを入れながら、遅刻ギリギリの汗だけの私が昇降口を走り抜ける。

現実ってそんなもんよ……。

だいたい漫画のヒロインは余計な汗も掻かないし、髪も乱れないし、疲れたって『ハアハア』だし、走りながらちゃっかり食パンだつて綺麗に食べ終わるんだから!!

そんな神業が使える人がいたらお目にかかりたいわよ。

バンツッ！！！！！！？

「ゼイゼイゼイ！！ み、皆、おはよ いったあゝい！！」

ドアを開ける音と一緒に何かは頭から降って来た。

「ったあ！」

思わず痛さで座り込んだ。突然の頭上からの襲撃。

「遅よう！！ 神崎さん」

降って来たものは紛れもなく、片眉が吊り上って不自然な笑顔の先生の手の中にあつた。

何かの本だつた……あ、日誌かあ。

……つておい。日誌って酷い。結構厚い紙で出来てて痛いんだぞ  
っ！！

今、知つたんだけど。

日誌を片手に般若顔負けの憎たらしい程の表情で微笑んでいる。

辺り一面に笑いが木霊した。

この痛さと笑い声が遅刻つてことを再確認させる。ついでに悔しさも再確認。

「まったく、もっとおしとやかに上目遣いで『せんせえ〜。ごめんななりっ』って、申し訳なさそうに来たら許してあげようかと思つたが……」

上から見下ろす先生が舌を抜こうとしているエン魔に見える。

私、舌を抜かれるのかしら……。

ってそれは何？ 上目遣いは先生の趣味なの？

「駄目だって先生！！ そんな漫画みたいなこと出来るわけないって！！」

どいつもこいつも……って私自身も思ってたけどさ。

「だって聞いたたる？ そのドアを開けるまでの足音。おしとやかには程遠いって……」

そう言った男子の声が教室全体に広がり、笑いの渦になった。

先生の目が離れた瞬間に私はそっと気配を消しながら、前を通り抜け自分の席に着いた。

その時、一つ後ろの美弥が先生に見つからないように小さく手招きをしていた。

「お勤めご苦労さん」

「いえいえ。とんでも」

上司に対する言葉遣いの様に会話を交わし、安心しきった顔で席に座る。

「またどうしたの今日は……？ いつも遅刻なんてしない優等生のあんたが珍しい」

優等生なんて微塵も思っていないせに。冷静ないつものトーンで冗談を言う。

冗談でも美弥の声のトーンは上がらない。

「昨日は寝付けなかったんだよ。気付いたら朝でさ……」

そういつて先生をちらつと見る。

すぐに美弥に気付かれないように目を逸らす。

「なるほど。んで、滅多にしないたった一回っきりの遅刻でこの歡



迎？ まるで常習犯みたいな扱いじゃない」

「ん〜人気者は辛いということでお分かりいただけだと思います  
……」

深々と美弥にお辞儀をする。

「予想外のお勤めお疲れ」

軽く私の頭を撫でる。

んー……この扱いもいかなものかと。

先生の声が一段と大きくなったので、美弥の顔にさよならを告げて前を向く。

「今日の日程についての連絡事項は終わりだ。なんか質問あるか？  
今日も変わらず、初めとは比べ物にならないくらいにラフな格好の先生。」

まさに今、起きてコンビニに行くような服装だ。

「ないなら最後に。これから体育祭の係りをきめるぞ。まあ、要は体育祭実行委員ってやつだな。これは何処のクラスでも決まりづら  
いんだよな」

そうでしょう。そうでしょ。

だって皆、早く帰りたいからねえ。

頬杖を付きながら先生の話を聞く。

実行委員になった日には毎回放課後は残されるんだから、利点がないし意味がないって！！

皆早く帰りたいんだし、そんな理解のある生徒は確実に内申狙いだね……。

「しょうがない。この手段は使いたくなかったのだから……」

怪しく瞳が光ったような気がした。  
手っ取り早い方法を初めから用意してた先生。

一気に凍りつく教室。

「まあ、平たく言えば……」

教室全体が息を飲んだ。そんな表現が的確かも。

そこまで役員になりたくないのかって言ったら私は嘘になる。確かに嫌だけどそんな先生の一言一句に息を飲むほど嫌じゃない。

だけどきつと生徒の八割くらいはバイト、遊び、彼氏とデート。多感な時期だ。色々あるに違いない。そういう私は何様だ？

その行く末を見守った。

「アミダクジ。文句はないな？俺だって面倒なんだよ頼んだりするのは。だから皆の中で公平に！！まあ、三十八分の一だ。当たる確立なんてそうない。当たった奴は宝クジにでも当たった気分です。頑張ってくれ」

んな……無茶な。

先生の言葉とは言いがたい言葉を吐き捨て、ポイポイと用意していたペンと用紙を取り出す。

「ほら、皆ちやちゃと書いた書いたあ！！男は男らしくスパツと女は女らしくスパツと書きな！！」

どっちであろうとスパツと結局は同じじゃん……。

私は静かに腰を上げた。美弥もだるそうに、どっちでもいいって感じで席を立つ。

数分後、無理矢理任命された

『体育祭実行委員に決まったのは……』と、意味なく誇らしくはつきり指を差す。

「神崎、お前で決定だ!!」

意味の分からない勝ち誇った笑みの先生に私は呆気をとられて、ブライングに近い文句を言うのも忘れてしまった。

この職務放棄教師。先生は子供だ……。

担任であるならば、一人一人の適材適所を見据えながら実行委員は決めるべきなのにこんな紙切れに任せるなんて……。

アミダで決まった瞬間には自分の役は終わった。と私を見る目。

信じられないのは私も同じ。

だってさっきまでは別に私は嫌って言うほど嫌じゃないって考えてたクセに……。

役員になった途端、自分の運の悪さを心の底から後悔した。

『嫌じゃない』っていうのは自分じゃないだろうっていう余裕からきた考えだったのかもしれない。

皆みたく遊べないからとかじゃない。

そんな簡単なものだったら私はもつと表情に出して嫌がっていた。

けど、人事だと思って皆は嬉しそうだから、それ相応の空気に合わせてる。

だってそれは想定内の表情だから。喜怒哀楽のタイミング、価値を知り尽くしている。

計算し尽くしている分、こんなトコでも要らぬ我慢は出てしまうものだ。

### 13 不安定な心

先生から綺麗に一本指で指名されたその日の放課後から早速、企画や議案、クラス用旗を作るための木材を生徒会へ取りに行ったり買出しだったり散々な毎日だ。

しかも全てが手作りでハチマキなんかミシンで縫う始末。百パーセント、メイドイン私だ。

買えばいいのに……。

なんて愚痴を言っただけで生徒会に直談版する気力もなく、無言で家庭科室に居座ることもしばしば。

なんだかんだで美弥が手伝ってくれて、仕事は軽くなってるけど……こんな損な役回りだったとは……。

それはきつと断れない私のせいでもある。

アミダの最中は周りは敵と思えていう空気の中、断る勇気があるかっていうと断言してノーだ。

群れの中で仲間の眼差しに耐えられなかった。

それにも責任にも程がある！ あの先生の表情！！

さすがにあれはないわぁ……。

放課後の家庭科室。そこはいつも家庭部が使ってる場所。

まあ、本当に名の通り家庭的なことをしているのかっていうと、即刻アウトで八割の確立でダベりに使っているのだろう……。

放課後に階段を下りる時、ミシンのカタカタって音が聞こえた日には思わず立ち止まってしまつくらい稀さ。本当に名ばかりの家庭部だったりする。

きつとあそこのロッカーには色んなお菓子がてんこもりなんだろう。

でも、そんなもんさ……。

文系の部活だって争えるものがなきゃ人は真剣にはやらない。

人によるけど興味がついてこなきゃ尚更だ。

スポーツが嫌いでここでいいやあ……って適当に決めちゃった人の集まり。

対抗意識と興味がかち合えば計り知れない力を出すんだろう。

「ごめんねえ……美弥。こんなことに手伝わせて」

言っではいるものの、目の先にはミシンなので美弥に視線を向けられずにいた。

規則正しくカタカタとなり続ける機械的な音は問答無用で手元にある布をさらっていく。

断続で続くミシンの音は、静かになった放課後の教室に響き渡り、更に静けさを演出する。少しも乱れのないミシンの音に電車のガタゴトンにも似た眠気が襲ってくるってもんだ。

「いいよ。だって一人じゃ大変だろうし……」

少し棒読みに聞こえる美弥の声。だけどいつも美弥はこんな感じだ。

落ち着いてるといっつか冷静っていうか。心配させないようにワザとオーバーに言わないのか。いつも静かにそこにいてくれる。

美弥も『手伝うよ』とか言わない。いつもなんとなく気付けばそこにいる。

だいたい私達なんで仲良くなったのかさえ忘れた。

カタカタカタ……。

一定の速度を保つミシンと応援旗に取り掛かった私と美弥。二人以外には誰もいなかった。実際はこんなもんだ……。

どっかの青春ドラマだと確かに皆、役員を嫌がる。

だけど、いざ取り掛かってみると『俺手伝うよ』とか『私も!!』っていつか皆が集まって一致団結なる。

なんてこと起こりえない。

いつも皆、なんだかんだで優しい言葉をかけては帰り支度をして逃げてく。

言葉で丸く収めて私に声を掛けその場を後にする。

駄目だ。私、大分捻くれてるな……。

「ふああ〜っ」

美弥の目の前で私は恥ずかしげもなく大きな欠伸をし、腕も高く上げ背伸びをする。

こんな生活どれくらい続いてんだあ？

下校時間ギリギリまで作業して、帰って少しやって。授業が終わって家庭科室に来ての繰り返しに疲れはピークに達している。

涙目の瞳の向こうでふつと美弥と目が合う。

「あ、ごめん」

なんだか謝ってしまった。

「別に何も言っていないじゃん」

そう言って口端の上げて笑う。

静かに手縫いしていた布を膝に置くと、美弥も伸びをしていた腕を降ろす。

「細かいところ終わったよ」

それはもうすぐ応援旗の完成を意味していた。

「本当！！ 私もほらっ！ 丁度今、終わっ」

美弥に見せようとバツと広げようとした時。

「った……！」

思わず出来上がったばかりの応援旗を落としてしまった。

見つめた指先は血が滲んでいた。

「大丈夫？」

「うん。チクつてただけ。あつちゃ。針が刺さったままだった」

駆け寄ってきてくれた美弥に当たり前の様に針を見せる。

考え事をしていたからかもしれないけど大失敗だ。

血で溢れた人差し指を口に運ぶ。

「血、止まらない？」

心配そうに私の顔を覗きこむから、口を開けないかわりに首を振る。

「それはどうにかなるんだけど。だって止まんなきゃ死ぬしね」

血の味がする不快感に片目を瞑りながら、私は茶化して笑う。

『一度あることは三度ある』ってよく言うから、持っていた針をまた刺してしまわないように仕舞う。

「ただ染みるかな？ 食事に洗濯。ココのシャンプー」

指折り数え、思い浮かべるだけでいっぱいあった。

もう大丈夫と判断したのか美弥は自分の持ち場に戻る。

「そっか。智亜美は自分で全部やってるもんねえ」

完成間近の布を手に取り、美弥は作業を続ける。



「つていうか、やってくれる人がいないから。お母さん仕事で忙しいし」

お父さんはいないし……と後続く言葉。

思い出したくもない。

離婚したなんてなんだかその発言自体があまりしたくない……。

もうすぐ校舎が閉まってしまおうというのもあり、キリが良いところで私達は次の日に繰り越す様にした。

座って行う作業に肩が凝った。

旗だけ作ってるだけならまだ良かったけど、クラス種目の練習にも参加しなきゃならない。

少し疲れてるのかな？ 首をコキコキと鳴らす。

「やっぱ少し疲れてる？」

思考を読んだかのように隣から言葉が投げかけられる。同時に後ろに倒れる位の大きな欠伸が出た。

「ん~~~~わかんない。けど欠伸が出る」

答えになってるようであってない。

美弥と同時に靴を出すと、投げるように下へ置いた。

「ありがとね。いつも付き合ってくれて」

欠伸をまた繰り返しながらお礼を言う。

「別にいいよ。そんなこと頼まれてやってる訳じゃないし勝手にね」  
「だけど、これは私の仕事だから」

その瞬間、美弥の表情が変わった気がした。

靴を履き終わるとほぼ同時に、昇降口を目指した。

「あ、智亜美！ 内職忘れてる」

後から追いかける美弥から大きい紙袋を受け取る。

「これも良いけど、やっぱり少し休憩が必要じゃない？」

見つめる紙袋の先はもうすぐ完成する旗が袋から覗かせていた。

「うん、だけどねえ」

日数を考えると余裕なんてなかった。

受け取りながら感謝の意味も込めて、私は美弥に微笑むだけ微笑んだ。

九月の夜。

暑さが残っている涼しい帰り道の中、雑談をしながら途中で美弥とは別れた。

美弥には悪いけど、やっぱり誰かというより一人が落ち着く。学校帰りに駆けていく子供の姿もない。話し込んでる主婦もいない。

時々、自転車や車は時々通るけど気になる程じゃない。

世界全体が暗いと必要なもの以外が視界に入らなくて余計なことを考えずに済む……。

自分だけの世界っていうのか、大袈裟な物言いだけどそんな気になる。

「お、今帰りか？」

「……」

私だけの世界なはずなのに声がし、水を差された気がした。

「つて聞こえてないのか？」

こんな時でもこの先生は邪魔をするのか……。自転車私の横を通り過ぎ、そして私の五歩位先に自転車を停止した。

「おい！ その不良女子高校生！！」

そう言われる前にピントは合っていた。だって私の目の前に自転車を止めているから。

聞こえない位の小さな溜息を吐くと、自然に口の端が上がった。

「先生。こんな時間にどうしたんですか？」

「やっと気付いたな」

先生は何故か苦笑していた。

「ひどっ！！ 不良って先生が無理に仕事を押し付けたんじゃないですか」

満面の笑みで先生を攻めた。

「あれは、お前の運が悪かったただけだ。文句を言うなら俺じゃないアマダ神だな」

足を止めない私に自転車から降りた先生は隣で押して歩く。

「ぷっ！ 先生のお言葉とは思えない無責任さですねえ。ははははっ！！」

お腹を抱えてオーバーに笑う。ただ黙って先生は私の横顔を見ていた。

「つてか先生も今帰りなんですか？ なんだか先生とはよく会いますねえ」

涙を拭いながら会話をつなげる。

「ああ。家がこの近くだから」

平然と言って歩く私達の目の前には、先生と初めて会ったコンビがある。

「あとそうだな。五百もしない間に俺んちに着く。ここをちょっと曲がった先のマンションなんだ。神崎も知ってる通り木村先生の代わりで来たから引越して越して仕立てただけだな」

「淡々と指を差しながら話を続ける先生。」

「どうした？」

「喋らなくなつた私を気にしてか顔を窺う。」

「そうか。ココの散歩に行こうとした時に通つたあのトラック。」

「神崎？」

「え？ あ、……あつ、私もそんなんです！！ 家この近くなんですよ。偶然ですね。今度先生の家に遊びに行っちゃおうかな？」

「顎に指先を当て先生の顔を窺う。」

「なんだか笑いすぎて頬が疲れた……今日は無理に笑つてばかりだ。」

「もしかして疲れてる？」

「気を抜いた私の表情を先生は見逃さなかった。」

「え？ いやいや疲れてないですよ？ なんかそういえば美弥にも言われたなあ」

「……。 やっぱりこの新任嫌い。ふとした瞬間でさえ余裕与えてくれない。」

「知らないフリしてくれれば良いのに間髪いれずにストレートに追求してくる。」

「よく見てんだ。普段いい加減な分だけよく分かる。」

「まあ、アミダの神様のせいだけだな！」

「またそんな先生のせいじゃないみたい……」

「呆れた顔を作り上げるのさえ、辛くなってきた。」

「疲れるだろう。神崎みたいになんか近づいて欲しくない人に」

程、無理に笑うんじゃない……」

すんなりとまるで会話の続きのように言い放つ。

突然の予期せぬ発言に対応しきれない頬は上げたまま硬直した。頬は熱いが、一気に体温が下降した気分になる。

肯定も否定も出来ないまま先生の言葉を聞く。

「なあ、神崎。狩屋先生のこと好きじゃないだろ？」

わざと自分の事を『狩屋先生』と呼ぶ。言葉の下では確信を付いた笑みを浮かべていた。

「何を言ってるんですか。まだ私、先生の事なんて何も知らないのに……」

そんなのまだよく知らなくても分かる。

雰囲気や仕草が……勘が、そう伝えているんだ。

ここでまだ笑っていればこの場は逃れられる。

「バレバレだよ。俺さ、昔……弟がいていつも」

先生の話はどうでもよかった。私の中でスライドされる言葉。

木村先生の言葉や千佳の言葉。

『面白い子でしょ？ 智亜美って……』

『無駄に元気で……はしゃいでそのままの神崎でいてくれ』

色んな言葉が蘇る。

「先生？」

「ん？」

「それは。それはあの日、ココ連れてコンビニにいた私を見たからですか？」

理由は一つしか見当たらなかった。

むし返したくもないあの日の事……。

「ココ？ あ、ペットのこと？」

自分でも予想しなかった。

こんな平然と言われた言葉。何気なく言われた言葉だけに思った以上に癢にさわる。

なんで先生はこんな私がイラツつとくるようなことを言うんだらう。

お腹の奥の方から沸々と湧き上がるこの感覚。だけど表面に出すわけにはいかない。

「……………」

「だからすごく感謝してます！！ 担任でもあり、困ってた時に助けてくれた先生を私が苦手なんて思うはずないじゃないですかあ！」

騒いでる私はおかしく写ってないだろうか……。

こんなこと意識したのは初めて。

上手くやってきたつもりだったから。

自分が今、どんな表情をしているのかなんて気にしたことがなかった筈なのに。

「しかもそんな事、これから共に学んでいく生徒に言うことじゃないよ。大体嫌いって言ったらどうするんですかあ？」

身振り手振りと大げさになっているのに気付く。

バサンッ！！

「あ……………」

動揺のせいかカバンが地面に落ちる。

まるで『それ以上は言うな』って言われてるみたいに糸が切れ、言葉を失う。

それを無言でさっさと拾い上げる。

「じゃあ……私。ココの散歩をしなくちゃならないんでこれで」

足を半回転させると小走りで走る。そして少し距離が離れた頃。

「バイバイ!! 先生また明日ねえ!」

大きく先生に見えるように手を振る。

「言われなくても実行委員、頑張るからっ!!」

小さくなり始めた先生も小さく手を振ってるように見えた。

夜の始まり、先生と別れてしばらくもしない間に自分の家。もちろん自分の部屋には明かりは点いてないが、奥の方から微かな光が見える。

お母さん帰ってきたんだ。

それはそうか。いつも5時位には帰ってくるから。

「ただいま」

テツテツテツ。

お母さんより先にココが私を出迎えた。

ココは私が荷物を持っていることを知っているのか抱きつくのを我慢していた。

その代わりに、いつもより倍に尻尾が私を呼んでいるように見える。

溺愛している飼い主の思い上がりなのか、そう思えてしまう。

「よしよ」

手に持っていた体育祭の道具を下ろした。

途端、ココは遠慮せずに私の胸に飛び込んだ。無性に嬉しくなっ  
た……。

「おかえり。智亜美」

少し時間が経ってから奥からお母さんが見える。

「ただいま」

珍しくメガネを掛けていたお母さんがメガネをずらして私の顔に  
挨拶をする。

何か書籍に目を通していたのか肩を叩く。

「あ、ごめんね。遅くなって。これからご飯作るから」

静かにココをフローリングに降ろした。

まだ足りないと言いたそうに二、三回吠えるココ。

それを頭を撫でることで我慢してもらった。

「いいわよ。疲れてるんでしょ？ 体育祭が終わるまで適当に見繕  
うわ」

そう言って笑顔を見せたその笑顔に従う私、再びカバンを持ち上  
げる。

「智亜美、少し疲れてない？ 役員ってそんなに大変なの？」

この何時間で何回その言葉を聞いただろうか。

そこまで疲れているように見えるのか確認しようにも鏡がなかつ  
た。

「ん〜。どうなんだろう忙しっちゃ忙しい」

そう良いながら階段を上がり自分の部屋に辿り着く。



ココも後ろからついて来ていた、扉を開けて先にココを部屋に入  
れると扉を閉める。

疲れてるのかな……？ 無意識にカバンを放り投げてベットに倒  
れ込む。

「……………」

あ、やばい目が閉じそう。っていつかこのまま眠りたい……。

ゆっくりと身体を起こす。

「へへっ」

こういう時は頼りになる薬みたいなものがある。

放り投げたカバンをまた拾い上げる。ココは垂れた耳を動かし敏  
感に反応すると、何か貰えるのかと座り込む。

「ココには何も無いよ」

何も分かってないココは尻尾をふって愛想よく座っていた。

ん……何処だったかな？

確か、カバンの外のポケットに今朝入れた気がする。

違ったかな？ スカートだったかな？

乱暴に立ち上がるとスカートのポケットに手を入れた。

「あれ？」

見つからない……何処に入れたっけ？

扉の脇に持って帰ってきた紙袋に急ぎ足で手を伸ばす。

「……違うここじゃない。やっぱり確か、カバンの外ポケットに」

またベットにあるカバンを今度はひっくり返した。

ココは首を傾げて私の顔を覗きこんだ。

「あれ？ な、ない」

心臓が早鐘を打った。一瞬にして漠然とした不安が心をかき乱す。いつも生徒手帳か外ポケットの筈なのにどうしてないの……。

涙目になっていた私にココが心配そうに喉をならす。

違う……。この中じゃない違う違う!!

「ど、どうして? 何処行っちゃったの?」

ただの紙切れ。人から見ればそうかもしれない。

ただの写真。人から見ればそうかもしれない……。

だけどそれは私にとって大切な大事なもの。

勢いよく部屋の扉を開け放ち外へと飛び出す。

「智亜美!! こんな時間に何処行くの」

声を掛けるお母さんを無視して外へと飛び出した。

即座にポケットから携帯を取り出し、地面の光を当てる。

落ちてるはず!!

きつと落ちてる。途中で落としたんだよ。それ以外に考えられない!!

知らない人が持つていく?

そんな訳ない。だってそんな高価なものじゃない。

紙屑って思ってしまったら捨ててしまう?

私だけが大事って思ってるもの。

「何処? 何処に落としたの」

言い訳や理由をつけて見つかる可能性を捜す。

もしかしたら部屋の何処かに落ちているかもしれない。可能性は

ある。

錯乱してる私は何処を最優先に捜せばいいのかを見失っていた。

「どうして見つからないの……?!」

焦れば焦るほど注意力は削がれていく。

知ってる……そんなの知ってる!!

知っててもどうしようもない時って言うのがある。

落ち着けと言いつ聞かせる程、コントロールが出来ない。

「あれがなきゃ。あれがなきゃ私……」

壊れていく……今の自分じゃなくなる。

どれ位捜し歩いたのか、私は暗くなったアスファルトにへたり込む。

分かっている頼っちゃいけないって。人は頼るものがあると弱くなっていく。

支えられるものがあると辛さは2分割4分割にされ、忽ち自分で立ち上がる術を忘れてしまう。

掌にある筈のモノがない。

いつも包んでくれている人がいない。

そんな単純なことで大粒の涙を零した……。

## 14・真つ白な保健室

失くした物のお陰で昨夜は寝てない。

あれから、どの道を通って帰宅したかも記憶にない。

変な話だけど、目を覚ました私が私自身であることを自覚するにも時間が掛かった。

朝から寝不足のせいか。耳鳴りがコメカミの辺りで不穏な音を立てている。

通学時間が差し迫ると首を横に振り、ベットから足を床に付ける事で自分だということを改めて確認する。

それでも一歩一歩前進し、重いカバンを持ち、学校に来た意思は何者でもない。

自分に対する周りの反応と、詮索されたくない一つの意地だった。友達も家族も……誰も私に関与して欲しくない。

皆にはどこまでも『学校』での私を見ていて欲しい。お母さんにはいつでも『リビング』での私を見ていて欲しい。

臆病者の末路。

取り返しの付かなくなった結果に空しさを感じない時なんてない。

「あ、やばい智亜美！！次、体育体育」

上の空の中。いつの間にか時間は過ぎ、鳴った予鈴に千佳が反応する。

「そつだよ体育！ まったく。千佳が下らない話するからだよ」

我に返った私は聞いていなかった事を誤魔化すために、千佳が言っていた単語を拾い集めて手早く支度をする。

「何ソレ!! 酷くない?」

「ウソだって。真にうけないですよ」

私だけじゃない。きっと誰だって人は辛い時があったら必ず笑顔になろうとする。

心配されたくないのか、それは変に他人であろうとする精一杯の虚勢だ。

自分が思う許容範囲を相手が越えてくるとイラだったりする。

一定の距離を保ちたがる人間特有のクセだと思う。

「美弥、うちらも行こう!!」

着替えていない私達は、腕から落ちそうになるジャージを顎や腕で抑え、先に行ってしまった千佳達のグループに追いつくように急いで教室を後にする。

体育っていつてもやることなんて決まっていた。

今の時期やることと言えば体育祭を控えた競技練習。

正直、あまり乗り気じゃない……。

それになんだか気持ち悪いかも……昨日は寝れなかったからかな。欠伸をかみ殺しながら美弥にバレない様に浮かんだ涙を拭う。

寝れる状態じゃなかった。

きっと明日になれば見つかるとか、きっと机の中に置いたままで帰ってきてしまったとか。ベットの途中で夜明けまで『きつと』や『

絶対』を捜して可能性を何度も張り巡らせていた。

分かってた可能性なんてないって。だって私は人前でソレを開かない。

妙な詮索をされたくない。興味本位の視線はつきり言っただ面倒だ。人から見たら何処にでもある海外の風景画。綺麗な街並みが写ってて、昇る朝日が感動的でよくポストカードになりそうな写真だ。誰もに興味をそそられる様な絵画みたいな写真だからこそ、私は人がたくさんいるところでは開かない。

踏み込まないでほしい……近寄らないで。それは常日頃思う事。

「智亜美、着替えた？ 先生呼んでるみたい早く行こう！」

美弥は急いで更衣室のロッカーを閉め、それに合わせる様に慌ててロッカーを閉める。

「うん！ あの先生は歳を取ってる割には言うことが元気だからね」

一足先に更衣室のノブに美弥は手を掛ける。

「待って！」

走り出そうとしたら靴紐が視界に見え、慌てて靴紐も結び終わると、顔を上げて立ち上がった。

辛い時は笑ってしまう自分に時々は空しく思ってしまう時もある。それでも首を突っ込んでほしくない。

何の根拠も無い漠然とした意地が私をここまで駆り立てる。

そんな私にとって、美弥はとっておきの親友と言っている。

心から理解しあっているそれが親友だっと思つかも知れない。だけれど人それぞれ形があっというと思う。

余計な詮索をしない、言わない限り聞きたがらない。  
考えてる以上に踏み込んでこない関係、それが私の望んでいる親友。

心から理解しあえる。そうだったとしてなんだというんだ……。  
お互いの全てを理解しても、更に人は極上の何かを望む。

一番近い関係は絶妙な筈なのに、一番に細くて脆い一本の線で繋がっている。

想い合う気持ちで引いては緩めて、緩めては引いて、引いて欲しい時に緩めてしまうと上手く噛み合わず絡まってしまう。

人の愛って言うのは押ししてるだけじゃ返ってこない。緩めてるだけじゃ返ってこない。

そんな気の使う駆け引きは面倒で仕方ない。

だったら初めからしない方がいい。望まない方がいい。

はあ。先に行ってしまった美弥の後姿を見て何を考えてるんだ。  
うるさい体育教師が笛を片手に目くじら立てて待っているって言うのに……。

急いで着替えたせいなのか、少しカッコ悪い感じに着こなしてしまった。

ジャージの裾を揃え、襟をピンと張り、朝の身支度の様に整える。  
二回目の笛の音が鳴った。本気でヤバイと感じた私は一気に更衣室から外に出る。

「……っ!」

予想以上の天気の良いさに目の前が真っ白になった ……。

真夏の日照りとはいかないが、更衣室の中が薄暗いせいもあり、屋内と屋外の差が私の瞳に予想外のダメージを与える。

強い光が眼球を突き抜け、辺りが薄明るく視界が白くぼやけた。

辺りに見えるのはまるで、ピンボケしたカメラのレンズみたい…。

確かに今日は晴れると出掛けのテレビで言ってた。

ボーっと朝食を取る私の耳元に聞こえた天気予報のお姉さんの声。呑気にもそんな今朝の出来事が脳裏に甦る。

先生の何度も笛を吹く音が聞こえる。もう三回だか四回だか分かんなくなってきた。

さっきより音が大きくなった気がする。

集まらない生徒にかなり怒りが溜まっている様子だ。笛の音だけが鮮明で皆が集合しているところが見当たらない。

「……あ」

頭がクラクラする。気付けば足は地面を蹴っている筈なのに、風船の上を歩いているような感覚に陥った。

体勢を立て直そうともう一度踏ん張ると、容赦なく陽光が私を襲った。

!!!!!!??

ま、眩しい ……っ!!



「ちょっと、智亜美？」

あ、そんなところにいたんだ美弥。

早く……っ。は、やくいかなきゃ先生が

……。

歩こうと足を前に出して体重を傾けた時、膝の関節に力が入らずグニヤリと意思とは関係なく前のめりに倒れた。瞬間、私の瞼は自然と閉じていた。

「智亜美っ！！！！？」

皆が急いで駆けてくる音が聞こえた。

走ってくる砂埃に気が付く前に、私は気を失って熱くなっていたグラウンドの上に倒れ込んでしまった。

………。

「う……、んっ」

寝返りを打つ。途端に意識が回復したが身体が上手く動かせない。自分の身体じゃないみたい。全身で鉛を背負った重さ。目覚めは最悪みたい。

「あ……っ」

状況は把握できない。まだ目が覚めたといっても意識は朦朧としてる。

気持ち悪さが残っているのか、口の中に何とも言えない嫌な感じが残っていた。

目が覚めた？ 私はどうして横たわっているんだろう……。

確か体育祭の練習で更衣室を出た時から記憶がない。

瞬きを何回か繰り返すと少しチカチカした。

周りには一面の白。私の頭にはお日様と洗剤のいい香りがする枕陽の匂いがする掛け布団は丁度いい重さで私の身体を包んでいた。

学校なはずなのに閑散としていて、少し鼻の通りがよくなる様な薬品の匂いがする。気にはなるが、微かだから安心できる心地いい匂いだ。

「智亜美？ 起きた？」

視界に入った美弥が私の顔色を覗く。

「あ、美弥。え、ここ、……一体」

何が起きたのか単純に知りたかった。

頭が上手く回らなくて、人に聞かなきゃ解決できない。

辺り一面の清潔感を保った異空間的な白い部屋に簡単に頭が翻弄される。

「倒れたの。原因は睡眠不足、過労だったさ……」

布団越しの私の身体を優しくポンポンと叩く。なんだかお母さんが赤ちゃんをあやす時に使うような力強さだった。また何も考えられなくなる様な一面の純白と、心地良いリズムが安心する。

「夜更かししてまで体育祭の用意してたの？」

「……え？」

「だって、じゃなきゃ睡眠不足にはなんないでしょ？」

今、考えられる当たり前な原因の一つを美弥はベットに肘を付けながら言っていた。

「うん……ごめん」

『本当は違う』そう思いながら顔を背けた。

全然寝れなかった。ずっと心配だった。何より大切なものを私は失くしてしまった。

一つの可能性としてきつと学校にあるそう思ってたのがそれ外的外れ。

期待していた分、ショックがでかい。

何処で落としたんだろう。そう思うとまた嫌な吐き気がする。

「そう……か。まったく。そんなことで無理するなんて」

美弥の返答に少し間があった。

「本当にごめんね」

「とりあえず先生がもう帰っていいってさ。これから私は授業に出なきゃいけないから行くけど、少し休むならそうしな？ 先生には私から言っとくから」

顔の筋肉が上手くコントロール出来ないけど、今やれる笑顔で美弥を見送る。扉を閉める音が聞こえると私は身体を起こした。

視線を下に向けると、着ている服は体操着のまま横たわっていた。

「神崎？ 入るぞ」

美弥と入れ違いにその声はカーテン越しの向こう側から聞こえる。こっちが返事をする前に問答無用で少しクリーム色に透けているカーテンを左右に開いた。

「おっ！ 起きたな。さつきそこで一ノ瀬に会ってな」

一ノ瀬……あ、美弥のことか。

私は名前で呼んでるし、苗字でだと聞きなれないから変な感じ。

「神崎が起きたって聞いたから見舞いに来た」

「見舞いなんて大げさな」

教室と保健室この近すぎる距離でお見舞いだなんて……。

私はまだ体調からか精神的なものなのか、震えが止まらない手をきつく握り笑った。

さつき美弥が座っていた椅子に今度は先生が座る。美弥より身長の高い先生が椅子に腰掛けると、丁度良い具合に視線が重なった。

「大丈夫か体調は？ 過労と睡眠不足なんだって？ 気合入れすぎなんじゃないか。夜なべとかして準備してるんだろう」

まったく美弥と同じ事を言う。

「うーん……やっぱそうなんですかね？」

だけどそれは違う。さつきと同じ頭で否定する。

美弥とは違う誤魔化し笑いを先生に向けた。

「神崎、なんでクラスの奴らに声をかけないんだ？」

「え？」

「神崎の場合は、手伝ってって言ったら手伝ってくれそうな友達いっぱいいるだろう」

言い返す言葉がない。無言でその質問が終わるのを待っていた。

「まあ、いいんだ……そこんこは」

あっさりと引き下がった先生は、思い付いたかのように無造作に腰をあげるとズボンのポケットに手を入れた。

「ただ、これを渡したくて来たんだ」

渡したいもの……？

私が先生から受け取るものって何もな

……。

「これ、神崎の落とし物だろうか？」

え……それ……。

受け取るものなんて何も無いと思ったけど、それは何よりも願っていたモノだった。

私は無意識にゆっくりと両手を伸ばし、片手で受け取れるはずの大きさなのに、両方の指でそれを受け取った。

「……………」

思考が停止した。もやもや考えてること。

上手く筋肉が動かないこと。さっきから誤魔化し笑いばかり浮かべていること。

美弥の言葉や先生がさっき言ったこと全て忘れた。全てが帳消しにされる。

両手でしっかりと掴み、ゆっくりとそれを包み込むように胸の前までに持っていく。

あ、あった……。

「昨日、帰り道に落としただろう？ 神崎が走り去った後にそれが落ちてた。その写真はロンドンだろ」

見つかった……っつ。

写真を持つ逆の手がシーツを強く握り締めた。

今も尚、震えが止まらない掌は、白く綺麗に整っているシーツの皺を増やしていく。

一つ、二つ……皺が増えていく。毎に掌を握り締め、伝わる痛みは本物だった。

不自然な私の仕草に先生の言葉が止まる。

「か、んさぎ？」

私自身、泣いていることに気付かなかった。

人前で泣くことなんて滅多にないといっても過言じゃない……。だからあまりにも不慣れで……。だから気付かなかった。

自分自身が泣いていることを……。

一滴一滴。小さな深い色を作り、白いシーツを涙で染めていく。

その瞳から流れる数だけ先生は私に声を掛けられずにいた。

写真を差し出した掌は私の視界に入り込んでいく。手渡したまま瞳から消えない先生の掌は彼が戸惑っていることに証明している。

ここで少しでも自分が動いてしまえば、私がさらに泣き出してしまっんじゃないかと。

「えっ、うっ……」  
益々しゃくり上げるこの反動で涙が一向に止まらないことに気付く。

さつきまで落胆していた気持ちに、いきなりお腹いっぱいになる程の不意打ち。

制御できない気持ちだが、上へ上へとはけ口を求めて競りあがっていく。

この予期せぬ反動を器用に止められるものがいたら、それは紛れもなく偽者だろう。

「よかった……っ。よかった……」

その言葉に先生は何か気付いたのか、驚いた表情はなくなり、泣いて俯く私の頭を優しくなだめてくれる。ますます涙は大きく雫をつくり頬を流れた。

こういつ優しさに私は弱い……。

理由も分からず、私の頭を優しく撫でた大きな掌。

先生は二、三回撫でると、それは一瞬のことですぐ明後日の方に向いてしまった……けど優しく撫でてくれるこの大きな掌は時間を許してくれた。

言葉なく『泣いていいよ』って言われたみたい。元々遠慮なんてなかった私の瞳から涙が零れ落ちた。

……その間、先生は私の側にずっと居てくれた……。

それから泣き止むまでの時間を先生は共有してくれた。

「先生。普通は女の子が泣き出すと男って外に出て行くものじゃないんですか」

写真も見つかり、すっかり私はいつもの元気を取り戻していた。

しっかりとズボンのポケットには確かなものがある。再度、手で確かめる。

だからこそ、ここは言いたいことは言っておかなければなるまい……。

「ここで誰か入ってきたら困るだろ」

自信満々に当然と先生は反論する。

「そう言うな。生徒を相手に変なこと考えてないから……」

当たり前だ。

だって先生がいれば誰か一人いればこれ以上の失態を誰にも晒さなくていい。

逆に言えばこの状況の場合、人がいてくれないと不安になる。

ドアが開く音したらきつと気まずい。

「誰か入ってきたら俺が外に顔を出せばいいだろ？」

やっぱ嫌いだこの人、この人の考え方は上辺がない。

義理とか当たり前とか常識とかそんなもの関係ないんだろう。その人を見てその人に応じた考え方をしてくれる。だから何だ。そういう訳なんだ。

「凶星って顔だ」



不意をつかれた私は顔を覗いているのを気付きもしなかった。頭に血が昇った気がした。

「先生！！ 怒りますよ」

今は本当にヤバイ！！

何がやばいって、さっき頻り泣いたから感情の制御がまるで追いつかない。先生の行動やくれる言葉を壁を隔てる事無く、ストリートに聞き入れてしまう。いわゆる素直な私だ。

「とりあえず……顔ボロボロ。洗ってこれば？」

見てられないみたいないな悲惨な顔をする先生。

確かに化粧は濃くない方だけど、あれだけ泣いたらメイクは落ちてるだろう。

「もうこれで早退だろ？ 送って行ってやるよ。担任の先生が！」

自分の胸を二、三回叩き任せなさいと言った口調で微笑む。

なんだこの恩着せがましい言い方は『担任の先生』なんて無理矢理くつつけるし。

「そういえば先生、授業は？ あ、サボリですか？」

「あほ。俺は今の時限、担当するクラスがないの。だから昼飯を食う時間までフリーな訳」

送っていつてくれる。

その言葉が嬉しかったけど、私は先生が苦手だって言うことを忘れてはいない。だから心のどこかで喜んでない自分がいた。

「本当ですか？！ ありがとうございます」

けど、背中越しのリアクションを大きくした。

## 15・自転車と坂道と涙

「先生？」

不躰に先生を呼んだ。

「先生っ！！」

聞こえない振りか……。

今度は嫌でも聞こえるように声を荒げて呼ぶ。とりあえず何でもいい返事が欲しかった。

目の前にある状況は事実なのかどうか。この先生はどうも不安でしようがない。

「先生つてばっ……！ 聞こえてますか！！？」

「なんだよ神崎！」

返事するのが面倒くさそうに聞こえる。

付き合いが短いとはいえ生徒でもある私への有るまじき応答する。証拠に先生と呼んでるのに振り向きもしない……失礼な返事もあったもんだ。

「何これ……」

指を差し、思わず漏れた一言。

さつきから慌しく先生の身体は上へ下へと機敏に動いていた。

荒い息を吐きながらまだ終える事無く一定のリズムに乗って身体を上下に揺らし、いつもやってますみたいな手馴れた感じで作業をしている。

「先生。送ってくれるって本当ですか？」

「ああ?! ……送るって! 言ったはずだけど?!」

激しい動作なのか、先生の声は途切れ途切れになっている。

「……送るってこれで、ですか？」

そつえばそうだった……思わず頭を抱える。

知っていた筈なのに、何度も学校帰りにすれ違ってたのを忘れてた。

さっきの出来事で頭が幸せになっていた。誰のせいでもない私の失態だ。

途端、一気に具合が悪くなった気がした。

「だ、だいたいなんでこれで送ろうと思ったたんですか！！私、仮にも病人ですよ？！これで帰ったら私の家までいつ辿り着くんですか！！」

「うるさい！少しは黙ってる！！空気を入れてんだから。音と入れる感覚で微調整が必要なんだよ。ゴチャゴチャ言くと成功しない！！」

理解できない気合の入れ様に私は思わず黙ってしまった。

決して言われたからじゃない。目の前で繰り広げられてるタイヤへの空気入れ。

そして熱心な教師に呆れ返って、言葉が見つからなくなってしまったからだ。

口論してる間にどんどんタイヤに空気が入っていく。スースーと気持ちの良い音が授業中の静かな駐輪場で流れていた。

「しかも今更何言ってるんだよ……。何度もこの自転車ですれ違っているだろう？ほら出来たっつー！！」

知ってますとも。



先生と自転車……と、隣に空気入れ。この奇妙なありえないコラボに流されつつある。

誰でもいい……誰でも。私を一瞬でもワクワクさせてくれるんなら。

訳の分からない衝動に駆られていく。

何だか挑戦してみたくなった私は、ゆっくりと挑むような勢いで自転車へと歩を進めた。

こつこつの場合。そつと乗ったんじゃバランスが取れない。なので一気に体重を掛けて立ち乗り事にした。

「よつと……！ わわわつ……！ 危なっ……！ 結構ムズい」

「乗ったか。じゃあ、行くぞ……！」

確認もせずに自分勝手にペダルを踏む。当然のことながら車輪は動き出した。

「先生っ……！ 待って……！ ちょっと待っててば……！」

いきなり動き出した自転車。立ち乗りしている私に捕まるところがなかった……。

考えもしなかった予期せぬ事態。私は何処に掴まればいいんだろっ。

肩、だよね？ …… 妥当に考えると。

思ってる側からバランスが上手く取れずに思わず先生の頭をギュッと掴む。

「わっ……。ごめんなさい」

気にしてないのか、気が付いてないのか。先生は無言でスピードを上げる。

だけど先生を頭だけ抱きしめた感じになった私は、一人でしどろ

もどろ馬鹿みたいな光景。

あ、意外にサラサラだ。

普段はグシャグシャだけど先生の髪は触るとこんなに柔らかいんだ。

私の掌を通り抜ける髪。気付かないように二、三回先生の髪を撫でる。

「なあ？ 神崎」

「は、はい？」

安定を保ち始めた私。そして自転車は校内を出ていつもの道を軽快に走り出す。

あれだけ気合入れて空気を入れたんだから、これ位の走りは当たり前だよな。

テンポ良く回る車輪。頬を撫でる……制服を靡かせる風。どれを取っても爽快だった。

「今、ドキドキするだろ」

「え……？」

「車で送ってくれると思った先生にいきなり自転車に乗せられて、慣れもしない二人乗りさせられて……したこともない事をさせられて驚いてるんだろ？ いつも見る景色と違うだろ？」

さっきのぶつきらぼつな口調じゃない。これは教師としての先生だ。

「いつも冷めた目線で他人の事を見て、人と一定の距離を保ってる。いつだって『自分はそうじゃない』って心で強く思ってる。無理矢理開かれた世界はどうだ？」

「何言ってるんですか？ 冷めてるって……私は先生にはそういう

風に見えるんですか？」

先生に表情が見えないと分かっているても私は半笑いを浮かべる。

なんだか見透かされてる気がして良い気がしない。

「知ってるか？ 良く笑う人ほど実際は、警戒心が強いんだ」

「……………っ！！」

この嫌に言葉が胸に突き刺さって抜けない感じ、凶星の証拠。

「な。少しはさ……………人のことを信じてみたらどうだ？ 笑顔でいることは良い事だけど。神崎は笑いたくないところで無理矢理笑っているだろう？」

「……………っ！ 私はっっ！！」

急に斜面が変わる。エレベーターで降下する時によくある不快感に似ていた。

先生の前髪が風に吹かれて舞い上がる。同時に私の髪も舞い上がる。

突然の突風に目を伏せると、その何秒もしない間に状況の変化に気付く。

広がる世界。

私の住んでいる街が一望出来る位に見晴らしが良い……………。

もし、立ち止まってみたらあれが学校。あれが私の家って指を差しながら笑い合えただろう。

そこまで鮮明に見える上から見た私の街に、自然と視線を奪われる。

昼空を飛び交う鳥達こそ私達の頭の上だが、いつも見上げる街並みは私達の下にあった。

遮るものの無いこの静かな昼下がりの風は、隠れる事無く私の頬を掠めていく。

目の前に見える景色の下では感じることの出来ない爽やかな風。

まだ、今は昼間。

街並みが反射するこの時間がもし夕方だったら、ここから見える夕日は忘れられないものになる。目を細めて見たこの景色にはそんな確信があった。

一瞬、笑みが零れたがそれは本当に一瞬だった。

「なにこれ長い坂！？ 帰り道にこんな道ないのに！」

景色に目を奪われていると、目の前にジェットコースターもお手上げな急な坂道が目に入る。

「当たり前だろ。遠回りして俺が見つけたんだからさっ！ なんかこの光景、青春してるみたいじゃないか？ 見晴らしが良いし、微かに潮の香りもする。近くに海があるのかもな？ これで夕焼けがあつたら最高だ！」

そつだよねえ……。

単純に考えたらこの景色に辿り着くまでの高さを昇ったら、当然のごとく下り坂もある訳で。

無邪気に喋る先生からさっきの雰囲気は消えていた。

さっきまで真面目な話だったのに論点が話がずれてしまってる。



けど、私の頭の中から離れないさっきの言葉。

風が私達のすぐ側を通り過ぎる……　そして徐々にスピードが増していく。

「青春つて先生はおっさんでしょ……！」

「あほ……！　俺はまだ二十六だ」

二十六でこの性格つてどうよ。その歳で自転車乗りこなして、いっただって新しい発見を捜し求めて、こんな遊びみたいな感覚坂見つけて、病人を相手に気楽に遠回り。

先生の同じ歳が聞いたらビックリでしょ……。

「おお……っつ！？　ははっ……！　スピードが出てきたぞ……！」

十分にスピードは出し切っているのに無邪気な二十六歳はまだペダルを漕ぐ。

その姿は最早、三十路近い立派な少年だ。容赦ないこの速さについてこれる自転車。さっき空気を入れただけあって、軽快な音を立てながらご主人様の為すがままスピードを上げる。

最大限スピードが出し切れた所で先生はペダルから足を離す。

「わわわあ……っつ……！　ちょ先生怖……！　マジで……っ……っ……！」

本気で面白がっている先生の後ろで必死に先生の肩にしがみ付き本気で怖がっていた。

近い距離でなんだこの顔色の差は……！！

傍から見れば信号機ぐらい色がハッキリしてると思う。

しかもブレーキを掛ける素振りもない。



情が崩れる姿を見たかったのかもしれない。

「先生………なんか」

誰にも聞こえない声でそう呟く。

ますます加速していく自転車。軽快な音を繰り返しながら、整備された車輪はアスファルトを滑っていく。

なんでこんなに冷静になれたのか分からない。でも私の吸う息は打ち付ける風より鮮明に耳元まで辿り着き、吐く息は喉につり返る事も無く、口から外へと通り過ぎる。

言いたい言葉は敏感に脳裏を促した。

「先生なんかだいつきらいだああああああ!!!!!!」

言い始めが遅かったからなのか、速度が弱まり自転車は終わりを目指していた。

ペダルに力を入れない先生。当然そうになると自転車は動きを止まってしまう。

その言葉は跳ね返る事も無く景色に吸い込まれていく。あつという間だったけど………一瞬だったからとはいえ、取り消すことなんて出来ない。

先生は降りる気が無いのに足を着き、私はまだ乗ったまま肩に掴まっていた。

………。

「先生。こんな私が見たかつたんですか？」

私は不思議と笑いもしないし怒りもしなかった。ただ無表情で振り返らない先生の背中をただただ見つめる。

「それが正直な言葉ならな」

躊躇いもなく返事を返す。先生の声は震えていないし身体だって微動だにしない。

ただ妙にさつきより声が低く聞こえる。

「嫌いです。先生がだいつ嫌いです。先生言いましたよね？ 『俺が嫌いなんだろ』って。嫌いです。これが本当の私です。満足ですか？」

そこに上辺など存在しない、真平らな自分自身。

興味があつた。この先生は一体どんな表情をするのか。

けど、私はまだ先生の顔を見れていない。確認するどころかさっきまで連呼していたはずの『先生』って名前さえ口に出てこない。

ゆつくりと先生はペダルを踏む。

徐々に進み始めた自転車は先生の肩を強く掴む事無く、私の身体を安定させる。

掴む必要のないゆつたりとしたこの速さが、まるで先生に拒否されていくような感覚で、

どうしたらいいのか分からなくなる。

事実……事実。そう事実……私は正直に言っただけ。

なのに、なんで大嫌いな先生を相手なのにこんな悲しくなるんだろ……。

先生の背中が冷たいだなんて、真っ直ぐ前を見て漕ぐ先生が気になるなんて。

涙は零れる事無く横に流れていく。風力で涙は先生の背中にすら落ちない。

この涙を知ったらどんな顔で振り返ってくれるのか。考えも空しく一度も先生は振り返ることなく自転車は走る。

肩を強く掴む必要がないこのゆったりとしたスピードに、静かに幾度となく涙が溢れ、そして零れる……。

『嫌い』そう言われた先生はどんな顔をしているのだろうか……確かめる術がない。

その分、私の気持ちをかき乱した……。

## 16・共に消える一つの想い

「……ココの散歩にいかなくちゃ」

なのに指先一つも動かすことすらなく、部屋のベットで横たわっている。

視界に見えるのは、さっきから仰向けで見える天井の木目ばかり。少し早めに散歩に行こうって決心してから私の頭は行動に移せずにいた。

幸いにもいつも散歩と私の足を引つ摺むココは今、見渡す限り私の目に見える所にはいない。きつとキッチンの椅子で気持ち良さそうにお昼寝しているのかも。

「はあ~~~~~」

無意識に溜息が宙を舞う。なんだか後味があまりよくない。

別に先生が怒っている訳でもなく、私に文句を言ってきた訳でもない。

むしろ何か言われた方が気分良くもつと嫌いになれて良かった……だからなのか自己嫌悪に陥っている。

先生が嫌い……なのに、何を期待してたのかな。

きつと違う。

『嫌い』って言葉に全て心を持ってかれた感じ。なんて言つのか『精一杯』だった。

「ん~~~~う!~!」

大きく背伸びをするとベットから勢い良く飛び起きた。

「ああもう!~! やめよやめよ」

綺麗さっぱり忘れる気持ちで窓を開ける。

今の時間なら出ているはず。何故か日課のように見ている夕焼け窓を開けると部屋中に満ちてくるオレンジの日差しがいつも私を魅了している。つい誘惑に負け、窓を全開にして眺めたくなくなってしまった。

さっきまでブルーだった私の心の色さえ、オレンジに変わってしまっってしまったもの。

「はあ~~~~」

さっきとは明らかに違う吐き出す息、見とれてしまっただけの感動の溜息。

何も考えられなくなる。このオレンジを目の前にすると今日の夕日は少し赤い気がした。

下を見るとお母さんが見てるはずの場所には誰もいなかった。

まあ、いつも上手い具合に見てたら怖いもんな。

「さあーて! 行ってくるか」

壁に貼った大事な写真を手にすると、折れないように両手で挟んで写真を伸ばし、そっとポケットに仕舞う。

静かに窓を閉め、自分の部屋を後にしようとドアを開ける。

……と。

「ココ!」

丁度、私の部屋を目指してたみたいに駆けてくる。

「はあ〜ん。さては散歩に行くって嗅ぎつけたな」

「ワン」

元気よく私の声に返事をする。

「そうかあ。じゃあ！ ご期待にお答えして散歩に行くかあ!!!?」

ココの頭を力いっぱい撫でる。

「ココ!! ついておいで」

先頭を切ると自分の部屋を出た。微かに床を擦る可愛い足音は耳を澄まさないと聞こえないけど、確実に私の後ろから追ってきていた。

「あれ? お母さん」

いないはずのお母さんはキッチンで簡単に見つかった。

私に背を向けているお母さんは、鍵をいつ開けたかも分からずいつの間にか帰っていた。

珍しく夕焼けを見るタイミングが合わなかったらしい……。

姿をみつけたココは私の横を通り抜け、お母さんの周りをウロウロする。

「いつ帰ってきてたの?」

「あ、智亜美。ただいま」

そう言っつてやっと私の方に身体を向ける。その姿は何処か不自然だった。

「ん、手紙? 誰から?」

「あ……」

途端、何だかお母さんの顔が曇った気がした。私の直感っていうのは良く当たる。

「ただのダイレクトメールよ。それより今からココの散歩に出かけるの?」

お母さんの周りをウロウロしているココの頭を撫でる。ココも嬉しそつに目を細めた。



「うん。今日は早めに行こうかと思って。あ、いや、行こうかと思っただけど……考え事したらいつもの時間になっちゃった」  
「そう、なら早く行って来なさい」  
「う、うん」

簡潔に事を済ませようとしている雰囲気は何も言えなくなってしまう。やっぱり今はあまり機嫌が良くないみたい。

いつもだったら一言二言、他愛ない話するのに……疲れてるのかな。

「ココ、行こう！」

こういう時は素直に従うに限る。

振り返りもせず『いつてきます』も言わず、家の扉を思いっきり開けた。

ココの足に前よりついて行けなくなってる気がする。  
最近運動不足かな？

そんな訳ない。だって今は体育祭の練習してるんだもん。クラス対抗種目で私はリレーをやることになってる。クラスの半分が出場するリレーとその後に実行委員で裁縫まがいなものをやるものだからヘトヘトなんだから。

理由をつけてるけどそれは関係ないんだ。

まあ、まだ放課後に残ったりの練習は明日からだからマシだけど仮にも高校生……！

まだ、若いつて自分自身では思いたい。

「ちょっと待ってってば!!!」

今日のココはいつにも増して元気だった。

私が追いかけて来てくれるのが嬉しいのか、好きで追いかけてる訳じゃないのに。

ただ単に追いかけること勘違いしているのか、追いつけなくて追いかけてるのにスピードがどんどん早くなる。

「ちょっとタンマッ!!!」

そう言っただけ近くのベンチに座る。

やっと追いついて、ココの身体を大股で跨いで掴むと、いつの間にか公園へと足を踏み入れていた。

「ワンワンワン!!!」

「はあ! はあ!」

だ、だから、歩幅は絶対的に私の方が勝っているのに追いつけないうってどうということ!?

人間は無駄な動きが多いってこの小さな身体で証明されてる気がする。

捕まえた途端、私の方に振り返り、半円を描く様に尻尾を左右と行ったり来たりさせている。

逆に、ココは息が切れてない。

逆になんで止まっちゃうの? って言ってるようにも見えない。

「はあはあ。休もう?」

「くう〜ん」

少し悲しそうな鳴き声に変わった。

私の周りを一周すると新しい遊び場を発見したのか遊具へと駆けていった。

ここから見守っていれば平気でしょ。

ココが辿り着いた場所砂場。そこで遊んでいた子供達に愛想を振りまく。

「さすが！ 他の遊び相手を見つけたか」

安心してベンチに座る。なんか汗掻いたな。

夏も終わったとはいえ、まだ暑さが残る季節なんだから走ったりするものじゃないよ。

無意識に空気の入れ替えのためTシャツの襟元をパタパタさせる。

風が気持ちいい……。

葉っぱの隙間から零れるオレンジの光が眩しい。

ポケットに落ち着いている写真を取り出す。自分の手元にあることを再び確認する。

……………。

言葉じゃ表現できない程、私が一番に落ち込んだ時に側にいてくれた人。

って言うっても、直接あったことはない。要はネットの友達。

私の両親が離婚した時も側にいてくれた友達。

相談に乗ってくれて私の話を聞いてくれた。生まれて初めて友達って言える子だった。

昔は私は、今と性格が違っていた。

『智亜美！！ 貴方は黙ってなさい！！』

と当時のお母さん。

『智亜美！！ お前が口出しすることじゃない！！』

私を叱り付けるお父さん。

『子供は早く寝なさい！！』

泣いてばかりいた……怯えてばかりいた。私に発言権なんてない。同じ家族なのに、子供というだけで発言権を奪われる。

『私の話を聞いて、離婚なんてして欲しくない！！』 今なら言える。

だけと言葉じゃ上手く伝えられない当時は、必死に泣くことで意思表示をしていた。

『お前は子供なんだから、親に反抗するんじゃない』

どうして子供だって決め付けるんだらう。確かに事実、子供だ。

だから私は何も言っではいけない。

何歳だったら耳を傾けてくれるの？

私、パパとママの娘じゃないの？ 泣いたら聞いてくれる？

もっと喚いて泣いたら耳を傾けてくれる？ 私はどうすればいい？

小さい頃、疑問ばかり頭の中で浮かべていた。

出来る限り泣いた……思いっきり泣いた。

だけとお父さんとお母さんは振り向くことも喧嘩をやめることもなかった。

毎晩続く入れ違って、玄関を出て行く知らない男性、女性。

気軽に私の名前を呼んで来る。

優しそうな表情で幼い私と、わざわざ目線まで合わせて腰を下ろしては微笑む。

可愛い名前ね……とか、何歳？　とか。まるで我が者顔で私の家を出入りする知らない人達ばかり。

大人になつていくにつれどんな意味がなんて理解できる。

荒々しくなる口論に、当たり前のように投げられる食器。

『話し合い』言葉では言うものの展開されるのは決まって『喧嘩』だ。

『仕事と私どっちが大事なの……っ！！』

自分だつて男の人連れてくるクセに、ウソをついて被害者ぶつて。

泣きつ面の裏には偉そうな傲慢な顔を隠して踏ん反り返っている。こんなことばかりが続いた。こんな日々がどれ位続いたんだろう。

そんな中で出会った。キツカケは『忘れられる時間が欲しい』それが理由だった。

興味本位で開いたサイトで、言ってしまうえば現実逃避なんだろう。本当に純粹に友達を捜してるサイトで、評判は調べてみると随分ポイントが高かった。

（『私の友達になつてくれませんか？』）

誰でも良かった。本当に誰でも……知ってる人になんて話せない。こんなこと話しても言葉なんて返つてこない。得られるものなんて何もない。

『大丈夫？』とか可愛そうとか『頑張つてね』とかもう聞き飽き

た。

身近な友達ほど無難なことを言ってくる役立たずなものはない。ただ聞いて欲しかった。

同情じゃなくて、それは一つの物語のように客観的に聞き入れて考えが欲しい。『友達』の話だなんて思わないで欲しい。

余計な詮索や同情なんて真っ平だ。

今日も下で聞こえる。耳を塞いでいても聞こえる。

幻聴じゃない ……確かに鮮明に。そして終わり無く明日も繰り返される。

『貴方、別れましょう。智亜美は私が育てるわ』

お母さんは何度目かの言葉を口にする。その言葉はクセになり性懲りもなく簡単に使う。

自分の娘はいつだって取り合う所有物だった。

私の理解なんて関係なく進められていく。別に差別するのは他人だけじゃない。

生まれながら平等なんてありえないんだ。親にものを言う権利は子供にはない。

ましてや逆らう権利。だから子供は泣く。それを分かって欲しくて。

確かに子供っぽいかもしれない。駄々をこねたりお願いしてみたり。

だけどその逆らいきれない権力により、叩かれたり怒られたりすると分かって欲しくてますます泣く。

その瞬間、紛れもなく愛情は憎しみに変わる。

『貴方には任せておけない！！ あの子は私が立派に育てます』

壁一枚を隔てた先、身勝手な母親の発言に怒りは爆発する。

もう曲がっていることに気付かない時点でもうアウトだ。

出来る出来ないじゃない……もう遅いんだ。

それを分かってないのなら、貴方なんかに育てる権利なんてない。

だけど何も言わないのは、私にはもう知恵がついてしまったから。

ご飯は一人じゃ食べれない。

今じゃまだお金を稼げない。

結局、子供扱いされてるのは親からも自分自身からもだった。

運命を変える男の子に出逢ってから彼らの行動に何の変わりもなく続いた。

ここじゃない違う世界に行きたい

そう願うのは、普通じゃないんだろうか。

一つの願いだった。ここじゃなければ何処でもいい。

誰でもいいこの世界からお願い。連れ出して……。

私は家に帰るとヘッドホンをすることにした。  
頭から被ると、外気からは遮断されて耳を塞ぎなくなるような声は聞こえない。

すると、両親も喧嘩をする時はリビングで鍵を閉めるようにした。私のことを思ってもかもしれない。元から蚊帳の外だったけどますますだ。

最善の方法とも思っているのか。もう慣れたこんなこと。

二人とも久しぶりに帰ってきてても同じことしてるだけじゃない。

鍵を閉めるか閉めないかじゃない。

もう、空気で何をしているかなんて分かる。

中学に入ってから、場の空気だけで物事が把握できるようになった。

カタカタカタ……。

大音量で聴く音楽のお陰で、キーボードを叩く音も扉を閉める音さえ聞こえない。

自らが作り出すこの空間にのめり込む……この時間は好きだった。

邪魔されない音楽の世界から、彼と話をしている数時間。夜遅くまでお互いに起きていた。

彼は同じ視点で私のことを見てくれる。確かに始めは自分の事だっ  
って知られたくなくて『友達』の話って偽って話をしていた。

話し終わった後の返事は『智亜美ちゃんの話でしょ?』って言葉



だった。

確かにショックは受けたけど嬉しかった。彼には大したことではないかもしれない。でも不意に踏み込んでくれたその一歩。返信されたものは抽象的な言葉でも励ましの言葉でもなかった。

一気に興味をそそられた。

それからはいつも学校から帰ってきてパソコンに向かう。いつも笑っていることを覚えて、それが楽しいことも気付いていた。

だけど全然、心は笑ってない。

そんな冷め切った生活に光をさしてくれた男の子は、チャットルームしか知らないけど『ユキ』くん。

彼は優しくて親身で、でも何処か普通の優しさとは違う。

『甘える優しさ』じゃなくて『厳しい優しさ』を持っている人。そういつても私の二、三歳が上って言ってたけど、当時は高校生ってことになるのかな？

今も気になって忘れられない……というか今でも好き。恋とか愛での好き。

ある日、ユキ君が最初で最後に私を誘ってくれた言葉。

ロンドンこれから行って来る。

いつ帰ってくるか分かんないけど、帰ってこれたら今度は二人で行こう。

送られてきた文字と、一つの写真を残して。

もともとネット越し、画面越しの恋。

文字を打たなきゃそこから存在なんて簡単に消せてしまう。彼は私の前から姿を消した。

呆気ないもの。言ってしまえばそんなものだけど私は忘れられずにいる。

その証拠にこの写真を手放せずにいるんだから……。

「ワン！！　ワン！！」

目の前でココが私に向かって吠える。

「ん？　何？」

戻ってきたことを嬉しく思いながら、ココに視線を合わせる。

「って！　またそんなに泥だらけになって！　今度はなにをしたの？」

！  
想いに耽っている間に何があつたのかと辺りを見渡す。

ふっと目に入ったのは子供達が遊んだのか水遊びの後があつた。

まだ子供達は自ら作った水溜りで遊んでいる。

「ワンワンワン！！」

飼い主の気持ちも知らないでご機嫌だ。

前足についた水を含んだ泥を飛び散らしながら私の前を駆け回る。

「わんちゃ~~~~ん！！　まだ遊ぼうよっ！！」

遠くから子供達の声がする。私の言葉を聞くまでもなく呼んでる子供達の所へと一直線に駆けていく。呆れながらも頬は緩んでいた。

ココを子供達の所まで目線だけで見送ると、再びベンチに腰掛けた。

.....。

『嫌い』何故、あんなこと言ったんだろう。

今までそんな人前で感情に流されることなかった。

いつも皆の思っ『智亜美』を演じ続けてたのに。

一言で左右されて欲しくない。私が黙ってて済む事であれば私が我慢しよう。

『ねえ、ママ』

小さい頃、私の些細な言葉から両親の空気が変わった。

それは多分キツカケにしか過ぎないんだろうけど、もっと前から

両親は仲が悪かったから。でも幼い頃の私を変えるには十分だった。

それから人の顔をよく見るようになった。

他人が一番に喜ぶことを言うようになった。

自制心が人一倍強くなった。

人付き合いが上手くなった。

人を笑わせることが自分をいい位置に立たせるって事を学んだ。

それを知らなかった幼い頃の私は、一瞬で曇った両親の顔が忘れられない。

## 17 染み込んだペンキ

通常授業は体育祭のため午前中のみ。残された午後の時間は体育祭の準備に勤しんでいた。

来週に体育祭を控え、張り切ってるクラスは張り切っている。

うちのクラスも初めはやる気なかったけど、思った通り。お祭り騒ぎが好きな人達ばかりだからそれなりに真面目に練習に励んでいる。

「智亜美。もう平気なの？」

ウォーミングアップをしている矢先、隣で美弥に声を掛けられる。

「丁度良かった。美弥背中押して。で、平気って何が？」

「もうふらついたりしないのかってこと」

言葉を返しながら柔軟に勤しむ。

「ああ、なんだ。その事？ 平気平気！！ 今日からまた放課後残って準備しなきゃ！」

につこりと美弥に向かって笑う。

表情を窺いながらも美弥の不安は消えたらしい……。

先生が笛を鳴らす。その合図に私達は駆け足をした。

「集合しろ〜〜。よしっ！！ サボっているヤツはいないなあ」

なんだかんだで先生までも気合が入ってる。結構お祭り騒ぎ好きなんじゃん。

全員が集まった中、私一人だけ先生の顔を見れずにいた。

『大嫌い！！』と宣言した手前、まともに見れる筈がない。

普通だったらドラマとかアニメだと勢いで先生について好きとか言っちゃってどきまぎって感じになるけど……。私の場合『嫌い』だからなあ〜。

それがまた結構似てるんだよねえ。気持ちこそ正反対だけど、嫌いって言った後の気まずさと好きって言った時の気まずさ。

……はあ?????!

要らぬ思考を遮断するように力の限り首をブンブンと大きく振る。美弥は私のいきなりの変貌ぶりに驚いた表情で見ている。

そんな、何と比較してるのよ。ありもしないことを考えて!!

確認のためか、点呼を取っている先生とバツチリと目が合う。ワザとらしくパツと私は自分の足元に視線を向けた。

他、種目が多々あるけど、クラス対抗は毎年リレーと決まってる。

一番に一致団結できる競技と言っても過言じゃないだろう。クラス全員参加で三分割に分かれて一部、二部、三部と別れる。

だから結果的にはクラスの半分と言いながらも必然的に全員参加ということになる。

しかしなんで一番に気合が入ってるのが先生かなあ。

役員決めはあんなやる気なかったのに。まあ、それにつられて皆もやる気出してるのはいいんだけど……。

「ねえ、智亜美はどこがいい?」

「あ、そうだなあ」

今の時間。私達は一部と二部、三部に別れて走る順番を決めていた。

男女関係なく混じって走る。

けど、そこに不公平は無く、偶数は男子で女子は奇数といった感じでちゃんと決まっている。

しかし、ここで問題なのが……。

「アンカーだよねえ……」

最後は女子。締めが女子だけに真剣に順番は決めなければならぬ。

責任の半分はアンカー、女子にかかっているという訳だ。

隣で千佳達が言葉にする。ちなみに偶然にも美弥も一緒だ。

順番決めをする輪の中、名前だけ知ってる大人しい文系っぽいメガネを掛けた女子が一人グループにいる。

名前と言ってもすぐには思い出せない。

誰だっけ？ 確か名前は須藤さんだった気がする。

いるんだ……。

何処のクラスにも空気と同化しているクラスメート。それに彼女は位置しているのかもしれない。

同じ輪の中にいるメンバーで違和感が否めない須藤さんの姿を眺めていたら、いつの間にか皆は私の顔を直視していた。何か悪い事をしたのか戸惑いながら言葉にする。

「な、何。皆して……」

右にいる千佳はニヤニヤ、左にいる美弥は無言で何かを訴えている。

状況を把握していなくても分かる。これは良からぬことが起きる

瞬間だ。

だって今、この場で。タイミング的に……ねえ？

「確か智亜美って足が速かったよねえ？」

ギクツッ！ 藪から棒に美弥は言葉にする。

……って言うても絶対、計算してるんだろっけど。

「うんうん、だって前やった体力テスト。ねえ〜？」

頭に浮かんでいる直感が当たらないで欲しい……。だからそんな皆ノリノリで話さないでよ。

話の流れについて行けない須藤さんだけは、体育座りをして行く末を見守っている。

単に興味がないのか、このタイプは次の時間の予習でも頭の中でしているのだろうか……。

「あ、いや、ちょっとまさか」

「だって速い人を最後に残した方が盛り上がるじゃん!!」

皆やりたくないだけじゃないの？

言えなかった。それは場の雰囲気悪くするだけだ。

だったら私が言わなければいけないことは一つもなかった。困っている間に事は済んでしまっていた。こんなに乗り気で、反対しているのが私だけなら、アンカーは強制的に私になってしまっただろう。

コレで何回目の溜息だろう。今日は教室で旗の色塗りをしていた。相変わらずの二人。皆が帰った後に机を移動させ、適当に旗を広げられるようなスペースを確保し、私と美弥は教室の適当な場所を確保して応援旗の作っていた。

これが完成すれば終わり。

後は体育祭を迎えるだけ。完成すればって簡単に言っただけこれが一番面倒だった。

最後にした理由は考えなきゃならないことがあったから。一つ言うならデザイン。絵を加えなきゃいけないから、センスもいるけど時間もいる。

「はぁ……………」

また溜息が出てしまった。

「何、その気にして欲しい的な溜息」

「違うよ。自然に出てくるものなんだって。溜息っていうのは」  
ツーンと鼻にくるペンキの中に刷毛を無造作に突っ込む。八つ当たりにも見えるだろう。ペンキの底を手持ち無沙汰にコツコツと打ち付ける。

何故かそんな私を見て美弥は顔を緩ませた。

「自然に出るその溜息さえ我慢できるのに…………？ 珍しいこともあるもんだ」

独り言のように小言を漏らす。どういう意味で言ってるか分からない以上言い返す言葉は私にはない。だから話を元に戻す。

「アンカーだよ！？ アンカー！！ 知ってるでしょ？ 私プレッシャーに弱いんだって！！」

全てが私にかかってるって思うと…………。



何故私が走るのが得意かと言うと誰の事も気にしなくて良いからだもん。

一人だけの世界だから……。自分の配分で走れて誰のことも考えなくていいから。

プロになるんならそれだと問題だけど、目指してる訳じゃないしこれで良いと思ってる。

「断ればよかつたんだけどなあ……」

何もデザインが浮かんでない真っ白な旗を見つめ、満杯に入っている赤いペンキの中をグルグルと乱暴にかき回す……。

「それが出来れば後悔なんてしないってね」

美弥の言葉の付け足しが私の心を頷かせた。

ぽたっ

「ああ~~~~~~~~っ!!」

かき回し過ぎたのか緩くなったペンキは雫となってスカートに落ちた。

「な、何よ……。へんな声出して」

美弥は素っ頓狂な声を出した私の方を向く。

「ペ、ペンキがスカートに落ちたっ!!!? どうしよっ!!」

何か拭くものと辺りを見渡す。

「ああ、なんだ……。何が起きたのかと胸を撫で下ろす美弥。

「なんだじゃないよ!! ペンキ落ちにくいんだよ!？」

私は刷毛を投げ捨て当ても無くあたふたしていた。そんな私の姿を見て美弥はお腹を抱えて笑う。

「だったら尚更早く水道で洗ってきなよ」

苦笑しながら私のそう忠告する。

「あ。そ、そうか」

妙に冷静に納得した私は立ち上がると急いで水道がある廊下に出た。

ジャ~~~~~。。。。。

放課後の廊下は水の音さえ反響させると思ったんだけど、これだけ他のクラスから賑やかな声が聞こえていたら休み時間と一緒に隣のクラスから聞こえる笑い声は同じ様に体育祭の準備をしているのだろう。

聞こえる感じからして二、三人の話し声じゃない。倍の倍の倍ぐらいの人数。

ジャ~~~~~。。。。。

蛇口だって制服に飛沫が飛ぶくらいに全開に捻ってる。

なのに、聞こえるはずの大量の水が排水溝を通る音。それがあまり聞こえない。

代わり隣のクラスの下らない話や笑い声がさっきの倍になって聞こえる。

そんな中無言で、赤く染まっている部分をスカートを履いたまま蛇口に近づける。

大丈夫……下には短パンを履いているから平気。

コシコシコシ……。。。

「やっぱ落ちないかな？ 運悪く目立つ赤だし……」  
不意に隣のクラスから一人、女子生徒が私の隣を陣取る。  
私達が使っている真っ白なパレットとは違って、様々な色が重な  
って汚れているパレットを洗いにやってきた。私を気にかける事な  
く再び教室に戻る。

途端、また笑い声が倍になった。じゃれ合う声が耳を劈く。

ゴシゴシゴシ……ッ！

少し強めに擦るが落ちることはない。

取ろうと拭い去ろうと思っても……取れないものは絶対にある。  
強めに擦る程全体に広がって周りを気付かぬ内に汚していく。ス  
カートの広がる赤いペンキの様に。

パパツと履いたままスカートを伸ばす。洗濯物を伸ばすみたいに  
手絞りだから大粒の水飛沫が散ったけど気にせず持ってきたタオル  
で拭く。

「こんなものかな？」

綺麗にペンキが取れたわけじゃない。

だけど分かっていた完璧に拭い去れる訳じゃないことを。

ある程度渴いたタオルで拭くと、スカートを元の位置に戻す。ゆ  
っくりと踵を返し笑い声のする自分の教室へと歩き出す。

え……？ 笑い声？

そんなはずないんだけど。だって教室にいるのは私と美弥だけ。  
その私がおここにいてことは美弥一人だけってこと。たった一

人で笑い声なんて聞こえてくるわけがない。

真相を確かめるべく自然と急ぎ足になった。

「ねえ、ちよつと美弥。誰と……？」

美弥と顔を合わせる前に質問を投げる。

途端視界に入ったものは……。

「あ、チャミ！！戻ってきた。ペンキ零したんだって？」

「ははっ。何してんの……って言ってもチャミらしいか！」

何だか自分だけ置いてけぼりを気分。だって何で人が集まってるの？

見た所、美弥以外誰もいないはずの教室に十人くらいは集まっている。

隣のクラスと同じ位の人数がスカートを洗いに行っている間に増えた。

「ばっかじゃねえの……！！」

その中には男子もいた。さっきまで二人で黙々とやってただけあって今、一段と騒がしく感じる教室。だから勘違いしそうになる今の時間を。

いつも昼休みとかで聞きなれてる騒がしさなのに、何故か違和感があつて居心地の悪さを感じる。不自然に状況が分ならず愛想笑いを浮かべる。

美弥の側にさりげなく位置を移動させる。

「ねえ、美弥。これって」

美弥にだけ問いかけたつもりなのに近くで聞いていた千佳が駆け寄ってきた。

「もしかして驚いてる？」

「え？」

薄笑いを浮かべ、こっちの心情なんか関係なしに話を続ける。

「さつきねえ、帰ろうと思ったら先生が来て」

「先生？」

「担任担任うちの担任！！」『少し体育祭の準備で手こずってるみたいだから手伝ってやってくれないか？』って言われたの」

そのまま相槌を打たずに千佳の話を聞く。

「だから別にやることもないし〜って教室覗いたら美弥がいて」

千佳は美弥の顔をチラッとみる。

「チャミは一人でやるのが好きなんじゃないってそう思ってたから、今回は口に出さなかったんだけど、だってチャミ一言も声かけないじゃない？ だから余計なことかと思って」

うんうんと自分の言葉に頷きながら千佳は言葉にする。

「一人で黙々とやるし、逆に手伝いにくくて。そしたら先生なんて言ったと思う？」

「……………」

「好きでやってるんなら倒れたりしない……………ってさ」

あの、写真を失くした翌日のことを言ってる。

「確かにこれからカラオケ行こうとか放課後の予定立ててる中で、手伝ってなんて言える訳ないし……………。まあ、そんなこんなで近くにいた男子も巻き沿いにして来たわけ」

なんだろう……………。この複雑な感じ。

嬉しい確かに嬉しいはずなんだけどなんだろう。素直に喜べない。手間が省けて正直助かるけど、一人の方が気が楽なのは変わらない。やっぱり一人がいい。

「そうなんだ……………ありがとう。正直人手が欲しくて困ってたから千

佳達が来てくれて助かったあ~~~~!!」  
そういつて乱暴に千佳に抱きつく。

いつもの私なら気の利いたことを言えたかもしれない。  
でも一つ二つひっかかったモノの正体が掴めなくて、上辺を取り繕うことしか出来なかった。

「つめたっ……」

「あ、ごめん。そういえばスカート洗ったんだ」

「ちよ、チャミ！ そんな姿で抱きつかないでよ」

苦笑いしながら私の腕から離れる。周りの皆は大笑い。

「嫌よ嫌よも好きの内」

「それなんか違うよ~~~~……ははっは!!」

調子に乗ってもう一度抱きつこうとした時に肩を叩くと同時に美弥の声。この場に担ういかにも適切な一言で無言で作業を再開した。

辺りを見渡すとペースが倍のさらに倍になったことに気付かされる。

この調子なら終わる……体育祭まで後、五日を切った。

あれから放課後残って手伝ってくれる千佳達、男子も面子はいつも違うけど時々手伝ってくれる。

悩みだったものが解消、そして間に合う。

なのになんだろうこの憂鬱さは、手伝ってくれるって言われた時から妙に残っている胸の奥にあるシコリ。

確かに前より大分楽になった。家に帰って作業することもなくなつた。

全ては学校で出来るし帰ってココとも遊べる。

静かに昇降口まで歩いた。

周りに生徒はいるけど下校時刻は過ぎてちらほら見え隠れする位だ。地面に靴を置く音が廊下に響く昇降口を後にした。

## 18・『先生』な答え

体育祭の前の週、部活動は例によって来週の文化祭に備えて禁止となった。

代わりにクラス対抗リレーの特訓をしている生徒達がグラウンドに溢れ返っている。

ほぼ全校生徒が集結している校庭に、群がる生徒は微妙な広さで窮屈そうに練習に勤しんでいる。これからお祭りが始まるのではないかと言う位の人ゴミだ。

他にも中庭という手もあるが、もうそこも他のクラスでいっぱいだ。

練習に励んでいる声が聞こえてくる。それはグラウンド全体から織り成す轟音、あるいは唸りとなって聞こえてくるようだ。土まみれになりながらも走り回る生徒達を何も考える事無く見ていた。

そんなに大事なのだろうか体育祭なんて、たかだか毎年行つ学校の行事なのに馬鹿馬鹿しい。

本当に自分が望んでいるものならば必死にやるけど……。

「はあ〜い！ 今帰りなのか？」

変な呼び声の後。ふっと横を見ると斜めに顔を傾け、無理矢理に視界へと乱入しようとする先生。

「っ！！」

驚きもあり、少し後ずさりをした。いきなり人が斜めから視界に入ってきたら誰だつてそうなる。

後は、先生とこうやって話すのはあの自転車で送ってもらってから初めてだからかも。



実際に正面きつて会いたくない人物ナンバーワンだ。

「久しぶりってとこだな？」

「……」

学校で授業なら普通に受けていた。

担任だし顔を合わせない日なんてないから、けど無意識にきつと私は……。

「避けてただろ？ 俺の事」

さつきから私の思考を読み取る様に聞きなれた低い声が言葉を重ねていく。

先生の立つ位置より少し奥に、やけに目立つ色の整っている自転車がある。

リュックも前カゴに置いてあるし、状況を察するに私と同じ帰り途中らしい。

「はい。その通りです」

頷きながらそう答えると先生は大笑いした。

私はというと、爆笑された事に訳が分からず思わず目を白黒させる。

笑い終わると先生は数歩後ろに下がり、自転車を引きながら歩いた。

つられる必要も無いのに私も歩き出す。

「ははっ。別に気にすることないのに」

「え？」

「たかが嫌いだって言っただくらいで……」

そうあっさりと言いのける先生。

下向き加減だった私が不意に見上げると、先生の表情は木々の間から漏れる日差しで表情が見えなかった。

「重く、捉えてないからさ」

先生は私の視線に気付き、私と違い下向き加減になると口端を上げた。見えたと思った先生の表情は日差しに隠れる。

自信満々に……。さも、見透かしてますって言う瞳。この顔が私をイラつかせる。

『分かってます』ってまさしく先生みたいな顔、物分りのいい大人を演じる。

なんでこんなに言葉に詰まらなきゃいけないんだろう……。

全て思い通りにならないのがいけないんだ。

表を見てくれない……表面を見て欲しい。私は先生が嫌いだって言った筈なのに。

どうして近づいてきたり笑ったり茶化したり、さも私は悪くないみたいにその微笑み。

この人は怒ることってあるんだろうか。

こんな人は初めて。裏側を見たがる人。誰だって裏はある。

そこまでは知ってる人は多いだろう……。

知っていて心の内に踏み込んでくる人って何人いるんだろう。

ごく僅かだって私は思っている。私も含め、人間は表面上の生き物。

そんな先生みたいな異質な人間に近寄って欲しくない、内に触れて欲しくない。

先生の一言一句で私は変わらない……。

私は歩調を合えずらしていた。上手く表情を繕えないから。

意識的に少し後ろから離れて歩いているのに、わざわざ先生は真横へと自転車から降りて合わせる。

「分かってないようならもう一度言います。先生のこと嫌いです。私、苦手なんです先生みたいなタイプ生理的に受け付けられないんです」

あの時は勢いで言ってしまった口調を荒げて感情だしまくりで……。

「いつも私の姿をみて笑ってくれる人はたくさんいます。私が笑ってるからつられて友達も笑うんです。嘘だとしても、冗談言つて馬鹿やつて『明るい子』だ『面白い子』って言われて思われて……：そしたらもうこっちの思い通り。ボロさえ出さなけりゃ大抵の事は上手くやつてのけられるんです」

大丈夫、今日は落ち着いている。ちゃんと自分の言葉だ。

グラウンドから聞こえてくる声が耳を通り抜ける。

周りの出来事が把握できる、冷静な証拠だ。

「言い方が悪いね」

「そうですね。だけど一番当てはまる言葉です。だけど先生は違っただ。いつでも何処でも私に対して否定的で笑つてもくれない」

「笑ってるよ。俺は」

「いいえ」

私には分かるそれが笑顔でも何処か違うことが……。風が歩いている私達の側を通り抜ける。

……。

「先生。あの時、コンビニで私を見かけなかったら学校だけの私を見てくれました？」

だいたい初めからいけなかった。あの時助けてくれたのが先生だったから。

些細なことで動揺する私を偶然にも見られてしまった。

「もしそうなら……そうなら」

それさえ見ていなければ。

「……」

心臓が止まる脈が止まった気がする。

一息置いた言葉。

「ココ、置いて帰ればよかった。差し伸ばしてくれた手を払いのければ良かった」

ズキンッ……。

発した言葉に心臓は反応する。何よりも速い速度で胸を打ち鳴らす。

気まずい雰囲気の中を壊すかのように再び目の前で笑い声が木霊する。

「はっ……ははははははっ!! 何を言い出すかと思えば神崎、答えはノーだ。違うよ。分かりやすいんだよお前は」

そういつて私の頭を二、三回撫でる。仕草も回数も香りもあの保健室での出来事を思い出す。

伸びた先生の大きな手に暖かさを感じた。

「お前はどう自分を思ってるか知らないけどな？」

撫でられてる手を振り解くことが出来ない。

『嫌い』先生は私がどんな酷い言葉を言ってもきつと私を嫌いに

ならない。

教師として、担任だから？ それは大人だから……？

どんな上手い言葉を使えば私の思い通りにこの人はなってくれるんだろう。

溢れ返る程にそこら中にたくさん大人はいる。

目の前にいる先生なんかよりたくさん知恵を蓄えて生きている人はいっぱいいる。

日々出会う、すれ違う大人たちと何が違うんだろう。

数分間、何も言う事無く歩き続けた。

別に沈黙が重い訳でもなく、むしろ自転車を引く先生の顔は遠くを見ながら笑っているように見える。その姿を見て私はホツとした。

……！！！！？

今、何を思った？

フツと先生から視線を外す。

何でもいい……。混乱し始めている思考を違うことで紛らわそうと目に止まるものはないかと考えグラウンドに目を配った。

「……あ」

目に止まるものを見つけた。さっきから目に止まっていたものを投げかけようと思った。

それは最近、見慣れた風景の中にひっそりと映し出された。

「先生？ なんてたかが体育祭、学校行事なのに頑張るんだろう」「私が立ち止まってから数秒遅れて先生も歩みを止める。」

グラウンドに近寄り、フェンスを掴みつつ映し出されたものを見

つめる。

「それが自分がこれから掴み取ろうとしてるものなら私だって頑張る。だけど違うでしょ？ 夢や趣味じゃなく、増してや生徒全員が皆運動が好きで、陸上選手になりたくて必死なんじゃない。誰に見られるもなく目に止まるでもなく。この姿そのものが至って無意味なんじゃないですか？」

「それは勉強ってなんのためにあるのって質問か？」

後ろから風を遮って声が聞こえる。

「それは先生にもわかんないなあ……」

ワザとらしく先生と自身を呼んだ声。その言葉に落胆する間もなく声が近くなる。

グラウンドを見つめる私の脇に自転車を止めた。

「社会が言ってることは屁理屈で納得のいかない理由ばかりだ。これからの自分に役立てるための学校、将来を安定させるための学校、交流を学ぶための学校」

「……」

「だけどなあ……後悔先に立たず。後悔した人もいたんだ。子供って言うのは何にでも興味を持つ。ボール一つ転がっても不思議がる。それがまだ少しでも備わっている内に精一杯学んでおけ？ たくさんの事に全力で興味を持つんだな」

何それ。まったく答えになってない。

もっともらしい聖職者らしい答え、それは多分先生も分かっていると思う。

私の中ではそれはどうでもよかった。

ただ、先生が思い浮かべている瞳に写るものが少し気になった。

それからしばらく歩くも大した話しはしなかった。

## 19・目指すは優勝！！

自己満足にプラス満面の笑顔。

偉そうに仁王立ちでお送りする今日の私がここにいる。

皆の視線は私の持っているものに注がれる。

だからなのか、単純な私はいつも以上に私は調子に乗っていた。

オーバーアクションでそれを広げる。

無言でその如何にも下らない一部始終を、美弥は苦笑しながら付き合ってくれた。

お披露目を教室で行うなんて勿体無い。

これだけたくさんのクラスメートが手伝ってくれたんだから……。

そう思っ、ニヤケ顔でもったいぶりながらも中庭へとクラスの皆を誘導した。

まあ、クラスの皆というか、細かく言えば手伝ってくれた人達。

ガヤガヤとそれぞれの会話をしながら、完成したクラス旗を美弥と一緒に広げる。

「かんせ〜〜〜〜いつ！！！」

ジャジャー〜！！ と効果音を付けたい位に気持ちは盛り上がった。

中庭全体に聞こえるような声。

校舎中に駆け抜ける大迷惑な私の声に、関係のない他生徒が驚きながら目を点にして振り返った。



ここまでのクオリティーにするのには時間が掛かった。

クラス種目の練習が終わった後、疲れているのにも関わらず千佳達は手伝ってくれた。

そして、毎回入れ替わりでクラスのメンバー数名が手を貸してくれた。

材料が足りなくなつて買い出し行ったり、ペンキで面白半分に落書きしながら作業を進め、日に日にペンキで汚れていくジャージに愛着を持ち始めた頃、旗は見事に完成となった。

「へえ……すごいじゃん！！ これ、絶対に旗部門では入賞するねっ！！」

私の目の前にいる千佳は、大きくVサインをする。

更に大きいVサインをウインク付きで千佳の目の前にして見せた。「だってこれ見て力作力作！！ うちの担任そっくりじゃない？！」

旗の半分を陣取っているキャラクターを指差し、腹を抱えながら大声で笑う。

私の時間はこの似顔絵のために費やしたと言っても過言ではない。

一番に言いたかった掲げる旗のメインディッシュ！！

「なんだってここ！！ ここ注目だよ」

手招きをして時には腕を引っ張り皆を集める。

「へえ……。俺は顎が割れてて、眉毛濃くて瞳は細めなのか……」

私の後ろを陣取った影。聞こえた声は妙に明るくトーンが高い。

冷や汗と同時に恐る恐る後ろを振り返ると。

「っ……！！」

「あ、かかか狩屋先生。な、なぜこちらに……？」

まるで、給湯室で上司の悪口を言っていたOL気分だ。

「これだけ騒いでたらな。うん、これはこれはいい出来栄えだ。今後の内申のことも考えなくちゃな」

腕を組みながらもワザとらしく感心してみせる姿は紛れもなく、偽りない先生だった。

旗に書かれたコミカルな先生の似顔絵と、等身大の先生に挟まれている今現在の私。ただ表情は似ても似つかない。

「ははっ！！ これはノリというか何というか。よ、要するに絵にする場合！ 大げさにダイナミックに表現しないと印象に残らないじゃない？ インパクトが重要よ先生！！ 美弥もそう思うでしょ！！」

素知らぬ振りをする美弥。

涼しげに不自然に木の葉なんか見て……目線を外しながらも口元は笑っていた。

こいつはただ単に内申が怖いだけじゃないなっ！！

「そんなあ……。絶対似てると思うんだけどな」

頼れるのは自分のみ！！ 奪回策を藁をも掴む勢いで見つけよう。「だったらアントニオ猪木は凄いカッコよく見えるんだろうな」

「ねえ、先生。それって自分はイケメンって思ってる発言？」

しまった！！

思わず口を両手で押さえ、言ってしまった言葉に冷や汗を掻く。弁解する暇もなく怒号が耳を劈いた。同時に中庭内を響き渡らせる位の笑い声が舞い上がった。

先生は肩を落とす私の顔と、コミカルに描かれている自分の似顔絵とを睨めっこ。何度か往復し、似顔絵の倍にある先生の顔は蒼く広がる大空に視線を向けると中庭へと視線を戻した。

「はぁ………つたくー！　こんなところにインクを付けて」

そう言っただけ先生は袖を伸ばし頬に擦り付ける。

落としてくれた先生の力は強くて、擦られた肌が空気に当てられてヒリヒリ痛む。

フツと目を向けると頬に付いたインクをふき取ってくれた袖は黒ずんでいた。

「あ、ちよつとチャミ。ここも汚れてるよ？」

「え？………ありがと」

不意に千佳に顔を近づけると、袖を引っ張り、もう片方の頬を力いっぱい擦り付ける。

「ちよー！！　千佳千佳、千佳ってばー！！　痛い痛いー！！」

「あれ？　どしてだろー！！　落ちないなああああー！！」

異様にじゃれる楽しそうな声とは裏腹に眉がっぴりあがっていた。

な、なんで？　………お、怒ってるの???

何で？　………何かした？

「これは罰じゃー………！！」

「痛いー！！　………苦しっ！　離して」

一向にやめない千佳に、助けてのアイコンタクトを美弥に送る。

それに気付かず美弥は笑っていた。親友の一大事に大笑いですか

………美弥さん。

「仕返しー！！」

そう言っ止めない千佳に反撃を繰り出す。

「はぁーい!!! 止めっっ!!!」

やっとの事で反撃に掛かれると思ったのに何の恨みがあるのか…  
…あ、いやさっきの恨みがあるのか。

先生は大きな掌で空中をチョップし、踏み切りみたいに私と千佳の間を遮断した。

「先生どいて!!! 自分を守るのは最早自分のみよ!!!」  
最もらしいことを演技っぽく伝える。

それ以上、先生は何も言わずに人差し指を下に向ける。

「……神崎、旗」

千佳へと繰り出す腕を下ろし差された指の方向を視線で辿る。  
そこには原型も無く、もみくしゃになった旗が半死していた。

「あああああああっっっ!!!!!!」

焦っていたのがいけなかったのか、急いで足を退けようとしたら  
見事に纏れた。

その瞬間、スローモーションでさらに焦って慌てた先、私の身体  
が半回転した。

気付いた時には腰に激痛が走った。

「ったあゝ……!!!」

またまた笑いの的になつてしまった。

よかつたあ……ジャージ姿で。制服だと変なセクシーショットに  
なるトコだった。

お尻が痛い。肘ぶつけたけど、何が何だか把握が出来てない。とりあえず星が沈んでから考えよう。

「ほら、智亜美」

私を『智亜美』っていうのは一人しかいない。美弥の手を借りて起き上がる。

「旗、大丈夫そうだよ？」

千佳が拾い上げる旗は何処も汚れが見当たらず無傷だった。

美弥は無言で旗に付いた埃を掃い、順良く折り曲げて私の目の前に差し出す。

「体育祭、絶対勝とうね！！」

見えない背中に付いた埃を振り払うと、今度は後ろから顔を覗かせ千佳が笑う。

「な、何を、突然……」

「この旗みたいは無傷優勝を狙おうよ！！　ここまで手伝ったんだから本気で戦わないと！！」

さっきのことはなかったかのように元気にガッツポーズをする。

私は一息飲んだ。

「もちろん！！」

意気込んでいる千佳に賛同しない理由はなかった。

もちろん。

そう明るく言い切った私の心に切れ間のない雲が現れた。

さっきまで忘れかけていた疑問……自分でも分からないわだかまり。

笑っている千佳の姿だけが別世界にいるように見えた。

## 20. どつちが偽善

待ちに待った体育祭まであとちょっと。だけど、私には一つ気にかかることがあった。

クラス練習が終わり、疲れたと肩を落としながらも皆は帰ってしまった。

美弥はこれからバイトということで先に帰宅し、千佳も他の友達とカラオケに行った。

美弥は金銭面の気持ちは分かるから仕方ないとしても、千佳は元気だなあ。

あれだけ練習してまだ大声で歌える元気があると来たもんだ……。

あれから幾度と積み重ねた努力の結果。

なかなか上手いかなかったバトンの受け渡しもほぼ完璧になり、個人個人の足の速さは別としていい感じで進んでる。

「ん……つと何処だったかな？」

キヨロキヨロと見渡す先には、一望出来るグラウンドが広がっている。

きつと今日も校庭にいる。

きつと一日そこらで自由気ままに練習してたわけじゃない。

この前先生と歩いた帰り道で不意に目に入ったその姿は、誰よりも真剣な眼差しだった。

グラウンドへと足を踏み出した私は、拳動不審に辺りを見渡す。

お目当ての彼女は校庭の片隅で走っていた。  
練習が終わった後、一人で残って同じ練習を何度も何度も、毎日  
かかさず練習していたのだろう。

「須藤さん!!」

呼びなれない彼女の名前を呼んだ。

いつも机に座っている印象しかない彼女のこの行動力が私は気に  
掛かった。物静かな彼女が積極的に一人で走る練習をしていたから  
だ。

彼女が掛けているメガネのレンズ越しに二重の大きな瞳が見える。  
だがそれは微かだ。

暑さのせいかメガネが少し曇っている。それもその筈。辛そうに  
走る彼女の肩は激しく上下していた。

スタートダッシュが苦手なのか主にその練習していた。体勢を整  
え、今から走り出すと言う時に私は声を掛けた。

「……………え?」

挙動不審に辺りを見渡す。私は彼女を見つけていても須藤さんは  
私を確認できていなかった。

「こつちこつち!!」

大きく今度は手を振りながら駆け寄り、声を掛ける。

「え? ……あ、神崎さん」

私を呼ぶ声も何処か途切れ途切れで疲れが目立っていた。

それもまたその筈。

さつきまでクラス練習もあつたからもあるけど、彼女はどう見て  
も文系だ。

外見で決めるのは可笑しい話だけど、色白でメガネを掛けていて、  
全体的に身体の線が細めで机に向かって行つ授業は得意でも外に出



て行く授業はきつと苦手そつなイメージ。

そんな彼女がどうして……？

「偉いね。練習してるんだ」

彼女と目が合つと、少しふら付きながらも須藤さんはゆっくり駆け寄った。

「うん。私、走るの苦手だから」

そう言つて笑つ須藤さんの声や頬は、暑さで上気する姿とは別に赤く照れていた。

彼女の動作を目視してから手にあるものを渡す。

「はい、差し入れ……」

さつき買つておいたスポーツドリンク。暑さで缶に付着している水滴が私の手首を濡らす。

ただで近づくのはなんだし、タオルはきつと持参してると思うから。

「え？ そんな……いいのに」

ありがとつと戸惑いながらも受け取る彼女の細い手。そして細い足。

別に病弱つて訳じゃないだろうけど、やっぱり運動が好きつて感じはウソでもしない。

それにさつき苦手だつて言つてたし。

「毎日、練習してたの？」

「うん……。だつて体育祭は皆が楽しみにしてるから。私が足を引張つちや悪いと思つて」

彼女は私や千佳達と一緒に旗の手伝いはしてない。

だからクラス練習が終わってから最近ずっと練習してたのだろう。  
「楽しみねえ。そうなのかな？」

『リレーが』というかお祭り騒ぎが大好きって言うのであればそ  
うかも……。

ちよつと疑問に思いながらも言葉を濁す。

「クラスの中でタイム遅いの私だから」

この足を引つ張っちゃいけないとか、楽しみにしてるとか。

こんな遅くまでそれだけのために、まともに私の名前が呼べなく  
なくなるまで頑張ってるなんて、何がそんなに彼女を駆り立てるん  
だろう。良い子ぶった発言が少し癪に障った。

「でも、そんな一日二日でどうにかなる問題じゃないと思うけど…

…」

気持ちがそのまま言葉になり、私自身も予期もせぬ言葉に口をつ  
ぐんだ。

驚いた顔で私を見た。

一瞬だけ見せたその顔はすぐ戻り、微笑んだままの状態で側に置  
いてあるタオルを手に取り汗を拭く。

「うん。確かにそうだねえ。クラスの皆にも私は運動苦手で文系だ  
って思われてるだろうけど……。勉強も得意でもなかったよ。私、  
何もとりえのない子だったから」

私の言葉がなかったかのように話し出す。

「勉強が出来るのも無我夢中で頑張っただけだし、知識がないなら  
補えばいい。それを実行に移しただけで。運動もね？ そうなるっ  
て信じてるんだ」

「……」

「確かに、一日二日じゃ速くはならないけど、だけど一日前より、二日前よりかは新しい自分になってる。短い時間で無駄かもしれないけど一番意味ないことは何もしないことだよ」

走っている須藤さんはお世辞にも速いとは言えない。無駄と言って何もしない人より、効果が得られていない筈なのにそう語る須藤さんは何処か輝いて見える。

益々癪に障り、不覚にも彼女の姿が瞳の奥で歪んで見える。

「結構ネガティブな印象受けてたけど……ポジティブなんだね須藤さん」

「んと、勉強ばかりだから暗い子に見えてしまうのかな？ 実際そうじゃないんだけど」

向けられる笑顔に嫌に苛立った。

ここまで前向きにいられる彼女が……。

『意味ないことは何もしないこと……』

そんなの小学生の頃からそう思ってたけどもう諦めた。

何かしても怒っても泣いても気に求めてくれないんじゃない、行動を起ここしてる意味がない。

気持ちが私に気付いてくれないんじゃない意味がない。

生まれた頃。物心が付いた頃、智亜美って呼んでくれる。娘だつて認めてくれる。

お父さんとお母さんの笑顔がしゃがんで覗き込む。何よりも私は二人の子供なんだなって幸せだった。だけど、ある日を境に『子供』ってという言葉に嫌気が差した。

子供なんだから、娘なんだから……まだ小さいんだから。  
子供なんだから、黙ってなさい。あっちに行ってなさい……。  
最後、お父さんとの別れ際の時も。

「神崎、さん？」

耳を傾けている筈だったその声は不信に思い、私の顔を覗きこむ。  
「ごめん、ボーっとしてた」

そういつて笑うと須藤さんも微笑んだ。

須藤さんは近くの柵に寄りかかっていた腰を上げる。慌しく動いていたタオルは彼女の肩に掛けてある。

「きつと練習で疲れてるんだよ。私もあと少し練習したら帰るかな？」

軽く柔軟する仕草をする。その一部始終をただ見つめていた。

「だけどやっぱ私は運動方面は向いてないのかなあ？ 勉強は基礎がしっかりしてればいいけど運動って何だろって感じだもん。潜在能力っていうのかな。備わってなきゃ無理なのかなって言ってもキリがないし」

「スタートの時に身体が反るからいけないんじゃないのかな？」

無意識に言葉を発していた。

「え？」

彼女の走る順番が一番初めだった。

その順番に策略があるわけじゃない。ただ単にじゃんけんして決めた。

「ドンってなった時に身体が反っていると、その分バランスが崩れる

からそれもロスの原因。それとバトンを渡す時はもうちょっと離れて渡しても平気だと思っよ？」

私も腰を上げて身振り素振りをする。

「え？ こう、こんな感じ？」

「ん……っと」

彼女に続いて私も柵から腰を上げる。何だかんだ言って自分が一番の偽善者だ。

短時間で無謀だつて分かつてる彼女。

比べて私はどっちかって言ったら文系ではなく体力派。

須藤さんの悩みに答えることは出来る。

連日続く練習に身体はクタクタだけど何かせずにいられなかった。

これが偽善と言わずになんだっていうんだ一番の偽善者だ……。それは私と正反対の考えを須藤さんが出したからかもしれない。

翌日、体育祭を迎えた私達。私達っていうのはここに何人かいたからだ。

須藤さんと私を見つけて偶然、集まった美弥と千佳。

同じチームだからこれ以上に心強い助けはなかった。

ラストスパート。言うならそうかもしれない。

須藤さんと二人で練習した次の日『何してるの？』って後から美弥と千佳が加わってくれた。

あれから毎日毎日クラス練が終わって皆でグラウンドに集まった。

日が暮れるまでどれくらいやってたんだろう……。

そんな努力も空しく終わらずどんどんタイムが良くなっていく須藤さん。タイムが上がる度に彼女の笑顔は宙を舞った。

あまりそんなイメージがなかった。

いつも教科書を読んで、練習問題を解いている。その彼女のレズ越しにはこんな素顔が隠れてたなんて。だからこそ俄然やる気が出るのかもしれない。

可笑しい話だけど、か弱い女の子に男性が惹かれる気持ち少し分かった気がする……。

## 21・痛み

体育祭当日。雲は見当たるのもの、私達の期待を裏切らず天候は快晴となった。

……可笑しい、そんなはずない。

『期待を裏切らず』いつからそんな言葉に変わっていたんだろう。  
『私達』って一体、誰の事を指しているんだろう。

今も考えは変わらない。意味の無い事で一生懸命になるのは馬鹿げてる。

自分が一番にやりたいことじゃないからと、今も思っし毎年思ってた。

なら、手を抜くべき。一生懸命やるだけいつかは痛い目に会う。深入りをするとう気付かなくて良い事にも気付かされてしまう。

私は……と言えば憎らしい位の晴れた空と、そして美弥と一緒にジャージ登校をしてきた所だ。

まあ。仮にも体育祭実行委員な訳で、先生が無理矢理というか己の運もあるだろうけど、やっつけアミダクジの当たりを引いてしまっただけから今までの役目をこなしてきた。

何だか色々ありすぎて、そんな経緯も遠い昔のように感じる。

そして今日が最後。早めに行って旗をグラウンドに持っていかなきやならない。

「ごめんね。美弥まで早めに学校に来る破目になって」

「いいよ別に。黙って一人で行かれるよりずっといい」

黙って？

「何でもない。これ、出すんでしょ？」

教室に着いて休む間もなく、私より先に美弥が完成した旗を手取る。数歩先に行く美弥の顔を直視しながら言葉の意味を探しながら半信半疑で頷いた。

意外に二人で持つには重い物だということを初めて知った。

しかも棒状に長いものだから重心が左右どちらかに一方的に傾いてしまう。

「おつも〜いつ!!」

そして、必然と身長差が関係してくる訳で……美弥よりも低い私が旗の餌食になる。

身体の何処から声が出ているのか。低い声が誰もいない教室に響き渡る。

何とか腰に力を入れながらも美弥とタイミング合わせて持ち上げた。

さすがの自称『ポーカーフェイス』の美弥も顔が少し歪んでる。

美弥が居なかったら一人で持つていこうとしてた。なんて無謀にも程があったわ。

昨日、須藤さん達と練習後の別れ際に『明日、智亜美早く行くんでしょ？』って言うてくれた美弥。

『一人で行かれるよりずっといい』

……美弥は見抜いてたのかな？

自分から言わなきゃ声を掛けてくれないって事を。

あまり言葉には出さないけど美弥は私の事、全部じゃないまでも



誰よりも分かっているのかもしれない。

八チマキや旗の時も自然と手伝ってくれたし。だけど無闇にチヨツカイ出さないし。

私のすることに口も出さないけど、いつも側にいるんだよなあ…

まるで私の行動分かってるみたいに、いつも近くに。

「智亜美！！ その先階段！！？」

え ？

スカツ。

美弥に呼ばれ我に返った瞬間、確認する間の無く宙を蹴った。

足は階段に差し掛かり視界は間逆、足を踏み外した瞬間からスロ―になった。

ガタン！！！ ダダダダダア -！！！！！！

何回かの視界だけで繰り返される振動を繰り返した後、見事にお尻から着地した。

「つつたあゝつー！！」

視界が遊園地で良くあるコーヒーカップに乗った時の様にぐらつく。

グルグルと意思とは関係なく回る頭を、コンコンと叩くと視界がしっかりとしてきた。

さっきまで私達の負担になっていた旗も私の手の先に着地してい

た。

「大丈夫!!」

「うん。何とか生きてると思う」

断続的な振動が祟ったのか頭がまだ正常へと戻らない。

今、確かに言えることは……。

「お尻が痛い。私、何段お尻で歩いたの？」

冗談混じりでゆっくりと腰を上げるとふらつく私に、美弥のストラップと伸びた細い手が見える。

「ありがとう」

「痛いのはお尻だけ？」

左右軽く見渡しながらも手を上下に振り、笑って頷く。

「強靱みたい私。ごめんね」

「ならよかった」

美弥は私の頭に乗った埃を無造作にとると、まだ半分も距離を達していない旗の大移動を再開した。

すでに校庭には数人の生徒がいた。生徒会、放送委員会とか準備が大変なんだろう。

よくもまあ、ここまで晴れたものだ。

手をオデコに翳しながら眩しくて見えない青空を見上げる。

「でっきたあ!!」

上手い具合に柵に紐を絡ませ交差させながらフェンスに括りつけると、グラウンド全体にお披露目となる。丹精を込めた旗にやっと出番はやってきた。

一様に両隣には違うクラスの旗がある。

うん。絶対うちの旗の方が出来栄がいい！！

すっかり愛着を持ってしまった応援旗を軽く撫でてあげる。

いい子いい子したくなる。ちよっとした親心ってやつだ。

仕方ないとはいえ、これから運動するっていうのになんて汗をかいてるんだ……って思っている側から隣で美弥も汗を拭っていた。

「いい感じじゃない？」

やっぱり仕方ない。まだ夏の暑さが残るこの季節。こんな重いものを持ち上げて落ちないように括りつけてりゃ汗かかないほうがおかしい……。

「うん。良い感じだとは思いつけど弛んでる気が。……結び方が緩くない？」

実は私もそう思っていた。面倒だけど折角のお披露目だし、もう一度結び直すか。

紐を結び直すために手を伸ばしてから力カトを上げた。

「……っ!？」

えっ……!!

思わぬ膝から下へと突き抜ける痛みに足元がふら付いた。

その時、後ろから私を抱え上げるように支えてくれた人物によって身体が軽く浮き上がる。

「俺はそんなに顎がしゃくれてて、目が細かいか」

出会い頭というか、まだ正確には出会ってないけど文句が飛ぶ。

「まったく。よく女子が二人でここまで持っていたよ。朝から俺がいるんだから、担任の先生に頼ればいいもの。先生に貸してみ？」

私を無事に着地させると先生は力カトを上げる事無く楽々と結び直す。

身長がここまで違つたとカカト上げなくても軽々と結べる。そんな当たり前な事に感動をってしまった。

まあ。さすが先生って言った感じだけど。  
ん？ 先生って言うか男の人？

「声を掛けてくれりや旗くらい持って来たのに、いつまで経っても水臭い。どうだーノ瀬こんな感じで……」

先生の二、三步後ろにいた美弥に紐に触れながら視線を向ける。  
「うん、バツチリ！」

笑顔で見上げた美弥は、構わず先生に向かってオツケーサイン。確認を取ってから結び目から先生は手を離す。

「本当はお前一人でやるうって思ってたんだろ？ ーノ瀬もそんな神崎の考えをお見通しで早めに来たつてところか？」

手に付いた埃を叩きながら私と美弥を交互に目配せする。  
「神崎？ 嫌味を言ってるんだけど聞こえてるか？」

先生の嫌味も頭に入っていないかった。

さつき全身に流れた激痛、途端に零れる冷や汗、嫌な予感がした。

誰にもバレないように足を軽く曲げ、再確認。嫌な予感が当たらないように祈りながらも五感を足に研ぎ澄ませる。

今度は逆に筋を伸ばしてみる。途端、歪む表情は勘違いじゃなかった。

な、何で……？

いつ？ 何処で？

今日一日の自分をフル回転でフラッシュバックさせると一つしか見当たらなかった。

さつき階段から転んだ時に捻ったんだ。

いきなりの事で覚えてないけど階段を踏み外したんだもん。なんて悪いタイミング……。

思い当たる節が見つかり、益々痛みが増してきた気がした。

「神崎いゝ。お前、人の話聞いているのか」

いつの間にか不機嫌顔の先生の顔がアップになっていた。

「わっ！！ 何、先生」

思わず飛びのく。ビリツと電流みたいな痛みが走る。

「顔色が悪くないか？ まだ体調は治ってないのか？」

そう言っただきな掌を私の額に当てる。外の気温のせいなのか先生の掌の方が熱い。

「先生、セクハラですよ」

冷静に私の額に当てている掌を指を差して言葉にする。

ばれちゃいけない。とにかく何も無い顔をするんだ。

「あのなあ！ こんなんでセクハラって言ったら先生は泣くぞ！！」

ワザとらしく手元にあつたハチマキを目頭に当てる。

「なんのために教職員になったっていうんだ！！ 生徒と触れ合うために決まってるじゃないか？ 分かるか？」

真つ当な事を言ってる様に聞こえるけど、下心見え見えの表情に私はツツコミを入れる。

「意味違っし。それに先生、生徒じゃなくて女子でしょ」

痛いなんてばれちゃいけない……智亜美、笑え。

ツボにはまったのかお腹を抱えて美弥が笑った。遅れないように私も大笑いをする。

「そんな話をしてるんじゃない……神崎。体調は本当に大丈夫なんだろうな？」

鼓動が跳ねた。

大丈夫。痛みに震える足をしっかりと地面に着ける。

「心配も教師の務めですか？ 大丈夫です！！ 今日はいっぱい睡眠も取ったし、ご飯も食べた。気分は晴れ晴れです」

そんな私の姿を横目で見ると先生は口を私の耳へと近づけてくる。「愛しのダーリンの写真、ちゃんと閉まっておけよ？ 倒れられたら適わんからな」

美弥に聞こえないようにひそひそと耳打ちする。

案の定美弥は不思議そうな顔をして私の顔を見ていた。耳打ちされた言葉に眉がっり上がる。

やっぱりこの先生嫌い！！

「あれはそんなんじゃないんです！！！」

なんでこんなにムキになって隠そうとするのか。

立っているだけで足は震えて、まともに地面に立てないって叫びをあげてる。

足の痛みに気付いてから痛さは秒を追うごとに増し、笑ってはいらぬものの冷や汗がさっきから止まらない。初めは暑さのせいに来るけど、いつまで持つんだろうか。

足挫いたからって正直に言えばいいのに、でも言葉として何も出てこない。

脳裏に現れるのは、皆でガヤガヤと完成させた旗と放課後に皆で練習の後に飲んだドリンク。

千佳の『優勝』って叫んだ声。そして彼女……須藤さんの笑顔だった。

## 22・体育祭（前編）

毎週行われる朝会と同じと言える退屈な開会式が終わった。

日差しが容赦なく照りつける中、校長の話だの体育委員の話だの体育教員の話だの聞いている場合じゃない。

聞いている間に走る元気さえ無くなるってもんだ。

主旨はこれだと言わんばかりに長々と話す様々な先生に怒りを覚えた頃、生徒代表で体育委員が選手宣誓とラジオ体操を終わらせ、自分らの持ち場に戻った。

要は待機場所。応援席と言っていい場所だけど。

そして全校生徒は思い思いの席へと散らばった。

開会式の時にひたすら静かにしてた分、取り返すように席に着いた瞬間に体育祭以外の話をし出す。

教室という箱の中でなく開放的な場所『グラウンド』だ。

照りつける太陽の下にも関わらず、生徒の話す声は何処を吹き抜けるでもなくガヤガヤと体育祭を賑わせる。

そんな時間がどれくらい続いただろう……。

痛い……。



さつきは動揺で分からなかったけど、冷静になり痛みは右足から来ていた事を知った。

何種目か選手として出場してこれまで我慢できたけど朝より痛みをしてみる。

きつと気のせいだ。時間が経てば痛みは治まって良くなっていく。そんな期待も空しく、私の足を囲む靴下の中、朝と違って窮屈な感じがする。

靴の入りに触れる度、痛みが足全体に電流が走ったみたいになる。

熱を持ってしまったのか、クルブシの部分がホツカイ口を当てられてるかのように熱い。

フツと手元にあつた体育祭のプログラム。それを手に取り今の進行具合を確認する。

今、三年生の出し物が終わったところだから……手で辿り、目で追って行く。

これからお昼か……。

足から来る緊張のせい食欲もないし、今のうち保健室で湿布を貰っておこう。

私が出る種目は午前中にほとんど終わってるし、痛みが我慢できる時に大半が済んでよかった。

私が出る最後の種目は『クラス対抗リレー』

放課後に残って頑張ったりリレーが出場種目の最後、幸か不幸か最後……。

まだ我慢できる！！ 走れる。そう思わなきゃやってけないかも。座ってなくても、足に重心を掛けてなくても伝わる。

心臓に響く位の振動は、右足からジワジワと駆け上ってくる。出

来ればリレーの時まで一時も動かしたくない。

これはもう行かなきゃならない。

ゆっくりと足を隠していた上着を取り去ると立ち上がろうと右足の力を込めた。

「っ！?!？」

分かっていった痛さに思わず身体が縮こまる。顔を歪めては我慢しながらゆっくりと立ち上がった。

「あ、ちよつと智亜美」

今、何処からか帰って来たのか美弥が声をかける

「わっ！ 美弥？ 何処行ってたの」

平然とした顔を装い、声がした方をつまり美弥の方に振り返る。

「丁度良かった。これからお昼でしょ？ 千佳達とさっきトイレで会って一緒に食べないかって誘われたんだけど」

「ごめん！！ 私、これから実行委員の仕事があつて行かなきゃならないんだ。でも千佳達と会ったんなら丁度よかった。遅くなると思うし、皆と一緒に食べちゃってよ」

美弥の顔をチラチラ見ながら片手でごめんの合図を送る。

「それじゃ、しょうがないよねえ……分かった。また後で、委員会の仕事頑張つて」

残念な顔を私に向けると、お弁当を持って去っていく美弥に手を振って別れた。

油断していると気付かされる終わらない痛み。

早く保健室に行こう。お昼休みが終わらないうちに……。

「失礼します……」

ガラッと扉を開けた先は微かに消毒液の匂いがした。この前倒れて目が覚めた時と同じ匂い。

学校一番清潔でなきゃいけない場所。そして、学校一落ち着いてる場所。

私だけが思うのかな？ だからなのか保健室って静かで時間が止まってる感じがする。

辺り一面が白で埋め尽くされているから錯覚してしまうのだろうか。色のない部屋が学校の一角にある。

生徒の声もしないし、生徒がつけてる香水とか、わざとらしい匂いがしない。

鼻に付くのは、いつも常備されてる淡い消毒液の匂いだけ。気になる匂いだけど不思議と安心感に浸れる。

「……………」

気分が悪くなった生徒でもいるのか、一つだけカーテンが閉まっているベットがあった。

まあ、こんな炎天下の中倒れないでそれどころか出番じゃない時ははしゃいで遊びまくってるって方が凄い。

それはいわゆるこの学校の大多数の生徒を指しているんだけど。

カーテンの先に影がうつすらと見える。生徒らしき人を横目に見ながら保健医を目で捜す。

あれ？ 保健の先生はいないのかな？

誰も見ていないので遠慮なく右足を引きずりながらも手探りで湿布を捜す。

目で追うだけで分かった。

今日の日のためにたくさん用意したんだろう。ドサツと山のように大量に発注して置いてある湿布。その一つを手にとると近くにある椅子まで頑張って足を運んだ。

「はぁ……」

とりあえずは山積み湿布に一安心し、深く息を吐く。

近くの椅子に腰掛けるのも一苦勞。かなり重症らしい……。

「タイミング悪いよなあ。なんだったって今日……なの」

誰もいないことを良い事に、独り言を言い始める。

シーンと静まり返ってるからこそ何か独り言を言いたくなるもの。気分はトンネルに入って叫びたくなる気分似てる。

それに、ちゃんとドアも閉めてあるから大丈夫！！

「いたっ！」

右足を上げ、靴下を取るのに足首を曲げるのもやっぱり一苦勞だった。

「ああ。腫れちゃってるよ」

見たくないけど焼けた御餅の様に腫れ上がっている自分の足だ。見えちゃうしやっぱり見たくない。

知ってはいたけど突きつけられた事実首が垂れる。

今日のために準備された山の天辺から取ってきた湿布を手に取り、ひんやりとした冷たい面を腫れている部分、象みたいな右足クルブシに当てる。

「冷たっ！！ けど、気持ちいいかも。でもこれ……っ」

そのまま野放ししておく訳にはいかないからこの後包帯しなきゃいけないんだろっけど、どう巻いたら良いのか分からない。

途方に暮れ、意味なく辺りを見渡す。

保健の先生が居ると思ってたからなあ……。

「手伝ってやるっか？」

カーテンの向こう側で生徒の影がお昼真っ盛りの日差しに照らされ、黒いシルエツトが動く。

男子だ……。

よくは見えないけど女子にしては体格が大きいし、何より声が低い。

「あ、ごめんなさい。うるさかったですよね」

「ヤバイ忘れてた……。私一人じゃないんだよね。」

「きつと具合悪いのにだろっくに悪い事をしてしまったかな。」

「別にいいよ。だって」

瞬間、私とを遮るカーテンがその男子生徒の手によって開けられた。

「俺、担任だからな」

「せ、先生！！！」

静かな保健室に私の大声が響き渡る。

「……っ馬鹿！！ シツッ！！」

そういつて勢い良く飛び起き、私の口を塞ぎに駆けてくる。

生徒だと勘違いしていた脳に修正を掛けるには突然の事で整理が出来ない。

だってさっきまでの独り言が全部聞かれた……。

私が足捻ってる事、足が腫れてる事。

何を喋っていたかは覚えてないけど、徹底的な事は言っていた確信はある。

「馬鹿かお前！！俺がサボってるのバレたらどうすんだよ！！」  
あからさまに自分が悪い事をしているのに、私を馬鹿呼ばわりするこの教師。

逆切れする先生の意図が分からない。『意味不明』とはこの事だ。そう言ってる先生の声も驚いた私と同じ位の声で校内に響き渡った。

先生が保健室でサボってることを知られてないと確認すると、私に向き直り腰を屈めた。

「あれまあ。足、腫れてるね」

腰を曲げ、マジマジと私の足を瞳だけで見つめてくる。

「サボってるって今、お昼ですけど」

「話をずらすな」

そう言っただけ私の顔を軽くはたく。だって聞かれてなかったことにしたかった。

絶対に反対される。

……だって担任だもん。学校の先生だもん。

生徒が怪我してるのに監督する立場の人間が許してくれる訳がない。

今朝、足を捻ってから一瞬でも疑問に思わない時はなかった。

どうしてこんなに私は隠そうとしてるんだろって。まだ答えは

見つからない。

「はあ。かなり無理したなあ。これは……」

そう言つてう座り込んで先生は、私の腫れた足を手に取つて見つめ始める。

「……」

「これからまだ何かあるのか？」

「ないです」

「ウソつけ！ リレーが残つてるだろ」

知つてるんなら言わないで欲しい。そう思った私は、明後日の方に頬を膨らませる。

そう言つてる間にも足は先生の掌の上で痙攣している。それに気付かない先生じゃない。

「神崎、お前はどうしたい？」

「え？」

何が『どうしたい』って言つてるのか理解が出来ない。

「『先生』としては偶然とはいえ見つけてしまったんだ。俺はリレーは代役を立てたい。だけどその前にお前の言い分も聞こうと思つてな」

「私は……」

ここで棄権するつて言えば楽し、自分が望んだ面倒なことはしなくて済む。

いつだってどうでもよかつた。

「わ、たしは」

適当に旗を作つて、適当に練習して。

人付き合い程度に会話を頑張つて、全部を想定内でやるから人の助けなんかいらぬ。

「……出たいです」

「ただど言葉にした言葉は正反対だった。」

「なんで？」

「え、なんでって？」

「はつきり言ってるそれは、私が自分自身に聞きたい言葉だ。」

「今だってこんなに足が痙攣して、動けない位に腫れ上がってるんだから止めておけて、もう一人の自分が言ってる。走らなくても結果はもう出ているって。」

「ただ……ただ私の意思を伝えれば満足なんだと思ってた。」

「だから『出たいです』だけ言ったのに……そこに理由を求められると頭が真っ白になる。」

「いいか？ お前はこんなに腫れるほどの無茶を犯したんだ。それ相応の理由がないと『先生』としても、『大人』としても許可なんて出来ない」

「さっきまでの冗談めいた表情ではない。そのギャップにすぐに言葉返せなかった。」

「大人？ 何？ 大人ってそんなに子供の意思を奪って良いものなんでしょうか？」

「こんな言い方されるとこっちだって勘に触るものがある。」

「大人として」 『先生として』 『親として』 うんざりだった

「……」

「神崎、話がずれてるぞ」

「だって今、先生そう言ったじゃないですか！ 私は出たいんです。出してください！……」



途端、先生は私の足をグツと引つ張った。

「いった!!」

当たり前だ。腫れている方の足を引つ張ったんだから。

乱暴に私の足を触る先生の意図が分からない。

なのに、床に私の右足を着地させようとする腕はとても優しかった。

その一部始終に声を掛けられないでいる。

「もっと早く棄権してればこんな腫れたりしなかった」

後で考えたらすぐに分かった。感情的になっっている私を黙らせるためなんだ。

「こんな時間じゃなく、もっと早くに保健室に来てればこんなに酷くはならなかったんじゃないのか? 『我慢』そんな誤った選択をしたのもお前だ……神崎。早めに対処できる全てのことをひたすら絶える事で判断を誤ってきたのはお前の攻められる点じゃないのか? これは生徒同士のお祭り事だが社会に出たらどうなる。なあ? お前は子供だろう?」

「……」

「大人だったら即怒られてるところだ……」  
言っていることは正しかった。

先生の言葉は紛れも無く大人そのもの。

『子供の我慢』遠まわしだったがそう解釈するしかなかった。

「そこまで意地になる理由はなんだ?」  
声は嫌に落ち着いている。だけどその視線は小さい子をあやす親の表情だった。

先生の瞳に居たたまれなくなって情けなくなってくる。益々頭が真っ白になっていった。

「正直分らないんです。痛いのに絶えてる自分が一番分らない。皆に迷惑かけたくないって頑張る須藤さんや、夜遅くまで手伝ってくれた美弥。絶対勝とうねって笑ってくれた千佳達の顔ばかりがちらついて」

「……………」

顔を伏せ、声が震えてないように喉を絞めるとますます出てくる声は震えた。

だけどそれを茶化す事無く、目の前で座り込んだままの先生は耳を傾けてくれる。

「こうなるんだったら、最初から一人がよかった」

訳の分からない感情が渦巻くばかりだ。無駄に渦ばかり巻いて心の捌け口がない。

だけど泣きたくなかった。もう、この人にだけは泣き顔を見られたくない。

どんなに情けなくても、惨めでも。

「そうか……………」

それだけ言うと先生は立ち上がり、近くにある戸棚を開け新しい包帯を取り出した。

「せ、先生？」

「じつとしてる」

それ以上何も言わずにただ私の右足に包帯を、まるで綿菓子のようにフワツと被せ、クルクルと巻き続けた。

先生は無言で様子を見つめる。

「……………」

「……………」

私も無言で……………先生も無言で、時だけが過ぎて行く。

手際の良い巻いている音が微かに聞こえる。

「ま、巻き過ぎじゃないですか？」

巻き過ぎたけどしつかり固定されていて、痛くはない。

「これくらいしなないと走ってる時に解ける」

「え？」

「今、許可が出た」

怒った口調で言った先生の表情は和らいでいる。思わず私の表情も緩んだ。

「はい立って！！ 確認！！」

「え、あ。……はい！！」

言われるがまま椅子から立ち、言われるがまま歩きにくくないか少し歩いてみる。

さつきより断然痛さは和らいだ。

「許可出した以上……何があっても手助けはしない。ただ終わったら即刻、病院送りだ」

「病院送りって」

どっかのヤンキーみたいに……：……：……だけど嬉しかった。

「え、あの、分かりました。ありがとうございます」

頭を下げてもう一度顔を上げたら先生は笑っていた。しょうがないなって呆れてるような顔。

あ、ボーっとしてる暇がなかった。時間はもう昼休みの終わりを告げている。

もう一度頭を下げると、私は保健室を後にした。

「ああ。あんなに喜んじゃって」

微かに漏れていた保健室の真っ白いカーテンを開け、昼間の容赦ない太陽の光を先生は目を細めながら身体に受け止める。その眩しさに目が慣れてきた頃、グラウンドへと小走りで駆けていく私を先生は見ていた。

「確かにお前が言ってた通りだよシタカ……」

取り出した上着の内ポケットから覗かせる一枚の写真。

もちろんもう、保健室から出て行った私からは見えないし、先生の背後からも日差しが当たって反射する。要は確認する術がない。

フツと木の葉に太陽が隠れた時、瞬間見えたのは何処かの風景画だった……。

### 23・体育祭（後編）

先生のお陰でさつきよりは大分痛みは和らいだ。

少し窮屈で息苦しい気もするけど、念には念をといて事で包帯を入念に巻いてくれたお陰。

先生のゴツゴツとした大きな掌が私の足を覆い隠し、器用に巻いてくれた様子を鮮明に今も思い出す。

これしかないからって運良く履いて来たけど、大きめなスニーカーを履いて来たのは結果的には良かったかもしれない。多少腫れが目立っても千佳や美弥達にバレなくて済みそう。

軽く足踏みをして今の状況を確認してみる。

なんとか大丈夫かも……。

「ねえねえ智亜美！ 体育祭終わったらボーリング行こうって話が出てるんだけど行く？ あ、でも智亜美実行委員だったよね。体育祭の片付けしなきゃいけないのか」

椅子に座っている私の少し離れた所で美弥は、今だテンションが高い千佳と話している。

「ああ、うん。だからパス！！」

私は腰を捻り、真後ろにいる美弥に向け、聞こえるように手を合わせる。

実際、今日はこのまま帰るだけだった。

片付けは生徒への配慮なのか、実行委員総出で明日、朝早くから行われる。

要は明日の話って訳だ……。

「ただ私には嘘を付いてでも行かなきゃ行けないところがあつた。先生の所というか病院だ。無理に出させてくれた先生との約束は守らなきゃ……。」

『狩屋先生』としては許してくれなかったけど、『狩屋悠仁』としては許してくれた。

あの保健室での出来事だけは生徒として見なかった。

「だったら私は『狩屋先生』としての立場を尊重しなければならぬい。」

「ふう〜ん。何がそんなに嬉しいの？」

「離れていた筈の美弥がいつの間にか私の顔色を窺える様な距離にまで近づいて来ていた。」

「ビックリした」

「その調子じゃ良くなったみたいね」

「その言葉の意味は何？」

「いつもと変わらず単調に話す美弥の言葉に返す言葉がなかった。」

「あんた午前の競技が不調っぽかったから。でも今は顔色も良いし、もう大丈夫みたいね」

「なんだってそんなに私のことが分かるのか、脳裏を駆け巡るけど聞きたくはない。」

「実はお腹が痛くてさ。今は何とか平気なんだけど」

「照れながら嘘の白状をする。矛盾してる『嘘の白状』だなんて。」

「自慢じゃないけど体力命の体育祭だし、お腹空くと思って朝御飯は二杯も食べた。」

「要はいつもの二倍は食べたって訳で。」

「ははっ!!! そんなことだろうと思ってた」

「美弥は私の隣に陣取っていた自分の席に座る。」

途端、お昼休みの終わりを知らせる放送委員のアナウンスが校舎内に響き渡った。

「どうやらランチタイムは終了の時間らしい。」

プログラム通りに遂行されてるならば午後の最初の競技は、私が最後に出場する種目だ。

今までの学校行事で一番頑張ったと言えるだろうクラス対抗リレーの三部。

いつの間にか周りに千佳と須藤さんも集まっていた。

「今、座ったばかりなのにな」

独り言を言いながら美弥は腰を上げた。

美弥に気をとられていると反対の腕をグイッと掴まれた。

「チャミ、頑張ろうねっ！！　せっかく須藤さんとも仲良くなってる張ったんだもん！！」

午前中の疲れを感じさせない意気込みを見せる千佳が私の腕を強く掴む。

それくらいタフさがなければクラス練習が終わった後、ボーリングだのカラオケだの行けない訳だけだ。

「絶対うちらみたいに放課後まで練習してたヤツなんていないって！　そんな奴らに負けたら悔しいじゃん！」

負けたくないと言う気持ちに更に私を掴む腕に力が入り、やる気満々なのが腕を伝って足にピリピリと電気みたいに伝っていく。

「手を合わせて気合でも入れる？」

目を輝かせる千佳。何に目覚めてしまったのだろうか……この子は。

「嫌だよ。恥ずかしい」

美弥は声を大にして千佳の言葉を跳ね除ける。

「あ、二回目の呼び出し！ 行かなきゃ！」

アナウンスがなる中、千佳は駆け足をする真似をする。

「あ、ごめん皆。先……行っててくれないかな？ ちょっとトイレ」  
それだけ伝えると、私は綺麗に描かれていた輪の中から離れた。

ただ本番始まる前くらいは一人でいたかっただけ。

足の心配もあってイメトレもあるけど。

誰もいないことを確認し、リレーの待機場所の近くで壁に身体を預ける。

九月らしくない爽やかな風が吹いた。

ここは言うならば校舎裏に近い場所。

目の前は車道があり、向こう側には閑散とした住宅街が立ち並んでいた。

うちの学校で体育祭が開催されてることさえ知らない近所の主婦が、買い物帰りなのか自転車で視界の前を通り過ぎる。

不意に視線を外すと少し先ではさつきから流れている音楽が聞こえ、リレーの準備をする生徒達で溢れ返っている。

その溢れ返っている生徒達と私の間には二本の大きな木がそびえ立っている。

だから私から彼らが見えても彼らから私が見えることはない。

スピーカーから聞こえる次の種目の案内をする放送委員の声も何処か他人事のように聞こえる。この近距離でのギャップが私は大好きだ。

「はあ〜」

深い息で心と足を落ち着かせる。さつきから何回も無闇に右足を



確認する。

包帯が取れてないか心配だったけど先生の手当てが良かったのか、きつく固定されていて足に痛みがない。

クセになっちゃってしまっているのか再び何度も指先に力を入れる。

筋を伸ばしても関節を曲げても痛くない。

もう一つ。

体操着の後ろポケットに潜ませてある写真を折れないように取り出す。

いつもは制服のスカートに入れてあるんだけど、今だけは特別だ。

彼、ユキ君がいるロンドンの風景写真を優しく撫でる。

別に『彼』って言うてるから彼氏とかじゃない。

一番私を知ってる人、私を変えてくれた人……支えになってくれた人。

何処か違う。

言葉でまとめようと思えば浮かべるほど陳腐な言葉で括られていく。だから無理に表現するのはやめよう。

そんな大事な写真を一時でも失くしたなんて馬鹿すぎる、ごめんね。

ギュッと胸に引き寄せ注げるだけの力で写真を抱きしめる。

いつも精神が不安定になりそうな時、こうすると心が落ち着く。

まだ大丈夫な気がする。

彼が好きだってその気持ちだけで何よりの強さに変わる。私にとって一番苦手な『単純』な自分に変えてくれる。

その時、出場選手を束ねる実行委員の何度目かの集合の笛がなる。壁の向こう側に見える教室の時計を見ると集合時刻から五分過ぎてしまっていた。

「ヤバイ！！ 急がなきゃ」

フツと背を預けていた校舎の壁から離れ、足を半反転させる。

「っ！！」

さっきまで痛さなんか感じなかったのに忘れていたビリビリと電気が流れるような痛みが走る。

「何処行つてたの！！」

指示を促す体育委員そつちのけで角を生やした千佳が突然現れた。

美弥にトイレに行くって言つといたはずなんだけど…。

そんな千佳の大声に構わず点呼を取っている実行委員は、慣れた手付きで私達を本番の舞台へと招く。

隣で大声で怒鳴る千佳と私の間に挟まって冷や汗を流すばかりの須藤さんにはちよつとばかり罪悪感を抱いた。

ドキン！！

突然、目覚めたかのように心臓が鳴った。

去年と違う。

突如湧き上がった予期もしない気持ちに戸惑う。

本番になるにつれ、点呼の後に引き続き案内をする単調な声。確

実に舞台は揃えられようとしている。必死に隠してた心臓の高鳴りが頂点を迎えようとしていた時、私の列を統括している生徒が歩き出した。

適当に浮きもせず埋もれもせずに参加していた去年の体育祭と違う。

だって、つい何分か前に『頑張ろうね』って美弥が言った。

私の腕を掴む千佳が『練習したんだから』って、負けられないって最高の笑顔と意気込みを私達に話した。

皆でクラス練習の後も必死になって頑張った放課後、迷惑掛けられないからって運動苦手なのに遅くまで一人で頑張っていた須藤さん。

残って皆が手伝ってくれた旗。絶対に優勝って転んだ私を引っ張りあげた千佳の手。

無理を言って包帯まで巻いて出場を許してくれた先生。

嬉しかった出来事が何もかも鉛のように押し掛かる自分の足に、肩に。

私は、間違ったことをしたんだろうか。

やっと分かった…。

……私、やっぱり一人がよかった……。

。

パンツツツ!!!??

その時、いつの間にかグラウンドの中央に来ていた。

私の耳を突き破るかのようなスタートの合図。ピストルの音がした。

「はっ……!!」

我に返った時、第一走者の須藤さんが勉強をしている時の様な真剣な瞳を景色の先に向け走り出した。振り払うかのように首を左右に振ると今の状況を瞳に映し出す。

最後に走る私の出番はまだ早い。

須藤さんの走りは何日か前とは違っていた。

初めから外見もだったけど勉強が出来て、基礎とか学び慣れている。

だから公式を覚えてくれる誰かが存在すれば、ある程度は出来るんだらう。

理屈さえ教えてしまえば後は解くだけ……走るだけなんだから彼女にとっては簡単な事だ。

瞳は目先の地面ではなく景色へ、そして前のめりな走り方にはなっていない。

的確に私の告げた言葉を理解していた。

もっとも須藤さんにこんなこと言ったら謙遜するだけだろうけど。一番は取れなかったが良いポジションをキープしていた。

走者は過ぎ、今度は男子が千佳にバトンを渡す。

彼女は何と言っても要領が良い。自分のあるべき場所にいつも二本足で立っている。

それは友達との関係にも出ていて、物怖じしない性格がよく出てる。

自分は前進あるのみみたいな。一見単純な様で、なかなか出来ない事を簡単にやってのける。

そして私が一人で分析している間にあっという間に目の前を走る他のクラスの女子を抜く。

楽しそうに走る千佳は私の目の前を爽快に駆け抜けていく。

「千佳、頑張れ！」

聞こえてるか分からないけど。とりあえず大声で叫ぶと千佳は軽くバトンを揺らした。

さっきの嫌な予感がする痛みは消えていた。

うん。これならいける！

アンカーは最後だからなのか。普通の走者の倍で、一周走らなきゃいけない決まりがある。責任重大というのもあるけど、きつと皆がアンカーを嫌がる理由の一つなんだろう。

トントん……トントん……。

さっきから一定のリズムで右足を地面にノックする。

まるで一人合唱団の様に、地面に右足を打ち付ける音と、心臓の音が共鳴する。

もうクセになってしまったのか。何回もつま先を地面に叩いて大丈夫だって確信を手に入れたかった。さっきの気持ちを取っ払うくらいの最大級のテンションが私には必要だった。

いける気がする……いける気がする。気がするじゃない!! 絶  
対いける!!

先生の指示に従い、左右にはライバルの私達が並んで前に出る。  
あからさまに睨みあったり、火花を散らしたりなんてしないけど。  
勝ちたいなんて気持ちは目を合わさなくても肌で感じる。  
緊迫と言う空気が辺りを取り巻く。

緊張を癒すかの様に微かに風が吹き抜け、お互いの闘争心を意識  
させるハッキリと色が違うアンカー走者のハチマキを揺らした。

「はあ〜」

目を瞑れ。こんな時だからこそ精神を集中しなきゃ。

バトンは何人目かの男子の手から美弥に渡った。

美弥は計算タイプ。

より良い自分の居場所を見つけ、振り返る事無く駆け抜ける。決  
して自分が出来ないような無駄なことはしない。自分のできる範囲  
を自覚し、無謀な勝負に出たりしない。

いつも何処か人とは違う目線で辺りに気を配り、至って冷静に事  
を判断する。

そんな打算的な美弥の行動が吉となったのか。それとも今、二位  
を保っている女生徒が美弥みたいな走り方する人が苦手なタイプな  
のか距離を詰め、隣合わせになる。

弱冠、美弥の方が遅れている？ そう私には窺えた。

私はアンカーの肩掛けを力の限りギュツと握り締めた。  
不安なんてもうそんなの考えていられない！！

だってもう美弥はすぐそこまで来てる。

「……………はあ、はあ」

近くに美弥はいないのに、息遣いが聞こえてくるような錯覚に陥る。

私の二つ前の走者だから距離はゴールした時点でも二百は越えている。

美弥の持つバトンは、私にバトンを渡すことになっている男子に手渡される。

私達クラスの色。緑のバトンが私の手元に力強く渡された。

それを一つの命綱のようにグツと、自分自身の胸元に引き寄せる。

自分の胸元にバトンを確認すると、走り出すのと同時に辺りの情報を把握する。

足を振り上げた途端、一位のクラスが私の横を颯爽と通り過ぎた。巻き起こる風にハチマキが引き寄せられるかの様に舞う。

そんなに差がないのは分かる。……………けど距離は微妙に私の方が遅れる。

「つく！！」

でも大丈夫いける！！

もっと目の前を走る女子より早く。一ミリでも良い。前に出せば結果となって隣り合わせになるはずだ。私と歩幅は変わらないのな

ら尚更だ。

この距離、相手との大差ない歩幅。そして速さ……………絶対勝つ。

それは、いつもより腕も大きく振り上げる毎に段々と縮まっていく。

蹴り上げる砂埃がバトンを握り締める手を汚す。目の前を走る女子の蹴り上げる小石が私の足に当たる度に、後もう少しだって思う。私は目の前を走る彼女の右側に身体を移動させた。

後、少しで抜ける。

「はあ！ はあ！」

息を吐く力さえも勿体ない。前へと突き出す足の力に変えたい位。

もっと……………もっともっと！！

足が鉛のように重く、右足の痛みが増して来てるのも初めからもう分かっていた。

足を振り上げ振り落とし、着地を繰り返す度に増していつてるのがもう明らかだ。

でも、同じレベル。私が少し無理をしなきゃ勝てない。

これ位いける！！ 前へ……………前へ前へ！！

その願い通じてか、やっとの思いで先頭を走る彼女の横顔が分かるくらいの隣合わせになる。

もうゴールまで直進するだけの距離。目の前にゴールは見えていた。



千佳の甲高い声が聞こえた気がする。

……だとすると。後、もう少しだ。

だから後もう一ミリでもいい！ 私の足、前に出てお願い！！！  
前に前に前につっつ！！！！

隣で競っている子の荒れた息遣いが聞こえる。

もどどっちかの息かなんて分からない。二人の吐く息がエコーがかかったかの様に私の耳元に木霊する。誰の息かも認識できない私の脳裏にそれは瞬間瞬間で焼きついた。

その息が彼女よりも前へ……。

この足が彼女よりも前へ……。

なんでもいいからこの身体が彼女よりも前へ！！！！

足が、私とその先を求める。

スローモーションで……視界に写る。

右足、左足、右足、左足

ストップウォッチを片手に息を飲み見つめる委員の生徒。

規則正しく右足が前へと出た瞬間……。

左の足が、出なかった。

えっ ……。

私の足はもう持ち主の言うことを聞いてくれなかった。

最後の最後で足が無意識に走ることを拒否をし、グニヤリと力を失くす。

まるで柱を無くした建物の様に、力が入っていた私の身体は崩壊を始めた。

意思とは反してバランスを崩し身体は下降する。

気付いてはいた……。

痛みを感じなくなる位に痛いつて悲鳴をあげてるって。だけど走りたかった……。

身体は揺らめく。視界が真っ白になる。貧血を起こしたかの様に横へと倒れた。

さっきまで全身の筋肉をフル回転で使っていた。

機能を停止した身体は、一瞬で言うことを利かなくなった。

落下する直後、さっきまで競っていた生徒が両手を振り上げ、真っ赤に彩られたゴールテープを切るのが見えた。

私は気を失った訳じゃない。異様な倒れ方したから皆は驚いているけど。

ただ挫いた右足に限界が来て倒れた、ただそれだけ。

「智亜美!!!」

先に美弥が倒れた私の元に駆けってくる。

分かった。そう言われるのは、だから気を失いたかった。

気を失ってしまえばそんな顔で私を見つめる美弥を……。

「チャミー！」

美弥をそして皆を見なくていいのに。  
心配そうに覗き込むその瞳に私は目を背けた。

次々と通過していく走者が過ぎ去った後に砂埃が舞い、次から次へとゴールしていく。

これはもう……棄権なのかな。

「智亜美ちゃん！！ 平気！？」

須藤さんは私のことを名前で呼ぶようになった。

あまりにも練習している時に美弥と千佳が私の名前を連呼するものだから咄嗟に彼女も『神崎さん』じゃなくて『智亜美ちゃん』になっちゃった。

咄嗟でも呼び捨てに出来ないのが須藤さんらしいけど、真っ赤になっちゃってごめんって言った彼女の顔は可愛かったな。

だから私も名前、何か考えようかな？

んんんん何がいいかな？ 今は、何も考えられないや。

皆が言ってるのも分かる。心配してくれるのも。

走り切れなかった私の顔を同情するかの様に覗き込まれると俯きたくなる。

期待に添えられなかったんだからほっといてくれないかな。

皆が心配そうに集まってくる度に……あまりにも惨めで、情けなくて泣きたくなってくる。

えっ……………？

その時、無言で動けない私の身体を抱き上げてくれる人がいた。風船のように私を軽く持ち上げる。汗で濡れた髪が不意に空を斬る。

私の脇下と膝裏に体温を感じる。一体、誰？

「せ、先生？」

笑っている様子もなく怒っている様子もなく、ただ無表情で私をフワリと抱える。

「ど、どうして」

当たり前のことを言ってくれるのを待っていた。先生だって心配そうな眼で見るんだ。

彼だって同じ事を言う。大丈夫か？ とか、平気？とか……。

先生らしい。そして最もらしい抽象的な言葉だ。

その時、周りの生徒達がざわめいた。ジロジロと私と先生の間を視線が行ったり来たり。

取り巻く女子の心配する声が歓声へと変わっていた。

気付けば先生にお姫様だっこされていた。

「ちよつと先生！！」

「黙ってる。無理に喋らなくても良いから」

瞳を見開いた私は途端に瞳を伏せ、先生の腕の中に収まった。

あ、そうか。だから先生は無言なんだ。

あまり足を揺らさないように先生は注意して歩く。

抱きかかえられている事に動揺するでもなく、茶化すでもなく。騒ぐ生徒をそっこのけで真っ直ぐに校舎内を目指した。

行き先はきつと保健室。そんな先生を目の当たりにして、私も暴

れる事無く恥ずかしがる訳でもなく先生の腕に落ち着いてる。後から考えれば信じられない位の大事件だけど……当たり前のように平然として歩く先生の姿に全ての感情が奪われてしまった。

保健室に入って一番近くにある椅子に私を降ろす。

床に触れた足先に激痛が走ったと思つたら、さつきと変わらない暖かい掌で私の右足を掴む。私は声を出す暇もない程に余裕がないこの右足の痛みに表情を引きつらせた。

「痛いか？」

何も言葉にせずただ頷く、それは変な沈黙に繋がる。

すっかり先生の腕の中で我に返っていた私は平常心ではいられなかつた。

そんな私の心情を他所に、手際よく応急処置としての湿布を手探りで探す。

「ああ。一躍有名人だな」

私の予想とは全然違つた言葉に通常の私ではいられなかつた。

またもやこの先生の言葉は私的の的を得ていた。

「皆の前であんな抱え方されて……」

何も言つて欲しくなかつた。

声を掛けて欲しくなかつた。

そんな輪の中から無言で先生は私を抱え上げ連れ出した。

「明日には噂になつてるかもねえ……」

チラと横目で見た先生の顔が意味あり気に笑つた。

湿布に視線が行つてる先生に私なんて見えないのだけど。

「俺と神崎は教師と生徒だ……。事実、それ以外何もなくてただ」

何……これ。

場を和ますつもりで言ったのに肝心の笑顔が上手く作れない。

漂ってきた湿布の匂いに我に返る。

「それにだっ！！ お前は俺が嫌いなんだから『何か』なんてある訳ないだろ」

「そ、そうだよ。当たり前じゃん！！」

上手くコントロールできない表情に無意識に顔が下がる。

「だいたい！！ 私は先生なんか好みじゃないんだからね。見つめるなら絶対、目が大きくて優しくて成人してからも馬鹿みたいに自転車通勤してなくて、顎がしゃくれてない人」

これじゃなんか私、ムキになってる子供みたい。

「だけど、上手く会話を繋げられない。いつもみたいに器用に言葉を選べない。」

「だから俺は、顎しゃくれてないって」

だって先生の体温が足や腕も残っているから。冷たい湿布からも伝わる先生の温かさ。

少しひんやりとした真つ白な包帯を巻いていく先生は、聞いてられないと言った感じで無言で巻いていく。

「はい。応急処置完了！！」

出来を確かめるように私の足を包帯の上から軽くポンと叩くと先生は立ち上がった。

「あ、ありがとうござい」

お礼を言おうと言葉にした時、先生の大きな掌が私の頭を軽く二、三回叩いた。

え……。

また新しく加わった先生の温かさが伝っていく。

これ以上そういう事をされるとこの温かさに耐え切れなくなる。  
ポンポンと降って来た暖かい手になんだかもう十分に涙が出そう  
になった。

だけど泣かない……泣くわけにはいかない。  
必死な堪えもあつてか泣くのは我慢出来た。

## 24・責められる理由

私が保健室に運ばれた後に、何回目かの教員の怒鳴り声で取り囲んでいた生徒は終止収まつたらしい。

包帯を巻き終えた頃に要らぬ歓声がグラウンドに響き渡る中、体育祭は知らぬ間に終えていた。本当は例え足が捻挫から骨折になっていたとしても、最後まであのグラウンドにいたかった。

だけど私が出る全ての競技は終わり、そして最後のクラスリレーで足に異常な程の腫れがみられた為にさすがの先生も黙って見過ごす訳にはいかないみたいだ。

私を心配する観衆の中で迷わず私を持ち上げる。まるで周りに人など一人もいないみたいに誰に知らせるでもなく真っ直ぐ保健室へと運んでくれた。

軽く包帯を応急処置として巻き終えた後、学校最寄の病院へと来ていた。

登校してくる生徒を一日の半分以上を預かる学校と言う場所。何が起こってもいいようにとき々と指定された病院なのだろう。

その証拠に街にきて間もない筈なのに、先生は迷わずこの総合病院に私を連れてきた。それもあって、あまり学校からこの病院まで離れていないし、うちの学校の名前を言うと手馴れた様子で看護婦さんも手配してくれた。

私はそのやりとりを金槌で叩かれているような右足を引きずりながら目で追っていた。



それから二十分も経ってるのだろうけど、まだ診察はしてない。私が見つかちなのか病院側が遅いのか。足に限界が来ていて普段の二十分より遅く感じてしまうのか……。

正直、よく分からない。

大体あまり病院って来ないからどれ位が平均なのかも分からない。

「……………」  
足、やっぱり酷くなってるなあ……………。

右足を撫でると、全身に伝わるような電気紛いのものが走る。

相当熱を持っている。普段人間が保っている体温とは到底思えないくらい熱かった。

「神崎おまたせ」

「……………」

待合室の椅子から少し離れた所の自動ドアが開き、側から離れていた先生が手をあげて徐々に私の側に近づいてくる。

そんな先生の耳の横程の高さで振る掌を見つめていると思いつく。

さつき保健室で私の頭を二、三回軽く叩いた大きな掌。

あれはどういう意味だったんだろう。

まあ。浮かんでくる理由といえば、間違いなく落ち込んだ生徒を慰めてた担任の教師って感じかな。

そう勝手に解釈をすると、考える思考を別に移した。

「ん？ なんだ？」

ジロジロと見つめる私の視線が気になったのか。

小振りでも左右に動かす手を止め、私の瞳に疑問を投げかける。

「シヨックです。先生が車の免許持ってたなんて」

「あほっ！！俺だって車ぐらい乗れるわっ！！」

近いとはいえ、足を怪我していたのでここまでは車で移動した。

しかも『あの』っていうか、『この』っていうか……狩屋先生に、  
だ。

乗っけてもらって言うのもなんだけど、ハンドルを握る先生に妙に違和感があったし……手馴れた感じでギアをチェンジする先生が妙に可笑しかった。

「だっていつも自転車通学してるから、剥奪されたか、取ってないものだと」

「俺は、自転車が好きなんだ！！別に車に乗れない訳じゃないってえの！！」

淡々と喋る私の言葉が癪に障ったのか。院内に響く位に先生の声は圧倒的に私の二、三倍の声は出していた。

静かな院内で先生の声だけエコーがかかる中、見つめられる視線と言えば冷たい視線だ。

ただでさえ訪れた患者さんはお爺さんやお婆さんばかりなのに……。

注意すべきがどうか考えていた頃。

「神崎さん。神崎智亜美さん。『整形外科』一番へお入りください」  
呼ばれた私は苦笑しながら立ち上がる。

当然のごとく先生にしか向けてない観衆の冷たい視線を潜り抜け、一番の診察室に入っていく。この後、想像しなくても分かる。我に返って慌てふためく先生の姿。

診察室に入った後。ニヤケ顔でいられたのはつかの間だった。担当医は顔を見るなり私じゃ話にならないとばかりに先生をすぐ呼び出した。

思い出したいくない位に散々なことを言われた。

気持ちはさっきの先生とのやり取りから入れ替わり、男性担当医の私を見る目が何処か冷たく、無言で私の右足に視線を向けた。

私の足に触れるため前かがみになる担当医の名札が反射して光って見える。

軽く足に触れると、前かがみから椅子へと深く腰を落ち着かせる。途端、瞳の奥から私に対する嫌悪感がうかがえる。少し疲れているのか、私の足を簡潔に触ると手を離し、自分の首と肩を揉んだ。

私はというと初めの視線が気になり、担当医に視線を合わせはしないが中途半端に目を離せずにいた。

途端、待合室と診察室を仕切ったドアが無造作に開いた。

こう言っではなんだけど、別に骨折してるわけじゃない。

確かに軽い捻挫から重度にさせたのは、私自身の過ちかもしれない。

でもそれは先生の言葉を押し切って私が無理に出させてもらっただけで、先生は何も悪いことなんてしてない。

無闇に痛めた部分を触っては苦痛に顔を歪ませる私に視線さえもくれず、担当医の怒りの矛先は連れ添った先生にばかり集中していた。

捻挫と気付いてから私は、体育祭の最中に何度も同じ右足を挫いていた。

それは診察で理解できたらしく、初めは深い溜息から口を開いた。ただ、なんでここまでになるまで放っておいたのか、もう少しで骨折だったとか。

終いにはどういう教育をしているのかとか余計なお節介を言われる程だ。

言い訳もせずにまるで事実かのように、一部始終をただ聞いていた先生は謝るばかりだった。私はこの偏見丸見え医師に怒鳴ってやりたかった。

先生のせいじゃないって。全ては私が決断したことって。

けど、それが出来なかったのは……その暴言の矛先まで『責任者』である先生にいつてしまふと感じていたから。

どうしてここまで生徒さんを放っておいたのかとか、先生の監督不足だとか。

医師は、初めから私に眼もくれず、先生を呼び出して事の重大さを戒めるように放った。

まるで、私なんか蚊帳の外。……初めから用がないかのように。

そんなはずはない。

これは私が決めたことで、無理に先生に言っただけで走らせて貰ったこと。

先生が走る事を譲らなかつた私に納得なんてしてなかつたことは知つてた。

包帯を私の足に巻きながら『口出しはしない』って言ってくれた先生の言葉がとっても嬉しかった。確かに嬉しかったけど……意外な場面で無理にとつた私の行動は間違いなく先生に迷惑を掛けた。

予測していなかつたとしても、目の前で反論しない先生に顔を伏せるばかりだつた。

そんな対処しか出来ない私は、やっぱり先生の言う通り子供なのかもしれない。

保健室での私の決意に最後は頷きながらも先生は予測できていた……んだらう。

私の足が悪化することはもちろん。医師の言わんとする事の重大さを。

監督不足だと医師だけじゃない。

学年主任や他の先生から罵声を浴びせられることも、私のことを理解し、頷いた先にきつと見えていたんだ。

だつたら黙つて見てれば良かったのに。

私が倒れた瞬間に先生なんか出てこなければ良かったのに。

私を抱えてわざわざ同職員の痛い視線や生徒の茶化す視線に飛びこまなくても良かったのに。

それはやっぱり大人だからなのかな。

でも、素直に言えるのは、こんな大人は見たことないかも。

会計が終わり、先生が来るのを病院の待合室の椅子で待っていた。先生の応急処置よりも数段上手い包帯の施し方でしっかりと固定されている私の右足はピクリとも動かなかった。

鎮痛剤を飲んだからとも言えるが今は痛みさえ感じない。

改めて病院つてすごい所なんだなって思う。同時に痛まない分、思考に余裕が出来たことに今は後悔をしている。

赤茶色の財布を仕舞いながら、何事もなかったかのように「車を自動ドアの前まで動かしてくる」と言つて先生は離れた。変わらぬの能天気そうな笑顔でさっきの出来事はなかったかのように私に振舞う。

「……………」

私は怪我していない左足の力カトを椅子に引つ掛け、膝に顎を乗せて頬杖を付いたような状態で座っていた。ひたすら先生が迎えに来る方向ではなく逆の会計の方向をただずつと見つめていた。

だからって目の前が目まぐるしく動いている訳じゃない。

私が患者としてこの病院に来たのは体育祭が終わりかけの午後四時位だ。

それからレントゲンを撮って、診察してと移動していたら時刻は六時を過ぎていた。

結果。会計も立て込んでる訳でもなく、前を向く事務の女性が姿

勢正しく院内を見ているだけだった。

要は、何も変わらない風景。それを私は今、一番欲しがっていた。

今は九月だから陽はまだ完全には落ち終わってはいない。

院内の明かりに頼らずとも歩けるような明るさだった。

実際ここは総合病院で、目が不自由なお年寄りなど通院するから朝から全ての電気は万全を期しているのだが。

なんだかんだ言ってるけど、今はとりあえず急患もなく静かなのはさつきから変わらない。

誰もいない待合室の椅子に向かって深い溜息を吐き出す。

「最近の女子高生は、椅子の上で膝を立てて座るのか」

まるで、しばらく会っていなかった変わった変わり果てた娘の実態を知ったお父さんみたいな台詞を私の背後から投げかける。

真後ろから聞こえる声は振り向くまでもなく分かった。

「だって。体操着のままだもん」

「だから大丈夫って？」

変な言い分に噴出しそうになったのか先生の低い通った声が少し籠った気がした。

正直、距離なんか関係なく先生の顔が見れなかった。

私と先生の距離はこのソファーみたいな椅子の布きじ一枚だけの距離。

声を掛けられたら振り返ってもいい距離なのに。

ただ椅子に立てた左足を両手で包み込み、その膝に顎を置き頼杖を付いた状態でした。

まるでこれじゃ、拗ねた子供みたいだ。

「先生」





する暑さが私の頬を掠めた。

秋だなんて思える様な微かに葉を染めるブラウン色の景色に目を奪われていると、いつの間にか先を歩き始めていた先生が車のロックを解除する。

詳しい車の種類なんて私自身は興味がないから分からないけど、運転席に乗る先生は何よりも誰よりも大人に見えた。

黙って先を歩き、無言で車に乗り込む先生はきつといつもみたくに気付いているんだろう。今は何も話したくないって。

きつと私が少し笑顔を取りもどした頃になって改めて茶化してくる。

今の気分が覆されるようなテンションでまた、青春ドラマの一部みたいに喋りかけてくる。

今は、先生はきつと時間が経って私の気分が和らいでボロがでる瞬間を計っているんだってそう考えてる。

要領良くなれない私は何度も右足を庇い、足や手をぶつけながらやっとの事で助手席に座り終わると、左右を確認しながら慣れた手付きでベルトを締め、ハンドルを握る。

「……………」

運転に集中している先生をバックミラー越しに見つめる。

道路の先を見つめている先生が私の視線に気付くはずなかった。

先生と同じく道路の先を見ている振りして、気付かれない程度に一瞬だけ視線を先生に移した。自分でも分らないくらい同じ動作を繰り返していた。

先生に一番近い私の右手を見る振りして運転する先生の姿を瞳に

映す。

途端にギアをチェンジするのか機、敏に私のすぐ側にあった先生の左手は動いた。

同じ車内だと言うのに遠く見える。

私達子供と先生達大人。どれくらいの差があるんだろう。

こんなに近いのに子供には遠くに見えてしまうんだろうな。

大人になりたい子供程、この距離はどうしても埋まらないものなのだろう。

元々学校は自宅から十五分で行けるとところで、ましてや病院は自宅よりの場所にあった。

言葉どおりの『あつと言つ間』に私の家の近くまで来ていた。

「先生。ここで降りして下さい」

「そんな足なんだから家の前まで送る」

家の前つて言ってもこの道をまっすぐ行って右に折れるだけ。足を痛めているとはいえ疲れない距離だった。なので簡潔に答える先生にもう一言重ねる。

「この足で、しかも先生まで来たらきつとお母さん驚いちゃうから……」

包帯を指差しながら、納得の返事を貰ってないままドアに手をかける。

片足で後部座席にまで外から移動した。

置いてあった松葉杖を拾い上げると、これで安心といわんばかりに全体重を松葉杖に預けた。

先生はまだ運転席から顔を出さないが、一足先に私は準備万端になつていた。

途端、顔だけ出すのかと思つていたらエンジンを切り、先生まで

運転席から降りる。

「先生？」

話したいことがあるかのようにまだ助手席側にいる私に方へと振り向く。

そっか。これが今日一日の最後だもんね。

落ち込んでいる生徒をそのままにして帰る教師なんている訳ないか。

今日のことは気にするとか、保健室で泣いてた時の様にいつも見せる笑顔で私を、自分の受け持つ生徒を慰めるんだ。

「今日はよく頑張ったな」

励ましているのには変わりなかった。笑顔なのは変わりなかった。「楽しかった？」

ただあやしているかのような瞳で優しく私の瞳を見つめてくる。

先生の瞳に気をとられていた私は、徐々に縮めてくる距離に気が付かなかった。運転席を降り、呆然と歩道に立つ私の方へと歩み寄ってくる。

気付いたその距離に、私は視線を反らした。

「神崎はよくその足で頑張ったし」

こんなところが嫌い。わざわざ人の見なくても良い余計な部分。今日一日一人でいれば、明日からはいつもの私に戻る。

先生なら……担任なら、明日に繋ぐ軽い言葉を口にして去っていくばいいんだ。

分かっているクセに……。どんな言葉でも、私は口先一つで変わったりなんかしない。

なら私は何故、歩み寄ってくる先生から視線を反らそうとしていく？

先生の二つ二つの言動に目を反らすことしか出来ない。

気にしているのは体育祭のこともあるけど、一番は先生のことかもしれない。

無理して走って無茶して捻挫を何度も重ねて、事情を知っていた先生は色んな大人から怒られて……なんでそれを『気にするな』って言うてくれない。

責任を感じている私に一番今、効果がある言葉なのに。

先生も知ってるはずなのに合えてそれを口にしない。

本当に何事もなかったかのようにするつもりなんだ。

「良い先生ぶってよ」

病院を出てから無言で運転して、口を開いたかと思えば人のことばかり。どんな言葉を浴びせられてたかなんて近くで聞いてたんだから重々理解してる。

「いい大人ぶって笑ってよ」

「え？」

途端、先生の足が止まる。けど、話をするには十分な距離だった。これ以上近づいて欲しくない。

その距離は約一メートルあるかないか位。人と話するにはこれが丁度良い。

今日最後の笑顔『苦笑い』を浮かべながらやつのことで先生の歩いてくる方へと視線を向ける。笑顔は笑顔でも『苦笑い』で最高に私らしくない言葉を添えて。

「先生、今日はありがとうございました」

それだけ言うと松葉杖を持つ腕に力を入れてきごちない歩きで私の家がある方向へと半回転した。変な別れ方だけど先生はきつと呼び止めたりなんかしない。

だって私と先生は教師と生徒以上に、そこまで踏み入る程の仲じゃない。

あまりにも私らしくない笑顔に困惑しているだろう。

私という人物がまだ明確に分からない以上は躊躇いが生じる。人は人との境界線を守る生き物だ。それが表面では優しさと言っているが、結局は臆病から生まれる言い訳とは知らずに。

自分自身だってそうなんだ。絶対にこの線を越えてきたりなんかしない。

だから、今はこの不自由な捻挫した足でも大丈夫。

先生は私に追いつけやしな…………。

!!!!!!??

「えっ……」

確実とも言える確信で、私は松葉杖を宙へと蹴り上げる。

瞬間、私の腕は力強く引つ張られた。

握り締めていた松葉杖は掌から拒絶されたかのように離れていった。

倒れはしなかったが、後ろのめりになり後頭部が何かにぶつかる。

倒れると思っていた私は咄嗟に目を瞑ったが、支えてくれている腕と頭に震動する先生の鼓動や体温で徐々に瞳を開く。

後ろから軽く包まれている体勢になってしまったのはつかの間で即離れ、勢いで落ちた松葉杖を私に持たせる。

「せ、んせい？」

地面に落ちた松葉杖を差し出されるまま受け取る。

「何、弱い顔してるんだ。最後には義理でもウソでも笑うんだろ？  
それがないと不安で仕方ない」

何を言っているのか検討がつかない。義理でも嘘でもって私は先生に向かつて笑顔で『ありがとう』って言ったはずなのに。

「なんで笑顔でありがとうって言わない」

あれが笑顔じゃないって言ってるみたいに関こえる。

捻挫した後遺症で足が震えているわけじゃない。

まだ松葉杖に慣れていないから手が震えている訳じゃない。

なんで、この人には間合いがないんだろう。

心臓のドキドキが手や足を不自然に振るわせる。

訳の分からない全身に伝わる微弱な震えが何も考えなくさせる。

「ごめんなさい。先生」

こつちが予想もしてない言動が何よりもそんな言葉が、いつも隠された本当の私を引き出していく。

「でも、出たかった。皆で頑張ったんだから、私の不注意で終わらせたくなかった」

極めて偽善な言葉が自らの口から出てくる。何より私自身が嫌う言葉だ。

分かっているからこそ変に解釈されていないだろうかと先生の顔を見たい反面見れない。

「ははっ……だけど負けちゃって報われなかった訳！ 結局出ての意味がなかった。迷惑掛けるだけ掛けて……凹んで」

「……」

「私の独断で無理言って出させてもらったのに、担任っただけで非難を浴びせられて、誰も私の話は聞いてもらえなかった」

俯いた瞳に溜められる涙はもうない。無造作に地面に落ちていくしかない。

「ごめんなさい。一人で突っ走って後の処理が出来ないようじゃ先

生の言った通りだよな」

やっとのことで顔を上げ、涙目のまま先生の読み取れない表情をぼやけた瞳に映す。

小さい頃から変わってない。後先を考えない今の私じゃ受け入れてくれない。

口を出しても泣いても怒っても聞き入れてくれなかったあの頃と同じなんだ。

私は出来る限り、精一杯に笑った。

もしかしたらもう、諦めが入っていたのかもしれない。

上手い生き方を見つけたと思っていた今までの私は、幼い頃の私と何も変わっていなかった。

……っ。

気にもしていなかった右手で先生は私の頭を撫でる。

体育祭後、抱え上げて優しく頭を叩いてくれた掌と一緒に。

「神崎が無理して負けようが勝とうが。俺が怒られようが怒鳴られようがどっちでもよかったんだ。ただ、神崎は始める前から結果を予測しすぎる。違う結果もあるんだっていうことを神崎に知ってほしかった」

「どういう意味ですか？」

理解できないで首を傾げるだけの私に先生は微笑んだ。

「明日、また学校で会おうな」

言い終わらない内に先生は背中を向け、後ろ姿で手を振ると運転席に乗り込んだ。

## 25・それでも朝はやってくる

先生の車が過ぎ去ったのを瞳で見送った後に、私は向いていた方の逆方向へと踵を返し、落ちそうなカバンを支えながらマンションへと歩き出した。

車から降り、杖を突きながらもぎこちない歩きに少し慣れてきた頃、何も考える間もない程に自分の家に着いた。

玄関を開けた時のお母さんの顔と言ったら、いつも通りメガネを下にずらしながら本を片手に玄関へと迎え入れたが、私の姿を見た途端、手にしていた書籍を真つ逆様に落とした。

本が落ちてくるのにお構いなしのココは、床を蹴り、普通に私の胸に飛び込んできた。

事の経緯を話したら表情は変わらないままだったけど、呆れたように胸を撫で下ろしていた。

そりゃ、ご飯二杯も平らげて今朝は出て行った元気な我が子が帰って来た時、こんな松葉杖に包帯グルグル巻きの重症な姿になっただけじゃ驚くこと間違いなしだ。

お母さんの表情を窺いながらも全てを話し終えた後、やっとのことでお母さんは落ちてしまった本を拾った。

そして、私は腕の中にいるココを落とさないように片腕に収めると、再び松葉杖を手にして自室に戻った。

ベットの横にこれからしばらくご厄介になる杖をそっと立て掛け、私の気苦労はお構いなしで、片腕で支えたままになっているココは早くも暴れまわっていた。

「待って！ 降ろすから」

足を曲げる訳にもいかず、腰を曲げるだけが限界だった。私はあ



まり絨毯に近くない高さでココを降ろした。

ココには十分だったみたいで、屈み終わらない内にココは絨毯の上へと着地した。

まったく、よく引っ付いてくる割にはすぐ離れたがる。我がまま娘なんだから。

愚痴の一つ二つと出てはくるものの、ココに向けて微笑んでいた。何だかんだでそんなじゃじゃ馬っぷりに嬉しくなる私はバカ親だ。足を庇うように右足を宙に浮かすと、同時に後ろのめりにベツトに腰掛ける。

お尻のポケットにゴツゴツした物が当たった。

「あ……そうだ」

腰を浮かせ確認すると、さっき痛み止めって先生に貰った薬だ。

「後で飲まなきゃな」

と言ってもあまり食欲ないけど。

食欲のない理由は思い当たる限り幾つもあったか、今日は疲れた。体育祭なんだから疲れることは覚悟してたけど、疲れ方の種類が違う。

不意に足をベツトの上に乗せると、私は天井へと仰向けになった。瞬間、やっぱり精神的な疲れだ。だってあれだけ走ったのに眠くなりやしない。

益々、思考の迷路へと入り込んでいく。

振り払えることが出来ないのは知っているのに、勢いをつけて身体を横向きにする。

先生に連れられ病院に直行し、倒れた私に驚きを隠せない表情の美弥達と話しできなかった。ただでさえ転倒した後、あまり目を合わさないようにしていたから……それが一番の心残りだ。

あれだけ須藤さんは放課後に一人で残って帰る間も惜しんでは練習を頑張ったのに。

千佳だって『絶対に勝とう』って私の腕を引っ張って言うてくれたのに……。

美弥は、いつも私の側で実行委員の手伝いをただ黙ってやってくれてた。

そんな皆の頑張りも空しく足を挫いた私は、ゴール前で限界が来て走りきれなかった。

それは……『棄権』って事。

棄権ってことは辞退って意味で、体育祭の大半を占める評価はなかったことと同じことになってる。困惑する皆の目の前で謝るどころか目さえ合わすことも出来なかったし……。

無意識に取った行動と言えば逃げることだけか。

明日、学校行きたくないな……。

「ワンワン」

吠える声は真横になっている私の反対の方向から私の耳元へと、押さえ気味で聞こえる。

さっきは私の怪我した姿を見ても構わず遠慮なく飛び込んできたくせに。

寝たままの状態で腕の力のみでココを拾い上げ、胸へと引き寄せて抱きしめる。

しっかりとココは衣服の上に着地すると私の顎を舐めた。

気持ちが落ち込んでるとそうやって心配するんだから。

親より家族より、ココは私のことを分かってくれてる。

ココの茶色い毛並みを頭から順番に撫でていくと、気持ち良さそうに喉を鳴らした。

そう、誰よりも近い存在。

「はあ〜」

それにしても先生の行動も意味が分からない。

ココが励ましてくれているのは知ってる。

頑張り空しく。やっぱり、今日一日のことが気になって仕方ない。

『偽善でもウソでも最後は笑うんだろ？　なんでありがとって笑わないんだ』

まるで私のことを知ってるような言い方だった。

私は笑顔だったはずなのに、表情が引き攣っているのは私にしか分からないはずなのに……。どうして先生があんな顔をしなきゃならないのか。

分からない。

何で何でって思っている間に、心配してる先生が私の瞳に飛び込んだ。

先生は足を怪我してる私を容赦なく後ろから引つ張った。

怪我の容態を気にする間もなく力強く私の腕を掴んだ。その腕の強さがまだ私の掴まれた部分に熱を持たせている。

『不安で仕方ない』

私を見て、あんな顔をしていたんだ……。

「あぁ〜〜〜もう!〜!」

また、明日は学校に行きたくない悩みの一つを見つけ出してしま

った。

こんなんじゃない、朝になるまでに何倍になってるか分からない！！

こんな時近くに来てくれたらな。

仰向けになっていた身体を起こすと、私のお腹辺りでココはスヤスヤと睡眠に入っていた。

無邪気な寝顔を見せるココをそっとベッドの上に移動させると、耳は動いたが起きる様子もなかった。ホッと胸を撫で下ろし腰を上げると、片足でバックがある場所へと移動した。

別に近くじゃなくてもいい。相談に乗れる距離にいてくれたら私は安心できる。

バックの内ポケットに忍ばせた私とユキ君を繋ぐ唯一の物。

「今、何処にいるんだろう」

近くにいたらすぐにこの部屋から飛び出して一番に相談したい。

中学の時。偶然見つけたサイトにこの写真を貰ったユキ君は存在していた。

今はユキ君がいなくなったからネットさえ繋いでいない。

写真をたった一枚を残し、サイトから去ったユキ君が『あげるよ』と転送してくれたロンドンの写真は今も私の手元に残っている。

いつもドアを閉めては、誰も入り込めない空間を作り上げていた筈なのに、離れていても聞こえていた、止まない両親の喧嘩。

学校から帰って来ると、知らない間に見たことのない男性や女性が家にいた事もあった。

その時には……もう分かった。もう、私の家じゃない事を。

私がこの娘である以上に、両親は私の話など聞いてくれない。下手したら近所の叔母さんや、事情を知らない他人が言った方が効果はあるのかもしれない。

そんな家とも言えない家の中、安堵の息をつけたのは、ネットという空想世界での彼の顔さえ知らない『見えない笑顔』だった。

何処で何をしているのか分からない。

けど、前に年齢と高校生と田舎に住んでいるとまでは教えてくれた。

歳の割には旅行するのが好きで……と笑って話していたけど。

現実を変えられない自分には気ままに旅行するユキ君が羨ましかった。

色んな文化や思想に触れてきているせいか、考え方が柔軟で一気に私の中で頼れる存在へと変化していた。

ロンドンが大好きだから少し旅行しに行くってメールが来たまま私は、ユキ君からのメールを待ち続けている。

どんなに憂鬱でも世の中には関係なく朝はやってくる。

明日が来ない昨日はない。明日のない今日はない。かっこよく心の中で決めてみたものの……現実はやっぱり嫌だ。

快晴という言葉は似つかわしくなくても、太陽は雲に隠れながらもひよっこりと顔を出す。今日はそんな天気なんだろう。

夏の終わりという割には、いつも暑いはずの早朝は涼しさの方が勝っている。

暑さに嫌気が差している中、今日みたいに涼しいと喜んでいたらあつという間に冬はやって来るんだらう。

青空より雲の比率が多い。

けど、さっきココの餌を作りながら見た天気予報は『雨は降らない』と言っていた。

いつもは雨が降ろうが晴れだろうが関係ないって思うけど、この足だと傘を持って歩いたり、それ以上に傘を差して歩いたり出来ないから。降らないに越したことはない。

天気予報士の明るいお姉さんから、真面目そうな女性のベテランキャスターにカメラが変わった頃、見切りを付けてテレビから離れ、ココ専用食器に餌をあげる。

体育祭の間母親にまかせっきりだったココの世話は、通常通り私に戻った。

今日からはまたココと遊んで騒ぎまくる毎日に戻る。

「ココ……おはよ」

珍しく早起きなココが先に起きていた私の声で驚き、ビー玉みたいな目をパチッと開かせる。茶色い垂れた耳が私の声を察知したようだ。

危険を察知するレーダーか何かのように耳をクルクルと動かす。

もう一回目を閉じ、また大きな瞳で私を見つめると、ムクッと起き上がり、寝起き一番の大きな欠伸をする。

「珍しいねえ。私より後に起きるなんて」

「ワン!」

何を言ってるのか理解できないんだろう。ご飯？ それともお早う？ その元気な声は何を私に訴えかけているんだろうか。何にせよ、私がイヤミを言ったなんて一ミリも感じていないんだろっね。

そんな朝から愛嬌たっぷりのココの姿に、やっぱり隠し切れない口元が緩む。

「おいで。朝ごはんだよ」

小さな手足は起きて間もないというのにも関わらず、しっかりと私の後を付いてくる。

眠気よりも食い気と言う訳なのかな？

たどり着いた先にさつき出来上がったばかりのホカホカご飯。

トテトテと可愛らしいステップをキッチンの端まで披露すると、勢い良く器に首を突っ込む。そんなココを、自分の食事を惜しんでまで側に近づき頭を撫でた。

瞳の延長線にある柱を見上げると、掛け時計の針は八時前を示していた。

そろそろ学校……行かなきゃ行けない時間だ。

「ふう……」

考えないようにしていても無意識に重い溜息が漏れる。

気になっていた。

先生が昨日別れ際に私に言った言葉。

枕の上で数え切れない位の寝返りを打ちながらも最後まで頭の中

から離れなかった。

『神崎は結果を予測しすぎる。違う結果だってあるんだってそれを知って欲しかった』

間違いなく昨日、先生はそう私に告げた。

言った割には、その真意を教えるには貰えずに帰っていった。

正直分らない。だけど無視することは出来ないのは先生の言った意味を知りたい。

嫌いな先生なのにそう思ってしまうのは、矛盾していることなのだろうか。

昨日の夜から先生の見せた表情が頭から離れない。

夢見たいな真っ白な空間の中。私が向いていない逆の方向にいつも先生はいる。

きっと先生は右にいるだろうって『先生!!』って振り返ると左だったり、左を向くと右だったり、瞬きをすると先生はいつの間にか近くで笑っている。

正直、油断ならない一番の天敵。

だけど、それが少しずつだけど担任という立場で毎日見ているせいか慣れ始めている。

その証拠に、それでもいいって思えてきた。

右だって思って向いた世界はいつも通り。

でも『こつちだよ』って左を向いた時の世界を見せてくれるのはいつも先生だ。

「ワンワン!!」



私の衣服を爪で引つ掻くココに私は我に返る。

「何？ おかわり？」

視線をココに向けようとしたり、一目散にある所に駆け出した。床を弾くりズミカルな音が途絶えた時、ココは玄関の前で大きく声を張り上げた。

いつもこの時間学校に行くから、考えに耽って微動だにしない私に不信感を抱いたんだろう。

「え、マジ！！ そんな時間！？」

勢いよく立とうにも昨日の今日だから右足に力が入らない。

入れようにもギブスさえ入ってはいないが、包帯できつく巻いてある足では到底無理だ。

観念して近くに置いてあった松葉杖を手に取り、ココが吠える場所に向かう。

「行ってくるね。お留守番よろしく！！」

「ワン！」

自分の事で精一杯で気が付かなかった。

いつも綺麗に食べ上げるココ専用のお皿の中身、それが半分以上も残っていることを。

杖を突く利き手にお昼のお弁当を持っていた。気付くのが遅かった。

もう、玄関を出てマンションの出口まで何回も杖を突いて歩いてきたからきつとお弁当の中身ゴチャゴチャだあ……。

そんなどうでもいいことを考えながらマンションの扉を開ける。

「おう！！ おはよう」

誰だか一瞬理解できなかったけど忘れてた。先生の家ってこの先なんだよね。

なんて現れた訪問者に妙な納得を付け加えたりする。  
目の前でさも、私がマンションから出てくるのを待っていましたと  
嫌に得意気な表情で立っていられる。

偶然なんだろう。偶然だろうけど、これがワザと起こした必然で、  
迎えに来たよ的な発想なら。もし、私を気遣ってくれているのなら。  
目に入る物体に迎えに来てくれた先生には悪いけど。頭を抱えて  
しまう。

私は先生ではなく……その座っているものに注目した。

「先生、自転車ですか」

「ああ。いつもの通りの愛用車だか？」

何食わぬ顔でサラリという先生に釣られて、私もあっさりと答える。

「もしかして、私のコレが心配で迎えに？」

「そりゃ担任として当然だろ？ それに俺んちから近いし……」

そう言いながら、朝から素敵なお満面の笑みかあ。

「だったら車ですよ？ だって私コレだし」

松葉杖を。そして更に、包帯で痛々しい足に先生の視線を促す。

後から考えたら図々しい事この上ない言い分だが、あまりに理解  
できない彼の行動に思わず私は本音が出てしまった。

「これだって愛用車だ」

これまた平然とした口調で返ってきた。

先生の頭の中では、車道を走る乗用車と歩道を走る自転車は同じ

『車』だと思っっているらしい。まあ、確かに間違っではないんだろ  
うけど……利点として考えてみるとは遥かに乗用車の方が勝る訳で  
……。

マンションの目の前で、朝の忙しいこの瞬間、私の時間は止まっ  
てしまった。

知ってはいたけど……ってか最近も更に知ったけど。  
先生っていわゆる自転車バカなのかもしれない。

「とりあえず送り迎えは出来るぞ！！　まあ。乗れ」  
「乗れ……って」

言ってる側から時計は刻一刻と開始の時間に迫っていた。

「乗れないなら先行くぞ！！　足を怪我してるからって遅刻は遅刻  
だからなっ」

担任ともあるう者が、生徒しかも怪我人相手に脅しとも取れる言  
動に私は言葉を失くす。

生徒を思う先生の言葉じゃない……。

どうすればいいのか分からず、とりあえず前に貧血を起こして送  
ってくれたように立って肩に掴まる訳にもいかず横すわりをした。

そのまま出発を待っていると、前から先生の低い声が私を呼んだ。  
「お前。次は複雑骨折したいのか？」

だって掴まるところが分からない。

「ご要望ならそれでいいけど」

だったらなんで自転車でお迎えなんだ？　車で来ればいいじゃ  
ん。

氣遣つてくれたのは嬉しいことだけど。これじゃ、ありがた迷惑もいとこだ。

段々、逆切れ気味になってしまっている私自身を、得意の笑顔でカバーする。

「まったく神崎。俺まで遅刻するってえくの！！ 手はココだって！！」

無理矢理掴まれた腕は、先生自らの腰に押し当てた。

心臓が飛び跳ねる暇もなく、先生はスピードを上げたものだから、強制的に先生の腰にしがみつくしかなかった。

一瞬、細いなと感じた先生の腰は、冷静になっていくたびに細いのではなく筋肉が鍛えられているせいだって気付く。

どう学校まで着いたのか分からない。

ただ覚えているのは。前、帰りに行った坂道は通らなかつたってことだけ。

まあ、帰りが下り坂だつたんだから。家から向かうと上り坂なんだろう。

それに時刻を見ると遅刻しそうだし。

先生は後ろで乗っている私が怖いって思う位、猛スピード出したのに息が切れてなかつた。どれだけ、日々の行動が自転車で行っているのか一目瞭然だった。

そんな先生の大きな背中に思わず笑ってしまった。

## 26・場違いさがし

さつき先生とは別れたばかり。

それは生徒と教師は登校する場所が違うから。そして駐輪場も違う。

校内の端の門を入れてすぐ手前が生徒用駐輪場。更に奥に進んだ場所に教員用駐輪場があった。付け足せば、昇降口はどっちかというと生徒専用駐輪場から近いので校舎に入っただけで降ろされた。

一人で歩くと言ったのもあるけど、今は一人で教室に向かっていた。

当たり前だ。

だって先生のほとんどは車で通勤で、自転車なんて人は全く言っただけでいい。

先生が稀なんだ……。しかもちゃんとした免許を持っているのに、それをあのチャリ教師。さも当然かのように自転車で出迎えなんて。

……。……。  
……。……。  
……。まあ、来てくれた分だけありがたいけど。

何様な自分はさて置き。

前カゴから杖を渡されて先生と別れた後、一人になるとはつきり分かる。

やっぱり拭い去れない罪悪感が残っていた。

気のせいかな。駐輪場から校舎までの距離はこんなに長かったのかって不思議に思っている。足の自由が効かないせいで校舎に辿り着くまでが遅い。

初めて、この重症の捻挫に感謝をしている。  
気が滅入る様な気持ちは、こんな理不尽な事に感謝の気持ちさえ  
覚えていた。

でも、結局は教室に辿り着いちゃうんだけど。

歩く度に包帯で頑丈に包んでいる右足に違和感が走る。

曲がらない関節にじれったい様な気持ち悪ささえ感じた。

先生の自転車の前カゴから杖を取った時より以前から、脳裏に渦  
ばかりが巻いている。

きつと許してくれるのは分かってるけど、皆の『これ以上何も言  
えない』みたいな遠慮した顔が目には浮かんでは消えていく。

校舎に入る手前で同情の瞳が脳裏に浮かび上がる。何より自分の  
足を地面に縛り付けていた。その瞳を昨日の今日で目の当たりにす  
るのは正直に言うと辛い。

だってリレーで私が倒れたりしなければ勝ってた。それは確実に  
言える事。

あの時の状況を言えば、私達クラスは二位で一位のクラスとは大  
差離れていなかったから。要は、体育祭はクラス対抗リレーが得点  
の大半を占める競技で、あれさえ良い得点を出していれば優勝は確  
定されていた筈なんだ。

杖を前へと突く度に左足は地に付き、右足はそれを追いかけよう  
と宙を泳ぐ。

まるでそのリズムに合わせる様に先生に抱えられた時の千佳の顔。  
走りよって来た時の美弥の驚いた顔が浮かんでは消えていく。

倒れこむ時は冷静だった分、気が付かなかった筈がない。

走馬灯やフラッシュバックの一種。

倒れる瞬間って本当に周りが鮮明に見えるんだってあの時に実感をした。お陰で枕の上にまで持つていつてしまつて昨夜は眠れずに頭から離れなかつた。

片方だけの靴を下駄箱に入れる。

慣れない杖のせいか、これからの事への心構えが足りないのか自然と深い溜息が出る。

教室行きたくないなあ……って思つていても自然と足は二階へと向き、ごく自然に見慣れた扉を開ける。

扉の向こう側の視界が朝日で広がると、ふつと美弥と話をしている千佳が見上げた。

私を見つけた千佳は素早く私の側にやつてくる。

「来た来た！ チャミお早う。足、大丈夫なの？」

真つ先に目立つ右足をじつと千佳は見つめる。

「うん、大丈夫。少し捻つただけだから」

「少し捻つた位で杖なんて使わないでしょ！ 本当は痛いんじゃない？ ビックリしたよ。勢いよくゴール手前で転倒するんだもん。超焦っちゃつた」

ただ千佳の顔を見つめたまま、返す言葉が見つからない。

当の本人は眉をしかめながら足に巻かれた包帯を見ているので、私の視線には気が付かない。

「しかし、惜しかつたよねえ。あのリレー」

撃つても響かない私に気付いたのかいきなり目の前に千佳の顔が現れた。







もつと重要なことがあったはずなのに……だって私は台無しにしてしまった訳なんだから。

走りが得意じゃない須藤さん。一緒に手伝ってくれた美弥にもちろん目の前にいる千佳にも。

やっぱり自分の不注意でダメにしてしまった事はどうしても拭い去れない。

なのに、なんで千佳は笑っていられるんだろう。

それとも、当事者じゃないからそうやって平然としていられるのかな。

近くにいた美弥や須藤さんだつて、千佳と嬉しそうに手を叩いてないでもつと私を責めていい筈だ。あれだけ苦手なリレーを時間を潰してまで放課後に頑張つて練習していたのに。

突然、右側にいる美弥の左半分が視界に入る。

「美弥？」

何を言いたいのかわからない間に、私のがら空きだった腕は千佳に引つ張られる。

引つ張られた腕は左腕だったから良かったものの、右腕だったら体制が整わなくて千佳に向かって倒れていた頃だ。

そんな誰関せずな千佳のもう一つの手は自然に美弥も道連れになつていた。

こつなつたらいつもの展開へと持ち込まれる。

「うっしや！！カラオケ行くかあ！！」

私はいつものノリに戻らざるえなくなつてしまった。何にテンションを上げていいのか分からないこの状況に対応できるものがいた

ら変わりに騒いで欲しい位に戸惑っていた。

皆の気持ちが掴めないまま、手当たり次第に心の中からテンションの上がるものを拾い上げると千佳が再び笑った。

朝の一件があつてから調子がでない……。

それは表面にこそ出てないが、私の心の中だけ意識的にモヤモヤ感が残っている。

足は昨日の今日にも関わらず、痛み止め薬を飲むまでもなく平気だ。

だけど当たり前だが、出来るものの制限は限られていた。その度に美弥や千佳達に助けられて考え込む時間が増えていく。

「失礼します」

今日、最後に残された世界史の授業の教材を私は取りにきていた。ドアを開けると埃っぽさが部屋中を舞った。ただ準備室の扉を開けただけだというのに。

仕方ないといえば仕方ない。ここは社会科資料室。

簡単に見渡すだけで地理で使う地図や、歴史で使うのである。歴史上の人物画が大きく書いてある厚い本が山積みになっている。いつから利用されなくなったのか。

下敷きになっている下の方の本は何故か白い筈のページが黄ばんでいる。

絶対に使っていないであろう無駄にある地球儀はいくつか埃まみれになっていた。

地球には海がほとんどの筈なのに、資料室にある地球儀はどうやら地面が大半の様だ。

だって、こんな海色じゃない。

通常通りの授業に戻り、体育祭ムードは週明けにはまったく言っていない程に消え去っていた。もちろん不思議に思わない生徒は、だるさを振り払って、本日最後の授業に向かう。

ドアを閉めたその隙間から生徒の上靴の影が過ぎ去り、また騒ぎ声と一緒に通り過ぎていく。

まあ。私は何故こんな埃っぽい資料室にいるかって言うといわゆる当番であって、手伝ってくれて言った美弥を断り、私は次の時間の荷物運びに来ていた。

話したいこともあったから。

負傷者と皆知りつつも、あれだけ平気に振舞っていれば月一で回ってきた日直を遂行する。誰に任せようとも思ってたけど、気にされるとそれだけ私にとって重荷だ。

「おお。神崎。お前が日直か？」

分厚い本と本の間に見えた我らが担任……狩屋先生。

元々、前担当木村先生を引き継いで赴任してきた先生だから前の先

生が受け持っていたクラス。そして教科が必然的に担当教科に先生になる。

「あの角に掛かっているヤツと……。後この配るヤツ持っていったくれ」

そういつてドンと音がなりそんな勢いで容赦なく私の掌に乗っける。

先生も私が負傷者だと知ってるくせに、よくもまあ……。色々注文してくる。

崩れ落ちそうになる渡されたプリントを必死に胸元に押さえ付け、先生の瞳を見つめる。

さっきから引っ掛かっていることを言っってしまうおう。

そういえば、昨日先生に送ってもらった時に言った。

『お前は結果を予測しすぎてる』って、確かに私が思っていたのとは違った。

結局、その場の雰囲気に乗ることしか出来なくて、うやむやになっってしまったけど。

先生にはどこまで分かっていたのかな。

「お前、変な空気出すなよ」

え………？

我に返った時、先生と私は向かい合いながら視線が重なっている事に気が付く。

………となると自然と私は先生を見つめていたことになる。

「ち、違います！ー！ そんなんじゃないです」

変な空気になると言つなら目線を反らせばいいのに。本当に妙な先生だ。

動揺していたのか。掌に乗っていた資料の存在さえも忘れて床にばら撒いてしまう。

あ……。

今は条件反射で動けない身体の私は、ヒラヒラと舞って行く紙の束をただ見つめていることしかできなかった。

何してんだ私……。

その舞った一枚は、書類にペン片手に目を落としていた先生の靴の上に誘い込まれるようにヒラヒラと舞い落ちていった。

咄嗟に動けない身体に分、無駄な動きにならない様に、綺麗に下へと落ちてからゆっくりと腰を下げる。

順を追って拾おうとしゃがみ込もうとしていたら突然。

靴の上に落ちたプリントを拾い上げると、右方向から見慣れた大きな掌が私の視界へと伸びてきた。

「あ、いい……。他のも俺が拾うから」

ついでとでもいうのか。私を言葉で制すると椅子から降り、規則正しくプリントを拾い上げるとトントンと角を揃えていく。

突っ立ったまま私は頭しか見えない先生の姿を追っていた。

馴れた手付きでプリントを上へ上へと重ね拾い上げ、束にしていく大きな掌にゴツゴツした指先。クラス全員に次の時間に配る資料なのか……枚数は多かった。

先生が座っていた椅子の周りから徐々に拾い上げ、私の方へと近づいてくる。

松葉杖に伝って強調されるドクンドクンと高鳴る音。床に散らばった紙に意識が集中しているとはいえ、しゃがみ込んでいる先生に気づかれてないか心配だった。

だって。松葉杖を伝ってこんなにも全身に震動していく。

この紙を重ねる音しかしない稀な静けさに、さっきの動揺が重なって嫌に緊張している。

何故か分からないけどこれは先生に聞かれたくない音……の様な気がした。

「ほら……今度はしっかり持てよ」

最後まで一人で拾い上げ、顔を上げた先生のどんな色にも混ざり合える透き通ったボサボサな髪は、ずっと下を向いていたせいかもっと乱れていた。

そんなことはお構いなしに、さっきと打って変わり今度はそっと私の掌に乗せた。

「ありがとうございます」

好意が無駄にならないためにもしっかりと資料を胸元へと引き寄せる。

また聞きなれた意地悪めいた先生の声が、仕事は終えたと手に付いたゴミを叩き落とすと同時に聞こえてくる。

「そんな二人きりだからって緊張しなくても……」

ここは社会科資料室。日直じゃなければ他の生徒はここには用が

ない。

当たり前前なことに私と先生。この部屋で二人だけだった。転勤なりたてだったら、若い先生に群がる女子生徒はいっぱいたものの、慣れてしまえばこの資料室も至って静かなもの。うるさいのはこの宙をいつまでも舞っている埃くらいだ。

それも踏まえ、いたずら顔で先生は私を茶化す。

「そんなんじゃない……っ!!」

…… っと、また何を言い返そうとしてるんだ。

さつきから自分らしくないことに気が付く。

落ち着いて考えれば分かる。

ここは冗談で言ってるんだから……当たり前前に返せばいいんだ。心の中で大きく深呼吸して一置きすると、思った以上に冷静になれた自分がある。

「そんなんじゃないんです」

いつもの自分に戻り、冷静に事を進めることに決めた。

ここに一人で来た理由。それは頭の端っこで消えないで残っていた。

「ただ、先生が昨日、言ってたことが気になって」

「俺が言ってたこと？」

集めたプリントを私の掌から腕にかけて渡した後、立ち上がり背筋を伸ばすと、そのままさつきまで座っていた椅子に腰掛ける。

教員用の椅子特有の身体の重みだけで軋む音がした。

「昨日、言っていましたよね？ 私は結果を勝手に決めすぎてるみたいなこと」



「……」

「違うつて。先生はもう、知ってたんですか？」

先生に背を向けていた私は何度か杖を突き、椅子に座る先生の方へと方向転換させる。

初めて見た資料室の窓際は不思議と分厚い参考書や、視界を遮るものが無くカーテンさえ開いてはいないが埃っぽさはない。

先生が吸うのか。違う社会科担当の先生が吸うのか。

肌色のカーテンの隙間から覗き込む日差しで反射する灰皿は先生が頬杖を突くすぐ横にある。

「知らないよ」

「……」

先生の一言で沈黙になる二人の間を破るかのようにチャイムが鳴った。

「ただ、神崎は気負いすぎなんだ」

肘を下ろすと身体を預けていた椅子が再び軋む音を鳴らし、先生はゆっくりと腰を上げる。その一部始終を微妙に杖をずらしながら目で追った。

「言っていたら？ この前『なんでたかだか体育祭で頑張るんだろ』って誰かの目に止まる訳でもないのに無意味だつて」

立ち上がるとその場から離れず、近くにある横長な紙と縦長な紙の角を綺麗に揃える。

「一番そう思いたいのは神崎じゃないか？」

「私？」

綺麗に揃えられていくプリントに気を取られていた訳ではない。

ただ意味が分からない。

困惑して言葉にすることが出来ない間に先生が私のいる方へと近づいてきた。

「たかだか体育祭って思いたい。今回は偶然体育祭だったけど言葉の発端は『誰の目に止まる訳でもないのに無意味』……かな？」

私がグラウンドで先生と歩きながらその場しのぎでぶつけた疑問。忘れた。不意を突かれた言葉こそ、その人の本質を語るものだと言うことを……。

その場しのぎで何気なく言った言葉に、私の地雷は知らぬ間に隠されていた。

そして、この先生は……見つけてしまった……………。

人の心を模索するような瞳。初めから見透かすような目で私を見つめてくる。

その瞳から反らしてばかりじゃ、凶星って言ってる様なものだ。でも、何事も無いように見つめ返しても今の自分じゃ何処か不自然に見えるんだろう。

きっと、この人の前じゃ……………。

「ただ怪我しただけだ。確かにあんな練習して一ノ瀬達は悔しかったかもしれないけど。そんな神崎を叱り付けるほど悔しがってはいないよ。友達なんだし、あれだこれだって過剰に反応することない」  
見つめ返せはしないけど、カーテンの隙間から漏れる光による影で分かる。伸びた大きな人影は午後三時の太陽に照らされて私を覆いつくす。

「だから、不安になることなんてない」

そして、影はあつという間に私を覆い隠した。

「先生」

「ん？」

何故か私の隣に先生は移動する。途端、漏れる日差しは私を問答無用で照らした。

目を覆うほどの強い光じゃなかったのでそのまま話を続ける。

「近いんですけど……」

話も気になるけど先生の行動も気になった。

これ以上に話を聞くことも、答えることも私には出来ない。

「何？ また緊張する？」

「そんなんじゃない……」

私が何を言うのか予測できていたから、先生は私の隣に移動したんだ。

……………っ。

「そんなんじゃないです」

思わず下向き加減。微妙にさっきと同じ言葉でも意味が違っている。

理解できない鼓動が私の全身を支配していた。

この感覚、私はまた松葉杖を強く握り締めてこの不明な動悸を押しさえ込む事しか出来なかった。

「時間だから、どうせなら一緒に行こうかと思って」

「じ、時間……ですか？」

ふっと備え付けの時計を見ると授業の時間を過ぎてしまっていた。

「ちょっと……！ 先生なんて言わないのっ！ 先生も先生で落ち着

「いてるし」

「お前な。聞いてなかったのかよ。さつきチャイム鳴っただろっ?」  
「知ってるなら何で言わなかったんですか!?!」

平然と言い放つ先生に言葉にならない溜息が出そうになるのを堪える。

急ぎたくても急げる足じゃない。あたふたと杖を鳴らして出口に向かおうとしていると、片手に乗っていた紙の重みが無くなる。

「このままだとノ口いから担任の先生が持つてやる。捻挫してるからって遅刻は遅刻だからな」

途端、先生一人。私を無視してスムーズに先を歩き始める。

今朝と同じ言葉、今朝と同じ笑みで無責任に言い捨てる。

先生の後を追うように、資料室の扉が閉まらない内に大振りに杖を突く。

チャイムが鳴ったのを気が付かない程、この人といると時間を忘れる。

文句だつて愚痴だつて先生の嫌な部分たくさん出てくる。

木村先生から狩屋先生に代わつて狂いっぱなし。

予想外の事を言葉にしては私の規則正しい時間を狂わしていく。

出会いも生徒を騙したりして自分の名前に大きなハートマーク付けるし、彼女いない事もエロ本買うことも暴露して、面倒だからって無責任にもクジで決めて終いには先生なのに人のこと指差すし。

こんな非常識な先生はちつとも好きじゃない。

拳句の果てに怪我してる生徒を置き去りにして、サクサク一人で廊下に出て行っちゃうし、気が利かないのか意地悪なのかドアを閉めてくれちゃったり。

こっちは杖を支えにドア開けるのだって一苦労なんだから。

でも最後は……。

いつもドアの向こう側でニヤケ顔で待っていてくれるんだ。

いつも、そのドアの向こうで待っていてくれること。私はまだ知らないんだ。

## 27・百円ちよつとの幸せ

去年に一回経験しているとはいえ、体育祭の疲れが取れたかと思っただけで文化祭だ。

なんて生徒の事を考えない学校なこと。

どうして一学期に体育祭を持つてこないのか。前にも思ったけど、聞いた噂だと我が校の校長が『芸術の秋、スポーツの秋と言っただから一学期にやってどうするんだ』っていうお気楽な言葉を頂戴してから、二学期に体育祭がお引越しになっただけ……。

あくまで噂なんだ。

日付で言うと体育祭から文化祭までの期間は一ヶ月半差。そうすると文化祭開催は十一月下旬になる。

日にちにすれば四十日程。長く感じるかもしれないが、議案とかクラスで出したり企画する期間も入れると、もうすぐそこだ。

まだ企画こそ入らないが、細かい事は来週からまた実行委員決めで忙しくなる。

窓際の一番後ろが美弥、その前の席の私は椅子の背もたれにお腹を預ける。

美弥の机に頭をお邪魔させながらこの秋空の下、授業と授業の合間のささやかな休息。

「来週からは文化祭企画か……遊べるのは今週くらいだねえ」  
何時間目だか覚えていない休み時間に、美弥は頬杖を突きながら  
呟く。

秋らしいカラッととした寂しさを感じる空。

暑さはお昼の一瞬位で遠のき、過ごし易い涼しさを感じさせるこの季節。今日はなんていいお天気なんだろう。

カレンダーは十月も上旬に入り、過ごしやすいのに外に出れない。悲しき勉強の日々に明け暮れている。

だからってこつやつてボヤいている瞬間が嫌いな訳でもない。

愚痴を言いながらも共感し合っている。このどうでもいい時間も好き。

「放課後、どつか行く?」

お互い外を見ていたからそう思い立ったのか、不意に窓の外を見つめていた美弥が言葉にする。

「ん〜……」

悩んでいる訳じゃない。何度も言うけど、ただこんなくうたらな時間が好きなだけ。

「ごめん。今日は断っておく」

よく分からない至って微妙な断り方をする。

魅力的なお誘いに行きたいけど行けないと言つのを分かってもらえればそれでいい。

「最近は何育祭の件と、足の件もあつて家事を任せつきりなんだ。お母さんと二人だし、また文化祭ってなる前に少しでも家庭を優先にしないと」

再びお互い窓の外ばかり見てる。美弥は私の視界から外れてるか分からなけれど。

私が思っていることと言えば……。

今、あの電柱から飛び立った何ぞやの鳥になりたいなんて思っている。

さりげなく事情を軽く言葉にする。  
やっぱり言うタイミングで雰囲気や言葉の重みなんてこんなにも  
違うものだ。

「そうか。おっかさん喜ぶよ」

呆けたくなる秋の青空も手伝って間抜けな話は進んでいく。

「リアル母子感動物語っす」

涙を拭う振りをして適当なところで切り上げる。

割り込んでこない、首を突っ込んでこないからなのか最近は気の  
緩みもあって喋ってしまう。

そんな美弥の雰囲気がそうさせているのか、吹き出したくなる位  
クサイ台詞だけど『澄んだ青空』がそうさせるのか。心情共々定か  
ではない。

今日最後のチャイムが鳴り響く。それから少し時間が経ってから  
校舎を離れた。

美弥はノロノロとしか歩けない私の横に黙って並び、通い慣れた  
いつもの道を歩いていた。

そんな美弥が心配することも無く。慣れない松葉杖も左程時間は  
かからず担当医から突かなくてもいいという指示が下された。

まあ、元々は骨折ではなく重い捻挫だったから早いだろうと思っ  
てたけど。こんなに早いとは拍子抜けだ。まだ走ったりは出来ない  
けど両足でゆっくり歩いたり是可以る。



そしてさつき、美弥とも別れた。

誰かさんみたいに自宅から近い所をただ単に受けたんじゃなく、ちゃんと自分のレベルに合わせた学校として電車通学している。

美弥の家に遊びには数回しか行つたことない。

私と美弥との間ではあまりないが『今から家来れる？』と美弥から連絡があつたらきつと道に迷う。それくらい数回しかお邪魔したことない。

遠いという訳じゃなく、ただ私の家の方が何かと都合がいいのだ。

学校指定の最寄り駅から美弥の降りる駅までは四駅あつた。そしてその学校指定の最寄り駅から逆方向の私の家は、必然的に早々とバイバイをすることになる。

美弥と話していたから紛れていたものの、一人になると実感する。

足を痛めているというだけで普段持つている荷物が倍に重い。

まるで、悪い霊に二、三匹取り憑かれるような気分だ。

この状態が何日が続くようなら本気でお払いに行こうかと思う位。

厳選して持ってきた教科書だからまだ良いけど、辞典とか持つて来いって言われた日にはお得意の笑顔で冷や汗ものだろう。

チャリンチャリン！！

眉間に皺を寄せている私の耳に入る。

他に言い様がないし、例えばようが無い。

もつとボキャブラリーに富んでいる人は、この音の理に適った様な例えがあるんだろうけど自転車と分かる以上、このベルは『チャリン』にしか聞こえない。

でも誰が来たかなんて分かっていた。

「先生も帰り？」

振り向く事などしないまま、私は先生だとベルの音だけで断定した。

タイヤの空気入れだけであれだけ熱く語った先生だからベルも整備しているのか、他の自転車と違って少し音が綺麗で高い。

もう気配や逆光で出来る人影という以前に、ベルの音で分かる自分もどうかと思うけど。

また会ったなって『偶然』帰り道に出会う。

「気持ち悪いなお前、見てもいないのに俺だって分かったのかよ」「相変わらずの生徒だか先生だか分からない喋り方。」

私が捻挫しているのを知ってるし、心配だからなのか『偶然』はいつもは同じ地点で起きる。

敢えて黙っておくけど、推測するに職員室から私を見つけて自転車で走ってくるのと丁度この地点なんだろう。

なんて考えてる私、可愛くないな。

「気持ち悪いって。まあ、どうでもいいですけど」

私はそんな先生の優しさが気持ち悪い。

生徒と同じ時刻で帰るってことは、先に先にと下校後の業務を終

わらせているかなんて一目瞭然。

何もそこまでしなくても。

そんな先生の余計なお世話とも言える行為がお腹の奥の奥の更に奥を嫌に燻ぶらせる。

『心配』もしそうなら。

「先生はなんで自転車？ 車じゃないんですか？」

思った事がつい口に出てしまう。またもや可愛くない自分を見せる。

これ以上何も付け加えなくても先生は包帯を巻いただけの私の足を見て、何が言いたいのか察知したようだ。

「お前知らないだろ。車じゃ、こんな心地いい風は吹いてこないだ」

……のはずなんだけど。

何を思い立ったのか、風こそ先生の頬を掠めるものの、私の考えは掠ってくれなかったみたいだ。

そりゃ、車内だし窓を開けない限り無風でしょう。

交通が不憫な事より、風に当たらない方がこの先生にとっては不憫なんだそうだ。

「先生は肌で感じたいんだ。風も生徒も ……」

チラッとどんな表情しているか、私より頭一個分は背の高い先生の顔を覗き見てみると、そんな自分に酔ってしまっているのか。ごく満悦な表情。

「俺、かっこいいだろ？」

「脈絡のない発言されても全然カッコよくないですよ」  
寸前の差で先生と目が合うのを避けると、つんと澄ました表情で自転車に乗っている先生を追い越す。  
いつでも自慢の自転車に乗って先に帰れるのに上手に歩けない私の歩調に合わせてくれる。

「あ、ちょちょー!」

先生の声が聞こえた途端、カギを掛ける音も耳に入った。  
タイミングからするに『ちょっと待って』って言いたいんだろう。

けど。ここでわざわざ歩みを止めて、律儀に待つ理由なんてない。  
ここで待つか。さっさと帰ってしまうかなんて私の自由だ。

大体、この先生が私は苦手なんだ。  
こんな茶番劇に付き合っている理由なんてそれこそ何も無い。

だったら、私は先生を置いて帰ることを選ぶ。

私は立ち止まる事も無く、先生に会う前と変わらぬ歩調で我が家を目指す。

先生が勝手に追いかけて、勝手に心配してるだけだし……。  
本当に心配しているのかは別として。

だが、単純に考えて自転車と徒歩……どう足掻いても勝ち是谁だか決まっていた。

私の行く手を阻むとなると、止まらない訳にはいなくなる。

「はい!」

渡されたものは、私の後ろ五十メートルも離れていない所にある自販機のジュース。

先生が阻む先の道を見ていた私の視界に何を思ったのかオレンジジュースが入ってくる。

頬に近い距離で手渡されたジュースの冷気が顔中に広がった。

ううん……何を考えたのか。じゃない。

何回も最近ある。

『偶然』はこうやって帰り道会ってはおごってくれる時。

そんな時はいつも私はオレンジジュースで、お礼に軽く会釈する私の視線の先に見える先生はいつもコーヒーなんだ。

しかも、ブラックの無糖。

苦くて嫌いな興味のない私にはメーカーなんて分かるわけないけど、同じ味の同じメーカーのコーヒーで飽きやしないのかって思う。貰ったジュースに目もくれず蓋を開けると、先生はヒョイと一口美味しそうに飲んだ。

あ、また搜してる。

先生と私。大人と子供の部分。

「神崎。そんなに百二十円のジュースが嬉しいのか？」

「え？」

思わず目が合ってしまった。

「別に嬉しいなんて言ってますけど」

さっきは上手く寸前でかわせた視線が、不覚にも油断していて目が合ってしまった。

そっぽ向いてお礼も言わずに乱暴に開けると口にする。全体に広がる甘酸っぱさがいつもより増していた気がした。

それを気が付かれないように下を向いて平然を装った。表面を見ると、私のまで同じメーカーのオレンジジュース。

「最近、笑わないんだな」

「どういう用件で言ってるんだ！」

「どういう意味で言ってるのか知りたくもないけど。」

傍から聞いたら誤解されそうな事や言葉ばかり。

「だって先生が嫌いだから」

「はつきりと言い捨て、もう遠慮する必要がない。」

「じゃあ、この状況をどう説明する。」

偶然、先生と会って先生と帰って、先生に奢ってもらって。

「こうやって目の前には自転車。ガードレールに並んで一緒に飲み物を飲んでる。」

「しかも、今日だけじゃない。」

「ははっ！！ そうだな。宣言されたんだっただな」

「何度言っても、応えてないこの手応えの無い感じ。」

「さっきまで忘れていて、今思い出したかのような横顔から見える」

余裕。

「どうも思い通りに行かない。」

「こんな奴。今日も明日も明後日も増して大っ嫌いだ。」

「心配してる割にはなんの役に立たない。」

足を怪我している生徒に自転車で追いかけてもなんの利用価値もない。

自転車って言えば、過労で倒れた私を無理に自転車に乗せてジエットコースターみたいな坂道を帰ったこともあったな。

先生の先生らしくないところなんてたくさんある。

さつきから順番に並び立てて、何個も何個も並び立ててながら嫌いだって連呼して『先生』を見ないようにしてる。

その理由はなんなのか……。

「やべっ……。俺、帰って今度の小テスト作んなきゃいけないんだっつた!!」

立ち上がった先生は地面に置いていたリュックを背負い直す。

「先生が許可できる寄り道はここまでだ。帰るぞ」

私の側を横切った先生からは、ほんのりとコーヒーの匂いがした。

「そんな勝手じゃん。自分に用が出来ただけじゃないですか」  
言いつつも自転車に乗ろうとする先生の側に私は歩を狭める。

ガードレールから腰を上げた私はあるべきものが無いことに気が付いた。

あ、あれ？

さつき置いておいたバック……あの鉛のように重たいバックがない。

あたりを見渡すと、セカセカと帰る準備をしている先生の自転車の前カゴに入っていた。

「はあ」

まったく、迷惑なくらい抜け目のないお節介。  
怪我しているのは足なんだから、荷物ぐらい自分で持てるっつー  
の。

急いでるくせに……明日までにテスト作んなきゃいけないくせに。  
さも当然と私の荷物を前カゴに入れる。これじゃ、先に歩いて帰  
れないじゃない。

毎回同じジューズ。役に立たない自転車。迷惑なお節介。今日も  
マイナスが多い。

なのに初めて今日。先生に気付かれないように笑顔になった。



## 28・オレンジジュース

段々と変わり始めている秋の空。

秋かあ……。

なんて感傷に浸っているわけでもなく、ただちょっとした秋風で茶色に色づいた葉がされるがまま散っていくのを見ています。

「秋だな」

なんだかんだやっぱり、季節の変わり目に私は感傷に浸っている。暴れ回りたくなるような夏の暑さからオサラバして、食欲と眠気が同時に起こる秋の気温。気のせいか遅刻する生徒や、朝早く小走りで校門を駆け抜けていく生徒が増えた気がする。

「ふああ〜あつ」

この過ごしやすい季節に地上で生きる人間は逆らえませんが。

夏は嫌だっと思っていていた日当たりの良いこの教室が、今は居心地のいい場所。

窓の外ばかり見てるなっという方が無理。どうでもいい先生の話よりつい見たくなる。

クラウンドを差す日差しが前より眩しく細くなっている気がする。八月と違って日が短くなっていく、辺り一面を照らすオレンジ色の時間が増えていく。

カーテンを揺らす風が違う。教室の窓越しに飛んでいく鳥が違う。夜、眠らずに鳴いている生き物が違う。

また……。また、この季節が来るんだ。

あれから何年かな。

秋って言うと色々な事を思い浮かぶ。

普通なら食欲の秋とか。頭が冴える芸術の季節だとか言うけど、暑さから寒さに徐々に変わっていくそれが十月の上旬。

少しずつ少しずつ紅葉が目立ち、散っていく葉も地に付く事が無く、  
く濁いた風で舞う。

共に私の歩く人生も変わって、木々に青い葉一枚も残されてない頃。

冬、人恋しい。肌寒い季節に私は何もかも失った。

丁度今の季節は毎年変わりなくユキ君を思い出すんだ。

『いつか一緒に行こうね……』

出発前にパソコンにそう送信されてた。

その時私は授業中で、家に帰ってパソコンを開くと『ありがとう』  
ってという題名でたった一通。一頻り涙を流した後、あれから涙を流さなくなった。

いつかユキ君が帰って来た時には、素直で泣き虫じゃない笑顔が似合う女の子になりたかった。

要は、その頃の自分とは正反対の私になりたいって。

たった一人、私の素顔を受け入れてくれた男の子。

授業中に関わらず、堂々と生徒手帳を取り出して写真を開く。

土気色の壁に赤いレンガの街並み。所々咲いている黄色い花が色  
栄えが良く映えている。

塔。

少し離れたところに写っているのは、世界遺産でもあるロンドン街を彩る屋根には何匹かのカラスが止まっている。

日本じゃありえないくらいの閑散とした澄んだ写真。

朝の風景なのか日差しが心なしが強く見える。

この写真を貰った時に気になってロンドンって言うのはどんなところなのか調べた。

興味は湧いたが、頭がついていけるかは別問題だ。

今、覚えているのはイギリス、イングランドの首都で、パツと出てくるのはバッキンガム神殿しか出てこない。

しかも映像越し。

玩具の兵隊みたいな人が沢山いて規律正しい行進をしてた。

なんだかんだで図書館の資料や教科書の上でのロンドンしか知らない。

今、見つめているユキ君の瞳にはどんな風に写っているんだろう。

どんな素敵な事に出会い、何を思っているのか。

そして、私もそんなユキ君の側に居合わせたい。

季節を感じるのが大好きだった。

いつも自分が見て、直に触れた世界の話聞かせてくれた。

高校生なのに素敵な人生を送っていて、部屋六畳分の世界しか知らない中学生の私には、画面越しに凄く大きく見えた彼。

実際に行ってみないとこんな紙切れ一つじゃ分からない。

どんなに日差しが強いのか。街の雰囲気とか、ロンドンの夕暮れ

や匂い。

どんな人達がどんな生活を送っているのか。

毎年思う。手繰り寄せなくても訪れる四季の中の秋と言うこの季節。

私は、どこまでこの人を好きなんだろうって。

最早、何を話しているのかさえ分からない子守唄みたいな先生の授業を、頬杖つきながら聞いているフリをする。

「じら、そこー!!」

コツンツ。

何かが跳ね返るような音と、先生の怒鳴るような大声で我に返る。

やばっ……!! ボーっとしすぎてた。

あまりにも呆けすぎて寝ていなかったのに涎が出ていないか、頬に手形がついていないか。

何よりそんな私を見ている生徒がいないか左右確認する始末。思わず隣の男子と目が合って笑われてしまった。

授業中なのそっちのけで窓から見える風景ばかり見てたし。

叱られるのは当たり前と、恐る恐る顔を正面に向けていると、怒られているのは斜め前の男子だった。

子守唄みたいな授業だったらまだ良かったものの。

今の時間、受けているのは天下のノー天気な我が担任の世界史の授業。

今だって『こらー!!』って叱ったのはいいけど

「おっかしいなあ。俺位の腕の持ち主だと、あの必殺技できるはず

なのに」

「先生！ 命中率ないねえ！！」

怒っているはずの先生は、早くも自分の世界にまっしぐらになっていた。

授業をろくに聞かず、携帯を打っていたら男子は怒られるのを分かっていたかの様に反省していない一言。

なるほど、何やらさっきの『コッソ』って何かが当たる音はチヨークを投げた音だった。

今度は慎重にチヨークの長さ確かめ短い方を選び、意味があるのかチヨークについている粉を掃うと目を細め、目的の場所へと投げる。

「つつてえ〜〜つつ！！」

「おつし！！ これこそ漫画でよく見る必殺『無差別チヨーク飛ばし』だ」

見事。標的である生徒の額に当てると満足気にガッツポーズをする。

無差別ではないと思うけど、今マジで狙ってたじゃん。

そんなリアルに喜んでる先生に、当てられた男子の罵声と共に笑いが巻き起こった。

自ら授業を放棄して、さっきまでの怒りはどこへやら……。

怒ったまでは百歩譲って教師だ。その後は万歩譲っても子供だ。

可笑しい位にバランスが取れている先生は、何処までも子供な笑顔で再度挑戦しようとしていた。

こんな馬鹿な先生に私が出会ったなんてユキ君知ったらどんなに喜ぶかな？

また話したいなあ。

ネットの中でもいい。会えなくても、目の前に現れなくてもいい。ただ話がしたい。言葉を聞きたい。

一時の通常授業は過ぎ、体育祭から文化祭準備へと変わっていく。学校事情により、行事に間はないけど夏から秋へと確実に季節は変わっていつてる。

吹く風はねっとりとした張り付くような風から渴いた風へと変化する、日差しは徐々に細く、日に日に弱くなっていく。『暑い』から『暖かい』になるまでそう日はないと感じる。羽織るもの、着るものは自然と変わって無意識に肌で感じ取っている証拠だった。

「ええつつつ！！！！！」

その日のHR中。声は教室中に響き渡る。

一人の男子と一人の女子以外の生徒は、迎えるように拍手を喝采していた。

立ち上がった二人の瞳の矛先には、一枚の白い紙にいくつかの梯子に為りきれない歪な形で黒いペンで何本か書かれた上から赤いペンでなぞった跡がある。

その、赤いペンの先には『文化祭実行委員』と書かれていた。逆側には叫び声を上げた彼女達の名前が書かれている。

「今回はお前らだな!!」

またもや、私の時と同じように綺麗な一本指を二人に示すと、高々と大笑いを始めた。

まとめると。文化祭実行委員が決まった。

今回も運任せ神頼み。先生自身は身勝手に人任せならず神任せ。

恒例というかまだ二回目だけど……担任の意向により、多数決や推薦すらせずアマダくじで配役は決まった。

今の時代、立候補とか推薦とか真面目な決め方じゃ終わらないと判断してのことだろうけど。

今回も私に決まったらどんだけ神様とやらは意地悪なんだろう。

二度目はないかって妙な自信を持って挑んだらやっぱり平気だった。

なんだかんだ言っているいい先生だと思ってきてる。

今は治ってきてる足を、気遣っていつも付き添ってくれた先生。写真を届けてくれたのも、泣き顔を見守ってくれたのも先生。

やたら一緒にお節介が付いてくるのは、矛盾だけど苦手なのは変わらない。

苦手って思える分、もしかしたら成長したのかもかもしれない。

いや、私はそんなにお人好しじゃない……『嫌いよりは苦手寄り』  
っていう微妙な線を引いておこう。だって今でも『嫌い』だったら  
先生への評価は何もなかったことになる。

お前、何様だっと思われれるかもしれない。

だけど、一度感じた印象を変える程に気持ちは容易くない。

嫌いなら嫌い。そうしてしまわないといつか歯止めが利かなくな  
る。

知っているから、気を許してしまうことの愚かさを……

。

この短期間で学んだことがある。

笑顔も作れるし会話も出来るけど、それは狩屋先生にだけは通用  
しない。

なら『笑顔がウソ』っていうなら笑わなければいい。

表面上の『笑顔』を出さなければいいんだから簡単だ。

狩屋先生に限って、機嫌を取らなければいい。

先生は私があまりにもニコニコと笑顔で卒なくこなしてしまっ  
てるから、人間臭くなくて疑問を抱いているだけ。

普通だったら普段接してる私で十分な筈だけど、あの先生だけは  
『別』なんだろう。

まあ、答えにたどり着いてしまえば簡単。

そしたら先生は私に構わなくなる。



構って貰わなくても、手を差し伸べられなくても私は出来る。

人とは違う考え方をしていると、私自身も思う。『人は一人では生きては行けない』そう良くドラマでも漫画でも当然のように語られている。

でも、それは差し伸べられた事がある人の言い分だ。だったら尚更私には関係ない。

実際、運良く目の前に差し向けられる手があるのは極僅か。

温かい掌も、寄り添える背中も知らない私には全てが戯言に聞こえる。

この考えを変えようと思わないし、誰かに変えてもらおうとも思っていない。

「今回は逃れられたね」

含み笑いを浮かべながらも聞きなれた少し低い声は、私の座る席の後ろから聞こえた。

ふっと振り返ると帰りのH・Rは終わり、美弥は帰り支度をしている。

それもそのはず。

H・Rさえ終わればもう放課後。

美弥が教科書をバックの中に詰めている頃には教室には半分位のクラスメートしかいなかった。

「本当だよ。これでまた役員になったら神様を恨み倒すね。各地に

ある賽銭箱をひっくり返して周ってやる」

捻挫のため、あまりバツクの入れ込まないようにしていた私の帰り支度は、先に始めていた美弥よりも先に終えてしまった。

「神様vs人間で勝ち目は無いよ。逆にバチが当たる。しかも、賽銭箱ってやることちっこいねえ」

やることちっこいって。

美弥の口から思わぬ用語が出てきた気がするんだけど。まあ、確かにやることセコいわな。

「言えてる言えてる！！ 物体がないものにさすがのチャミさんも手出しできないし。さあ、支度できた？」

まだ夕日が落ちない内に出来れば校舎を出たい。

別に何かあるって訳じゃないけど。

先に支度が終わっていた私はやることなく、美弥の動作を見つめながらも心の内は急いでいた。

美弥がバツクを背負ったのを確認すると、遅れながらも横に並び同時に教室を出る。

なんとか教室に残っている最後の生徒にはならなかったようだ。

ドアの側の席でじゃれあっている同じクラスの女子の会話が把握出来るか出来ないかの距離を通り過ぎると私達はドアを閉めた。

「文化祭の催し物、何するんだろうね」

今回は逃れたと言っても気になるってもんだ。

自分が言い出した言葉ではあったが、考えなしに言葉にしてしまったため改めて考える。

「なんだろ。無難なトコで喫茶店とかになるのかな？ 智亜美は何

か考えてるの？」

「ただの喫茶っていうのは盛り上がり欠けるから、執事喫茶とかホストカフェとか……コスプレ喫茶とか？ 現代のニーズに答えるとしたらコレじゃない？」

顎に人差し指を乗っけて考えてると二階から下っていた階段を最後まで降り終えた所だった。お互い考え事をしていた私達の間話し声はなかった。

だからかもしれない。

「まあ。俺のせいじゃないしさ」

こんなにも目立って聞こえてくるのは。

まだ見えていない階段を曲がった先に、私からは見えない死角の部分から声が聞こえてくる。

「……あ」

私の案を出そうとする人差し指は足と頭と共に静止した。

「っと……何？ いきなり止まんないだよ」

いきなり私が立ち止まったりしたものだから、予想外の出来事に美弥は静止が出来なかったみたい。

私の後ろを歩いていた美弥は不思議そうに表情を窺う。

自然と背後について来ていた美弥が私と同じ位置に足を向ける。

「あ、なんだ。先生じゃない」

何故かその時、私の全ての機能は立ち止まってしまった。

やましいことなんてないはずなのに、そんな現場でもない。

だけど、足音も言葉も……無意識に失う。

「言うなら神様のせいにもして」

そこには今日、H・Rで決めた文化祭実行委員に任命された女子と、付き添いの同じクラスの女子。そして担任の狩屋先生だ。

「だって面倒！！ 実行委員なんて変なこと任されるだけじゃん」  
「だから公平に決めたわけでしょ？」

悪びれた風でもなくお互い言葉を重ねていく。

公平に決めた訳だからと意見を譲らない先生。

アミダで決められたんじゃないや納得いかないと反発する女子生徒。  
まるで一ヶ月前の私の心情を覗いているみたいだ。

「ねえ先生？ もう一度やり直してくれない？」

「それは無理！！」

拝み倒すかの様に両手を鼻の前であわせる女子に、オーバーに両手を交差させ上半身を仰け反る先生。

「まったく、どっち退かずだな。」

「ええ！！ なんでえ〜」

肩を寄り添いながら一緒に講義をする二人の女子に先生は頭を掻かずにはいられなかった。

「そんなことしたら、文化祭実行委員だった子に申し訳ないでしょ」

……………文化祭実行委員だった子……………。

「だーから。やり直しはなし！」

「そんなあ……………。私、バイトだってあるのに」

ゆっくりと両手を合わせていた腕を下げ、落ち込む友達の側にいた友達は何も言えなくなっていた。途端、先生の位置から顔色を窺えないほど落ち込んでしまった生徒の頭をゆっくりと撫でた。

……………。

「落ち込むなって」

最近は見慣れていた先生特有の無責任な言葉を放ちながら笑う。  
「先生は先生だから、どんだけ面倒か知らないんだよ」  
自分の頭より一個分以上身長が低い生徒の頭を二、三回ポンポンと叩くと、先生はその場から離れた。

あ、そうだ。

なんで私、ここに立ち止まってるんだろう。

意味もなく立ち止まってしまった事に気付いた私は途端、時間を取りもどそうと気持ちは急ぎ足になる。

そんなに長い時間止まっていたんだろうか。目の前の状況と私の表情を交互に美弥は瞳を配っていた。

「そろそろ行くこう……美弥」

「そう?」

一言そう答えると何も言わずに私の横に並び歩き出す。

そうだ。

さっきの話の続きしなきゃ、何の話していたっけ?

確か、文化祭間近だねって話していて。

今年はどうなるんだろうね文化祭って話題になってたんだ。

そうそう!! 思い出してきた。

それで、うちのクラスの出し物はなんになるんだろって話が展開して……。

私が思うに、ホスト喫茶とか執事喫茶とか……男子がやるんじゃないから  
当たり前って感じで面白くないから ……。

「ねえ! 美弥」

少し後ろを歩いていた美弥の方に振り返ると、丁度さっきまで話

していた生徒の所に先生が戻ってきていた。

ど、どうして……。

上手く頭が切り替えられたと思って内心ホッとしたのに。

気に留めたくなくても先生は私の視界に入ってくる。意思とは正反対に自然と思考が止まる。

歩みを止めたくなくても自然と足はもう、止まってしまった。

視線は美弥を通り抜け、向かった先は先生だった。

後から考えたら、美弥は私に向けたことのない表情で私の視線の行き先を目で追っていたのかもしれない。

「ほら、これは先生からのお詫びで」

小走りで走ってきた先生の大きな掌が彼女達に渡そうとしている『何か』を手になっている。その手がゆっくりと開いた時……ポンと女子生徒の掌に乗せた。

キンキンと冷えているであろう、同じメーカーの同じ百パーセント。

『先生』から『生徒』に渡されるまったく同じ種類のオレンジジュース。

「オレンジ、ジュース……」

フツと漏らした私の言葉に美弥は反応した。

どんなに鈍感でもはつきりとこの感じは落胆と感じ取れる。

「行こう……美弥」

気付かない振りするのも長い時間、直視しすぎた。

硬く落ちないようにバックの取っ手を握り締めると制服の内ポケットも同時に握り締める。

いつも不安を簡単に消し去ってくれはるはずのものが、いつも助けしてくれる効果絶大の彼のお守りが効かない。

思い出す彼の優しさは、自分でも気が付かない内にいつの間にか、違うもの差し替えられていた。

## 29・聞こえない声

学校から帰つての自分の部屋から見える夕日は、心理状態に左右されるパターンが日常茶飯事だ。

こんな時は自分の姿があまりにもちつぽけに浮き彫りにされてしまふのは気のせいかなあ……。

心の在り方によって、目の前に広がる代わり映えの無い筈の夕日は何にでも見えてくる。

恐怖に感じたり幸せに感じたり、勇気を貰つたり。

でも、きつと今日は良い見え方はしないだろう……何となく予感を感じていた。

だけどもう習慣になつていて、見ないと私自身なんだか落ち着かない。

曇つていて夕日が見れないと分かつていても、窓を開けてしまう時がある位だ。

何でこんなに夕方が見せる情景に固執しているのかつて考えたことはない。

だって別に嫌なわけじゃない。時間の無駄だとか思うこともまずない。

一人になる時には必要不可欠で、一日の締め括りとして一種の行事みたいなものだ。

今回も、無意識に自分の部屋の窓を開ける。

真夏とは一味違ったいつまでも浸っていたい心地いい風が、持ち主の了解も得ずに乱暴に私の横を通り過ぎ、部屋にお邪魔する。

秋。十月上旬の今日は、薄い雲が邪魔しない程度に広がっていて、



快晴って程じゃないけど夕日が見えないくらい曇ってもいない。

そんな雲間から見える丸い固体が、雲に少し隠れたオレンジ色の夕日だ。

今日は私の大好きな『街全体がオレンジ』現象は起きてはいない。所々、街並みは己の主張をしていて少し夕日はそれに押されている。

それは今の心情をあらわしているよう。

自分でも原因が分からない。

ただ渦を巻くように頭の中がゴチャゴチャで表面は平気なんだ。

平気なんだけど……落ち着いてバツクを降ろした後の喪失感は何よりも身体に負担がかかった。

その原因は糸を辿っていくとたった一つだけ気にかかっている。

……あの光景を見てからおかしい。

気分は晴れ晴れな筈なのに、意思とは違った所で見渡せばすぐそこに暗雲がある。

そして、正体さえ見えない素知らぬ私を気付かないうちに雲は覆っていた。

でも、それに気が付いている時点で意思とは違ってないのかも知れない……。

だったら一体なんなのか。

まだ学校から帰ったままの制服姿でいた私は、スカートのポケットにある生徒手帳から写真を取り出す。

「……………」

いつも嫌なことを吸い取ってくれるお守りみたいなこの写真。手にこうして持っているだけで満たされた気持ちにさえなる。

けど、あの時私はそんな気持ちにはならなかった。

何も満たされなかった。

やたら違うものが脳裏に浮かんで、ユキ君の架空ではあるけど優しさを打ち消していた。

女子生徒のオレンジジュースを貰った時の表情と、先生のいつも同じジュースを選ぶ癖。

どうしてあの光景が何より勝って、鮮明に思い出されるんだろうか……………。

考えている間にも夕日は沈みかけている。

私が窓を開けた時が、きっと夕日を拝めるギリギリの時間って感じだったんだろう。

脳裏を麻痺させる位の夕日が隠れていく。

何もかも優しく包み込んでくれる眩しい位のオレンジが私の今日一日を消化してくれる。

こんな時だからこそまだ……………まだ見ていたかった。

『こんな時』って今、私に何が起きているというんだろう。

ふっと浮かんだ言葉に、漠然とした疑問ばかり浮かんでくる。

もうそろそろ五時になる筈なのに、窓越しから見ている私を注意するような叫び声が聞こえない。3階の私の部屋から見える真下のアスファルトに母の姿はなかった。

それもその筈……お母さんは今日は遅くなるみたい。

昨日の夕飯時に、仕事帰りに久々に誰かと会うみたいなのを言っていた。

遅くなるんだろうという事だけ覚えていて肝心な部分を聞いていなかった。

夕飯もその人と食べてくるらしい。

「はあ」

お母さんの夕飯が要らないなら、今日はコンビニで適当なものを買ってきて今日は早く寝てしまおう。こんなモヤモヤとした気分のままこれから残り何時間も起きていたくなんてない……。寝てしまうのに限るってものだ。

こっちの悩みなど知らん振りで、私の目の前から姿を消してしまった夕日に別れを告げると、ゆっくりと手すりから手を離す。

学校に行っている間中、陽に暖められていたベットに腰を落ち着けた。

「……あれ？」

いつもベットの上か、机の下にいるココの姿が見えない。

『用が済んだ？』と駆け寄って来る元気な姿が見当たらなかった。

「ココ？」

散歩に行く時刻は必ず『待ってました』って尻尾を振って待って

いるのに。

「いない……」

腰を上げ、部屋中に視線を張り巡らせながら自分の部屋を後にする。

もしかしたら驚かせるのが大好きなココの事だから、どこかに隠れているとも限らない。

私の死角になるところを縦横無尽に首を動かす。

でも……おかしい。

さすがに置いてかれると思ってドアを開けると一吠えあるかと思っただけ。

下でまだ寝てるのかな？

今まで数年も付き合ってきてありえない話を頭の中で張り巡らせる。

階段を降り、行き着くままキッチンに向かう。

部屋を照らす夕日が段々と姿を消し、薄暗くてあまり見えない。

夕日が別れを告げる前から薄暗くなっていた空は、秋にもなると日が落ちるのが早いのを改めて実感する。

瞳を細め、うつすらと見える視覚を研ぎ澄まし、触れる感覚だけで壁伝いに冷蔵庫の横にあるキッチンの電気を点けた。

……………。

薄暗くなっているだけだったので途端、明るくなった室内に瞳が驚く事無く対応する。

「あ、いたあ！ ココ」

テーブルと一緒に備えてあるココ専用椅子にココは寝そべっていた。

ココは突然の出来事にビー球みたいな瞳を左右動かすと起き上がった。

「ワン！」

「もう何処に行ったかと思ったじゃない」

何処に行くつて程に私の家は広くないけど。

冷静にツツコミを入れながらも、ゆつくりと安堵の溜息と同時にココのフサフサとした毛並みを揃えながら抱き上げる。

腕にココを座らせ、優しく撫でると気持ち良さそうにコロコロとした黒い瞳は瞑る。

「珍しく散歩の時間忘れたのかあ〜？」

「ワンワン！！」

そんなことないとさっきより倍に私に向かって吠える。

「分かった分かったから……そんなはずないよねえ〜」

威勢に圧倒された私は耳を塞ぎそうになった。勝ちだと感じ取ったのが満足気にペロペロと私の顔を舐める。

ココをゆつくりとテーブルに降ろすと、私は急いで散歩に行く準備をした。

二回に渡つて『早く！』と急かしながらも吠えるココを降ろしたテーブルの先には、綺麗にいつも食べつくしてある青色の受け皿がある。

その受け皿の餌が半分も減っていないことを私は見落としていた。

### 30 小さな身体、大きな背中

「ふああ~~~~あ」

公園に着いた途端にベンチに腰を落としながらも涙を溜めては大欠伸をする。

夜になる前の公園って、妙に瞳に馴染んで安心する。  
欠伸さんいらっしや〜いって感じた。

この中途半端な暗さが、眠くさせる原因の一つと言っている。

考え事もまだまだあるけど、こりゃ早く寝るのには越したことはないなあ……。

夕日を見ていたり、想いに耽ったりして、いつもより散歩の出発が遅くなった。

目の前でまたもや宝探しに出掛けているココを尻目に、退屈しのにぎに携帯の画面を見ると六時過ぎにまでなっていた。

いつも学校から帰った後、落ち着いてからココの散歩に出かけると、通常通りで四時過ぎ位なはずなのに……二時間オーバーしていることになる。

二時間も無駄に過ごしてしまった事に溜息が出ってしまった。  
なるほど。携帯を開いて眩しいなんて感じる訳だ。辺りがその分暗い。

「陽が落ちるの早くなってきたなあ」  
夜空にも夕空にも成りきれていない中途半端な空に顔を向けていると、妙に辺りが静かなことに気が付いた。

お陰で来た頃にはココと遊んでくれる子供達はママの手を取って帰ってしまった。

こうやってココと散歩をする度に、そういった光景を目にする。泥まみれになった子供に微笑んでいる親や叱る親。公園で知り合った友達を紹介する子供。いつの間にか親同士も仲良くなって……輪が広がる。

そして、泥だらけになった我が子の洋服を払いながら、暖かそうなママの手に小さな自分の手を添えて満足気に帰っていく。パパがいれば肩車かな？

ちよつと羨ましいな……。

この歳になんてそりやないだろうって思うけど、その暖かさを知らない私はいつまでも当たり前な暖かさを追っている。

どんな気持ちになるんだろう。嬉しくなるんだろうか。

うちの親は仕事仕事で構ってくれなかったから……。

本当に忙しかったのかってというのはもう不問だけど、さ。

ママに抱きつたりとか、手を繋ぎあったりする光景を見ると、無性に微笑ましくなったりする。妬ましくとか寂しくなるとか。昔はその言葉一つだけだった。

今は全て通り越して、姿は小さいけど大きく映る子供の笑顔がいつまでも続いていたらいいなって願ってしまう。

おっと、しんみり。

パンッ……！



景気付けにベンチに座っていた私は、両手で太ももを叩く。

しょうがない。

遊び相手がいないのなら、久々に夜の公園を満喫するか!!

再び今度は膝を叩いて立ち上がると、ココの居るであろう場所に歩んでいく。

予想していた通り、滑り台の次にブランコの順に遊具を過ぎて歩いていく。

目先の草むらの中にココはお座りをしていた。

いつも一人で遊ぶ時は決まってこの辺りにいる。

珍しく立ち止まったりなんかしてあまり元気にはしゃいでない様子。

まあ、仕方ないか……。

こつも暗くなってきた、遊ぶ相手が居ないんじゃないこのトラブルメーカーもテンションが落ちるってもんだ。

もつと早くに来ていればと、多少の申し訳なさを感じながら私は勢い良く同じ目線に座り、いつもより声を高く張り上げココの名前を呼ぶ。

「ココー!! おいであそぼっ」

「ワン」

ほら、途端元気になった。

思わず単純なココに顔がクニヤリと歪む。

あ、あれ？

おかしい……。

元気になつたって思ったのは気のせいだった。  
考えてみれば、いつもなら相手がいないと問答無用に私に駆け寄ってくる。

なのに目の前に私がいるというのに、見えていないみたいに辺りを拳動不審に短い尻尾を振り回している。

「ワンワン!!」

嫌な影が心を掠めると同時に時間差で私を見つけて駆け寄ってきたココをタイミングよく両手で抱きしめ拾い上げる。

「よしよし! …… ってちよつと。これじゃ遊んでないじゃない」  
ココが喋る訳がないので、一人突っ込みだけが辺りを木霊する。

いつもなら、それでも元気な声が聞こえてくるはずなのに……

…?

「……………」

「ココ?」

「コ、ココつてば」

いつもの見上げる瞳がなかった。

私の腕を撫でるくすぐったい程のフサフサな尻尾が揺れていなかった。

いつももかく小さな短い手足は反応のないまま、下へとつな垂れている。

私の大好きなクリンクリンとボールみたいな黒い大きな瞳が私を見てないことに気付く。

「ちよつと、……………「ココ?」

愛嬌たつぷりのココの表情は確認するまでもなく瞳は閉じ、力が抜けたように伏せている。

「ちょっとココ？」「冗談よしてよ」

いつも天真爛漫で人の事を驚かせるようなじゃじゃ馬なココだけど、こんな冗談にもならないような悪ふざけはいままで一度もなかった。

さっきまで『ワン』って吠えて私の名前を呼んでいた。

……はず。

「ココ、ココ？」

顔色を窺がおつと、ゆつくりと恐る恐る腕を上げた。

途端、まるで堰を切ったかのように空気のはけ口を探して嘔吐した。

！！！！！！！？

「ンッ！！ ゲッ！」

今までに聞いた事のない異様な声をあげ、抱え上げた私の服を染めていった。

過労時で数ミリ開いていた瞳は伏せ、再び私の腕に全体重を預けるココ。

「ココ！！！！！」

やっとココを呼ぶ私の声に反応したかと思えば、何度も嘔吐を繰り返し、尋常じゃない程の息を私の服に吹き掛ける。

目の前の想像もしたくない現状に、伏せる黒い瞳や動かない尻尾を見てるしか出来なかった。

一台の車が公園沿いの外道を通る。

微かにこの場所から見える閃光にも似た車の夜間ライトが、私の

瞳を眩しさに掻き立てた。

ハッ！！！！？

瞬間。車のライトが現状把握に戸惑って、現実逃避を促していた脳裏を現実へと引き戻してくれた。

何が起きているのか分からない。

目の前の現実が変わらず、淡い呼吸になりつつあるココは、いつも元氣な可愛らしい耳をいつになく伏せ、劈くような吠えも出来ないその口元から再び異様な声をあげる。

どうしてココは苦しそうにしているのか今はそれはどうでもいい。

「とりあえず病院 ……！！」

独り言の様に自分に確認を入れると、ドクドクと鳴り続ける煩わしい位の動悸に胸を当て、一呼吸入れると私の焦点は合致した。

ゆっくりと体勢を崩さないようにココをベンチへと置くと、用意していたココ用のバスタオルを手提げから取り出し、そっとココの身体を包んだ。

嫌に柔らかく、そして冷たい気がした。

それを頭の隅に追いやると、体温を下げないように、痙攣が少しでも治まるように。

体温を温存しておけるように……そっと。だけど力強くココを腕へと包み込んだ。

バスタオルに包んでいるはずなのに何処か小さく私の腕の中に収まっている。

こんなにもか弱くて、小さな命……、が。

余計な事は考えたくないはずなのに、脳裏は何回も最悪な状態をシミュレーションし、反応の速度を鈍くさせる。

心臓がバクバクする。

足が震える。

声が詰まる。

「……ッ!」

何回襲われようと気になんてしてられなかった。

ここには人がいないんだ。

頼れるのは誰かじゃない……自分一人しかないんだ。

私がこの場の状況に取り乱してはいけない。

私一人しかない今、誰よりも現状把握をしておくてはならないし、冷静に事をすすめなければならぬ。

振るえたり泣き出したりしたらそのまま終わり。行動する力がなくなる。今の自分に後悔する。

足が震えるのをグツと指先とカカトで押さえ付け、笑えなくなっている青ざめている頬を赤くなるくらいに叩く。

「よし……」

行く先を見据え、再び腕に収めた後は私の行動は迅速だった。

「とりあえず、病院に連れて行かないと……」

ココの頭を安定させ、小走りに公園を出る。

把握してた訳ないこの事態を……だからいざと言う時のために確認しておいた。

ココが具合悪くした時、通える近くの動物病院それは一つ。学校帰りにあるピンクの壁の病院だ。

受付終了時間までにはギリギリ間に合う。

公園を出る手前、備え付けの時計を確認すると益々急ぐ速度は速くなった。

「ハア……ハア」

段々ココの息が衣服越しではなく、耳元まで聞こえてくるようになる。

いつ、この息が途絶えるか分からない。そんな焦る気持ちを無理矢理気持ちの奥底へと押し殺した。

「お？ 神崎こんな時間に学校か？」

いつもの聞き慣れた自転車の音が後ろから出なく、前から聞こえる。

瞳をあわせる間もなく、学校帰りであろう先生の横を通り過ぎようつと歩を進める。

また冗談の一つでも言おうとしているのだろうか。

止まろうとする先生に低い声で制した。

「ごめん先生。今は話してる時間ない」

今は表情さえ硬かった。愛想笑いも、教室で向ける表情も取り繕ってられない。

ただ、今抱えているこの重みを失いたくない ……。

その一心で私は歩き続ける。  
もし、今この足を止めてしまうと多分、歩けなくなる。  
無意識に目の前のこの人に頼ってしまうだろうと直感していた。  
だから、呼びかける先生を尻目に急ぐ。

後ろでブレーキの音が微かに聞こえると、その気配は私の少し先で再びブレーキを掛けた。

「急用なんだろ？ 乗れよ」  
場に流されている様子もなく、私の瞳をただ単に見据え、自転車の後ろに指を差す。

冷静に何も言わず、先生は私の腕でグッタリしてるココを見ていた。

先生は抱えてるリュックをカゴに落とし、まるでクッション代わりと言わんばかりに今度は前のカゴに指を差す。

「この上にタオルごと犬を置いて……」  
「……っでも」

断る理由はいくらでもあった。

さつきから何度か荒い息を吐きながら幾度も吐ける状態ではないのに嘔吐している。

だから当然、タオルじゃ庇いきれてない。

断る理由……違う。違う……きっとそんな理由でもない。

「悩んでる場合じゃないだろ？」

荒い口調とは裏腹に、そっと私の手から受け取ると先生は静かにココを前カゴに置いた。

「いいからお前はさつきと後ろに乗れ」

焦る気持ちとは逆に宙ぶらりんになった空っぽの腕は、促されるまま私は先生の後ろに付いた。先生のこんな冷静な姿やここまでにかかった時間を考えると、普段の先生では想像できない程の身のこなしだった。

まるで別人になってしまったかのような大袈裟な印象を受ける。

自転車に足を掛けると先生の肩に腕を置く。上手く先生の肩を掴めない震えている手に無理矢理力を入れる。

「ダメだ……神崎、座れ」

やっぱり指示はいつもの先生の雰囲気と違っていた。

「でも……」

私は自分の着ている服を眺めた。

「躊躇っている場合かって言ってるんだよ!!!? 大丈夫だからさつさと座れ!!」

怒る先生は怖かった。誰だって怒ると怖いそれは当たり前のことなのに。

もう先生の言いたいことは分かった。

素直に自転車の荷台に座ると、遠慮する事無く先生の腰にギュッと腕を回した。

「よし!」

スピードを上げる先生の背中は、坂道を駆け抜けた時は気が付かなかったけど暖かい。

小さく震えていた私の腕にほんのりと指先から伝わる暖かさは紛れもなく、この目の前に映る大きな背中の人体温だ。

見上げることなく瞬きを忘れた瞳を伏せると、ただ冷たくなっていた身体が先生の温かさに交じり合っていく気がしていた。

右も左も分からない夜になったこの街中で……頼れるのは先生の



大きな背中だけだった。

### 31・無言のサイン

先生が急ブレーキを掛けた事によって、私は現実へと引き戻される。

十月の上旬。背中暖かさと夜の肌寒い空気が丁度交わる頃に、私は再び目を開けた。

ココの事を忘れていたわけじゃない。

今でも腕にこそいないが、ココの荒い息遣いが耳の奥に張り付いている様な感覚がある。

急ブレーキの音を聞くと、先生が降りた後に続いて私も荷台から腰を上げた。

先生の背中から離れてココを持ち上げた腕は、さつきよりも震えは治まっていた。

自転車で数分、学校から帰る道を辿ると動物病院はあった。

夜でも目立つピンク色の壁にクリーム色の屋根。極め付けに塀には猫、そして犬の絵がコミカルに描かれていた。

見た目は何処から見ても幼稚園の雰囲気を醸し出している病院だが、そのお陰で暗くなってしまった今でも目立ってよく見える。

こういう時のためのものなのか。明るい色を取り合わせた色彩に何故か安心してしまう。

そんな壁の中に描かれている犬はこっちに向かって微笑んでいた。そんな絵本に出てきそうなコミカルな塀を横切ると、外装に似合わない表情でココを抱えた私が足を踏み入れる。

日が落ちてから時間が経っていた。

自動ドアではなく手動になっているドアを、先生が私とココの分

まで開けてくれた。

その横を通り過ぎると、受付の女性の前に乗り出した。いきなり飛び込んできた私達を目を丸くしながら見つめる瞳は二つしかなかった。

閉院間近だった待合室には患者が一人もない状態で、ココを抱えながら私は立ち尽くしていた。

時は一瞬。目を丸くしていた受付の女性は私の胸に包まっているココを見ると、瞬時に診察室に繋がっているであろうインターホンを押した。

薄暗く店内を照らす、残り僅かな光も姿を消し始めた頃。

まだまだ現れては消えない私の中を埋め尽くす不安。

それが少しでも和らいでいるのは、先生が隣に立っていてくれるからかもしれない。

数分、吐く息が弱くなっているココを手放してからどれ位経つんだろう。

チツ　チツ　チツ

目の前で私と向かい合っている時計の秒針の音だけが聞こえる。

不思議に夜を表現してくれない窓の外から私はどう映っているんだろう。

不安そうな姿が夜の景色に映る度、ますます鼓動が高鳴る。

嫌な方向に纏まりつつある頭を、ゆっくりと瞳を閉じることで気持ちを切り替える。

再び瞳を開くと、向ける方向はもう決まっていた。

機械的な音を鳴らす時計から首を傾げる程度に移動すると、医師がココを抱えて入っていった診察室が目に入る。

皮地で出来ている冷たい茶色のソファーに腰を落ち着かせていると、飛び込んできた時より冷静になっていた。

掌に指先に暖かさが舞い戻り、一つ一つ追うかのように親指の方から順に指先を動かすと、脈が正常を取り戻ったことが確認できる。

一点しか見えていなかった瞳の視界は広がり、辺りの色が甦る。ソファーが茶色だった事から始まり、病院の壁が真っ白なこと。窓から見える景色は真っ暗で見えないこと。ゆっくりと開く掌が赤みを帯びてきている事。

視線を下に落とすと、薄汚れたスニーカーと一緒に二本の足はしっかりと地に着いている。

全て当たり前。

当たり前のことだけど、私の中では当たり前に動いていなかった。

そして、色を取り戻した世界には先生がいた……。

「少し落ち着いたか？」

挙動不審になっていた私に気が付いてか、久しぶりに先生の声が聞こえてきた気がする。

気が付けば当たり前に先生がいて、当たり前に先生の上着は私の身体を覆っていて、当たり前に震えは止まっていた。

先生が私の身体に乗っけてくれた上着が丁度良い重さで心地良い。「落ち着いたか？」

「はい」  
「そう」

会話と言うには成立しないあまりにも短い会話。

だけど、短くてもいい……少し時間が空いたら囁く程度に先生が話しかける意味。

返って来る声さえあればいいんだ。

素っ気無くても、冷たくても。一言でも二言でも。

私が正常でいるかどうか、声色でちよくちよくと窺がっている。

その短い会話の間に色んな事を考えていた。

色んな事……それは結論を言えば一つに繋がっていた。

今、私が考えている事といえばココの事。

他の扉よりも厚く造られている『診察中』と書かれたランプが点いている先に、今だ安否の分からないココが医師の診察を受けている。

私は掌を重ね合わせ、不安を溜息と一緒に吐き出す。

今にして思えばココは私にサインを送っていた。ココはいつもと変わらない振りしてはいたけど伝えてた。一目散に私の部屋に来なかった理由や、散歩の時に私を追い抜くその小さな足が軽やかでなかったこと。

自分の事にかまけて……気を配っていなかった。

暗くても明るくても散歩に出ればいつも跳ねて吠えているはずだったココ。

いつも一緒に連れ添っているからこそ、気付けるサインがあった。……あったのに。一体いつから見逃してたんだろう……。

冷静に考えると些細な事までそうだったんじゃないかって疑って考えてしまう。

もう、考えたって遅いのに。振り返って自分を責めたって終わってしまった事なのに……。

後悔する程に手遅れなこと。なのに、倍に自分を責めてしまう弱い私だ。

先生の体温を感じる中、瞳を伏せていると、目の前の固く閉ざした診察室のドアが開いた。

まるで、目でも覚めたかのように正面を向く。皺一つ無い白衣を羽織ったメガネの初老の男性が扉から現れた。

「……先生!!」

説明されなくても分かる。この男性がココを診てくれた医師だということ……。腰を上げると切羽詰った表情で駆け出す。

そんな焦っている私とは逆にゆっくりと診察用マスクを口から離す。

その時にはもう、私は医師の側まで駆け寄り言葉を待っていた。

「何度か嘔吐があっってビックリされたでしょうが……大丈夫。命に別状はありません。ただ多少、体力が低下していますので。そうです。一週間程、当院で預からせて頂きますが」

落ち着いた口調が信用できる気持ちにさせてくれる。

淡々と話す医師だけど、私の押し掛かった重りを確実に軽くしてくれていた。

「よかった……」

ホッと胸を撫で下ろすと、まだ見えない向こう側。ココの居る病室へと視線を向けた。

きつと、今はぐっすりと眠ってるんだろっな……。  
そんな私の姿を見ていた先生も私の視線の届かない所で笑顔にな  
っていた。

「ただ……症状は随分前から出ていたはずですよ？」

一瞬だった。

「……」

「食欲がなくなってきたる予兆や、吠える声が違っていたりとか。  
日常と違うことをしていたり心当たりがあるはずです。見落としが  
ち事なので、申し上げておきますが。犬や猫、動物は言葉が話せな  
いんです。一緒にいる飼い主の方がいち早く見つけてあげないとそ  
のまま亡くなってしまったケースも少なくないんですから……」

分かってる。

誰よりも気をつけていたはずなのに、小さなサインを見逃してい  
た。

学校の友達や家族よりも長く一緒にいて、友達や家族よりも大切  
に愛情を注いでる。

正直に言えば、面倒を見てないなんて一瞬でも思われたくない。

「……はい」

悔しいし歯がゆい。

必死で握り拳を作り、怒りを抑えようとするけど震えが止まらな  
い。

医師の顔さえ直視出来ず、下を向くことしか出来なかった。

「……すみませんでした」

頷いて謝る事しか出来ない。

肯定する事しか出来ないんだ。弁解の余地なんてない。

どんなに愛情を与えていたとしても、注意深く見ていたとしても…… 事實はもう目の前にあるのだから。

体育祭の怪我もそうだけど、どうして正しいと思っただけで行うことがこつも裏目に出てしまうのだろうか。

『大人は』って連呼している私が、他の人から見れば『子供は』なのだろうか……。

今の自分は誰よりも小さな子供に見える。

こつやって、怒り所のない気持ちは『勉強をしたのに成果を得られなかったテスト』とかわりないのかもしれない。

「とりあえず今日は絶対安静ということだ」

医師は長い白衣を翻し、私と先生の側から離れた。

診察室のランプは消えたのに…… ココの顔を見て謝ることも出来ない。

でも、きつと私の大好きなビー玉みたいな瞳は今閉じたままだろつ。

それでも良かった。ココの薄茶色の毛並みを撫でながら側にいる。いつもの元気な声を聞けないし、驚かせようと飛びつかれることもないけど、一緒にいたかった。

これこそ人間のエゴかもしれない。

「……………」

自転車でドアの前まで来ていた先生と、手動ドアを出ようとする私と自然に目が合った。



「もう夜遅いから送っていくよ。家には誰がいるの？」

「……」

ゆっくりと首を振る。

「用事があつて出かけてます」

「そっか……。一人じゃ帰りにくいかと思つたけど。俺の帰り道でもあるし一緒に帰るか」

手動ドアの前の短い階段を下り、少しだけ先生の前に出る。

夜の姿を見せた見慣れた道は、街灯だけで私達がその場にいることを知らせてくれる。

動物病院の看板もいつの間にか消え、辺りから物音一つもしない。ピンクの外装とクリーム色の屋根が街灯に照らされ、うっすらと見えるくらいだ。

視線をゆっくりと道なりに向けると、私は静かに歩き出す。

数秒遅れて、後ろからは自転車を引く音が聞こえた。

いつも私の脇に付ける自転車は、私と同じ速度で同じ距離を保っていた。

傍から見れば他人と思えるほど離れてはいなくて、喧嘩でもしたのかと思えるような数歩離れた距離。

縮まることも無く、遅れることも無く……。

そして、決して横に並ぶことも無い。

病院から一回、右に折れると、そこからは少しの間一本道だった。私は少し頬を緩ませると、先生がいる後ろに身体を向ける。

「先生？」

ん？ と声はないが聞こえてきそうな表情で私を見返す。

そのまま後ろ歩きの状態で私は話を繰り出す。

「今日はありがとうございます。偶然でもこんなことになっちゃって自転車を漕いでくれたり、治療費とか払ってくれたり……」  
先生から先に足を止めた。

「何より、真つ先にココを受け取ってくれたこと嬉しかったです」  
見るにも耐えない状態だった。冷静であろうとすればするほど手足は冷たくなって。

何回も嘔吐して、そんな時に迷いもしない先生の掌が現れた。

その掌は躊躇いもせず自分のバックを前カゴに置き、ココを乗せた。

そして私を叱ってくれた。

「ありがとうございます」

たくさんのありがとうございますがありすぎて訳が分からなくなってきた。  
頭を下げる私の頭の中は様々なことが渦を巻いている。

もう一度お礼を言うと、先生の掌が頭に降って来た。

二、三回頭にはなく髪に触れると今度は先生が先頭になる。

「……………」

歩き出す先生に無言でついて行く私。

無言でも静かでも距離は縮まらなくても、私に触れた先生の手は何も言わず暖かった。

### 32・気付いてはいけない事

私の目の前、二、三步先を歩く先生の横には、本人愛用の自転車が軽快な音をたてながら夜の道を通り過ぎる。

その後ろから、先生がふつとした瞬間に振り返らないことを祈るように私は歩く。

時々、道路を横切る車のライトに目を奪われながらも映し出す光景は、夜に限りなく近い藍色の景色だった。黒が主体の先生の身体は、暗闇の中で大きく揺れる。

何も喋らずに足音と自転車の車輪の音だけが二人の存在を表わしていた。

「……………」

先を歩く先生の背中を見つめながら、気が付かない様に溜息を吐いた。

何を喋ったらいいいのか分からない。それが正直な気持ちなんだろう。

いつもみたいに、適当な何気ない一言を話せる心境じゃない。それは先生も一緒なんだろう。

悪戯に笑いかけられることもなく真っ直ぐ前を見据え、私の家を目指している。

ただただ、同じ速さで私と先生は歩いていた。

ここまで言っておいて何だと思われるかもしれないけど、この空気が嫌いではない。

率直に言つといつもの『つくっている』私ではないから……………。

何も口に出す事無く先生の後姿を見つめている私は今、一番自然だと思っっている。

あんな出来事があつたのに考えることすらない。焦る気持ちも無い。

自分が理解できない。

でも、何だかとても自然。

暗闇の中、呆然とこの空気に馴染んでいる私の目にあるものが入った。

「あ、先生……」

「ん？」

小走りで先生の所まで走ると、自転車を持つ側の反対の方へと回る。

「これ、洗ってきます。汚れちゃってるんで……」

自転車を持つ反対側の腕にはリュックが背負われていたのに気が付いた。

今回、ココを病院へと連れて行くために大活躍した先生の通勤力バンに手を伸ばす。

「いいよ。どうぞ買い換えようって思ってたから」

ポロポロだし……と言いたそうに痛んでいる部分を私に見せる。

「でもっ」

断られたことにショックもあり、躊躇っている私を見て笑う。

「え？」

「あ、いや。何でもない」

「何か……可笑的ですか？」

笑われることに釈然としない私は、まだ苦笑している先生の顔を見返したままになっていた。

表情だけでもう一度聞き返したけど、それは相手には伝わらなかった様で半回転するとあつという間に私の立っている方に自転車が回ってきた。

条件反射で下がってる手にハンドルが向かってきたので手に取り、改めて先生の顔を見上げる。

「これ、ちょっと持ってた」

えっ。持ってたって軽く頼めるほどのものじゃ……。  
言ってる側から駆けて行った。

すっかり暗くなってしまった中で一人で待たされる。

先生が何処に駆けて行ったのか。視線の先に先生は映っていた。  
手持ち無沙汰に渡された自転車を前後させていると、手入れしてある車輪が良い音をたてた。

「ほら！！」

グイッと私に預けていた自転車を自分の方に傾けるとハンドルが手から外れた。

近いにも関わらず、至近距離で私に向かって何かを投げってくる。

これで何回目だろうか……。最近よくあるシチュエーション。  
先生が私の側を離れてから向かった場所。  
辿り着く前に分かってしまった自転車を預けた意図。

自動販売機で変わらず。いつも冷えたオレンジジュースを買ってくる先生。  
でも今回は違っていた。

そう。もう、十月の上旬。

自動販売機の『あったかあ〜い』と書いてある赤いマークに誘われたのか。

先生はいつもの見慣れているコーヒーなんだけど、投げられて渡されたものはオレンジジュースではなく温かいココアだった。

片手に収まっていたホット缶を両手で包み込む様に握り締める。

「……あつたかい」

掌の広がる『温かさ』と違う『暖かさ』に安心する。

思わず目を閉じてまでそれを実感するのは、血の気の引いた私の体温には丁度良かったから。

今日、昇降口で見かけた先生がクラスの女の子にあげたオレンジ。それを何気ない顔で受け取った同じクラスの女の子の反応を見て、誰にでも当たり前前に奢ってあげているって思ってた。

けど、今回は違う。

私に背を向けながらコーヒーを飲み干そうとする先生の背中がわざとらしく見える。

オレンジジュースしかレパートリーがないように見えたが、そうでもないみたいだ。

今回のココアは何処か意味が籠っているような気がした。

ゆっくりと開けると、口の中に含む。

喉に通さなくても感じる。久々に飲んだココアは口の中いっぱい甘さが広がった。

消えない甘さが何だかいとおしい。

更に次を欲しがると、甘さは倍になって喉を通っていった気がした。

「あ……やばっ」

小さく声を漏らすと、背中を向けている先生にも関わらず、私も背を向ける。

「ん？」

この体勢に疑問を感じたのか先生が振り返り、さっきまでとは逆の体勢になってしまった。

夏だから冷たいジュースとか、冬だから暖かい飲み物だとか、私が女だからとか生徒だからとか大人だから子供だとか。

そんな常識に関係なく、一番にその人に対して必要なことをしてくれる。

予想外の優しさが私のリズムを狂わせていく……。

初めは苛立った。非常識だとか軽々しい人だとか不平不満は山のようにたくさんあったのに。

信じられないと疑ってかかっていた気持ちがボロボロと崩れ落ちて、一番嫌っていた先生の不調和なリズムに安心し始めている自分がある。

空気を張り詰めることに専念する。

私の中で『警告信号』が出された。

「先生。今日はどうもありがとうございました……」

「それはもう聞いたって」

空のコーヒーを片手に苦笑気味の先生は振り向いた私を見て安心した顔になる。

身体のだこかがチクツと刺された様な気がした。

「もう平気です。ここからは一人で歩けます」

「一人でつて……。帰り道一緒」

先生の言葉が言い終わる前に足が家のある方向へと駆け出す。

「それじゃ……。先生、また」

生ぬるくなってしまったココアが入っていた缶を握り締めると、呼びかける先生へと振り向く事なく走る。

「……………」

気付いてはいけない。この優しさに……。

気付いて振り返ってしまったえば今までの自分が無かったことになる。ううん。無くなってしまう事になる。

振り払う様に追っかけてこないように全力で走る。

後で思えば。相手は自転車だということも忘れて、自分を抑えることに必死になっていた。

自分を抑える。何を抑えている？

それさえ抑えることで自分であるうとする私にもう、余裕がないとということを確認させられる。

一度癖になると止まらなくなるこのココアのように……。

甘さが病みつきになってしまえば、そこからは埋もれるしかない。二度、三度と喉に通す度にその甘さに気が付かなくなってしまふ。最初はあるに甘かったことも忘れて当たり前になる。

甘いのが苦手でも好きでも、慣れてしまえば普通なんだ。



最近感じる心のチグハグ。  
きつと予想だにしない先生の常識はずれの言葉がここまで狂わせ  
るんだ。

前任の木村先生も千佳も美弥も、誰も私の予想を反する対応なん  
てしてこなかった。

予想の範囲内にいない先生に、私はどうすればいいんだろう。

「はあ……はあっ」

いつも決められた優しさは、私のイメージどおりに運んでいた。  
なのに先生だけは違う。

壁で仕切られている向こう側の『私』をいつも何処でも見続けて  
るんだ。

明るくもなんともない。過去に縛られた情けない私自身だけを…  
…。

余計な詮索をする私が大嫌い！！  
頭の隅っこで、違う自分が叫んでいた。

以前の私とは違う心のチグハグに行動がついて行かない。きつと予想だにしない先生の常識外れな言葉がここまでさせているんだ。

木村先生も千佳も美弥も。誰も私の予想を反する行動なんかなかった。

目の当たりにする予想通りの反応に……安堵と失望の毎日。表にある笑顔の自分と、裏にある素顔の自分とこれからも、それこそ死ぬまで合間見えぬまま過ごしていくんだと思ってた。

「はあ……はあ……」

走って走って。激しく出入りする息と一緒に心の端から入り込む感じたこともない圧迫感に益々息苦しさを増徴させる。

息を吐いて、そして吸って。

幾度と繰り返ししても……脇から打撃を与えられたかのようにグツと締め付ける。

いつも決められた優しさに、表面で作るイメージ通りに事を運んでこれていたのに先生だけは違う。

壁で仕切られて、見えないようにしている向こう側の『私』をいつも見続けてるんだ。

それに怯え、警戒し、軽蔑し……無意識に拒絶する。

厚く造られた壁の向こう側は、明るくもなんともない。

幼い過去に縛られた情けない自分……。

「はあはあ……はあ〜っ」

深く息を吐く。

頭の中は高速で渦を巻いていた。何を考えているのか、思っているのか。

それも全て渦の中に巻き込まれ、結局は何を悩んでいるのか分からなくなってくる。

渦は私の身体全体を包み込み、走りきった足をも振ら付かせる。

目に写るものは暗闇の中で、自動ドアをすり抜けようとするガラス越しに映る自分だ。

今、時刻は夜を迎えているから表情は分からない。

暗闇に映る私はどんな顔をしているんだろうか……。

ううん。別に見なくてもいい。確認したところで私には奪回策がないのだから。

パタン……。

玄関を開けると、カギを閉めず無造作に靴を脱ぐ。

簡単に脱げたローファーに振り向きもせず、揃えないままカバンを玄関の脇に置いた。

とにかく落ち着こう。

玄関で点けたオレンジ色の電球のみで、明かりを点けるのも忘れて冷蔵庫を開ける。

「ただいま。ココ」

冷たい麦茶を取り出すと反対側にあるグラスを取りながら無造作

に名前を呼ぶ。

「ココ？ あっ……………」

麦茶を注ぐと腕が力なく下がる。

そうだった。今、ココはいないんだった……。

「……………」

うつすらと見える辺りを見渡し、改めて感じるいつも迎えてくれる筈のココが……………今はいない。明かりが電球だけのせいか。一段と寂しく見える。

いつもは溜息が出る位に荒らされてるのに……………。

学校で帰れない時が大半の中、帰って来るとココの足らしき跡に沿って水浸しになっていたり、テレビのチャンネルや新聞とか郵便とか、引っ掻き回されてるはずなのに……………。

扉を開けて見上げたりリビングは、綺麗に整頓されてて私が学校に行った時のままだった。

いつも座っている椅子に触る。暖かいはずの椅子が、今日は冷たい。

「……………」

今、この家には誰もいない。私は一人なんだっていうことを知る。何処に置いたのか分からなくなった麦茶を飲むことを忘れ、我さえも忘れる。

ココの餌皿が目につく。

「……な、なんで」

少し座高が高いダイニングテーブルの横。

丁度、私とココの椅子の間にある皿、いつもそこが決められている位置。

空になっているココのご飯皿が瞳の奥さらに奥深くに映る。いつも綺麗に食べ終わっているお皿が ……。

半分も減っていない……い。

「なんで私、気が付かなかったんだろう」

一瞬だった。

足の力が無くなり、脱力感で身体が支配される。

全身の力が抜け出るかのように座り込んだフローリングの床は、冷たいばかりでなく、明かりを点けていないのでまるで底の無い闇のように部屋を演出する。

医師の言葉が脳裏に浮かんだ。

『犬や猫はもちろん……動物は喋れないんです。だからこそ飼い主の方がいち早く見つけて頂かないと ……』

家の至る所に無言のSOSはばら撒かれていた。

私がそれに早く気付いていればあんなことにはならなかったのに ……。

一番近くにいる筈のココがない。  
玄関を開ければ、問答無用に飛び掛ってくるあの暖かさが無い。  
座っていれば寄り添ってきて、扉を開ければついて来るあの無邪  
気なココがない。  
散歩と吠える耳を劈く様に鳴くあの声が聞こえない。

私は、それを全て失くすところだったんだ……。

病院から帰るまで少し元気だったのは、診察してくれた医師のあの言葉を鵜呑みにしていなかったから。  
確かに私の注意が足りなかったのは事実であり、言い逃れはできないと思っていた。

だけど反抗心があった『貴方に言われたくない』って……。

目の前に映し出されている真実は、医師が言っていた事そのものを物語っていた。

言われるのと、目の当たりにするのとでは訳が違う。  
言葉として耳で聞くのと、心で感じるのとでは訳が違う。

それを受け止めてしまったこの部屋で……。

『それで亡くなってしまうケースも少なくないんですから』

一人ぼっちでいられるのだろうか。

言われたことの重みを知った。

大事にしているものが忽然といなくなってしまう事の意味。

私は誰よりも理解しているのに……変な意地や下らないプライドで聞かなかったことにしてた。

瞳を開けば感じる。暗闇の中での恐怖に顔全体を覆う。涙こそ出ないが、立つ力が無い。肘が震え、膝が震え、言葉も出ない。

カツン……。

音の無い静かな夜に、普段は聞かない軋む音を立てながら扉が開く。突然、眩しい位の線状の光がフローリングに座り込む私の前に明かりとなって現れる。

「!?!?」

お母さん帰ってきたんだ。

震える腕を抑えつけ、一気に緊張が走る。

鏡を見なくても分かる青白くなっているであろう顔は、必死で前髪を下ろし顔を隠す。

今は、冗談でも笑顔で取り繕えるほどの力が頬に残っていない。

「やっぱり」

玄関から見える外の明かりが逆光となり、シルエットになってい

る立ち姿。

聞こえてきたのは、私より少し甲高い聞き慣れたお母さんの声じやなく、もつと声が低い。

朝や昼間に聞き慣れた。トーンが低く、でも決して籠っていない声。

下校時間。後ろから声を掛けられることに慣れてしまっているその声の持ち主の把握は急がなくても分かった。

「やっぱりさ、まあ。まだまだこのリュックも使えそうだし……神崎に洗ってもらおうと思つて追っかける様に帰り道に寄らせてもらった」

すんなりと耳の通るその声は今、私が何をしているのかなんて聞かない。

暗闇の中で座り込んで青白い顔をしている私に『どうしたの』なんて聞かない。

「俺はこれでも物持ちいい方だし？ 使えなくなるまで使つてやるうと思つてさ。なんて言いながらも、残念ながら正直……引越し資金で金がない」

いつもと変わらない。

自分中心ばかりの話で何がしたいのかが分からない。

「だから」

と、言いながら勝手に人の家に入りこむ。

軋む床に喋るのを止めないシルエイトで映し出される人影。

近づいてくるその姿は紛れもなくさつき別れたばかりの先生だった。

先生だということを確認したのにも関わらず、私の瞳は先生から



目が離せない。

「不法侵入って言うなよ？　俺は先生で担任でお前は生徒だ。これも立派な家庭訪問だ」

さつきまで守っていた沈黙は、訳の分からない笑みを浮かべる先生の御託でことごとく打ち消されていく。

「この姿見たらクラスの誰もがびっくりだな」

それをただただ見ているしか出来ない私。

先生をただ見ているだけなのに頬が緩んだ。先生の顔を見たら涙腺も緩んだ。

どんどん溜まっていく涙は掌で拭う事無く、ゆっくりとそのまま頬を伝う。

何度か瞬きをした頃には、もう止まらなくなっていた。

何か言われた訳でもない。考えていた訳でもない。

ただ『この状況』について触れてこない先生に涙が溢れた。

その涙に戸惑いも、焦りもしない私の瞳にぼやけながらも映る先生の姿。

目の前で膝をつく先生が、私の視界に映る最後の姿となった。

「……まあ、いいんじゃないか？」

先生が近づきすぎて視界がまた真っ黒になる。

生徒の涙を見て微動だにしない先生。

「神崎らしくて……」

……らしい。

その言葉にしっくり来たのは初めて。

『その言葉』は何処に引つ掛かる事無く、心臓に降ってきた途端に浸透し、涙となって流れ落ちる。

私の頭をポンポンと二回叩く。

そして流れ落ちる涙を拭う事無く、そのまま私の身体を自分の胸に引き寄せた。

前もあつたこんなこと。

戸惑う事無く慰める事無く。涙を止めようとするのではなくただ、許された時間。

瞳を閉じると倍になって感じる体温は心地よく、触れる肌から体温が伝つていく。

あまりにも静かで心地よくて、これが本当の自分なのではないかと勘違いさえしてしまいたいそう。

勘違い、なんかじゃない。

こんな夜は一人ではいられなかった。

知らないフリをしているけど気が付いている。私は一人になるのが何よりも怖い。

一人を誰よりも望んでいるけど、誰よりも一人を望んでいないのは私だ。

その隙間を埋めてくれてたのがココだった。

今日。その隙間を埋めてくれたのはココでもなくユキ君でもない。  
ココアより暖かい……コーヒーの匂いがする先生の腕の中だった。

### 34・滅入ってたって始まらない

あれから……じんわりと伝わる体温と鼻を擦るコーヒーの匂いに包まれて、どれ位の時間が経ったのだろうか。

時が流れているのは分かった。夜が深くなっていくのも瞳の奥で感じた。

だけど、瞼を閉じた時に流れる涙が、時が経つのを邪魔して、告げる感覚を鈍らせていた。

とても一人じゃいられなかった。

先生の心地良い体温で冷たい涙さえ暖かさを感じられた頃。

ゆっくりと先生は自らの身体を離れた。

まるで今、時間が動き始めたかの様に……改めて先生から視線を背けてしまったら気が付いた。

足が、手が痺れて動かなくなっていたことを……。

脳裏だけでなく、身体さえも時が経っているのを忘れていたようだ。

動かすと電気でも通ったかのように、小刻みな波の様な刺激が身体を通り抜ける。

しばらくの間、同じ体勢でいたせいか足が痺れてしまっていた。思わずしかめっ面をしていたら、先生も同じような顔をしていた。そんなお互いを見ながら間抜けだって笑いあった。

お母さんが帰って来る前に、先生が言う『家庭訪問』が終了した。いつものように心臓が、冷たくなっていた足が手が、暖かくなっ



次の時間の準備をする色白の腕は止まり、見上げる瞳は私から離れない。

「お粗末さまでした……」

一仕事を終えた私は机に乗せていた足を下げ、椅子に両足を揃えらるとお辞儀をする。

「ふっ……何それ？」

あまりの可笑しさに頬を緩めて笑う美弥に、私自身も満足気に笑う。

「まあ、とりあえず痛い視線の的になってるから、座れば？」

指だけで美弥は合図を送ると、それに従って私は椅子へと腰を落ち着かせる。

確かに教室中の注目の的となっていた私。

だが、座ったことによつて視線の数が一つ。また一つと少なくなつていく。

そして、通常通りの教室に戻った。

「んで？ 何……その久々のテンションは」

美弥も気が付いていたのか。久々だつて事。

「これから文化祭だし。まあ、落ち込まないで元気を出そうということ……」

他愛ない話と言わんばかりにいつもの笑みを浮かべながら私を見ていた美弥が一瞬、顔が固まったような気がした。

「落ち込んだの？」

「色々あつてね」

ふーん……つと。興味ない感じで顔を窓に向ける。

視線を追つたそこには次の時間にハードルを使うのか、学年は分らないが生徒がハードルの準備をしていた。

「何？ その反応？」

「え？ あ、智亜美でも落ち込むことあるんだな〜あつて」

「私だつて人間だし、落ち込むことあるのっ！！」

そう力んだ私の目の前で美弥は普通だった。

「それはともかくとして……今は文化祭よ文化祭！！ 実行委員にはならなかったけど体育祭より盛り上がること間違いなし！ うちの場合は贅沢にも後夜祭もあることだし、今まで言えなかった心の奥に閉まっていた気持ちを告白する季節でもあるのよ。大いに盛り上げてやるうじゃない！！ 秋は短し、恋せよ乙女！！」

片手に握り拳を作りながら私の気合は充分すぎる程に入っている。

「それいつの時代よ。今は季節なんか関係なく言ってる人は言うてるって……」

だって、なんか今はとりあえず騒ぎたい。

別に辛いことの後だからって訳じゃないけど……忘れたいっていうのはあるのかも。

まあ。現実逃避にしかならないんだけどね。

一人になると、思い出すのは決まっている。でも私はそれから逃げたりはしたくない。

向き合っていかない。同じ痛みを繰り返すのは真っ平ごめんだから。

だから今は、栄養補給みたいなもの。

また頑張るぞっ！ みたいな……。

「ねえねえねえ！！」

私達が座っている席からは見えない。

振り向いてやっと分かる教室の角から、誰を呼んでいるのか分からない声が教室中に響き渡る。それが、私と美弥を呼んでいる声だ

と気付くのは、三回位聞こえた後だった。

近づいている声に首を捻りながら視線を追うと、今日も元気満々の千佳が立っていた。

「さっき聞いたんだけど、うちのクラスの文化祭の出し物が決まったんだって。聞いた？」

美弥と顔合わせるだけで返事もしていないのに、せっかちな千佳は聞いてないと判断したのか声を大にして言い放つ。

「今年はホスト喫茶みたいだよ!!」

また、お互いを見合わせる私と美弥。美弥もなんか言いたいことが同じかもしれない。

それはこの間。下校する時に予想した出し物とまったく一緒だったから。

興味あることで、面白そうで、今のニーズに沿っているもの。

うーっーん。でも、正直つまんないかも……。

だってホストって言ったら男が主役じゃん。

女子出番なし……って言ったら必然的に飾り付けとか裏方ってことになる訳だ。

「しかも男女が逆になるらしいよ。ホストの格好するの女子らしいんだよね」

「え？」

「まあ。初めはもちろん男子がって思ってたんだけど。なんだかんだで提案したら女の子の方が受けがいいし。しかも、この企画を反対する男子がほとんどで。んで、逆に妙に女子が乗り気でねえ。だったら女子がホストの格好しちゃおうと」



なんだ。この今の時代に合った企画。

詳しくはないけど、今はそういうお店も流行っているってよくユースでも言われてるし。

誰かの陰謀なんじゃないかって疑っても不思議じゃない。

「じゃあ、男子はどうすんの？」

「ホストするくらいなら裏でいいって考えみたい」

何気にこのクラスは男子より女子の力の方が強いから押されたのかもしれない。

へえ……。

一見そうは見えないけどシャイな連中だわ。

半分は面倒臭いんだろうけど……。

頬杖を突きながら千佳の話を聞いていると、私と美弥を交互に見ていた千佳が、いつの間にか私一人を見つめている。

「んで、どうする？」

「え？」

当然かのように。見当もつかない問いかけをする千佳に、逆に聞き返す。

「え？……って決まってんじゃない！　なんでチャミに早く教えてたと思ってるの。案を出してもらったためじゃん」

「あ、案？」

これまた当然かのように言い放つ千佳。

あまりに突然のことで、意味が理解できない私の脳裏には平仮名となつて現れる。

『あん』っていうのは饅頭の間に入ってる小豆のことじゃないよね？

『あん』っていうのは、考えとか意見とかを述べなさいってことなんだよね。きっと。

そう言った意味なら、実行委員が皆にする話じゃないの？

先生に言つて、帰りとかに時間をもらつて皆で決めてもらえば…。

その時、丁度千佳の直線上にある文化祭役員の顔を覗くと、あつちも私達の方をチラチラと様子を窺っていた。

なるほど。千佳……遣わされて来たんだ。

「はあ……」

思わず溜息が漏れる。

目の前で向かい合わせになっている美弥は目線だけを私に向け、気が付いたような感じがしたが、千佳は気付いてないみたい。

意見を出すぐらいなら平気……か。

自分だって頼りたい相手に拒否されるとショックだし。

何より、体育祭の時に手伝ってくれたのはこのクラスなんだし。

恩は恩で返すのが私の生きていく流儀。

千佳を間に入れないで自分達で私に言いに来て欲しかったって思うのは私だけかな。

意味の分からない言葉で無理矢理に頭の中で言い包める。

「やっぱり無理？」

千佳が眉を左右に下げながら私の顔を窺う。

バンツッ！！

机を叩き、再び立ち上がる。

「よっしやっ！……！」

誰に宣言する訳もなく、目指すは更なる高みへと指を突き上げる。

「盛り上げてやるっじゃないの！！」

言った私に向かって美弥と千佳が拍手！！　と言う展開のはずが

……。

パソコンッ！！？

「ったあ！！！」

一瞬、把握が出来なかったものの。頭に降ってきたのは世界史でよく使う地図だ。

と、言う事はだ。

あの、埃っぽい社会化準備室から持ってきた埃まみれの地図な訳だ。

「神崎……うるさい」

次の授業はいつの間にか始まっていた。

いつの間にかチャイムは鳴り終わっていて、周りで様々な話に花を咲かせていたクラスメートはまるで、私が悪い事をしたかのように白い目で見ている。

頭に降って来た埃を掌ではたくのと、痛みを和らげるために撫で

ている私の腕は、役目を果たしたにも関わらず、行き場もなくいつまでも頭を摩っていた。

気配が感じる後ろには、先が異様に凹んでいる地図をポンポン叩く狩屋先生。

そこか。そこで殴ったのか。その凹みは私の頭の形なのか……。

そして酷いのが、先生が入ってきたのに気付いたのか。

席についてる千佳は私の姿を見て声を殺して笑ってやがる……。

「……酷い」

どんなに千佳を睨んでも時すでに遅し……許しを請うしか手段は残されてなかった。

「まあ、神崎が世界史を盛り上げてくれるみたいだから」

う……っ。とんでもなく嫌な予感がする。

「そりゃもう、期待に込えてくれそうだな」

閻魔<sup>エンマ</sup>再来とはこの事だ。

決して視線を合わせない先生の瞳は、迷う事無く教卓に向けられる。

ポンポンと軽快にならす世界地図を叩く音が、死へのカウントとでもいうのだろうか。

普段は何でもない授業に使う道具が、今だけは違うように見えていた。

「そうだな。指名率百パーセント……回答率百パーセント。当然。正解率百パーセント」

ブンブンブン……!

機械的に。でも力いっぱい首を降るんだけど、背を向けている先生に見える訳もなくて。

皆の目にだけ写っている私は一人、馬鹿な訳で……。

「って訳で神崎!!」

頭を殴ったその地図は迷う事無く私に突き出す。

綺麗に丸まっている地図の向こう側に先生の意味有り気な微笑が見える。

せ、先生教わりませんでした？

人を指してはいけませんって……。

「……………はい」

成す術も無く、そのニヒルに笑う先生に逆らうことは出来ないのだ。

……………私は気づいていた。

違う。知っていてももう良い筈だ。

どんな私を見せても、先生が先生で変わらないこと。

日常と変わらない先生とのやりとりに、思わず上の空になってしまった。

それに気が付いてか。

間髪入れずに何時ぞやか、練習してレベルが上がったチヨーク飛ばしが私のオデコに命中することになる。

### 35・意味深?

学校での日々が一日終わり、必要な分だけカバンへと物を詰め込むと急いで教室を出た。

だって今日は待ちに待った病院で療養していたココを引き取りに行く日なんだもん。

あれから何日か入院する必要があつて、そして予定通りに一週間程は病院で診てもらった。だから、階段を下りる私の足も軽やかに二段飛ばしをしてしまう訳だ。

あまり物を詰め込んでいないカバンが、バサバサと音を立てて私のリズムに合わせては肩に落ちてくる。

ピンク色の屋根にクリーム色の壁面を発見。

そして今は素直に楽しそうと思える動物病院の門構えを通り過ぎると、コミカルに描かれていた仔犬や仔猫を笑顔で見送った。

今は目の前でココの面倒を診てくれた主治医の先生から話を受ける。

そして、診察室で説明を受けている私の隣で当たり前のようについて来ていた先生。

誘ったのは私……色々と迷惑掛けたから見届けて下さいという意味を込めて。

職員室に行こうと二段飛ばして駆けていたら、ぶつかりそうになった先生と出逢って引っ張ってきた。

「まあ。こんなところで大丈夫でしょうね」

冷静でそして優しい瞳の主治医の先生は、ゆっくりとカルテを閉じる。

「ご案内しますと言わんばかりに手を広げると私達は席を立った。

細身の中年主治医が白衣を翻し、ココがいる部屋へと案内をした。扉を開けずに主治医は近くにいる看護婦さんに一言一言と言いつけると、次の患者さんの元へと足早に通り過ぎていった。

「あ、そういえば……先生」

先頭を切って扉を開けようとする手を止め、あまり詰め込まれているとは言えないバツクの中を漁りながら呼び止める。

そう、学校の階段で二段飛ばしの被害を受けていたあのカバンだ。後ろにいた先生は、顔だけで話の続きを促していた。

バツクの中から更にバツク。おかしな光景になっているけど、ただそれを黙って見つめる先生。

「これ……洗ってきました」

「おっ！ マジで！？ サンキュ」

「多分、汚してしまった分は落ちたと思うんですけど……」

先生が洗ってくれて言っていたリュックを忘れないように手渡した。

洗濯機に何回かリュックだけを入れて回した。

匂いが残らないようにと重ねて洗ってしまったせいか、洗剤の匂いがほのかに香っている気がする。でも、洗い立ての匂いだからって悪い気はしないだろうと持ってきてしまった。

って。

「あ。えっと……後。これ……なんていうか、今回のお詫びに」



洗剤話はこれでいい。

二回洗おうが、三回洗おうが。実際はどうでもいい話だ。ここからが私の未知の領域だ。

ほのかにお日様の匂いがするリュックの後に、微かにバターの香りがするものに手を付けた。

お詫びにと思って、昨日一日中考えた。

頭を抱えて考えた。お陰で考えた分、重い気がする。いや、重たくはない筈だ。

だって、よくあるパターンだからコレにした。

漫画でだって調理実習で、仲の良い友達とかにあげてるじゃないか。

定番。そう世間一般として定番と認識されている手作りのクッキー。

先生がリュックを受け取った後に、間髪入れずにクッキーを宙へと差し出した。

その光景を後ろで見守る看護婦さんが見つめている。

「へっ？」

「ちよつと先生。恥ずかしいんだから早く受け取ってくださいよ！」

生まれてこれまで十七年間。そんなことした覚えがない……誰かに『手作り』なんて。

だって、クッキーみたいに食べて消えるものじゃないと、後に残るものを贈るのってなんか意味深みたいだし。

それになんか。他かだか先生を相手に何千円って悔しい気がするし……。

だって所詮。自転車通いの先生だし……。面倒くさがりの迷惑な

先生だし。

それに『手作り』っていうのも少し気が引けたけど、市販のものってなんか妙に綺麗に包装されててそれもまた意味深だし。変に花が散りばめてたりとか。ハートがでっかく書いてあったりとかかなり意味深。

とにかく目に付くもの何もかも意味深に見えて。

意味深意味深って言いながら、過剰に反応している自分が一番に意味深な気がして。

別々に渡して、こんなシチュエーションを二度も味わうのが嫌で、不自然だっと思って思ってる内にリュックも渡すの遅くなっただし……。

この瞬間。私の脳裏は今まで無い以上に高速回転してどうにかなりそう。

下へと俯いている私や、震えている手や、先生の反応とか。

何よりこの心臓のバクバクが意味深で意味深で意味深で……！！！！！！

「だあ~~~~っ！！！！！！ もう、早く受け取ってよ！！！！」

いきなりの私の大声にビックリした先生……の隣で付き添い出来ていた看護婦も驚いた表情でこっちを見ていた。

受け取ろうとする先生の掌がまるで、珍獣にでも触る様に怯えている気がした。

「あ、ありがとな？」

やっぱり、慣れない事するんではなかった。

『渡す』か『渡さない』か昨日一日中考えて、半日はその選択を下せずにいた。

『渡さない』……の方が有力候補だったのに、寝る寸前になってキッチンに立ってしまった。

止めといた方が良かったのかな？

こんなにも先生の顔が見れないなんて……。

大体こんなことに無縁な私に、渡すタイミングとか分かるわけないちゅーに!!

右へ左へと向きながらも、先生と目を合わせないように視線の先を駆けずり回る私に、先生はこれまた意味深に微笑んだ。

なんかやつぱりムカつく!!

「まあ。なんだ……。こんなことしてくれなくも良かったのに。俺はあれだ。神崎と夜中に抱擁が出来ただけで勝るものはないと思っ……グゲツ!!」

どんなワザを身に付けたのか。

先生の軽口を肘打ちで受け流す、勢い良く扉を開けた。

「ココ~~~~~~~~ツツツ!!!!!!?」

用は済んだとばかりに開け放った扉の向こうには、私がココを見つめる前にココの身体は一直線に私の胸へと飛び込んできた。

きつと、外での私と先生の声が聞こえていたんだろう。

「ワン!!! ワン!!!」

再度、先生の足を思いつきり踏んづけ、愛犬ココの元に向かう。絶対からかつてるって分かったから……今の許せないセクハラ発言。

「ワンワンー!!」

思いつきり飛びついてきたココの力に人であるにも関わらずよるめいた。

それは何よりも元気な証拠で、回復した証拠でもあった。

このよるめきと、腕に掛かる重み。

抱きつかれた瞬間に鼻を擦るココの身体が何もかも懐かしかった。他かだが一週間。言ってみればそうなのかもしれないけど、私にとっては去れど一週間だ。とても、とても長かった……。そんな気がする。

「ココ……」

先生の存在を忘れココ一色になる。

頬擦りする私の横で聞こえる甲高いココの声。これがココの声だ。って頭が認識する。

「ごめんね……ごめんね？」

何回言っても意味が伝わらないのか、元気な吠える声が何回も木霊する。

完全回復の証拠に、私の肩をつたってココの短い前足がよじ登る。空振りしながらも昇った先、ココが見たものは先生だった。

上手く前足を私の肩へと着地させると、先生がココへと顔を近づける。

「ココ、久しぶりだな？」

キョトンとした瞳は先生を見ると、前足を私の胸の中に仕舞い込み顔を伏せた。

そして今度は頭ごと私の腕の中に潜り込む。

「さすがはココ！！ 分かっているじゃない。偉いぞ！！」

「仮にも教師に向かって失礼じゃないか？」

先生の声も聞こえず、私を見つめるビー玉の様なココと向かい合いながら私は力いっぱい撫でてあげる。

「って聞いちゃいないし……。おお〜い！ 次の世界史赤点にするぞ」

やっぱり聞こえてないと悟ったのか。先生は頭を掻きながら溜息をつく。

そんな呆れた溜息さえ、今のこの空間は優しさへと変えていった。

### 36・好き嫌い

ココを迎えに行った帰り、私は我が家に先生を招待した。

この前の家庭訪問の延長線上……って都合のいい解釈を自分で付  
けながら。

二、三軒先が先生の家だから先生も億劫ではないよね？ 多分。

「ほらココ！ 久々の我が家だよ」

腰を曲げて腕を傾かせると、前足が私の腕から顔を出し、ココは  
フローリングへと降りる。

自分の席と言わんばかりに一直線に一週間程ご無沙汰だったココ  
の専用椅子に飛び乗る。

「そついえば……親は今いないの？」

ココの姿を見届けてから靴を脱ぐためにかかどに手を掛ける。

「最近はおかけてる時が多くて……あ、先生そこ座っちゃってくだ  
さい」

席へと促し、座ったのを確認すると、グラスを二つ手に取りなが  
ら何かあるかと冷蔵庫をチェックするために先生の側から離れる。

だって最近。まともにはちゃんと買い物してないから……。

「いいのなあ？ 親の居ぬ間に男を連れ込んで」

「先生と生徒です。家庭訪問なんだから何の問題もないじゃないで  
すか」

冷静に答えると再び冷蔵庫に顔を入れる。

先生の魂胆なんか見え見えなんだから。

うつたえていたのがそんなに面白かったのか、癖になっているのか。

飲み物を決めると肘で冷蔵庫の扉を閉め、流れるように二つのグラスに麦茶を注ぐ。

「忘れていたようですけど……………」

ドンツッ！！！！

「私は先生が！！ 嫌いなのをお忘れなく……………」

グラスに七分目程しか入れていないのに、零れる位の勢いで麦茶を先生の目と鼻の先を通り過ぎテーブルへと置く。

「おお……………怖っ！！！」

驚いている先生の横を通り過ぎ、向かい合うように椅子に座る。  
嫌だった……………。

何回もそんな冗談みたいな口調で言われるのがとんでもなく。  
手にした麦茶をいつもの二倍に口に含んで喉に通した。

……………ん？ なんだ今の感じ。

がぶ飲みなんて慣れない事をしたからなのか。

喉から食道に通っていくのが分かると、冷静さを取り戻す事が出来た。

「ワンワン！！！」

「ごめん。ココもね！」

今の気持ちも立ち上がったなら何が何だか分からなくなった。

まあ、気のせいだろ。

さつきココの担当医から言われた『水分は初めは控えめに……』  
と言っ言葉を忠実に守り、少し蛇口を捻ると、ココの前にお皿を置  
いた。

「本当。弟に似てるなあ」

「弟？ ……男の子？」

私の何処を見てか。何故女性ではなく男性なのと突っ込みたくな  
った。

振り続けていた尻尾を床に静かに収めると、ココは嬉しそうに飲  
み始めた。

その始終を確認すると、そっとココの側から離れる。

先生の言った言葉が気になって私は向かい側の自分専用椅子に座  
った。

「弟って……先生の？」

入れた麦茶を私は改めて口中含むと、先生の言葉を待つ。

「神崎みたいに何にでも一所懸命な弟だった」

「……え？」

私が一生懸命？

それは違う。それはそう見せているだけ……。

自分の陣地を必死に守ろうとしているだけ。

聞きなれない言葉と、あまりにも見当違いなことに驚くと同時に  
違う疑問が口から出てくる。

「だった……って？」



「亡くなったんだ……。心臓が弱くて。それでも医者が言うには長く生きた方らしんだけどさ」

……………。  
飲んだはずの麦茶の残り香が口の中で残っている。  
嫌に静まり返ってしまったこの部屋でそればかりが気になった。

「俺が二十歳過ぎ位の時に……」

ここにも一人。見つけてしまった。

誰だつて大切なものを失くす日が来る。それが何年先か何十年先か分からない。

でも。この部屋で弟を亡くした話を……。一番の身近な存在でいた肉親を、さも楽しかった思い出かのように笑顔で淡々と話す彼がいた。

「弟はヨシタカつて言うんだ……。何とも馬鹿なアニキを差し置いて優秀な奴で、病室の扉を開けるといつも何かしらの参考書を開いていた。なんでそんな勉強ばっかするんだって聞いたらなんて答えたと思う？」

その笑顔が瞳から離れないで不思議そうに見つめていた私は、その質問に何も答えることが出来ない。

「やることがないから……。だつてさ！」

「そりゃそうだ。病室に監獄みたいに入れられて目を開けた時、見つけるものって言ったら花瓶と紙とペンぐらいだ。そんな中でもヨ

シタカは前向きだったんだ。勉強とパソコンが得意で。いつも体調が良い時はパソコンに向かった」

皮肉にも病室を『監獄』と例える先生は全開の笑顔だったけど、何故か痛々しく感じる。

「……………」

「そんな弟に感化されたのか……兄貴として負けられないと思ったのか。いつの間にか教職に就いてたって感じ？ あ、まあ？ 元がよかったって言うものあるけど。あいつに兄として、してあげられる事ってなんだって思う位にヨシタカは出来が良かった」

話し始めた最初とは違う。崩れない先生の笑顔が辛かった。

「まあ、そんな話はどうでもいいんだ。ただ、弟に似てるって話でしたかっただけで気にしないでくれ……な？」

話は終わりと言いたいのか先生は常温に戻りつつあった麦茶を一気に飲み干す。

いつも私とは逆で、自分に真つ正直で隠さない先生が、飲み干す事によって必死に自分の気持ち隠す姿が瞳に焼きつく。

「そんなに私、似てますか？ それは一生懸命だからって言いたいのなら」

言いたいのなら……………。

言ってしまうはこの日の私は、状況に流されてしまったのかもしれない。

ユキ君以外には誰にも話したことのない事を淡々と話し始めること自体、稀というかきつとこれからも無い事を今、話そうとしている。

いつも計算している私に、目の前の彼はどれ程の度量があったか分からない。

そんな簡単な計算を頭の中で答えを打ち出せないこの状況は、やっぱり流されているとしか言えないだろう。

「先生、言いましたよね？ いつだったか『笑顔でいる人ほど警戒心が強い人はいない』って。本当にその通りなんです。いつも笑顔で人の顔を窺って、でも笑顔で気持ち悪い位笑ってる」

……。

「一つ、聞いてくれますか？ 家の親って離婚してるんです。なんでか理由を聞くとビックリすると思いますよ？」

これは誰にも話したことのないこと。

とてもじゃないけどこんな理由、馬鹿らしくて……。

「小さい頃。私、ピーマン大嫌いだったから」

「え？」

「これが離婚の理由って先生は思うでしょうけど、重大な物事こそその発端ってなんともちっちゃな事で。こんな簡単なキツカケで崩れていくんです」

言ってる意味が分からないのか、黙って聞いていることしか出来ない先生を見つめる。

「あの時は小さかったから。今思えば……好き嫌いどうこう言う前

から終わってたんですけど。でも、私のピーマン嫌いな事から羨やら、自分が悪いんだって小さい頃はずっと思ってた」

「……………」  
「でも、その事件は私には大きかった。小さいながらにピーマンを食べれなかった私が悪いのかって一生懸命食べれるように練習した。そしたら笑ってくれるような気がして、お父さんもお母さんも元に戻ってくれるって……………そう。信じてた」

お腹いっぱいになったココが私の膝に乗っかってくる。そんなココを私は優しく両腕を上げながら迎えた。

「次の御飯こそは次こそは。ピーマンが出る時は頑張って食べてやる！ って。でも、私がピーマンを食べてる姿なんて両親はどうでもよかつたんです」

「一生懸命に笑顔で食べてる私の横で喧嘩はエスカレートしてた……………。完全に好き嫌いを克服した私の横には誰もいなくなっていたんです」

心地良さそうに寝息を立てるココが与えてくれる暖かさが心地良い。

代わりに私は、一、二、三回と上下に揺れるココの背中を優しく撫でた。

「そこまでに至ったのも、私が原因なんだけど……………」

「……………え？」

「いつだったか不意に、訳も分からず言ってしまったんです。この前の女の人は誰って」

あの時は他愛のない疑問だった。

でもあの時の目の色を変えた両親の目は忘れられない。  
我が子を見る目じゃなかった……。

ただ褒めたかっただけ。『綺麗な人だったね』って……。

『綺麗』とか『可愛い』って言葉を使うと嬉しそうな顔するから。

でもそれには使い方やタイミングがあるんだって思った。  
その時に初めて知った。

37・『美味しかった』と『今度な?』

「なあ〜んて!! 先生。お互い不幸自慢なんてしても意味ないですか?」

先生が昔の事を話してくれたから、話した私の事情だ。不公平は嫌いだから。これで五分五分になったと思う……。

そう。ただそれだけ……。

他人に暗い顔や居たたまれない顔をされてまで、そこまで誰かに何かを言ってもらおうなんて思っていないし……。この雰囲気は私に苦手だ。

どう話しかけたら良いのかわからない。

空気全体が固まっている様なこの感じ。

まるで、この部屋だけ時間が止まってしまったかの様なこの感じ。

「時間の無駄、じゃないですか?」

そう時間の無駄なんだ。

誰もが口を揃えて、当たり前障りのないこと言って終わらせるに決まってるから。

当たり前前の言葉を言われて空しくなる。だから皆が望む私を演じてる。

誰からも慕われるちょっと馬鹿な能天気で明るい『チャミ』に。そしたら傷つくことなんてないし……自分を貶める事も無い。

そうしてからは楽だった。

誰も私の言葉で傷つかないし、私も笑っていられる。

……。

「本当に神崎は嘘つくのが下手だね……」

でも、初めて出会ったのかも知れない。

『当たり前』の先に隠れている私を見てくれる人。

先生の顔が見れない。

なのに、どんな顔したらどんな顔していたら良いのか分からない。

「……………」

「そんな顔して……時間の無駄なんて思ってる顔じゃないよ。どっちかって言えば」

心臓へと打ち付ける脈と、一緒に薄っぺらい自分がまた見え隠れする。

薄っぺらい自分が扉の向こう側で見つめる。胸の内に入ってこようとする先生をただ見つめ返す。

「助けてって言ってる顔だ」

気付いていた。先生に心を開き始めていることを……。

自分でも無意識のうちに勝手な理屈を付けてはいるが、勝手に口から出てくる『自分』こと。

「時間の無駄って思っている人は、必要ない相手にそんな話なんてしないよ」

見透かされると覗かれると、私はバタバタと慌てだして驚いて戸惑って。

どうしたらいいのかわからない。

一生懸命に手招きしているのもまた、自分なのに。

こっそりと扉を開けて先生がいたら、再度頑丈にカギを掛ける自分がいる。

扉の内側で矛盾を繰り返している私は『入ってこないで』とドアノブを握るものの。

この瞬間、入ってきて欲しい事を望んでいる。

ぶっちゃけ、慣れていないんだ。こんな訪問者に……。

沈黙は私から破る事になる。

弱虫な私は、この沈黙を何を思っているのか。先生の表情に耐えられることなんて、後数秒も出来やしない。

「……っ先生」

「……」

「これからちよつと用事があるんです……申し訳ないんですけど」

いつも通り。慣れた手順で表情を笑顔へと導く。

「そうか……分かった」

少しの沈黙があると先生は席を立ち上がった。

同時に飲み終えた麦茶のグラスを私へと手渡すと。

「麦茶美味しかった……ありがとな」

先生が口に出した言葉は、当然だけどさっきの話とは関係ない。



わがままな話かもしれないけど……落胆した。

ずるい奴だ。先生がどう出るか一瞬、窺ってしまった。

用事があるっていうのは嘘。先生の優先順位が知りたかった。

最も『用事がある』って馬鹿でも分かりそうな嘘を付いて逃げ腰になったのは私なんだけどさ。

一体どうして欲しかったのか、ここで引き下がった先生に少し気落ちした。

もっと突っ込んで聞いて欲しかったのか自分で自分がよく分からない……。

ただただ気落ちしてしまっていた。

さっきから頭の中でグルグルと渦巻く。気持ち悪い自問自答の繰り返し返し。

少なくとも。先生が言った『麦茶美味しかった』は褒め言葉でも嬉しいとは思わなかった。

飲み干してしまった何も入っていないグラスの様に、私の気持ちは空っぽでちょっと寂しくなった……。

だから、先生の顔を見上げる事無くグラスしか見れなくなってる。

「ごめんね？ 先生……」

この謝った意味にきつと先生は気が付いてる。

「いいよ……また今度な？」

俯く私に向かって先生は笑ってくれているような気がした。  
今度な……って言うてくれる声そのまま耳を通して心臓に飛び  
つく。

些細な一つ一つが気になる。

色んな意味が籠っているような気がする。

だけどさつきと違い『今度な？』って言うてくれた先生の言葉に  
嬉しく思った。

問題を先延ばしにされたのに、褒め言葉より嬉しいと思うこの気  
持ちは……？

問い詰める事自体がもう、愚問かもしれない。

『ココが膝の上で寝ているからいいよ』と、見送りを断った先生  
の後姿をココを撫でる掌も忘れて、眺め続けていた。

先生が玄関から出た後、カチャリと扉が小気味な音を立てて視界  
が一気に狭まる。

愚問かもしれない。その理由は？

あともうちよつと先に行き着くものは？

理解できない。この感情の浮き沈みに教えてくれる人は誰もいな  
かった。

### 38・季節到来！！

季節到来！！

カレンダーを指を差し見つめると、十月も下旬。

一年で一番に盛り上がるといっても過言ではない我が校の文化祭が迫っていた。

何が過言ではないかって言うと……。

さすが芸術にこだわって体育祭を秋に持ってきただけある現在の校長。

文化祭も言うなら学校の秋の風物詩。

その日、一日ある程度は自由で、危険な事さえしなければ一切お咎めなし。

校長の意向で、先生達も大抵の事は目を瞑るらしい。

それに、なんと！！

我が校の文化祭は力を入れて後夜祭がある。

後夜祭はある所はある……んだけどポイントはココ。

最後に花火を炸裂させるという豪華さ。

そこらで孤独に石を蹴ってる暗い生徒も、校舎裏でタバコ吸ってる不良生徒も、失恋の痛手を負い、草むらで泣いている可愛そうな女生徒も一斉に空を見上げてしまっつてものだ。

実際、そんな奴はいないのは分かってるよ。

分かりやすく言っただまです……。

とりあえず、言いたい事は。盛り上がる事間違いないって訳よ！

！！！！？

だったら、自分らの着る予定である服にも気合が入るって！！

浮き足立っている私の真横に美弥。ペアーをクラスの女子同士で組んで裁縫。

イコール文化祭の準備をしている。この気合の入れよう。マジ半端ない。

自分達で服を縫うなんて大した高校生だよ私達は……。

まあ、ペアーになってって言うけど。いつも通りの大騒ぎ。

結局は一個の輪になって作業しているようなものだ。

時々、千佳が乱入してきたり。体育祭の時に仲良くなった須藤さんに苦手な部分手伝ってもらったりって。

これがまた須藤さんは裁縫さえもお手の物で『お母さんこれで安心してこの世を去れるよ』って感じで関心関心！！

「これ、いい感じじゃない？」

……って。途端に自分のやってる事を褒めて欲しいのか。

私のやってる作業奪い取ってまで自分の話を聞いてもらおうとしている辺り、さすがの千佳様だ。そんなことしなくたって向くって……。

針をひとまず適当な所に置いて美弥の後を追うようにして顔を向けると、目の前に現れた物に思わず目が点になってしまった。

「今はねえ……。主流はこれだと思うのよ」

真面目な声とは裏腹に、向けた先にはいつの間にか試し着していた千佳のホスト姿に……。

「ね、猫耳……すか？」

それを言葉にしただけで恥ずかしさが充満。

だって、だって。テレビでよく見るアレが目の前にあるんだよ。

はっきり言ってそういう道には進んでないから言い慣れない言葉に、覚えの無い恥ずかしい思いをしてるんだけど。

これは『萌え』っていうものに値するのでしょうか。

「ただのホストじゃちよ〜と物足りないなあって……。んで、試行錯誤して考えてただけど……。これどうかな？」

千佳の後ろを見ると何処から買い漁ってきたのか。

通販か、それとも例の駅に降り立ったのか。

猫耳以外にも、ダンボールの中に他にもある。なんだ……？

あれは、犬とかウサギとか狐とか……。っつか、亀！……！！？

犬やウサギは分かって狐はギリギリ。けど、亀って何に使うんだよ……。

まさかその甲羅を背負ってホストっていうか接客すんの。

はつきり言って、そのまま海に帰れって感じだよ。

まあ、それは置いておいて良いか悪いかで言うと。まあ、正直。

「千佳……似合ってるよ。それ」

自然に口からその言葉が出てきた。

「本当……！？ ……へえ。これ採用だね！！ ねえちよつと！ 皆、コレ似合うと思う？」

円の中心でパリコレには劣るステップを踏みながら千佳はクラスの皆に披露して回る。

なんだか千佳に便乗してか、ハイテンションの千佳にちよつとワクワクしてきた。

ますます文化祭なんだって気がしてきた!!

「ねえ。ちよつと美弥!! 美弥もちよつと千佳みたいに变身してきなよ」

「变身つて……これまだやり途中だし」

マイペースに千佳の姿を見ながらも、ちゃんと作業を進ませていた美弥は、私の倍位の速度で完成させようとしていた。

「そんなに出来てるんなら大丈夫だつて!!」

さっきの千佳じゃないけど、持っている完成間近の布着れをぶん取って行かせる。

「ちよつと、智亜美!!」

ドンつと代わりに美弥に渡した服は千佳のとはデザインが違っていた。

あまり深くは考えずに美弥をトイレへと追いやると、満足したのか千佳がまた私の元へと腰を振りながら帰って来た。ご満悦って顔を浮かべながら。

「どんななるんだろうねえ……」

私の隣で負けず劣らず胸を弾ませて喋る千佳。

「私的予想はねえ……。美弥は女の子にしては長身でスラッとしてるし、綺麗に整った腰までの黒髪と、キリッとした顔のパーツが相まって似合うと思うよ」

「私を超えるものが早くも登場!!? 許すまじ!! でも、確かにチャミが言う通りだよねえ。美弥ちゃんは可愛いつて言うか綺麗だもん」

そう、美弥は私と違って落ち着いてて、物腰が柔らかい。それでいて長身でスタイルいいから……。

「まあ……。でも私も千佳に負けれないと思うけど」

つと横目で冗談交じりで千佳を見る……と睨んでる？

「そんな怖い顔して冗談、だよ？ ……冗談なんだよ。千佳さん  
あ、相手を誤ったかもしれない。」

こういつ冗談って本気にするんだった千佳って……。

で、でも美弥は良くて、私は駄目って何。

美弥は認めて、私は認めないって千佳様は一体、何様？

時すでに遅し……。

いつかの仕返しか。敵を射るような瞳を見せる千佳の手は私の頬をつねっていた。

「いふあ！！？」

「チャミ~~~~~イ！！」

「ぶえつに……ひかがふあるいつてひつてないふあん~~~~つ！  
！」

『別に千佳が悪いって言うて無いじゃん！！』

……なんて言い訳しても、その発言はすでに日本語になっ  
てないんだけど。

「これからチャミは、私の敵とみなした！！」

プリンツと肉付きの良い頬は解放され、赤くなつた頬を労わる

よつに私は撫でる。

~~~~~うっ!!

だから、美弥と私の違いって何!!

美弥にあつて智亜美に無いものって何っっ!!

「こんな感じになつたけど……」

頬に痛さが熱として籠っている頃、美弥の着替えは完了したよう  
だ。

美弥の変身した姿を次の話に持ち越そうとしている辺り、  
悲しい事にもう。

美弥にあつて私に無いものを発見したのかもしれない。



### 39・酔っ払いサラリーマン

突然の立て続け二本立てとなりましたが、私の親友とあって簡単にはお見せする事も出来ません。

私と千佳が意味のないことで、そして下らない事で言い争っていた矢先。

追い出されるかのように、出来立てホヤホヤのホスト服一式と一緒に廊下へと放り出した美弥が帰って来た。

「だいたいこんなことで時間使ってるいいの？ まだ作業が半分も……」

その道には進んでないはずなのに……。

私と、美弥を比較する事自体。

「半分も終わってないはずだけど」

あつてはならぬ事で。

うん。

ちよっと不満そうなおツレナイお顔OKです。

私の瞳。貴方を見つめ、ノンカットでお送りします。

美弥を毎日と言って良い程に見ているから、スレンダーなのは知ってたけど。

何気を持って生まれた身長とその黒髪がまさかこんな形で映えるとは……。

黒主体の服だけに美弥の黒髪が引き立つというか、真っ直ぐと伸びたストレートな髪に奥二重な瞳が鋭さを感じさせる。

何より。一回も着たことの無い服なのに、頬を赤らめるわけでもなく、いかにも脱ぎたいと懇願しているであろう顔がまた映える！！

違う。私は違うと首を振るが。

美弥のこの姿を見てしまつとお昼のファッションチェックより語り続ける自身がある。

「ちよ~~~~う！！ 似合ってるよ……美弥！！」

覚束ない足取りで目をキラキラさせながら近寄る私は、美弥が止める中で無闇に触れる。

私より遅れをとって入ってきた千佳の白い腕がそつと美弥に触れる。

「美弥ちゃん。似合ってる……」

千佳はきつと私より驚いたんだらうなあ。

そこまで予想していなかっただらうし……。

「美弥ちゃん！ 似合ってる！！ 美弥ちゃんのはね……ホストっていうか執事に近い感じなの。きつとネクタイもこんなんじゃないくて、黒の方が似合うかもしれない」

我を取り戻したんだか、千佳の茶々が入った途端に現実に戻る私なるほど。ホストって気がしなかったのは、執事服一式だったからなのか。

でも、催し物って……ホストなのに。

この際、何でも良いのかな？

うむ。見てみたかった……ホスト姿の美弥。

完全に夢から帰ってきてない私は、美弥と千佳のやり取りを見つ

めながらも下らない事を考えていた。

「美弥ちゃんはそうだな〜……猫、犬。あ、これ！　なんか美弥ちゃんは一匹狼っぽいから、狼いいかも……。『それはお前を食べちゃうからさ！』　ってキャ〜〜〜！！！」

え？　なんだって？

一匹狼っぽいってどんな連想だよ。

しかも、あかずきんちゃんをいきなり出してくる辺り。最早、周りが見えていないんだろうな。

幾らなんでもここまでテンションが高くなれない私は、ヒートアップしていく千佳を尻目に冷静になっていく。

その後、着せ替え人形にされてる美弥はされるがままだった。

狼、犬、猫……。次々と出される装飾品。あ、やっぱり亀は試さないのか。

二人の世界に入って私は蚊帳の外。……というのはつかの間。想像を絶する思いも寄らぬ事態になる。

「ってそうだ……。美弥ちゃんも手伝って」

「……え？」

「チャミは何せ、この私より着こなす自信がかなりのようだから」

え……………。

何でいきなり、ハートマークを飛ばしていた瞳から、火柱がたっているのかしら。

しかも、たった一人。私を目掛けて。

「ちょっと待って!! 知ってるでしょ。私、本当にそういうの苦手なんだって」

何を言っても私へと歩を進める千佳の足を見つめながらも後ずさりする私。

後ずさりをしているのに、吸い寄せられているようなこの感覚。完璧に千佳の威圧感に圧倒されていた。

口元だけを歪めた千佳の顔は、私の瞳に二倍、三倍と大きくなっていく。

「じよ、冗談でしょ。千佳……」

「まさかあゝ」

その『まさか』は冗談だよっていう肯定？

それとも、冗談な訳ないじゃんっていう否定？

……………。愚問ですね。

走って逃げようと半回転すると、すかさず逃げ場は塞がれる。

な、なんで？ 迫ってきてるのは私の身長にも満たない千佳だけのはずなのに……………。

逃げられないのは……………何ゆえ？

「今は、偶然にも女子だけだし。着替えて来てって言うても逃げられる恐れがある」

まさかまさかとは思っただけど。

「千佳さん？ あの〜〜。さっきの根に持ってる、とか？」

「あつたりまえでしょ!!!?!?!?!?」

十分距離が近かったのにも関わらず、そう耳元で怒鳴り声を上げる。

「ま、マジっすか~~~~あ!？」

間抜けな私の叫び声と同時に振り向くクラスメート。

そして、千佳の怒鳴り声と一緒にクラスの女子はガヤガヤと寄って集ってきた。

こんな時も団結力があるクラスに目を丸くしていると、もう私に逃げ場なんて用意されていなかった……。

というか、多勢に無勢。

私に選択肢は用意されていなかった。

相変わらず。こういう時には遠巻きに顔を歪ませ、お腹を抱えて笑う美弥。

半泣き、半笑いが同時に表情にして表れる。

絶対に面白がってる……。

面白いつて感じで数え切れない程の腕や掌が私へと降りかかる。黄色い声やドサクサに紛れてとんでもない事を言ってくる女子。まったく、大好きなんだからこういうの……。

……って冷静なのがリアルに悲しい。

「ってか、マジ千佳ってば!! どこ触ってんの!!」

親父化した千佳が、私のブラウスのボタンに手を掛ける。

自主規制入ります。

皆さん、見えているのでしょうか。見えないでしょうね。

この黄色い歓声と、忍び寄る腕に埋もれている中。私、こんなにも暴れているのよ？

冷静に脱出口を見つけようとするんだけど、制服と制服との間から微かに漏れる光に手を伸ばそうとするけど、問答無用で指先一本も外に出れないまま押しつぶされる。

結局……やられたい放題なんだね。

「チャミー！！ 暴れるなあ~~~~っつてんでしょ！！」

教訓だ。千佳は怖い。

「えつとねえ……これにしよう！！」

微かに漏れる蛍光灯の光の中で見えた一生懸命に皆で裁縫したはずのシャツは、一人で着れる筈のスーツは、何人もの女子の手に渡り皺にだらけ。糊がついてるはずだったシャツも原型を留めていない。

クラスの女子がもがき疲れた私にネクタイを付ける。

も、もうどうにでもして……。

精魂尽き果てました。

仕上げに千佳が、飾りとして何かを頭に被せる。

ガラガラガラ　　。

「どうだ？ 作業は進んでいるか？」

突然扉が開いた。

途端、タイミングばっちりのお披露目。

きつと『神崎智亜美人生』最大になるだろう汚点。

しっかりと私と先生は目が合ってしまった。

「……………うー!!」

「……………」

「プツ!! ……っはははははは!!!!!!」

教室に一步の入ってない状態で、足の力を無くしお腹を抱えて笑い転げる先生。

扉を開けた掌は震えていた。

多分、気のせいじゃなければ。

このクラスでは一番、私が先生との接触が会った筈。だけど、聞いた事無いよ。そんな笑い声。

「か、神崎……………おまつ」

そうでしょう……………そうでしょうよ。

涙がホロリ。

「神崎お前、酔っ払いのサラリーマンみたいっ!!」

誰だっけそう思うわ……………。

窓に映る私は、皺だらけのシャツに寄れたネクタイ。

そして、犬、猫、狼、はたまた亀でもない……………七三分けのハゲか

つら。

私だけ、人？

だったら私、亀でもいいよ。

笑い転げる先生に、指を差しながらお腹を抱える千佳と美弥。  
黄色かった声は拒絶の声と、白けた眼差し。

一人、真昼の窓に映る哀れな自分。

ガラス越し。透明に彩られた私の姿はそのまま消え去りそう。

一層、消え去ってしまいたい。

お線香一本。私のお墓で泣かないでください……。

灰になりたい。



#### 40・崩れ落ちる音

溜息も最早、溜息ではない溜息を付く。

瞬間。ドツと脱力感が体中を駆け巡るのは何故だろう。

あのタイミングはないわあ……。

まだあの事件を引きずる辺り私もないわ。

それならまだしも、タイミング良く先生が教室の扉を開けるのも無いわ。

何パーセントの確立である状況が成立するんだろう。

……………。

私は何処までも神様から見放されてるのね。

大体手加減知らないんだもん、千佳。

……………。

完成した途端に、まるで運命に手繰り寄せられたかのように開いた扉。

まあ、途中で扉を開けられても困るんだけど……。

だって美弥みたいにスタイル良くないし、良いか悪いか問題でもないんだけど。

まさか……………覗いてたか？

「まださっきのこと気にしてるって顔だね……………」

「……………」

「何？ 私の顔に何かついてる？」

散々馬鹿笑いしたあの先生から、涙を溜めながらも頼まれて買出しに来ていた。

いいんだ。いいんだ!!

所詮、心の中。これ以上無いくらい皮肉を込めて言ってる。

「別に……どうせ美弥にとっては他人事ですよ。私のあらぬ姿を泣き笑いしていた人に言うことなんてありませんっ!!」

「根に持つてるね」

先生の男らしいけど、綺麗なメモを片手に、私と美弥は二人で画材屋さんに来ていた。

知つての通り。さっき教室には男子がいなかった訳で、男子は男子で教室を借りて男子は別の作業をしていた。

うちら女子が裁縫なら男子は木材を使った力の必要する作業。

『ペンキがなくなったから買出しにいつてきてくれ』  
で、今に至る。

わざわざ教室まで来て頼まなかったって、手の空いている男子なんていっぱいいるだろうに。

でも、なんとなく分からないでもない。

男子に買出しを頼むと寄り道するか、帰ってこない可能性がある。いくら適当でいい加減な先生でも、帰ってこないとなると困るらしい。

美弥と駅前近くの画材屋さんまで来ていた。

社会人であろう服装をした人が通る中、同じ制服の生徒がちらほら姿を見せていた。

皆も同じような目的で駅前まで来ているのだろう。

三、四人のグループになって両手に持てない位の袋を持っていた。「根に持つてるも何も……」

私は視線でその子達を目で追いながらも話を続けていた。

「でも、ちよつとオイシかつたつて思つてるでしょ？」  
「まあ、ちよつと？ まともなホスト姿を見られるよりあの格好の方が救われたのは本当だし……」

そんなに可笑しな事を言ってしまったのか、美弥は隣で声に出して笑った。

「えっと、ペンキは何色つて言つてたっけ？」

そうこうしている間に目的の場所に着いた。

駅前デパートの五階にあるちよつと洒落た感じのお店だ。

静かに環境音楽が流れている中、ほんのりと木材の香りがする。

なんか新築みたい……。

「待つて……んと、看板用に黄色と赤。後、立て付け用の釘、装飾用に布」

美弥がポケットからメモを取り出し読み上げる。

ここ最近、黒板でよく見る。男の人とは思えない達筆の綺麗な文字が並んでいる。

あのいい加減な性格とは裏腹に字はキチンとしてるんだよなあ……。

日頃を見てると教師になったのさえ不思議なくらいなんだもん。

美弥の手元から覗き込む様に再び先生の書いたメモを読み進める。

「何これ」

不意に指をさすと美弥も目で追う

「えっと何々？」

「えっと『夜用にエロ本を一冊』」



「ごめん、美弥。……美弥も巻き込んだ」

無言で歩く美弥は振り向くと笑った。

「別に気にしてないって、だから！！　そんなお詫びみたいに私の倍に荷物、持たなくていいから」

不意に私の手から袋を奪う。

「あつ……」

荷物を引つ張られ、軽くなった手が行き場を失くした。

突如現れた思わぬ展開。

美弥の私を見透かした瞳に何処からともなく、照れてしまっている私は言葉で誤魔化する。

「たいだいどういうことだよね……買出しでしかも生徒に変な本頼むなんて」

他愛ない話でも『変な本』と隠してしまうシャイな私がいるから、きっと先生も調子に乗ってしまうんだろう。

「ただの冗談でしょ」

「冗談にしたって度が過ぎてる！！」

手持ち無沙汰になってしまった片方の手を、力の限り握り締める。学校へと帰る道の人通りの多い中で、相変わらずの大声でしゃべっていた。

「じゃあ……うちらも冗談で買いに行く？　こ・れ」

先生からのメモを摘み上げ、私の目の前でちらつかせる。

「もう！　美弥」

千切れる勢いで無理矢理奪い取る。

「まったく！　冗談を冗談で返したら本当になるっつゝの自分で言っつてて訳が分からなくなる。」

怒り任せに紙を丸めるとポイっとメモ紙を道端に捨てた。

「智亜美、何そんなに怒ってるの？」

「ごもつともだ……。」

なんでこんな眉を吊り上げている必要があるのか合点がいかない。

以上に理解不能のこの『イライラ』が収まらない。

「木村先生の代わりに先生入ってきた頃は興味ありませんって感じだったのに……二、三ヶ月の間で何が変わったのやら……」

「別に何も」

思わぬところでドキつとした。

さらりと美弥はビツクリする事を時々口にする。

でも、不自然に思われないように美弥から視線を外さない様に心がける。

「そう？ なら出過ぎた事を言ったわ……けど、今の仕打ちは」

美弥の視線は、私がかつき丸めて捨てたメモ。

寂しそくに風に吹かれながらココロと右へ左へと行ったり来たりしている。

「う……」

「ひ、拾ってきます」

なんだ？ 同い年なのに、この逆らえない上下関係。

それは自分が悪いって完全に認識しているからかもしれない。確かにクルクルポイはないよな。

今ので一気に怒りが冷めたわ。

頭をカリカリと掻くと、買出しの荷物を美弥の側に置いて飛ばされない内にと駆け足になる。

小走りで走ってる瞬間。命中率の良い意地悪な風が丸まったメモを浮かせる。

重さのない紙は簡単に目先の曲がり角を曲がった。

「ああ」

不意に口に出た言葉は『面倒くさい』の表れ。

ふっと右に曲がった先でまたコロコロとしていた。

また何処かへと飛ばうとしていたのを。

「よつと！ キャッチー！」

ちよつと満足気に手に取ると、荷物番している美弥のいる所まで戻ろうと身体を回転しようと腰を捻る。

「……………え？」

正確にはしようとしていると、メモが落ちていた先。身体を起き上がらせると見えた。

……………

……………え。

思考が停止した。

「……………なんで」

誰？ 相手の人。

仲良さそうに近くのレストランに入っていた。

だって分かる。あれは上司とか友達とかの関係じゃない。

だったら誰？

そう私も知らない人

自動ドアを抜けた先、私は追いかけて行った。

「……………っ」

途端、扉の向こう側で見た。腕を組んだところ。

足が動かなかった。

顔が硬直した。

肩が震えた。

崩れ落ちそうになる一歩手前、やっと足は地面から離れることを許してくれた。

急ぎ足で美弥の元へと戻る。

「智亜美、遅かったね」

「ちよつとね！ 風に飛ばされてあつちの方まで入っちゃったよ。

だから取ってくるの大変で大変で……………」

気のせいか、手が震えているような気がした。

瞬間『あつち』と出そうとした指先を引っ込める。

「……………何かあった？」

「ん？ 別に何も無いよ。あ、ごめんね荷物」

美弥と目を合わせ笑い掛けると、足元に置いた荷物を持つ。

後は頭が真っ白になって、美弥の言葉も覚えていなかった。



#### 41. いつからだったかな？

あれから無事に学校に帰って、買出しで頼まれた材料を手渡した。その時点では、もう意識はそこになかった。

いつの間にか家に帰っていて、玄関を開けていて……。

夕方も幾分か過ぎた今に至る。

頭に当てたタオルは早くも湿っていて、髪に擦り合わせるようにして手を動かし、私はバスルームから顔を出した。

身体は火照り、桜色の肌をした私は熱気でぼんやりとしていた。

落ちそうになる温かさを帯びた雫をタオルで拭う。

雫が落ちない程度に拭き終わった頃、頭から離れたタオルは問答無用に洗濯機の中へと運ばれる。

二枚目の違うタオルを卸すと肩に掛け、次なるターゲットへと視線を移した。

そう。ぼんやりとしている暇なんてない。

私の身体をすり抜ける様に疲れを知らないお転婆娘が飛び出していく。

身体を震わせ水を飛ばすココが、まるで女王様気分でフローリングに水を運んでいく。

「もう、ココ？ まだ拭いてないんだからあまり歩かないですよ」

「ワン！！」

「……って、聞いてるわけないか……」

返事した割には構わず動くんだよねえ……。

始末が悪い事に、キッチンのど真ん中で身体を震わせ、水滴を飛ばす。

パツと肩に掛けていたタオルを取ると、まるで虫でも捕まえるかのようにバサツとココの身体に覆い隠す。

「コラッ！」

捕まえて羽交い絞めにする。

逃れようと必死に手足をバタつかせるココの付いた水気を取る。

私の髪以上にタオルに水滴が浸透していく。

「暴れるなあ~~~~っ!!！」

いつものことだ。

じやれあつてる様に見えるのか、吠えながらもココは嬉しそうな声を上げる。

「ホイッ！ 一丁出来上がり!!！」

タオルが離れ、視界が明るくなったのに驚いたのか。一周二週と回転する。

三週目の頃には事の事態に気付き、私の顔を見つめながらもう一吠え。

そして、身体を震わせると見慣れた部屋を動き回る。

私の髪と、ココの身体の水を吸収したタオルは、問答無用にビシヨビシヨに濡れていた。

洗濯機にそれを入れると、新しいタオルを引き出しから取り出し、冷蔵庫に足を進める。

冷蔵庫を開け、水を取り出すと面倒になった私は片足で扉を閉める。

キャップを開け、二、三回喉を潤すと、ココの前にあるお皿にお水を注ぐ。

何処で一部始終見つめていたのか、待ってましたと言わんばかりにココはお皿に首を突っ込む。

「……あまり飲みすぎないでね」

いつだって真つ青な顔をしたココが思い浮かぶ。  
あんなことがあったばかりだ。だから量はそんなに入れてない。  
心配はないと思うけど……。  
水を飲んでいるココの背中に自然に触れる。湿った背中はいつも  
みたいにサラサラとイカないが、綺麗な茶色が水気を運び、蛍光灯  
に照らされて輝いてみえる。

背を向けている背後から建物が軋む音がした。

「……………」

冷たい風が身体を強張らせたと同時に、外の空気が入ってきた気配。

玄関を誰が入ってきたかなんて見なくても分かる。

飲料水を全部とまではいかないが、十分に堪能したココが背を向けたのを見届け、腰をあげると玄関まで迎えに行った。

「お帰り」

自分の後ろを追いかけて来ない私に不思議に思ったのか、ココは半回転すると私を逆に追いかけてきた。

そのココの表情とは違い、お母さんは肩に手を当てながら、疲れたような顔を見せていた。

帰りに買ってきたのかお酒のおつまみみたいな物を受け取る。

透明の袋から見える私へのお土産兼、ココへのお土産にココはジャンプし、飛びつこうとする。それを、飼い主の権力と言わんばかりに阻止する。

「最近、遅いんだね」

「え？ まあ、ちよっと今仕事が忙しいのよ」

カランと音を鳴らして落としたパンプスは、綺麗に揃えられない

まま放置される。

自分の役目と即座に私は揃えると、キッチンへと行くお母さんの後を追った。

「今日も……。今日も、遅くまでお仕事だったの？」

「え？」

不自然にならない程度に前置きをしたつもりだった。

けど、声のトーンがあまりにも低く、自然に言っただけなのに思惑通りにいってない……。そんな空気だ。

「あー！　また上着脱ぎ散らかす気でしょ！？　貸して！　私が掛けておくから」

なるべく声を、そして語尾を強めに張り上げた。

「それと、コーヒーとか飲み終わったカップ！　水を入れないまま放置されちゃうと洗いにくくなるんだから……。ちゃんとキッチンに持ってきておいてよね？」

いつも通りの口調で、さっき流してしまった空気を誤魔化す。

私の変わらない言動に安心したのか、勘違いだと思ったのか。お母さんの口元が緩む。

今日もお仕事よ。今、一年で一番売り上げが見込める時なのか準備に入念なのよ」

私の手に収まっていた上着をそっと取り上げると、ピンクのハンガーに掛ける。

「そう、なんだ」

「だから、力仕事で足腰痛くて……」

「まったく……。お母さん歳なんだからそんな無理して働かないでね」  
頬を緩ませ、笑窪が目立つくらいに微笑む。

「コラコラ！！　一言余計でしょ！！」

怒りながらも笑う器用なお母さん。

獲物を諦めきれしていないココは、獲物を持つ私を軸に、行ったり来たりしながら狩が出来るベストポジションを捜し求めている。

途端、観念したのか私とお母さんの間を行き来する笑い声を邪魔するかのようにココの声がキツチンに響き渡る。

でもさ。気が付いてないよね？ お母さん……。

お母さん……私にウソ、付いた。

お母さんが過去に付いたウソは幾つあるんだろう。  
きつともつとお母さんの付いている嘘は多いと思う。  
昔から……お母さんというよりは両親は嘘が多い。

子供だから分かるまいと思って、作り笑いしながら子供用の嘘を  
付く親が私は何より憎かった。

扉を一枚閉めれば……いつも本音なのに。

気が付けば二階にまで聞こえるような声で、お互い本性剥きだし  
で怒鳴りあっているくせして、扉一枚開ければ、他人にも見せる偽  
者の顔で私に語りかけてくる。

そんな嘘も、つかなくなっただのはいつからだっただな？

お酒を片手に転寝をし始める。

その日の深夜、私はお母さんに少し厚めのブランケットを肩に掛けてあげる。

「お母さん……お酒ほどほどにして疲れてるんだったら早く寝るんだよ」

寝苦しそつに首の向きを変えるお母さんを尻目に私は自分の部屋へと足を向ける。

小学校高学年の頃。

私が一回どうしても我慢できなくて怒った時かな。

それまでずっと二人の姿を見てきて、この二人の関係は何処にもある普通のものだと思ってた。

そんなある日、一番仲良かった友達の家招待された時だ。

『ママの手作りケーキ』と言われて差し出されたケーキがどうしようもなく甘くて、チラチラ見える美味しそつに食べる友達が羨ましく思った。

どこの家もって思ってたからそれまで不思議に思った事なんてなかった。

私の家との温度差に……。

友達の家で感じた温度は、扉一枚とか関係なく、同じ温度がその子の家では普通、だった。

クリームの甘さとかスポンジの柔らかさとか、幼くても分かるくらい美味しくて。備え付けでくる紅茶にまでも愛情が注がれている。一瞬にして、そんな嫌味な位に幸せな家族が妬ましくなった。

だから一口食べるとその子の目の前で掌で握りつぶし、ゴミ箱に

捨てた。

『何これ？ まずい』

途端、叫ぶように当たり前に泣き出す女の子。

想像通りの綿菓子みたいな笑顔のママは一気に私の顔を見て顔色を変え、殴りはしないが私の家にまで乗り込んできた。

『どんな教育をしているのか』とか『もう、うちの子と遊ばないでください』って二階の扉越しに聞こえた。

いつも聞こえるお母さんの声と同じ声。

結局、お菓子作りが得意な優しそうなママでもフツと『お母さんに代わる。』

何だかその時、無性に可笑しくなって笑ってしまった事を覚えている。

綿菓子みたいな笑顔の人が、さっきまでの人とは思えない位の形相で私の家に乗り込む……。

誰にでも『扉一枚』用意されているのだと思うと、どこも一緒なんだと。

その友達とお母さんが帰った後、お母さんは無言で私の部屋に来て私を初めて殴った。

嘘を付きながらも頭を撫でる矛盾した『母親』の顔とは違い……ただ無表情のお母さん。

「また明日ね？ おやすみコ」

一足先に、キッチン椅子でスヤスヤと寝ている。

起こさないようにゆっくりとタオルケットを掛けると、部屋の扉

を開けた。

扉を閉めた掌で、当時叩かれた方の頬を触る。

今でも覚えているその頬の痛みを。

目の前に同じ頬にアザのあるお母さんを目の前に……泣く叫ぶ気も起きなくて、だからって攻める気も起きなかった。

ただ黙って、私よりも赤くなり腫れた頬を見つめてた。

それからだな……。

自分を隠すようになったの。

次の日学校に行ってみると、その子はクラス全員を味方につけて私を攻めた。

別に、クラスの皆を味方につけたのが気に喰わなかったわけじゃない。

冷静に考えたら、罵声を浴びせるクラスの大多数が子供ながらに正論を言ってた。

同時に分かってくれる人はいないって考え始めたのかもしれない。  
『うちの家庭は特別』なんだって……。



## 42・望む暖かさ

それから数日間は気まずい関係が続いた。

朝、私の姿を見つける度に細い目をして怪訝そうな顔していた表情も、何回も謝っている内に表情の曇りは徐々に消えていった。

小さい頃に出来た友達なんてそんなものだと思う。

どんなに喧嘩をしていたとしても、転がってきたボールを拾ってあげるだけで仲直りが出来る関係……そこに理由なんかいららないんだ。

相手が欲しい言葉を言えば人気者になれる。

笑顔でいれば、親切でいれば、先生には認められ……クラスでは注目的。

通知表では『クラスの人気者で』と書かれ、絶大の信頼を得ることが出来る。

計算をして上手く生きないと、私はこれから先……確実に損をする。

私とその他大勢を混合してしまうと、自分と他人を比較してしまいいライラや憤りを隠せなくなってしまうから。

それを知ってからの私には、手に取るくらい簡単なことだった。

偽善みたいな親切に、ちょっとした人間味を織り交ぜるだけ。

もともと才能があったのか。この付き合いに慣れるまで時間なんてかからなかった。

小さい頃は両親の喧嘩に泣くだけだった私が、父や母の目の前で笑うことを覚えた……。

さすがの私も、初めは学校みたいに上手く取り繕う事が出来ずに、家で笑顔を作るのには時間がかかった。

初めは辛くて辛くて……なんでこんな事をしているんだろうって、一人でドアを閉めた向こう側で繰り返していた。分かっていたら。

自分で自分に嘘を吐く事によつての空しさも寂しさも、全て心の奥底に押し込めなければ私の中の『私』は完成をしない。

その最後の難関が、両親への態度だった。

学校で向き合う先生や友達みたいな薄っぺらい関係の中であれば、なんの苦痛も伴わない。

いつ別れるか分からない。言わば、所詮は社会の中の一部だからだ。

だけど、親は違う。そう思ってしまうのは当時、どんなに喧嘩をしていたとしても、何度殴られたとしても……大好きだったから。

そんな家族の前で、私の笑顔が完成すれば……私は『私』に生まれ変わる。

ここで矛盾を見つけてしまうのだけど、それには支えていてくれる人がいた。

偽りの笑顔を作ることが出来たのも、『私』へと導く事が出来たのも……寄り掛かれる誰かがいたからだ。

お母さんの肩にそつとブランケットを掛けてから、起こさない様にと廊下を音を立てないように歩くと、自分の部屋の扉を閉めた。

正面では白いカーテンがグレーに染まり、冬に変わろうとする肌寒い風。

全開に空けていた窓を三分の二位まで閉め、ベッドの上に置いてある写真を手に取る。

そこにはユキ君が側に居たから……。

中学の頃……一番辛かったあの時。  
実際には近くにいた訳じゃないけど、心の片隅で側にいてくれた。  
ネット越しでの間柄にも関わらず、不意にどんな人かって気にな  
って……ただ話しているだけで自然と笑顔になれた。これにまた、  
理由なんかいらなかった。

真夜中の何時だろう……。

眠気はともかく欠伸さえ出てこない目が冴えている私でも、この  
暗さまでになれば必然と今の時刻が気になるってものだ。

カーテンの向こう側から照らされる月の光一つで時計の秒針を探  
し当てる。

もう、電気を点ける気なんて起きなかった。

「久々に……きついな」

なんて自然に言葉に出ている辺り私もまだ未熟者。

もう慣れたはずなのに……親の見え透いたウソなんて。しかも高  
校生にもなると頭を掻きながら自分でも思う。

私のまったく知らない女の人を連れてきた時も……幼い私に笑い  
掛けるあの訳の分からない笑みも……『智亜美が大好きだから』っ  
ていう見慣れた両親の瞳も、『笑顔』と言う一線を引く事によって  
真に受けずに済んだ。

美弥と買出しの帰り、見つけたあの人は間違いなくお母さんだっ

た。

あの風貌に着ている服まで、一度は私が洗濯をした事があるお母さんの洋服。

楽しそうに男性と寄り添って歩いてる。初めは勤め先の上司の人かと思った。

勤務先の上司とご飯を食べに行くなんてよくある話だ。お母さんが部下であるならその申し出を断れないのは当然の事で、断ってしまえばそれはそれで気まずいだろう。

だけど雰囲気で察知した……何故か呼びかけちゃいけないって。

見つけた瞬間、あの時と重なった……。

昔、同じ現場を目撃したことがある。

街で偶然会って、呼び掛けた時のお母さんと男の人の驚き様と戸惑い様は今でも鮮明だった。

でも、その時にはすでに私の在るべき姿を熟知していた。

戸惑い、言葉を詰まらせるお母さんを尻目に、切り抜けた言葉は『母がいつもお世話になってます……』の一言。

私が誤解したと勘違いした二人はお互いに目配せをし、お母さんは見えない所で安堵の笑み。

下らない茶番劇はそれでお終いにして、私はその時は足早に帰った。

その当時を思い出す。

知らないんだろうなあ……。

お母さんが二人の関係を隠した事が当時の罪悪感だったとすれば、私はその後の微笑みが一番傷ついたんだって事。

起きた出来事で私は『何か』を思ったりしない。

例えば……思いつきり怒った後、泣いた後に見せる彼らの表情や言葉。そこに本音は隠されていると思うから。

今日、偶然見つけたお母さんが入っていった建物。  
自動ドアの先で、お母さんはその男性と腕を絡ませ、組んで歩いていった。

「嫌だなあ……」

手に持っていた写真立てを元に位置に戻すとシーツが擦りあう音と一緒にベットへと横たわる。

秋から冬になりかけで、頬が寒いのかな？ っと思つたら。

気が付かない内に泣いてるし……。

「……………はあ。ははっ！」

渴いた笑いに誰も笑ってくれない。僅かしか見えない明かりのない部屋で空しく響き渡る。

気付かなかつたら良かったのに、見えなければ良かったのに。もつと周りさえ見えない程に暗ければ……。横たわってみる唯一の光。月は……涙をも気付かせるのに薄っすらと滲んで、はつきり見えない。

「……………私」

腕で瞳を覆う。

暖かい……。自分の腕が心を癒してくれる。

冷たい涙が腕じゃ抑え切れなくて、頬や腕を伝う。

瞳を覆う濡れた腕は涙に感化され、私の心にも感化される。

暖かさは、いつしか涙と同じ温度になる。

「まだ、こんなにもショックだなんて……馬鹿みたい」

付け加える言葉は『高校生にもなって……』

……なんて幼稚な考えだ。

平気だと思ってたのに。この何年かお父さんと離婚してから何もなかったから。

ありふれた生活に慣れてしまつて油断してたのかもしれない。

今だつて、去つていったお父さんの後ろ背中が忘れられてないつていうのに……ね。

音もなく泣いて……。

もう一人の自分が心の中で、『なんて夜は静かなんだ』つて冷静に教えてくれる。

風はただカーテンを靡かせるだけだし、月は輝きを放っているだけ。

無意味な存在達と、無意味なこの時間に、私はただ単に涙を流し続けているだけ。

そう思うと、私は何に悲しくなつて涙を流しているのか分からなくなつて笑えてくる。

カリカリ……カリカリカリ。

突如現れた存在は、沈黙を破り、一定の音をドアの向こう側で鳴らしている。

カリカリ……カリカリ。

ドアを爪で引っ掻いている音。

立ち上がると、涙で濡れた頬をシートで拭き、腕は服に擦り付けて瞬時に何事も無かったかのようにする。

この無意味な静寂の中に現れた、ドアを引っ掻く存在。

誰だか分かった。

いつだってこの『静寂』を壊しに来てくれる。

だから大切だって思える。大事にしてくれるから……。

月明かりだけ頼りに、手探りで行きつく先。

キッチンから見える蛍光灯の白い線に導かれるようにドアノブを回す。

「……………ココ」

何も知らないだろうけど、ココは大事にしてくれるから……何も語らない私達の関係。

「ココ？」

思わず私は笑った。

いつも力任せに飛び付いてくせに……驚かせるくせに。

こつこつ時だけは私が『おいで』って声を掛けるまで、ジッと私の瞳を見て待っている。

透き通った瞳を見つめ返す。扉の向こう側で、吠えもせず。だからと言って勝手に部屋に入っても来ない。

お互いに会話のない時間は、私が瞳を細める事で終わりの合図を送る。

「おいで……」「」

手を差し伸べると、ゆっくりと腰を上げ、無理に飛びつく事無く、まるで引き寄せられたかの様に私の掌にキヤッチされる。

そのまま胸へと抱え上げ、すっかり冷たくなっているドアノブを閉めた。

そつとベットに前足を付かせると、クルッと反転して、ココはまた私の顔色を窺う。

その姿を尻目に、追うように私もベットで横になった。

「ココ？」

「……………」

「もう……十一月始まるもんね。キッチンじゃ寒かった？」

ココが入れる分だけの空白を開けると、スルリと私の側に駆け寄ってきた。

「あつたかい……………」

ギュツと抱きしめる。

いつもこの寒さに耐え切れなくなるのは自分だ。

外から感じる寒さではなく、内側から感じる寒さ。

望んでいたこの寒さに負けそうになる時、この暖かさがいつも救ってくれる。

らしくなく。吠えたり、じゃれたりしない。

そんな、されるがままの姿を見ると……不意に本当の私の気持ちをつかっているのかもしれない。この子なんじゃないかって思う。

私はそんな気遣い屋のココに甘えているのかもしれない。

でも、この時間だけ……こんな時だけ。



そしたら、大好きな散歩にだって。夜が明けるまで付き合ってもいい。

新聞ばら撒いたって、テレビのリモコン落として電池が外れたって、私の服を引っ掻いて破ったって、お水を引っくり返したって。しょうがないなって思いながらも許していい。

だからこの時間だけは甘えさせて。  
いつもいつも一人じゃないんだって  
…。

### 43・ティータイム

迎えた文化祭の当日は、この日に見合ったかのように、窓から見える太陽は眩しく教室内を照らしていた。

顔を見る度に、私の悲惨な姿を思い出しては大笑いしていた先生が、やっと笑わなくなってきた頃にはもう本番になっていた。

私の傷口を抉る様な先生の噛み殺した笑いを堪える顔……絶対に忘れない。

そして、あんな目に合わせた千佳の事はもつともつと忘れない。

はつきり言えば、まだちょっと引きずってる感がある……。

あの後、まだ満足は出来なくても、千佳に仕返しをしたから傷は少し癒えた。

「ううっ……」

でも、やっぱり。このスーツを着る度に古傷が痛む。

まるで、苛めの様に隔離されて、教室の隅で畳み掛ける様にセクハラの嵐。

あの時に、改めて集団女子の恐ろしさを知った。

それもこれも！ あれもこれも！！

「ああ〜？ お宅の千佳さん。いつ見てもその姿、お似合いで〜え！」

さつきから私の視線から外れない千佳にご挨拶の褒め言葉。

椅子に片足を乗せて上からものを言ってみる。

「ああ〜。お宅の智亜美さんのスーツ姿には適いませんわあ〜」  
お互いにらみ合い、無言でつねり合い。

「はあ〜い！ やめえ……」

面倒臭いと眉を吊り上げながらも、踏み切りの遮断機のように腕のみで美弥が割って入る。

そうでないとは終わらないことを美弥は知っている。

さつきも言った通り、本日文化祭当日。嫌味なくらいに良い晴れっぶり！！

まだ歯向かってこようと意気込んでいる千佳を片手で振り払い、グラウンドを見ると、野外でやっているお店も、たくさんお客さんが来ていて大繁盛だ。

懲りもせずに追ってくる今の千佳に噛み付かれると厄介だ。

お互い怒ってはいないけど、一種の面白ネタとしてやっている。

ちよつと千佳をからかうと、ムキになって返って来る言葉が何ともツボなのだ。

可愛いとも思っし、面白いとも思う。それに、羨ましいとも思う。もちろん、断じてこれは本人には内緒なんだけど……。

しかし、窓の外を見れば、晴れ渡った空には似つかわしくない囚われた趣向で……。

教室から見る限り、普通に制服を着ているクラスはいない。

男子が女子の制服着てたり、魔女っぽい服装してたり。

他。メイド、ホスト、ギャルソン、浴衣……文化祭はいつからコスプレが主流になってきたんだ。言葉通りに遂行するのであれば『文化』祭なのだよ。

これが、今の文化だとすれば……。

「日本の未来が思いやられるわ」

「智亜美……あんたがその服で言うことじゃないでしょ」

まるで、言葉の意味が分かったかのように言葉を重ねる美弥。  
冷静に突っ込む美弥のその姿は、なんだか本当に心の奥を覗かれ  
たような気分になる時がたまにある。これもまた美弥には内緒だ。

「これこそ萌えてくる……。燃えてくるってもんよ!!」

その隣で倍に温度が上昇している千佳。

何故『もえる』と二回言ったのか気にならないと言ったら嘘にな  
るけど、頭ではあえて変換はしないでおう。

それより、刺さる様な視線を千佳が向けているのが気になって仕  
方ない。

凄く、とんでもなく嫌な予感がするかも……。

「チャミ!! 勝負!!」

やっぱり……と悟る前に、完全に千佳の腕に私の身体は捕らわれ  
ていた。

いつまでつき合わされるの? いや。いつまで根に持ってるの?

『根に持っていない』と冗談だと思っていたのは単なる私の拒絶  
反応から来る思い込みだともいうのか。

思い込もうとしていたのかな……。はあ。

「バトル内容はこちら!! どちらが多く客の心を掴むか……っ」  
まるで、そこにパネルでもあるかのような進行っぷり。

そんな姿を見ていると、始まって間もないのに疲れが倍になり、  
それに逆らって何故か義務感も倍増する。

「私、出来れば苦手分野なんで放棄を志願……」

静々と手をあげたのにも関わらず、その挙げた手はタイミング悪  
く、千佳に掴まれ連行された。

「み、みやあ~~~~っ!!」

嘆く声にも耳を貸さず。面倒と言わんばかりに目を伏せる。見えるぞ。目を伏せて俯いてもその歪んだ口元が！！

私が海老反りになりながらも密やかな抵抗で、千佳に訴えていた頃。

目にしたものは、意外に賑わっているうちのクラス。

外ばかり見てたけど、気が付けばウチのクラスの催し物も大繁盛していた。

「な、なんで？」

不思議がつっていると、注目の先は生徒が群がっている場所を見れば一目瞭然つてもんだ。

「先生！！……先生！！ 写真を一枚良いですか？」

なるほど先生特有……。調子つかせたらどこまでも天狗になる。

カッコイイ。似合うとでも言われ続けているのか、かなりお鼻が長いようだけど。

次々と囲まれる事に満更でもない先生は、訪れる女子生徒の大半を相手にしていた。

ま、まあ……でも実際？ いつも頭がボツサボサで？

コンビニ帰りのおっさんみたいな服装で授業しているより、見せ掛けではあるけど、この執事の服の方が似合うとは思っ……けどそんな、囲まれるほどのものじゃ。

海老反りする力も失い、千佳に引っ張られるだけの状態になってしまった私の頭は、体温が上昇気味になっていた。

足は千佳の行く先に従っていたものの、目の先には先生の姿がちらほら見える。

「ちょっと先生。その方がいいって！！」

振り向いた先で、なんとも昭和な決めポーズ。  
椅子に片足を上げるなんて……どこぞのロマン男だよ。

「先生！！ 私とも一緒に撮ろう！！」

何処から来たのか。下級生だか上級生だから分からない人からの誘いをも笑顔で承諾してるし。

絶対、昔は道を聞かれて飴をあげるからって易々と車に乗ってたに違いないよ。

意味もない根拠を頭の中で並べ立てる。

「これとこれも持って先生！！ 手はココ！！」

先生は言われるがまま、ポーズを決めると、その腕に生徒が腕を絡めてきた。

無意識に、私の口から深い息が吐き出される。

一つの理解しがたい感情の波が去って、少し冷静になった。

若い先生で、普段はだらしない格好とはいえ、あの容姿だもんなあゝ。

それに、何かあれば一喜一憂する先生で、親しみ易い性格してるもんね。

騒ぐか……騒ぐのも分かる。それも一環の教師の勤めだろう。

「まったく、教師が笑顔の安売りしちゃってさ」

冷静になったはずなのに、誰にも聞こえないように吐いた言葉は一方的な文句。

不意に出た理不尽な暴言に、私さえも意味が分からなくなってる。

笑顔も親切も優しさもクラス全員に安売りでなんだか面白くない。

漠然となんだかそう思う。一番初めに出てくるものは『面白くない』  
文化祭自体は、これ以上ない位に盛り上がって楽しい。笑顔になれるし、笑いあって騒いで、千佳も面倒だけどこれも楽しい。けど、ある一角の感情はあえて私も目を反らしている。振り向くのが怖いんだ。

途端、私を引っ張る腕が強くなった。

「うわっ!!!」

気付けばグツと千佳の腕に引き寄せられ、千佳を見ると、実際に触れていないとはいえ、火傷しそうなほどの炎が瞳に宿っていた。

「二人の勝負を邪魔する者がいる。先生はなんだって今回はあんなカッコよくなっちゃってるの!!!?」

「な、なんでって。どうせやるなら裏方じゃなくてコッチやるって先生が言ってたじゃない。聞いてなかったの?」

まあ、性格上そう言うだろうねえ。基本、何も考えてない自由奔放人間だから。

どんどん群がる生徒に、いつもはハートマークを付けながら話している千佳も今日の先生は敵らしい。

「なら、手段は一つ」

経験から言って、千佳のこの言葉は怖いんですけど……。

聞いたことない低い声で勝手に隣で覚悟を決めている。

「この度のわたくし、千佳は……勝利のためなら手段は選ばない」  
生唾を飲み込む音。そして私も、つられて生唾を飲み込む。

同時に、綺麗に結わかれていた髪を解き、羽織っていた上着を脱ぐ。

更に執事に見立てた黒いネクタイを解き、シャツを第三ボタンまで外そうとしている。

「え？ 千佳……さん？」

襟を肩すれすれのラインまで下ろす。

無造作にバックからポーチを取り出すと、リップを厚めに唇をなぞり、ファンデを少し濃いめに塗ると、念入りに被っていたウサ耳を調整する。

仕上げにと、睫を完成させると、鏡に向かって二、三回瞬きを大きくする。

そして、二、三回の瞬きの間に……見る見る内に彼女は雌豹となつた。

……つて！ 違うでしょ！！ どの官能小説よ！

「ちよつと?! 千佳あんた何してんの!!」

途端、止まらない千佳はファスナーにまで手を掛ける。

こいつ、下も脱いでシャツ一枚になる気だ。生足で喜ぶ奴はいっぱいいるっつゝの!!

「決まってるでしょ!! 勝つにはこれしかない!!」

いたよ。ここにも上回る自由奔放な奴が……。

「それじゃ主旨が変わっちゃうでしょ!! これじゃ執事だか分かるんじゃないじゃない……っ」

シャツ一枚の姿になろうとしている千佳を総止めする。

「チャミ! 勝負する気あるの!! 勝負は勝つか負けるか二つに一つよ!!」

「負けでいいから私が惨敗です!! とんでもなく参りました!!」  
ある意味! ある意味本当に感服だ。



ファスナーから手を離そうとしない千佳に、力任せに腕を引つ張って制する。

「もう！　なんで私がこんな事しなきゃならないのっ！！」

私と千佳のやりとり、裏方の男子はなんか妙に盛り上がっているし。

周りで助けに来てくれそうな女子に目配せする。一番に、美弥の助けを呼ぼうと捜したら、来店した知らないお客さんと話し込んでるし……。

『貴方、背が高いわねえ』ってお気楽な声まで聞こえる。

女の子である身長と綺麗に伸びた黒髪だもん……。

『執事』というご名目の元、注目の的には黙っていてもなるだろう。

私は裏と表を遮るカーテンの隙間からそれを眺めていた。その遮断していたカーテンが一気に開かれる。

「はいはい。注文入ったよ！　ブラック二つに、スクリーンを……」

「

先生を囲う輪の中から解放されたのか、一人で、カーテン裏の私と目が合う。

オーダーを伝えにきたのだろう……。

伝票を片手に、固まった先生と何秒間か目が反らせずにいた。賑わっているはずの教室中の時間が止まった気さえする。

先に、目を離れたのは先生の方で、視線の行き先はゆっくりと千佳の方へと映される。

「わっ……！！　わわっ」

声だけは慌てて出るものの、行動はまったくついていっておらず、意味も分からず隠せるわけもないのに、手をあげたり下げたりして、

あわよくば千手観音になれたら良いとさえ思ってしまった。

なんでここで私が一番に気まずくなってるんだらう……。

「これからストリップでもやるの？」

「は……？」

千手観音もどきもこれでお終い……あまりの発言に腕は二本に戻ってしまった。

いや、あの。生徒が予想以上の露出してるんだから、教師として止めてよ先生。

瞬間……交代がくるのをただひたすら待ちわびた。

#### 44・昼下がり

何とか男子がはやし立てる中、我を取り戻し、留まる事を知らない様子の千佳の手を無理矢理に廊下に連れ出す事で、これ以上の危険を回避する。

『危険』って言うのはどっちの危険なのか……千佳の？ それとも私自身？

今となつては、なんだつていいや。

心配なのは、私の立ち位置がいつまでもこれでいいのかつて事だ。だいたい、なんで私が一人でここまで冷や汗を掻かなきゃいけないんだ。上手くかわせている筈なのに一番に損してるのは、やっぱり私だわ。

小言をいいながらも。まるで、千佳のお母さんかのように難癖を吐ける子供の前で膝を折り、ブラウスのボタンに手を掛けている時、見覚えのあるクラスメートが交代の時間を知らせてくれた。

お腹が空いたなと思っていたら、ドアの窓越しに見える教室の時計は一時を回ろうとしていた。

無意味に緊迫していた私の心臓は、千佳の身だしなみをきつちりと整える事で正常を取り戻す。

途端、皆に聞こえないようにお腹が鳴った。

やっと。コーヒーの香ばしい薫りとか、鼻をくすぐるスコーンが焼ける匂いとか……大袈裟に言えば平和の素晴らしさを実感する。

……って、それもなんだかなあ。

午前中で分担を終えたクラスメートは、キリが良い所で午後班とバトンタッチをした。

全て元に戻っていた事に雌豹は悔し涙を流し、念入りに刷り込ま

れた化粧はまるで、パレットで混ぜられた絵の具みたいに顔中に広がり、大笑いを受ける中、教室を後にした。

あ、あれだけの負けず嫌いだったとは……。

障らぬ千佳に祟りなし。

無意識に肝に銘じる私だった。

体育祭の時。私が捻挫してなかったらどれだけのことになっていたらんたろう。

もしかしたら今でも杖をついていたかもしれない……。

いやいや、もしかしたら学校にさえいないのかもしれない。

「うん。これからは千佳をあまりからかわないでおこう」

そう心に決めた昼下がりに。

太陽は眩しく照り返し、真っ白に私を染め上げる。

青空という言葉が最適で、雲が一つもない空にますます爽快感を覚える。

だけど、目を細める私の視界に『青』に映るのはもう少し先のことだ。

そんな暑くない。すっかり真夏のような暑さは姿を隠した様だ。

うん、そうだな。今は太陽が照っていて『暖かい』ってそう思う。

太陽が出ていて暖かい。途端、雲に隠れて寒い。

そんな勝手な我侷を言いたくなるのもこの季節が一番多い。

十一月の上旬。

冬みたいに太陽を欲さないけど太陽がないと寂しいって思う程度。

『秋だ』って思えるのは自分勝手に愚痴を言いたくなる中途半端な季節だ。

さつき、昼ご飯を取った後で、美弥とは別れた。

本当は午前中は一緒にお店を回して、午後は一緒に遊ぶ筈だったんだけど、美弥のお陰で前半の売り上げが良かったみたいで、午後も手伝ってくれないかって話になった。

私がいなくても良いバタバタをしている最中、美弥は涼しい顔してお客さんの人気を独占していたって事だ。

卑屈になつて美弥を送り出したのもあるけど……。まあ、一人になる時間が欲しかった。

美弥という時は苦痛じゃないけど、気を遣わない唯一の友達だし。でも、やっぱり一日の中で一人になる時間も大切かも。

そんなこんなで一人でゆっくりと休める場所を探していた。

この涼しい季節を地球で生きている限り堪能しなきゃ損だ！！  
変な理屈を掲げ、落ち着けるところを見つけようと浮き足立つ私は屋上へと出てきた。

学校の屋上から見下ろして探すのが一番妥当かと思い、屋上に来た訳だけど。どこも開いている場所はなかった。

フェンスに掴まっていた腕を下げると、身体を翻し、今度は背中をフェンスに預けた。

「まあ、それもそうか」

だつて当然の事ながら文化祭だし……来年に受験の中学生や外部の人だつて来る。

家族だ！ 視察だ！ OBだ！ と来てるんだし。

必然的に休める場所が無くなるのは考えてみれば当たり前だ。

途端、フツとフェンスの向こう側から私の背中を目掛けて風が吹いた。

私が好む颯爽とした風。

暖かい日差しの中、見合うように少し肌寒い風が吹く。

一瞬にして屋上がお気に入りの場所に認定された。

「まあ、ここでもいつか!!!」

腰を降ろすと、また一味違う風が私を歓迎してくれてる様な気がした。

午後班と交代の時に早々と毛嫌う様に制服に着替えてしまった。

残念ながらお気に入りにはなれなかった執事の服はロッカーの中に押し込んである。

着慣れた制服の上着から無造作にユキ君がくれた写真を取り出す。最近、思っている漠然とした違和感がある。

今も変わらずそこにはお気に入りの風景が写されているのに……

…なんでだろう。

前とこの写真の印象が違って見える。

何も変わったことなんてないはず……。

だいたい怪談じゃあるまいし、写真が急に変わる訳がない。

頭を抱えながらも自問自答していると写真に影が覆った。

目の前を通り過ぎる風を遮り、私を太陽から隠すようにその姿は私を覆う。

何者かの陰で太陽が隠れるとなると、さすがに無視を出来なくなる。

日差しが当たらない私の身体は、意思とは関係なく身震いを覚えた。

不思議に思いながらも、やっと異変に気付いて視線を上へと向ける。

「もう酔っ払いじゃないんだ？」

誰だか把握できない間に、この憎たらしい教師は声のみで存在を主張する。

まだ顔を合わせた訳でもないのにこの言われ様は一体何……？

「なんですか。その言い方。あれはやりたくてやったんじゃないんですか。」

……千佳がいきなり襲ってきて止む終えず『あれ……っ』と言う間にあの手のこの手で……って！ もう忘れてください！

「何それ。忘れてないのは神崎じゃないの？」

っ……。

ムカツとくると同時に、無性に悲しくなってきた。

奥底から掘り上げてきたのは先生なのに……。

「せ、先生こそ、なんでまだその服装をしてるんですか？」

「あ、これ？ 気に入ってるから……。ねえ、どう？」

そういつて、私の側から少し離れると一回転してみせる。

午前中、嫌味なくらいに生徒（特に女子）を目の前にして振り撒いていた笑顔に沿えて立ち止まってみせる。

決まったと言わんばかりに私の元へと駆け寄ってくる。

「馬鹿みたい……」

先生からしてみたら脈略のない感想を隠す事無く言葉にし、最後には鼻で笑って見せた。

「チャミもしかしてヤキモチ？」

一瞬、思考を停止せざるえない問い掛けに、反抗しようにもすぐに声が出てこない。

「は？ えっと……」

何を返せばいいのか分からなくなる私に、容赦なく沈黙という名のプレッシャーが駆け巡る。

この沈黙はあつてはならない沈黙なのに……焦る事も無く、何故か気持ちは落ち着いていた。言い返す言葉が無い……というか、感情のピースに言葉が上手く嵌ってしまっている事に気が付く。

でも、それって……まるで。

結局、返す言葉がなかった私の隣に、お気に入りのギャルソン服を翻しながら先生が腰を下ろす。

途端、太陽は私の頭上に顔を出し、さっきとは違う風が私の横を通り過ぎた。

そう。先生特有の……先生自身が持っている独特な風。

いつも、自転車に乗っているからなのか……横を通る風は何処かお日様の匂いがする。

そう、自転車で二人乗りして帰ったあの時と変わらない匂いが私の横に自然と降り立った。

「ねえ。その写真いつも見てるんだね」

「え……？」

そんな先生を横目で見てみると、瞳は私の手元を見ている事に気が付く。

「時々、俺の授業の時も見てるの知ってるよ」

「……………」

「授業中も見てる位にその写真は気に入ってるの？ 前さ。前に保健室でこれを渡した時には泣いて喜んでたよね？ 失くしたって思っていた写真をまるで、これ以上はない位の笑顔で。だから大事な写真なのかって……まあ。ずっとって言ったらあれだけ。気になっっていたんだ」

なんか、変な聞き方をするなあ……。

まるで、壊れ物に触れるみたいに慎重に言葉を選んでいる。いつもの先生らしくない。

だって、こんな空気を先生自身から醸し出すなんて……。

「大事な写真……ですね。もちろん気に入ってるのもあるんですけど



ど、大切な人から貰った物だから好きなんです」

「大切な人……」

だから、何？　なんで繰り返すの……。

時間が進む当たり前の事なのに、ぎこちなく感じるこの空気。

「はははははっ！　先生つてばヤキモチですか？」

この手の雰囲気の場合は、冗談で柔らかくするしかない。

さっきの仕返して軽く言い返した筈なのに……。

「だったらどうする？」

またもや、してやられたと。

どうしていつも窮地に陥るのは私なんだろう。

先生の真似している筈なのに……いつものノリで上手く行く筈なのに。

表情は大笑いした口のまま固まってしまった。

目線だけは気持ち悪く、我関せずと広がる青空を意味なく行ったり来たり。

笑顔は硬直したままで、思考だけが今、先生が言った言葉を繰り返していた。

45・先生と……ですか？

あの、教えてください……。

こんな時にはどうすればいいんでしょうか？

試行錯誤。

頭の中で何度か練り直してはみるものの、無様にも心臓の音の方が煩くて……まるで、枯れ葉が枝から落ちるようにパラパラと脳裏から朽ちていく。

空中を仰ぐ私の瞳に、群れから逸れたのであろう一羽の鳥がいなくなつた頃、意を決して、地上へと視線を静かに降ろしていく。

『だつたらどうする？』

だつたらどうする……って。

私は何を質問して、こう言われたんだっけ？

タイミング良いのか悪いのか、頭の中でリピートされた途端、先生の顔を見れなくなった。

この自分であつて、自分で無いような感覚。

視線を落とした先には、私の掌があつた。硬直していた掌だつたけど、何故か場違いな体温でお互いの掌はお互いを握り締めている。それ以上に、一番に違和感全開で体温上昇中なのは……私の頬だ。

「ふっ……」

そんな行動を見て、なにやら噴出すような音が耳に聞こえた。

「くっ！ はははははっ！！」

もう我慢できないとばかりに、息を吐き出すと同時に渾身の笑い声を屋上に響き渡らせる。

先生は、お気に入りのギャルソン服を叩きながら、私の姿を瞳に映しては噴出すのを堪えきれずに、やっぱり最終的には大声で笑つた。

「……っ！」

初めは目が点になっていた私だけど、冗談だった事に気が付いてからは、さっきまでとは違う真っ赤な顔になって視線を下に向けた。

何？ 何なの！！ この屈辱！！

さっきから仕掛けられたから仕返ししてるのに……この敗北感。何度も何度も、こっちからも攻撃してるはずなのに、いつもダメージを受けるのは私の方。怒るのも私の方で、恥ずかしくなるのも私の方で……全てが私一人だけ。

掌で踊らされると思うとむかつ腹が立つ！！

不躰に本人を目の前に爆笑してる教師の面を引ん剥いて、跪かして謝らして……困らせて、最後には出来るなら、出来るなら、出来るなら、出来るなら？

先生を同じ様な……。

先生を同じような気持ちに、させたい……。

瞬間、思い立った気持ち私の頭を冷静にさせた気がした。

何を思ったのかと、ゆっくりと先生の姿を視線で追うと、視線に気が付き、大人ですって顔して私の顔を見る。

途端、再び温度が上昇した私からは嘘の様に冷静さは消えていった。

「い、いつまで笑ってるんですか!？」

勢い良く立ち上がると、校内中に聞こえるような怒声を先生に浴びせる。

もちろん、屋上に来ていた人達の注目の的になったのは言うまでも無い。

それさえも気にならない程に、目の前で余裕の顔を見せる先生に腹が立っていた。

「まったく……」

お調子者の癖に……超が付くほどいい加減なくせに。

「どうしていつも」

日誌の角でよく人のこと叩くし、漫画の交換とか平気で生徒とするし、いつもやる気が無い服装してるし、エロ本買うし……運転苦手で、自転車通いで、坂道が好きで、いつまで経っても子供。ナルシストだし、不躰で失礼な行動ばかり。

ううん。子供なのは私か。

先生を出し抜こうとする言葉はいつも幼稚な言葉。

だって、他に欠点がない……。

どうして？ 欠点だらけな感じがして欠点がない。

隙だらけな気がして、隙が無い。

頭の中で必死に思い当たる事を指折り数えて、捜そうとしている時点で『ない』って証拠だ。

会った時からそうなんだ。いつも私が凶星をつかれてた……。

コンビニで出逢ってからほんの数ヶ月。

いきなり私の目の前に現れて、去っていった男の人がこれからお世話になる担任の先生で……初対面の時の優しかった印象とは違って、無断で他人の心を踏み荒らしてくる先生に怒って、笑って、泣いて……。

でも、優しくして。そして、また……怒ってる。

「……はあ。どうしていつも」

怒っていた筈なのに、なんか怒りが収まってきた。

もう分かってくる。

この考えに行き着く先の意味。

「神崎……これから暇か？　一緒に回る友達とかは？」

「美弥は今、当番してるし……いませんけど？」

「お前の友達は一人しかいないのか？」

「……もう、なんとでも言ってください」

隣で座っていた先生は、気合を入れるがてら太ももを叩くと立ち上がった。

途端にお日様の匂いが私の鼻を掠める。

空に手が届くんじやないかって位に大きく伸びをする先生をただ目で追つてると、先生の顔が私の方に向いた。

太陽から下ろした手の行き先は伸び足りないのか、肩へと移動する。

「さつき小耳に挟んだんだけどな？　すごい怖いお化け屋敷があるんだとき。ちょっと行ってみないか？」

「え、先生当番は？」

生徒の監督もあるけど、教職員としての仕事もあるんだし。

そう簡単に空き時間なんてないと思うんだけど。

「飽きた」

「あ、きた？」

「うん、もう飽きた」

飽きたって……。

あまりにも『そう思って当然』かのように堂々とし過ぎている先生に、笑いと一緒に込み上げる様な期待感が身体中を駆け巡った。

「いいですよ！　付き合います！！」

気が付いた時には、サボろうとする先生の片棒を担いでいた。

「先生！ せんせいってば！！」  
私の呼び掛けにまで無視を決め込み、あるいは雑踏の中で気が付いていないのか。先生は人ゴミの中をどんどん進んでいく。

長身の先生と噛み合わない歩幅に苛立ちを覚えながら問いかける。呼びかけられている本人は、途中で呼び止められる生徒や他校生に満面の笑みで受け答えていた。

あなたは芸能人かっつ！！ いやいやうん。最早、気分なんだな。………」

言い寄ってくる生徒達の手には必需品と言わんばかりにカメラ。きつと名前も知らないだろうに、先生は写真をせがまれる始末。

黄色い声に桃色の頬。うちの生徒の制服ではない学生が先生と向き合っていた。

現役男子高校生を差し置いてでも写真に収めておきたい人なのか……？

価値が分からない。あつちの男子の方が私は魅力的だと思うけど。

大体、あの子は知ってるの？

自転車通いの二十後半…… 普段は適当丸出しだよ？

はあ…… やめようやめよう。馬鹿馬鹿しい。

「先生…… 終わりました？」

押し寄せる波が終わって歩み寄る。

こんな現実じゃない世界ってあるものなんだ。本当に芸能界の世界だけだと思っていたのに…… こんな間近でお目にかかるなんて。

「何、その不機嫌な顔……」

「面倒。先生、その服着替えたら？」

「あらチャミ、もしかしてヤキモチ？」

「…… もう、その展開はいいです」

『クスツ』と鼻で笑う意味不明な笑みが、下を向く私の頭上から聞こえてきた。

「はいはい」

子供をあやすみたいに頭を撫でる。

「こ、子供扱いしないでください！」

撫でる先生の掌を思いつきり跳ね除ける。

廊下ですれ違う生徒が、不思議そうにこっちを向いたが、相手はあの狩屋先生だ。

他の女子にも同じ事をしたたりするのは同じ学校なら知れ渡っている。

「わ、私はその服だと面倒だって言ったんです！ だいたい先生から怖いお化け屋敷があるから行こうって言ったんじゃないですか！  
！ なのにクラスも分らないなんて……」

この計画性の無さに、知ってる筈なのに……イライラする。

「人づてに聞いたって言ったろ？」

この落胆は、いつもの先生に腹を立ててるんじゃない。

きつと『楽しみにしてたのに』？

「知ってます……。しってます、よ」

自分に問い掛けるのはいつもの癖だけど、こういった時に出る癖  
って嫌になってくる。

妙に意識をしてしまう。

「神崎はいつからそんな怒るようになったんだ？ 最近、怒ってる  
か拗ねてるかのどっちかだろ？」

話が一段落してから、前を歩く頭一個分飛び出ている先生の後ろ  
を歩く。

「それは……！！」

小走りで先生の前に立とうと追い越そうとした時、自分のあまり

にも大きくなってしまった声に口を塞ぐ。不意に驚いてしまった。それ以上に今、口に出そうとした言葉は何よりも一番に疑いたくなる。

「おっ……！！」

反射的に下を向いてしまっていた私は、何かを見つけて立ち止まった先生に気付きもせず、先生の背中に激突した。

「……いったあ！ 急に立ち止まらないで下さい！」

これじゃ、さっきから一昔前のコントみたいだ。

やっていて恥ずかしくなる。突っ込んでいる自分にますます恥ずかしくなる。

頭では分かっているけど、鼻が痛いのが先行してか。問答無用に立ちほだかる大きな背中に向かって怒鳴りつける。

「あれだ。ほら神崎、なんだかんだでお目当てに着いたぞ」

「……へっ？」

「見つからないはずだよなあ」

途中で写真を頼まれたり、声を掛けられたり、通ってる高校なのにも関わらず迷子になって何処を歩いているか分からなくなってたけど……。

まるで、全て何事も無かったかの様に得意気にお化け屋敷を指す先生。

気が付けば、校舎から外へと出ていて、ブラウスとベストだけでは寒いこの季節に身震いを感じていた。

屋上では、日が照っていて平気だったけど校舎に隠れるように姿を消した真昼の太陽は、私が立っているこの場所からは見つけないことが出来なかった。



「ほら、第一体育館のステージ使ってやってる」

私の学校は体育館が第一、第二と別れている。

運動系にも力を入れていている学校だからなのか、他の学校もそうなのか定かではないけど……何せ、自宅から近ければ良いとそれだけの理由で入学した学校だし、私もその辺りは詳しくない。

バンドとか演劇とかステージ特有の催し物は第二で行われていた。クラスの催し物がホスト喫茶だけあって、うちのクラスは競り合いはしなかったけど、この体育館を使いたいというクラスは多かったらしい。

まあ、これだけ広いと……使い勝手がいいもんねえ。

「っはははは！！！！」

突然、いると思っていた位置からではなく、少し先の方から大声で笑う先生の声が聞こえた。またもや、私は物思いに耽っていたらしい。

指を差して笑う先生の声はますますヒートアップしていた。

「だ、だってほら『ものごつつ怖いお化け屋敷』だって」

何処がツボなんだか、お腹を抱えて笑う先生の元に駆け寄る事で目の当たりにしているギャップを埋めようと心がける。

「ちつとも怖くなさそうなんだけどっっ！！ 適当な感じがマジでウケる」

やっぱり分からない。先生、笑いすぎたし。

看板のすぐ真横『入り口』と書いてあるそこは体育館の入り口でもある。

そこにはお化けのQちゃんとか、思い当たるだけのキャラクターが描かれていた。

これ、なんていうアニメだっけ？

その淵を飾る看板は、血を真似た赤い絵の具がこぞとばかりに散りばめられ、書体こそ恐ろしい趣で書かれているけど、確かに読んでみれば怖くなさそうだ。

「噂はハツタリだったかな……」

ボソツと呟く先生の逆口から出てきた来年受験志望なのか、中学生の女の子が出てきた。

真ん中で泣いている女の子を慰めるように囲みながらその場を離れていく。

「でもないみたいだな……まあ、あの子達は女の子だけど」

「要は、入ってみなきゃ分かんないんじゃないですか？」

先へと進もうと、私は白装束を着込んだ受付の人に尋ねる。

ん……発想がちつと昔かも。

白い着物を身に纏い、色白く軽く化粧も施していて、そのバサバサな髪は地毛なのかヅラなのか疑問に思っている……。

「お客さん入りますか？」

聞こえた声は、そこまではやっぱり役になりきれないのか普通の女の声。

「お一人です？」

「え？ あつ、ちよつと先生……！」

説明さえも聞かずに勝手に奥に入ろうとする先生を呼び止めた。

「お二人？ なら大丈夫です」

「大丈夫？」

呼び止められた先生は、面倒くさそうにこっちに向かって歩いてきた。

「ええ。お一人ですと無事に帰ってこれるかどうか不安ですから。

この暗幕の先は、いわくつきの墓地へと繋がっているのです……お

一人ですと帰ってこれる保障がございません」

普通に話しているけど舞台設計はしっかりしてるのね。

「タイムスリップとでも言いましょうか……いいえ、違います！  
霊によって作り出されたループ、空間移動なのです」

「は、はあ」

「夜、この墓地に足を踏み入れたものは……歩を進ませる程に霧が  
深くなり、二度と帰ってこれられないという噂。ふふ、そのお顔は信  
じていませんね」

先生と顔を見合わせる。

「あの……今、昼ですけど」

「じゃあ……昼」

「適当すぎ!!」

「馬鹿にしている人には時間なんて関係ありません……。油断して  
いる人にこそ、突然闇が覆い、霊が騒ぎ出し……。足先から無きもの  
としていくのです!!」

声は普通だけど演技派ねえ。

「先生、ウソつばいけどどうします?」

ウソも何も無い。

文化祭だからって異空間を容易く作られたんじゃ、たまったもの  
じゃないわ。

「決定ですね」

有無も言わさぬ間に、青白い掌から提灯を渡された。

「あと……こちらを」

提灯と一緒に逆の手から渡された二つ目の道具。

「白い布?」

「はい。お互いをお互いで繋ぎ合い、墓地から帰ってこれるための  
生命線みたいなものです。決してその布は解いてはいけません」

衣装が衣装だからなのか、雰囲気が出る。

不覚にも、身震いを覚えたが、寒さのせいにして何もなかった事にする。

「お互いの右手と左手に結んでください」

「はっ????」

思わず、私は先生と見合わせる。

だからこの展開、今日はなんなの。

だって……だって、私と先生とがですか？

苦笑いをしている私を目の前に、先生も案内役の生徒も平然とした表情をしてみせた。

## 46・背中合わせの気持ち

文化祭に相応しく、幽霊に変装が出来ている女生徒の掌も作られたものなのか、血の気がない印象を受ける。

着ている衣装も手が込んでいて、雰囲気や舞台設定も完璧で『ものごつつ』なんてタイトルは見なかったことにして、雰囲気はとも出てる。

でも、なんでこんな本格的なのに……やることは『カップル歓迎』みたいなんだろう。

溜息が漏れてしまう。

自称案内人から渡された五十センチ程の布を頭の上まで持って行き、先生と見つめ返してしまった。

渡されたものは『布が一つ』………しかないって事は、だ。

「申した筈です。そちらの布はお二人の言わば現世へと続く生命線です……。迷い人になるのも大変、美しい事ですが。あ、別に手を繋いで入って頂いても結構なんですけど」

「嫌です!!」

私は、間髪を入れずに拒絶する。

いきなり素に戻るな。この案内人!!

ってか、さっき泣いてた女の子達は白い布を持ってなかった気がするんですけど。

少し間が空いてから案内人は話を再開する。

「へえ………粹なことするねえ」

まるで一休さんの様にコメカミに指先をあてながら混乱している私の横で、どうして先生はそんな興味津々でいられるのかな?!

本当にこの人は………布がなきゃ、帰って来れないとも思っていないそう。

でも例え、嘘なのを分かっても『場を楽しみたい』という衝動の方が勝っているんだろっな。

でも、でもでも!!!

「先生！ やめましょ？ これってお化け屋敷の名を語った

……」

言い終わらない内に、私の手首を掴むと、慣れた手つきで自分の手にも結び始める。

「人の話、聞いてますか？ ってか先を聞いてもらえますか！」

青筋か立ちそうになるのを必死に抑えながら視線を上に向けると、その誰とも言いたくない瞳が輝いていた。

今、たった一回の吐く息だけで呼吸困難に陥りそう。

「言ったでしょ？ 俺、これ行きたいんだって！ さっきチラッと覗いてみたけど、それが結構リアルなんだよ」

そんなこれから、ご馳走にでもありつける様な目で見つめちゃって。

「……」

「ん？ どした？」

「なんでもないです」

私は、話していた先生の口端が上に上がるのを不思議そうに見上げる。

「あ、もしかして『白い布』じゃなくて『手錠』良かった？」

「はあ!!!？ な、何言ってるんですか!!!」

お互いの片手を結び付けていた事も忘れ、困った拳句に明後日の方を向こうとしていた私は体制が崩れそうになる。

「あ、なんならご用意出来ますけど……」

「あんた達二人はグルか!!!」

また更に、無理に振り返ろうとした私は、上手く体制が取れずに転びそうになる。

咄嗟に、伸びてきた先生の腕が私を支えてくれた。

「チャミ、何もそんな動揺しなくてもお〜」

「動揺なんかしてません！！ そのあなたも律儀に出さんでいいわっ！？」

音がしたと思ったら案の定、衣装に似つかわしくない物が出されつつあった。

先生の支えてくれた腕から無理矢理離れると、荒々しく提灯を取った。

「案内人失格！」

良く分からない捨て台詞を残すと、クスクスと笑う先生を引っぱり、怪しく光る暗幕を掌で乱暴に押しつけた。

当然の流れで、暗幕から手を離すと何も見えなくなっていた。

暗色系で彩られた世界。所々、人の手で作られたのもあり、線上に外の明かりが見えるがそれはなんの役にも立たない。

逆に、外とは違うと再認識させる良い演出のお手伝いをしていた。フツと背後からさっきのふざけた案内人の声がする。

『ごゆっくり』……って、やっぱ何か違う。

外の雰囲気からは隔離されたかのような世界が目の前に放たれていた。

グラウンドで聞こえる客を呼ぶ声も、放送部が演出する音楽も、隣の体育館でやっているバンド演奏も……まるで聞こえてこない。

ここは本当に学校なのか、体育館なのかも分からなくなる。

信じたくはないが、さっきのおちゃらけた案内人の言っていた様に何処かへとループしたかのような異様な感覚に思わず五感が強張る。





途端、何か冷たいのが私のふくらはぎに当たる。

「ぎゃっ!!」

それは冷気と共に見えないモノが目の前を通り過ぎていった気がする。

嫌なものを想像しないように連想の転換に頭をフル回転させる。

「そつよ。今のは蒟蒻、蒟蒻こん……………」

「か〜んざあきい〜〜!!」

「ああ! もう何ですか!! やたら声色使わないでください!! 人の名前呼ばないでください……近寄らないで、触らないでください!! 離れないで下さい!!」

最早、無茶苦茶な事を口走っている気がする。

頭の回転は今日一日の中で、無駄な程に回転してるけど、消費しすぎて空回りしてしまっている。

「早く、提灯付けろって……」

はて? 提灯?

お化け屋敷の中を探索し始めてから、大分経っていたのにも関わらず、手元にあった提灯の明かりを点けずにいた。

突き付けられた恐怖の前に、進もうと気持ちがいつぱいになっていたからかもしれない。

「さつきから俺だけかもしんないけど、色んな障害物にぶち当たってんだけど……明かりつけてくれないと」

「だったら、紛らわしい声を出さないでください!!」

明かりを灯す道具があったのに使わずに進んでいた自分の失態を誤魔化すために、思わず言葉を荒げた。

「まったく!!」

白い布で結び付けてある左側、先生がいる位置に顔を向ける。

これで見えるでしょうと言わんばかりに、先生の顔の位置まであてつけの様に提灯を持っていく。

実際は怖さを紛らわすために声を荒げているのもあるのかもしれない。

「本当に、先生ってば……はい。これで満足ですか!？」

「……っ!？」

「せんせいっ!」

半分、先生をというか生きている人間を見て、安心しようと企んでいたのは束の間。

暗闇で見えない真っ青になっている私の顔が、益々青くなっている。

「せ、せんせい!! せんせい血……血がっ!!!」

「え……?」

「あ、頭から大量に血がで、でてま……す。ど、どうしょ……私が明かりを点けなかったせいで」

先生は、頭に葉っぱでもついているみたいなりアクションで頭を触る。

そんな普通の行動が、スローモーションに見える。

「こ、こんなに血が出て……溢れてっ!」

あまりにも動揺しすぎて、段々声が擦れていくのが分かる。

「な、なにそ、んなに……っ落ち着いているんですか!!」

きつと、どつか壁に頭をぶつけたんだ。

「近くに人がいないか呼びましょう! 先生!!」

最悪な事態が脳裏に浮かぶ。

私は一番に何がしたいのか、何を優先にしたらいいのか分からなくなる。

こんな気持ち、ここ最近で味わったのと一緒だ。

頭が凍って、足が動かなくなっ……寒くもないのに口元が震えて……声を出したくても出せなくて……。

数分もしない間に、先生の目は閉じてしまって、名前呼んでも返事してくれなくて、意識を失って……その後はどうなってしまっんだろう。

焦る気持ちと、冷静な自分が同居している様な感覚。

「あ、ああそうだ。止血、止血しないと……」



提灯の明かりでちらつく中、涙目の先生はお腹を抱えて私の顔を覗きこむ。

「ははははははっ！　なんだ血のりかあ！　早くそれ言ってよ。さっきの提灯の事だっっていうの遅すぎなんだから……お陰でビックリしちゃったじゃん。いらない恥をかいちやうとこだったよ」

手に力が入らなくて……。

「焦った焦った……ははははははっ！……！」

まともに立っているのも不思議で……。

「あはははははははっ！……！」

大声で笑う声も、喉の上でカラカラ言ってるだけで。

未だどこか信じきれなくて……。

周りは暗闇で見えないはずなのに、目の前が真っ白になって、頭と足が反対になったような気がして、まだ生きてる心地がしない。

「先生。提灯を持っててください……靴紐解けちゃった」

無事だった先生に提灯を手渡すと、ゆっくりとしゃがみ込んだ。

結んだままの先生と私を繋ぐ白い布は、私に引っ張られ、ついでと先生も膝を曲げた。

「ははは……マジで可笑い！！　血のりだって、笑えますよね。でも……」

「か、んぞき……？」

そう、いつだってそんな時に靴紐なんて結べない。  
笑えない。

頭を巡るこの感覚が……。

「凄くこわか、った」

伸ばす手は、そのまま靴紐には行かず、歪んだ表情を覆い隠す。  
いつだってあの悪夢を呼び起こす。

「やだ……先生、笑っててよ。お願いだから、靴紐を結び終わるまで……でいい、からさ」  
「……………」

暗闇の中、何かが落ちる音が聞こえる。  
何かが服に染みていく気配がする。

先生の手が頭を触れる予感がする。

予感通り、いつもと変わらない掌が私の頭を包んだ。

「じゃなきゃ……いつまでも結び終わんないじゃない」  
「ごめん。今はタイミング……悪かったな」

大切な暖かさをくれるから失うのが怖い。

失うのがこんなにも怖い。

開いた瞳の先も、こんな暗幕で覆われている時は静かにベットに  
潜り込んでくるココは大切な宝物だ。

大事な人が、危険にさらされた瞬間に分かる。

座り込んでしまった瞬間に分かる。不意に立ち止まった時に分かる。  
る。

それは突然に吹く風のように、心の中を綺麗に飛ばして行って空っぽ  
ぼになってしまった時にポツンと立っている。

たった一つの真実。  
プライドや、理屈や常識が風で吹き荒らされた後、残る何も持たない真つ白な私。

無くなると思った瞬間に、どれだけ支えられていたか分かる。  
人の掌も悪くないものだと……。

もう止められないでいた。

いつも『嫌い』の背中合わせにあったもう一つの想い……。  
気が付いてしまった。

本当に見えなかったんだ。

だって、自分で自分の背中は見えない。  
本当の気持ちなんて嘘と嘘の狭間に存在するものだから……。

楽しいって気持ちや、嬉しいって気持ちは、表面上に隙間なく貼り付けてあって。

言ってしまうえば、真実の外側にある。

寂しいって気持ちも、悲しいって気持ちも、悔しいって気持ちも……私の場合は誰かがこじ開けてくれないと表に出ない。

パーフェクトに加工された私というものは、脆いけど完璧で、誰かが手に触れてくれないと溢れてこない。

いつも『嫌い』の背中合わせにあったもう一つの想い。

先生を見つめる瞳が答えを出していた。

#### 47・一体、誰ですか？

散々と酷い目にあつたお化け屋敷を抜けると、生徒や通りすがりの人の注目の的になった。

その向けられる視線につられるかの様に私は視線を辿つてみる。すると、そこには血まみれのギャルソン先生がいる……。

そして、ほんのちよっぴり被害にあつていている私の右半身を見ると何か起きたと思わない方が不自然だわ。

しかも、血まみれの張本人は満足気に笑つてるんだから。

自分が視線の的になつてているのが上機嫌になつてしまう原因だ。

なんて子供な先生だ。

その後、解けていた靴紐を結び直すと涙を拭い、屋敷探索を再開した。

先生が私に蒙つた恐怖に比べたら、怯える事無く冷静に決められたルートを歩けた気がする。

度々、私を驚かそうとしては舌打ちをする先生は最早、楽しむ矛盾が間違つていた。

そんな先生を無視しながら進む最後の一本道では、霊に変装している生徒が男か女かまで判別できる様になつていた。

案の定、最後には散々と私達を馬鹿にした案内人が私達を見送つていた。

そして、今……私と先生は文化祭の雰囲気とは少し外れた場所で一休みをしていた。

辿り着くまで迷つていたとはいえ、まだお化け屋敷しか文化祭を堪能していないのについて思うかもしれないけど……。

「せ、先生！ 冷たいってば！！」

こんな見た目だけ痛々しい先生を目の前に、楽しめないと思う。本当は一休みなんてしたくない。

だって、なんか……今回の文化祭は楽しいって思えるから。

迷って、騒いで、振り回されて……先生に、案内人にも馬鹿にされて、驚かされて、血まみれになって……注目的になって。

今なんて、十一月なのに水遊びなんかしてる。

一日で散々な目に合っているのに……全部をなかった事に出来る程に浮き足立っている私の気持ちは、自分自身でも不思議なものだ。

「ふっ……ははははっ！！」

頭に付いた血のりを洗い流すために流しに頭を突き出し水を浴びていた先生は、突然笑い始めた私の方に顔を向ける。

「いきなり、何？」

当然、驚いた顔をした先生は顔を上げる。

「なんか、可笑しくなっちゃって。なんで、先生は面白い事を自然と連れてきてくれるんだろうなって」

「なんだそれ……」

驚いた先生の表情は崩れない。

「少なくとも、私にはない力ですね」

なんの嫌味もなく、微笑んで言える素直な意見だった。

私はいつも面白くしようと思っても、何処か無理をしていて……それが人に伝わらないか怯えて……嘘で作り出していた自分に自分で怯えながら、それでも笑っていた。

悪循環の毎日。絶えながらの日々は何度も偽りの自分を塗りつけていって……本当の自分を見失いそうになっていた。

分かったのは数時間前でまだ、今も取り戻せてはいない。



ただ、何も言う事無く蛇口から流れる水の音だけに耳を澄ましている。

時間が流れ、再び先生は血のりを洗い流すと思っていたら、発作でも起きたかの様に、精一杯に水道の蛇口を回せるだけ回す。

勢いよく水は飛沫をあげて、問答無用に決まった道を通りながら地面を叩きつける。

「ちよつと先生、なにしてんの。出しすぎだつて!!」

数分、無言で先生は水飛沫を見つめていると、一気に頭を突き出した。

「ちよ、ちよつと……」

止める手も空しく、大惨事になっていたお気に入りのおジャルソン服が、台無しとも言える状態になってしまった。

お気に入りって言うていたのに……本当にこの先生は、意味が分からない。

血のりが絵の具で作られたものだったから、真っ白だったシャツもピンクに染められてしまっていた。

十一月だというのに寒くないのか……。

「ああ……お寺の修行僧になつた感じがする」

「それ、かなり正解だと思いますけど」

傍から見ても悲惨な状況になっているのに、頭を突き出しながらの冷静なその声にお応えするかの様に不思議と低い声が私の喉元から出てきた。

キュ！ キュ！ キュ！

何回か不必要な位に蛇口を回したら止まった。

まったく、どんだけ無駄な水を出してたんだ。

「はあ。すつきり。こうでもしなきゃ取れないって……」

分かつてはいたけど、予告なしにビックリする様なことをしない

で欲しい。

『突然』を見せ付けられている側は、何が起きたのかと動揺せざる得ない訳だ。

でも、そんな所がなければ……私は多分、この場にさえいないだろうな。

掌で掬いながら、流せたかどうかを確かめる先生。

暇を持て余していた私は、近くのベンチに腰を下ろしその光景を眺めていた。

まるで映画のワンシーンの様に、一部始終を何気なく見つめていた私の瞳に、濡れた先生の髪はいつもより茶色く透けて見えていた。

「先生、髪が濡れてると若く見えるね」

「馬鹿言え。俺はまだモテモテの二十六だ」

『モテモテ』って言葉にしてる事自体が論外な気がする。

「私から見ればおっさんじゃないですか」

途端、言葉を失った先生に私は思わずガッツポーズをした……ら、きつと怒られるので心の中でした。

一日一回は、何処かで仕返しをしておかないと……きつと眠れない。

でも、すぐに仕返しをすると枕元にまで辿り着けるか分からない事を思い出す。

「あゝあ。もう、さっきまで怖がってた人の言ってる言葉とは思えないなあ」

咄嗟に作られた溜息にしては、如何にもワザとらしかった。

「あ、やば……あ、あの狩屋先生？」

後悔先に立たず……。

「そんなおっさん相手に『死なないで!!』ってピーピー泣いたのはどこのお子様かな?」

しょうがないな……と両手を持ち上げて肩をすくめるその仕草。まるで、下らないアメリカコメディーに出てきそうなんですけど。笑っている筈の先生の瞳が、見開いているのは何で?

先生、細い目が普段よりも目が大きく見えるよ。言葉にしそうになる自分を必死で抑える。

雫を落としながら、濡れたままの髪でベンチにいる私へとゆっくりと擦り寄る。

ある意味、お化けより怖い気がするんですけど……ううん。悪意がなかった分、断然お化けの方が可愛らしく見える。

そんな先生に、腰をあげる力を無くした私は、言葉で制するしかなかった。

「ちよつと先生、近づかないでよ……濡れるって」

「近づかないで?」

首だけが器用に伸びてきた気がする。

「……うっ」

「どの口が言うのかな? 加齢臭がするおっさんにさっきまでしがみ付いて離さなかつたくせに……可愛かつたなあ」

「勝手に話を作らないでよ!! 私、そんなことまで言っていないし!」

ベンチから腰をあげるのも忘れて、言葉だけで反撃をしようとする私は先生にはどれだけ小さく見えてしまってるんだらう。

「へえ、じゃあ……何処まで言っただらう。先生は是非、聞いてみたいなあ。先生は怒ったりしないから」

何処か遠くに行ってしまったよ……。

『おっさん』っていうキーワードは強力すぎる。

目と鼻の先まで先生は私の側に近寄っていた。

こうというのが弱いって事を知っているの行動だ。

私の大好きな夕日に照らされる先生の髪は、茶色い筈なのに黒に見えるまで、先生は私に接近していた。

ベンチの背もたれに仰け反るようにして、時間を稼いでいた私はもう弁解の手立てはなかった。

近すぎる先生に、赤面しながらも大声を出して首を振り続けるだけで成す術も見つからない。

そんな『蛇に睨まれたカエル』は必死にゲロゲロと鳴く。

ベンチの上に足を付き、シャーシャーと舌を出す蛇に巻かれないようにするカエル。

「あ、のっ!! せんせい」

ただ、赤くなる頬とは裏腹に頭が真っ白でドキドキして……私の肩に先生の濡れた髪が触れた。

制服から肌に浸透していく水の冷たさに、益々冷静さを失う。

袖を捲くっていた先生の腕が、私を捕まえようと背中に手を回そうとしていた。

「せ、先生!! これ以上近づいたらセクハラ!!」

しどろもどろで何を口に行っているのか分からなくなってくる。

ただ単に逃げられない状況でいた私は、必死に扇ぐ掌に預かっていた先生の上着が引っ掛かった。

「あ、そ、そうだ!! せ、せせせせ先生!!? う、上着返します!!!!」

ドンツツツ!!!!?

「……………っ!!」

引き剥がそうとする私の腕は、思った以上に力が入ったらしく、跳ね除け様とした腕は問答無用に、上着ごと先生を倒してしまった。引力に引っ張られるかのようにバランスを崩し、上着より先に先

生は地面に向かって仰向けに倒れる。

先生とは違って、まるで風船の様に舞い上がる上着は持ち主を把握しているかの様に、青空を小旅行して、遅れて先生の上に着地する。

私は、その一部始終を片目を瞑りながらも見つめる。

「せ、せんせい？」

恐る恐る声を掛けるものの、返ってくる声は無く、背中を強く打ったのか言葉にしたいくても出てくる咳だけに、先生は必死だった。

あまりの至近距離だったため、引き剥がそうと働いた力は、私よりも背の高い男性をもノックアウトさせた。

軽い脳震盪でも起こしたのか、頭を抱えながら焦点を私へと合わせる。

頭を振りながらも上体を起こすと、正気に戻った先生は咳をしながらも大声を上げる。

「お前、教師を殺す気か！！」

「あ、ごめんなさい……でも、先生だって悪いんですよ」

謝りながらも主張を忘れない私は、先生を助ける前に乗っかってる上着を手取る。

土埃に晒された上着を軽く手で払うと、先生へと手を伸ばした。

「いつまでも、私の事をからかって……こんな目にあって当たり前なんです」

先生の濡れた髪がまた少し、汚れてしまっている。

まったく、愚痴を言いながらも心配をしている。

とんだ天邪鬼っぷりだよなあ……。

せつかく綺麗に洗い流したのに……なんだかんだで先生も踏んだり蹴ったりな訳だ。

透けた色素の薄い髪にばかり目を向けていると、ひんやりと冷たい先生の掌が私の掌に触れる。

先生の温度を感じてから、私はゆっくりと腕に力を入れる。あまり引つ張らない内に先生は自分の足で起き上がった。

濡れていなければ上手く掃える土埃も、吸い付くように先生のお気に入りの服を汚していた。犬にみたいに頭に付いた葉っぱや土を払う。

さっきとは信じられない位に静かな時間が流れる。

「……………」

先生と騒いでいるのも好きだけど、こんな意味のない時間も好きだ。

御飯も食べ終わって落ち着いた昼下がりに……みたいな時間が。

いつも警戒心ばかりを持ち合わせている私が、言葉も交わさない時間が安心できるなんて理解できないなんて話じゃない。

「あ……………」

私の腕の中に上着があるのを思い出した。

そういえば、先生を起こす時に上着を預かったんだっけ？

それに気が付くと同時に、先生がくしゃみを繰り返した。

思わず笑みが零れると、上着を差し出そうと手を伸ばすが、あまりにも『これを着て』と言うには可愛そうな姿に成り果てていた。

私の下敷きにされて、宙に放り出されてこの有様になってしまった。

洗濯物を干すみたいに掌で上着を広げると、皺を伸ばすように上着を掃う。

「……………ん？」

すると、ヒラヒラと一枚の紙切れが落ちた。

静か過ぎる今の状況にお似合いな程に、スローモーションで落ちていく一枚の紙切れ。

なのに、咄嗟に拾う事も忘れ、落ちていく白い紙切れを見つめていた。

風に流されることなく、S字を何度も描きながら私の靴の上に舞い降りる。

着地した一枚の紙切れは、紙ではなく写真の様に見えた。

……写真？

再び上着を腕に掛けると、拾い上げようと腰を曲げた。

左腕が塞がっている私は、右手でその写真を落とさないように拾い上げた。

紙の素材からいつてやつぱり、写真みたいだ。  
でも、なんの写真なんだろう……。

胸の上まで写真を持っていくと、写真を表に反した。

「……………え」

途端、吐く息が止まる。

一瞬で見つめた視線の先が理解できなくなった。

カラーであるはずの写真が、気持ち悪い程の黒に似た青色に映る。  
「な、んで」

力を失った左腕はうな垂れる。

自然とそこから抜け出すように、上着は再び地面へと落とされる。  
まるで、鈍器で殴られたかのように頭の後ろがズキズキと痛い。

「これを……………」

見覚えのある写真……………なんてものじゃなかった。

「なにこれ……」

必死に、言葉を繋げようとする口は震えていた。

まだ、なにも分からない。知らない。

なのに、まるで答えが出ているかのように、感情が抑えられなくなっている。

何も理解していないのに、眩暈がする頭を通り越して、自分勝手な怒りや喪失感が先走りする。考えてる事は混沌として、捌け口を知らない気持ちは喉元に留まるだけだ。

「……あ、先生」

怒りと言うほど熱くはないし、喪失感というほど冷静でもない。

どっち着かずの気持ちに、何を言葉にすればいいのか見つからない。い。

さつきとは違う私の先生を呼ぶ声に、先生の表情は変わった。

それはきつと、私が見つけてはいけないものを見つけてしまったから……。

一枚の写真を目の当たりにしている事に気が付くと、冗談ぶっていた顔はいつのまにか『先生』の顔をしていた。

ううん。先生としてでもない。

狩屋悠司としてでもない。

……簡単に言えば、今までに見た事もない『狩屋悠司』

お茶らけて、ヘラヘラしていて、軽くて、子供じゃない。

少なくとも、目の前にいる先生の瞳は確実に事態の把握を理解している。

ただ、太陽に照らされている色素の薄い髪から雫が落ちていく度に、さつきまで騒いで、笑っていた私達がいたことを証明していた。



「……先生、なんでこれを持っているんですか？」

「……」

「ねえ、教えてください。なんで、私と同じ写真を先生が持っているんですか？」

もう一度問いただしていた。

返ってこない返事に、益々私の気持ちは凝縮されていく。

時間が過ぎる度に、ギュツと締め付けられ気持ち悪さに絶えられなくなる。

考えたくない方向へと目を向けそうになる私は、必死で先生だけを見ようと目を凝らす。

私を見つめてくれている先生は何も、言葉に出さなかった。

ただ、動揺するし、困惑する私を瞳に映し出している。

「お願い先生……教えてください。私が大切に持っている写真を知ってるでしょ？ あれと同じ写真がなんで先生のポケットから出てくるの？ これって偶然？ 偶然でもどうして黙っていたの？」

初めて、先生は私から視線を反らす。

どんな問題が起こっても、私から目を反らす事なんか無かった。

肩を掴んでも、逃げる事は許さないと瞳を見つめ返してくれた先生はいない。

「なんで、黙ってるんですか？」

何故か、そんな先生の姿にショックを隠す事が出来なかった。

「先生……一体、誰ですか？」

漠然とした質問。だけど、今の私には一番聞きたいことだった

……。

## 48・知らされる真実

さつきまで考えもしなかった状況に、心臓と頭が付いていかない。ただ何故、私しか持っていない筈の写真を先生が持っているのか……聞きたい事があるからこうして先生と向き合っている。

心臓がバクバクと身体中を震動させ、頭の中は眩暈がする程の渦に巻かれてこのまま倒れこみそうになる。

暴れ出しそうなこの心境に、先生の口が開く事を待つしかないこの状況はただただ漠然と腹立たしかった。

先生は静かに私に近づくと、すっと私の腕に掛けてある上着を手に取ると羽織った。

大声を上げて問いただす勇気が私にはない。

さつきまでの和気藹々とした雰囲気楽しくて、この空気がただ受け入れられないだけなのかもしれない。

十一月に見合う風が舞う。遊んでいるみたいに同じ方向に散った葉が舞う。

私達を照らしてる太陽が眩しい位に先生の髪を茶色く透かす。

ついさつき、蛇口をしめた水道から落ち、水が一滴弾かれる。また一滴。

何も変わらないのに、数分前のままなのに……どうして二人の間に流れる空気だけがこんなに変わってしまったのだろう。

一定の距離をお互いで保っている。目を合わす事もなく笑いあう事もない。

私の取り越し苦労だったらすうだって言っただけで欲しい。

『偶然』と片付けてもらえればそれまでなのに……何も話さないこの時間が重大な事実を先送りにしていると思わざる得なかった。

「先生……答えて、下さい」

やっと、搾り出したこの言葉から時間は動き出す。

「俺は……狩屋悠司。九月からここに赴任してきた教……」

「そんなに知ってる！ 冗談を言っ……！！」

分かってるけど、聞きたいことはそれじゃない！！

無意識に大声を張り上げる私を無視し、何食わぬ顔をして言葉を繋げる。

「そして、その写真くれたのが弟で狩屋由貴だよ」  
（かりや よしたか）

「よしたか？ 写真？」

二つに共通点なんて一つもなかった。

先生と、弟さんと写真……釈然としない発言に私の気持ちが冷静になる。

私の手元にあるもう一つの写真を見つめる。

「写真ってこれ？ けど、私がこの写真を貰った人の名前はユキ君だよ」

「ああ……弟だ」

確実に返ってくる堂々とした言葉に、私が何か勘違いをしているのかと不思議な感覚に囚われてしまう。

迷う事無く言葉を並べる先生の言葉に耳を傾けるしかなかった。分かることは先生は嘘を吐いていないってことだけ。

まだ短い間の先生しか知らないけど、茶化したりするし、冗談は言うけど、嘘は言わない。

これだけには、自信がある。

「神崎がネットで知り合ったユキも、俺の弟のヨシタカも同一人物だ」

面白がって、人をからかって、馬鹿にして指差して……でも、冗談でも嘘は付いたりしない。分かっているからこそ、言っていることが

理解できなくなる。

「待つてよ。違う！ 全然違うじゃない！！ 弟さんとユキ君、名前が全然違う。ね？ ほら先生だつて違うつて思うでしょ？ なにも共通点がないの！ 違う誰かなんだよ」

写真の説明が付いてないけど、気持ちだけが焦る。

心から安心したい。先生の方が勘違いだつて認めさせたい。

そう強く願い、少し湿った先生のシャツの袖を引っ張る。

「なんで何も答えないの。先生、私と目を合わせてよ！！ ほらだつてほら、私が知ってるユキ君は旅行が大好きで、優しくて、頼りがいがあつて……」

先生のシャツが冷たいから指先が震えてるんじゃない。

寒いから身体が震えてるつて、一瞬でも勘違いできるのであれば幸せだつた。

強く、強く先生の腕を掴めば掴むほど、気持ちが空回りして違う方向を向く先生があまりにも冷たく感じる。

「いつだつて、気に掛けてくれて……ねえ？ せんせ。先生の弟さんもこんな人？ 違うつて思ってるんじゃない？ 弟さんだなんて勘違いだよ。いつもの冗談でしょ？」

「……」

「な、なんでこんな時に黙るの！！ いつもみたいに話してよ」

「俺が言えることは、本当のことだけだ。ゴチャゴチャ言つても、神崎を混乱させるだけだ。俺は聞いて欲しいから真実だけを話す」

そう、私は聞いていた。そして先生の弟の話覚えていた。

二回目、私が自宅に招き入れた時にした先生の話。

そつと先生を掴む私の手を離すと、近くにある棒である文字を書く。

振り払われた私は何も出来ず、地面を見つめる事で自分自身を保っていた。

中庭の地面をまるで、黒板の様に見慣れた字を書く先生のすぐ後ろに私は立ち尽くす。

そして……。

何が言いたいのか混乱していても分かった。

「もう一度言うな？ 弟は……『由貴』って名前なんだ。お前これなんて読める？」

「……………っ！！」

今度は言葉以外にも漢字を書く為に地面と向き合う先生。

言われたからって言葉になんて出なかった。

地面に書いた言葉に、喉を詰まらせ、飲み込もうとすると視界がぼやけて来ていた事に気が付く。唇が、自分の意思とは関係なく震えが止まらない。

振り向こうとしない先生は、静かに棒を地面に置くと、自分の書いた文字を見ながら無言を貫く。

私の視界を浮かび上がらせる涙は、悲しさなのか悔しさなのか、言葉にしようにも気持ちが納得してしまっている。

先生が言わんとする事実には、涙は無性に流れを止めずに零れ落ちていく。

「……………っっ」

私は、自分が思っている以上に、この『狩屋悠司』を信用してしまっていた。

何年も何年も私が信じ、願ってきた想いも簡単に覆せる位に、この人の言葉をありのままの姿を信頼してしまってる。

私の気持ちとか、どうでもいいんだ。心より頭が先に理解をってしまった。

いつだって、私が取り乱したりしても毅然と私の側で見守ってくれていた。

何故いつも？ どうして……って、考えていたけど考えたって理由が分からないから考えない事にした日だってたくさんあった。

私にくれる言葉は、私には知らない事を沢山教えてくれた。

ココの時だって、体育祭の時だって……。

「嘘だって言つてよ……先生」

だから、あまり人の言葉に左右されない。信じれない私だって

……。

「先生の言葉なら、信じるから……さ。ね？」

先生の言葉なら信じれる。

まだ、嘘だって言つてくれたら信じる。

それ位、私は馬鹿で子供で、幼稚で自転車好きで……無謀で。そんな先生を尊敬してる。

尊敬なんてものじゃない位に、さっき気がついた鈍感な私だけと大きな存在なんだ。

自分の書いた『由貴』という字を消すと、ゆっくりと立ち上がる先生。

相変わらず、こつちも見えてくれないし、後姿のままだ。

「だって、先生の弟さんって言ったら……」

冗談にしてくれなきゃ、ねえ。私の気持ちはどうなるの？

「……っ！」

言葉を飲み込む先生を無視して、無理矢理私の方を向かせる。

「死んじゃったって事になるじゃないですか！！」

「……」

顔がグチャグチャな私だって関係なかった。

私は覚えてる。

連れてきた私のマンションで先生が初めて話してくれた話。入院生活を送っていた事も、心臓が弱かった事も……そして、亡くなってしまう事。

無理矢理、私の方へと向かせた割には、先生は私から目を逸らす事はなかった。

だけど、いつも助けてくれる。『大丈夫だよ』って月並みだけど、安心できた手は変わらさず地面へと下ろされたままだった。

まるで、自分にはその資格がないとばかりにピクリとも動こうとしない。

迫ってくる私を引き剥がしたり納得させたりもしないんだ。

シャツをどんなに引っ張っても、その瞳は依然として私を見つめ返してくる。

「な、なんか……ずるいよ」

言葉にしてくれれば、今の私ならなんだって信用する。

何もしない先生から向けられている眼差しは全て『肯定』の眼差しだ。

「早く、言ってくれれば……。ずるいでしょ。それって」  
再び流れ出す涙は、止める人がいなければ流れるばかりだ。

掴んだ掌に伝って、先生のシャツに私の判別が付かない感情が染み込む。

何度も何度もその感情が先生に伝って行って、この気持ちを分かっ  
って欲しい。

ちよつとでもいい可能性が欲しかった。

『そうかもな』が欲しい。出来る限り『だって』を捜す。  
だから沢山、言葉が欲しかった。

「うっっ……」

でも、涙が納得してしまっている。ユキ君がこの世にいない事を……。

この先生の言ってる事が真実だって事を。

「由貴は、そうなって欲しくなかったんだよ」

「由貴って言わないで！！ 知ったような言葉を口にしないでよ！！！！」

俯いていた私は、先生に向けて眼を大きく見開いた

その時、一気に何粒もの涙が頬へと落ちる。

「ごめんなさい。今は、そう呼ばないで」

すっと、先生のシャツから手を引くと顔がグシャグシャになって  
いるのを髪で隠す。

こんな無言の先生も初めて……。

さっきまで楽しかったのに。

なんか、遠い昔の様に見える。

さっきまで何してたっけ？

お化け屋敷に行つて、思いつきり驚いて笑つて、先生の頭のお陰  
で注目の的になって。

ついさっきまで水遊びしてて……楽しかったんじゃないの？

でも、今は……先生は沈黙で私に触れないで、ただ立ち尽くして  
る私と先生。

先生の濡れた髪が私の制服を濡らす位に近かったはずなのに……。  
今は、私が先生の顔を直視できない。

また、失うことの怖さをまた知ることになるなんて。

私がそんな不安に駆られるたびに、茶化したり、真面目になつた  
り。



否定しない先生を冷たいと思わない。けど、こんなに優しくしない先生初めてだ。

まるで現実を見るってこの静寂の中、突き放されるみたい。

ただ一人で真実を突きつけられても、どうしたらいいのかわからない。

流れる涙だけが、時間を知っていて後は、頭を真っ白に染め上げていく。

「ネットの少年と俺の弟、そして……死んでしまってる事……全て事実だから」

先生は、悔やむ事無く……眉一つ動かす事無く、私にそう告げる。普通の人だったらここで『ごめん』とか『すまない』とか言うものだけど、一言も言わず言葉を重ねるこの人は、前と変わらず誠意が籠っている。

知っているんだ。

謝罪は今、何の解決にもならないことを。

優しさや慰めが例え、必要な時があったとしてもあの人の『優しさ』自体がそれを許さないんだ。

「少し、時間が必要だろ？」

「……」

「俺もいない方がいい……な。今日の後夜祭の時間、中庭で待つてるから。その時にこの続きを話すよ」

そして、私一人をこの場に残す。

横を通り過ぎ、去っていく人影が暖かい人だって事位は知ってるつもり。

そして、自分にも他人にも厳しい人だって何となく分かる。

だから、私は強く言葉に出来ないんだ。

「本当にずるいよ」

自分だって苦しんでいるって分かるから。

私が今、受けた気持ちをずっと前に経験している訳なんだから。

私はその『優しさ』にきつと答えることは出来ない

……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2850e/>

---

F o u l P l a y -笑顔の向こう側-

2011年1月13日04時03分発行